

奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

2

月号

1962



懸賞必勝作「契約書」北村浪々
百枚読切

奇譚クラス

KITAN CLUB

2

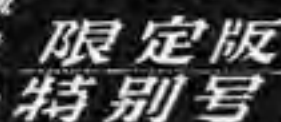
THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



定価二百円



オ4弾! 別冊奇譚クラス 別特 五百円

読 ー グ ラ ビ ヤ

[illegible]

第二グラビヤ

花の明	花本
懐ものなまざし	草子
第拾号四	初子
黒いロープ	相子
部屋飾り	山路ミヨ子
桃花一輪	山路ミヨ子
桃(くろかみ)製	大庭
拘束の日常	須川
哀 愛	絹川 文代
白い影髪	加賀利江子
舌(くばり)一節	森 千恵子
美しき呻吟	春日 伊吹
身体反転	高木 妙子
哀しき疑問	大井小夜子
四人 哀	桜井 葉子
囚妻 衣	藤井 葉子
ロープとの闘い	前本 妙子
いもじしの技藝	熱海 容子
突った時卒	加茂 良子
佳麗ながき	絹川 文代

第一口絵

- 1 犬吠の聲
- 2 鬼面の顔
- 3 耐苦のハシゴ
- 4 墓地に揺れる奴隷
- 5 迫り来る流鏑銃
- 6 木立ちの中の囚女
- 7 煙に咲いた麗顔
- 8 非情の鞭
- 9 燈籠に揺れる苦悶
- 10 回転木馬
- 11 刺責される女
- 12 香煙の宙吊り
- 13 アクロバチスト急造
- 14 恐怖のコンクリート部屋
- 15 空倉庫の怪事
- 16 暴虐の部屋

第二口 綫

17 黒皮の芋蟲
18 ゴム紐との闘い
19 受難の屋敷
20 空形舞踏・俳諧り
21 消えぬ灯
22 森の精
23 強まりゆく痛覚
24 迫り来る羞恥
25 夢といふ名の犬
26 組上のいけにえ
27 狙われる英因
28 車中のもがき
29 躍みにじられる女
30 ハンモック椅子
31 耐舌の座褥
32 雄鳩と蛾肌

絢を競う艶姿115ポーズ



◎◎豪華な内容とモデル陣

特価五百円 略号「グラフ」
表紙三度刷、内容グラビヤ印刷

大阪市阿倍野郵便局
私書箱第十四号
天 星 社
振替口座 大阪五〇〇四二番

要部全身裝飾一頁大原
 ながしめ……………絹川文代
 真鍮全珠裝飾……………大塚啓子
 薄ちた腰巻九懸（野弄）
 丹い乳房……………愛川悦子
 浴室におびえて九懸……………愛川悦子
 襦の胸飾……………絹川文代
 恍如境 悦慶の末……………絹川文代
 いためられた乳房……………桜井葉子
 耐えられる……………桜井葉子
 月経帯の強制……………大塚啓子
 手吊りと逆手吊り五懸……………大塚啓子
 全裸悦慶……………大塚啓子
 白痴美の誘惑……………大塚啓子
 はねかえす縄……………大塚啓子
 うろうろ許して……………大塚啓子
 雪白の肌は縄にまみれて
 六懸……………大塚啓子
 優姿ハダカ縛り……………絹川文代
 忘却の彼方……………絹川文代
 股間縛り背正面二懸……………絹川文代
 捕われの麗人二懸……………絹川文代
 過真め二懸……………大塚啓子
 浴室にて責める四懸……………大塚啓子
 何にせよと言うの……………桜井葉子
 新人藝無雙八懸……………桜井葉子
 いじめぬく二懸……………絹川文代
 メンスバンドの猿轡……………絹川文代
 観念構図の四二懸……………絹川文代
 変形手足しばり四懸……………愛川悦子
 裸身をさらして六懸……………愛川悦子
 豊満くらべ……………桜井葉子
 亀甲縛り正背面二懸……………愛川悦子
 怒めしき裸目二懸……………大塚啓子
 後手首腰縄……………大塚啓子
 新人緊縛ボーズ集八懸……………桜井葉子
 隅から隅まで四懸……………愛川悦子
 鏡面万華鏡模様と紋……………愛川悦子
 四十項目……………百十五ボーズ

既刊臨時增刊案内！

サティズム特集号シリーズ

殘部僅少，乞御申迅。

SADO特集号・第二集（略号S・2）
定価二百五十円（特価百八十円）

SADO特集号・第三集（略号S・3）
定價三百五十円（特価百八十円）

SAD 特集号・第四集（题号S-4）
定價三百五十円（特價百八十円）
「美しき愛の物語」一冊目

密貿易倉庫
 悪魔のような女
 (連作小説の愛蔵)
 新品第一号
 嫉妬の鬼
 地下室の苦行
 舌 問
 吊るし責め
 黒目鏡の女
 アクロの訓練
 挿れた商品
 〓グラビヤ・被縛女体特選集〓
 仇姿貴八丈
 技腕の笑み
 深 海 魚
 豊 胸
 飾り人形
 若妻の秘美
 麗 囚
 範囲・猪大人御乱行・強制女体特選集
 〓興趣溢れるS的読物〓
 私の貴麗一賣めの美人と皮革——四馬車
 本誌のモデルについて語る
 緊縛フォトと緊縛モデル夜話——覆面子
 乳房責め
 人間フープ
 檻
 奴 隷 船 禁
 妙な吊責め
 雨中の引廻し
 奈落のリハーサル
 鼻責めテスト
 犬の訓練
 女体脱馬
 筏ながし
 縛さばき
 被 襲
 哀れなる賓客
 絹布と絹肌
 台上の贅
 白い舌 舐
 三 面 鏡

蛇倉幽閑
防水服の恐怖
設製きの実験
水責め倉
哀れな強力
債吊り力
持久戦法
女体裁判
深夜の逆吊り
ムチ打ち開始
美容体操
拷問台

|| グラビヤ「狂い咲く綿花特選集」 ||
佳者一尾
狂花の戯れ
タイルの冷感
厚手の座席
共通の戯き
單身受難
流れ落ちる美腿
友情の表現
白蠟の不安
スポーツライト

|| 傑作・書き下し読物 ||
地獄の無法地帯……塔婆十景
廻轉フットと緊縛モデル夜話・囃面子

四馬路裏面集
烙印のX字架
ロソク責め
箱詰美女
舌悶の舌吊り
鼻責地獄
猿ぐつと煙草責
森の中の晒
愛人の危機
山小屋異聞
浴室の女体
白い実験動物
美容訓練師

哀美抽出
応接間の稀態
脱し得ぬ拘束
舌痛への階段
押込められた腕肢
レインコート
ひととべしら
泥まみれの青春
美貌の憤悶

(以上「百四十八態収録」)

狂乱の女	誘拐団の好餌	執念の賛	恋	金髪と虹	美貌の誘惑	初めての経験	汚いお仕置	飲んだ飲んだ	女学生の嫉妬	蛇倉地獄	ハリツケのいえ											
彗星の舌裏	手賊しき返礼	曠野の惨劇	手賊しき返礼	彗星の苦衷	新劇家の出来事	狂乱の女	手賊しき返礼	誘拐団の好餌	深し求めた私のモデル	私刑の森	ジャジャ馬馴し											
長虫の執念	楽しい期待	深夜の杉木立	馬上のはりつけ	この足が憎い	私刑の森	ジャジャ馬馴し	「グラビヤ」湧き上るムード	花模様の説き	壁飾り	床飾り	浮世絵草紙	冷酷なるクサリ	寒風におびえて	蠢惑のボーズ	わななく黒髪	三和順子	正木真龍	大竹与市郎	石橋富士夫	廣川力行	石見沢四郎	石見沢一郎



大阪市阿倍野郵便局
私書函第十四号
天 星 社
大阪五〇〇四番
名神通先

珍魚釣り

南村俊平・画





奇譚クラブ 二月特大号 目次

表紙裏「風流いろは歌留多」……………三十九夜同人作・滝れい子画
映画「珍魚釣り」……………南村 俊平

第一口絵

仇な初雪……………滝 れい子
香水のかおり……………黒川不二夫
あばら家……………黒川不二夫
珍案ビール飲法……………春川ナミオ
迷える小羊……………南村 俊平
柱と鏡……………滝 れい子
晴衣の令嬢……………滝 れい子
懐館のイメージ……………滝 れい子

グラビヤ写真

構成・塚本鉄三

粘着する嵌口具……………絹川 文代
妖奇の部屋……………梨花悠紀子
さるぐつわを求める女……………竹野ひろ子
排泄を耐える卓……………大塚 啓子
吸血女郎蜘蛛……………絹川 文代
連続絶頂……………梨花悠紀子
淫褻に至るまで……………梨花悠紀子
マソの境地……………梨花悠紀子
劉玉子と鏡……………熱海 容子
麗底の牝豹……………絹川 文代

第二口絵

女相模図絵 紅白対抗大団円の決戦

雪崎 京人

新作賞給集

四馬 孝

「奴隷運搬機」……………鼻と足の挿指
「白いイモ虫」……………飢えた野良猫
「冷えた番茶」……………有閑令嬢と下僕
「新築舞台の実験」……………

巻頭色頁「緊縛フォト撮影の実際」……………塚本 鉄三

私の意見「KK誌はマニヤ誌である」……………南村 俊平
小論「私の希望」……………四季 春彦
淡い思い出 賢母……………西田 仁
或るおムツマニヤの夢……………赤井 茂
奇譚二十九夜物語……………辻村 隆
ファンタジー・マソヒスティカ……………山本 節夫
創作「絆」……………近藤 一
わたしは奉仕がよい……………あまみかづひ
長篇連載小説「宇宙のどこかで」……………佐治 麻造
女性切腹秘話「百舌鳥」……………石井 章造
提案「私は訴える」……………高崎 勉
映画通信「洋画の縛り映画」……………東山 映史
女斗美絵巻シリーズ8「芳汗淋漓」……………雪崎 京人

奇クサロン

天 声 蛇 言

悩みに答える……………最高ノキス
奇ク論争に寄せて……………私のサド遍歴
連作「少女」未知への恐怖……………M謎々・強いものは
相模図絵 裸について……………連作「少女」船倉の少女
女性と縄の反応……………MS対話 ある女とある男
マソ画報「首絞め」……………竹野ひろ子嬢へ
「女裸」へのあこがれ……………アブ誌 採点表
メンズの数学……………まぞ川 標目註
アブチック・アフリカ……………M写真「奴隷の一日」
切腹のS・M性……………切腹 俳句
脱げないパンティ……………写真 私の切腹
愛と束縛と……………M女性への手紙
アブストラクト……………

懸賞（告白と手記と体験）黒い夢を抱いて……………京 信司
懸賞告白「ドレイ・ボーイ」……………津久井 毅
私がプロデューサーなら「こんな映画をつくりたい」……………南方 佳男
空の浣腸器……………山岸 悠子
飯想見学「少年モデル訓練所」……………杉 俊夫
妊娠の切腹 拘欄たる復讐……………黒木 節夫
懸賞百枚読切「契約書」……………北村 浪々
色気魅せられた舞台「サジスチックな軽演劇」……………柴里 雷九
読者通信……………

風流いろは歌留多

三十九夜同人作
淹れつ子画

大に棒でうたると
なれと



指に折れ
おめ

は花よう



尻をひいて
鞭うたれ



ほ

骨折り
損の
カラ
写し

と

撮らぬ
算用
縛り
のド



う





仇な初雪

(瀧 れい子 画)

「憎い姦夫姦婦め、俺の留守をいい事にしゃがって……………」

「こんな大雪だもの、泊ってくるとばかり思ったのに。ちえっ、どうでもしゃがれ」



香水のかおり

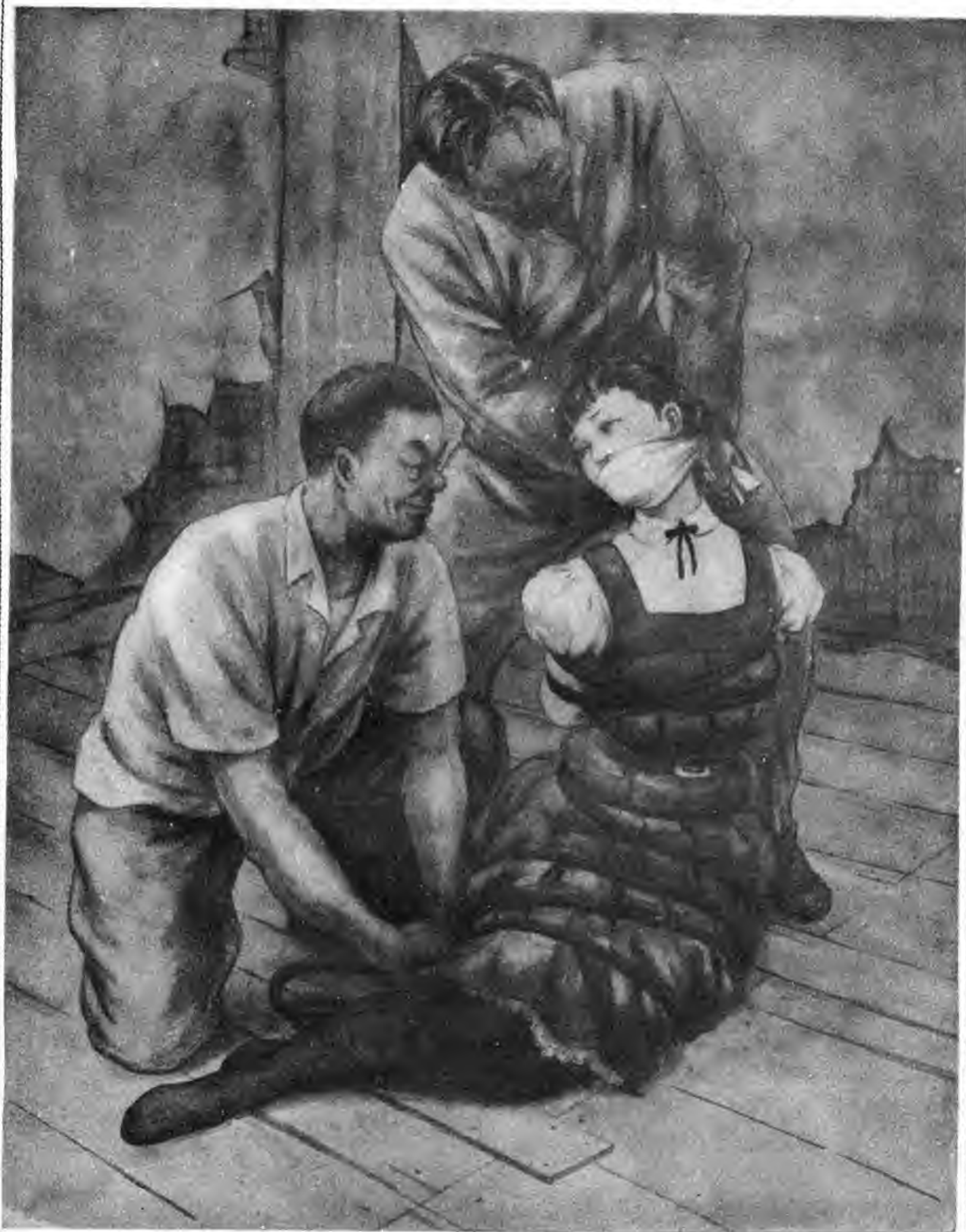
(黒川 不二夫 画)

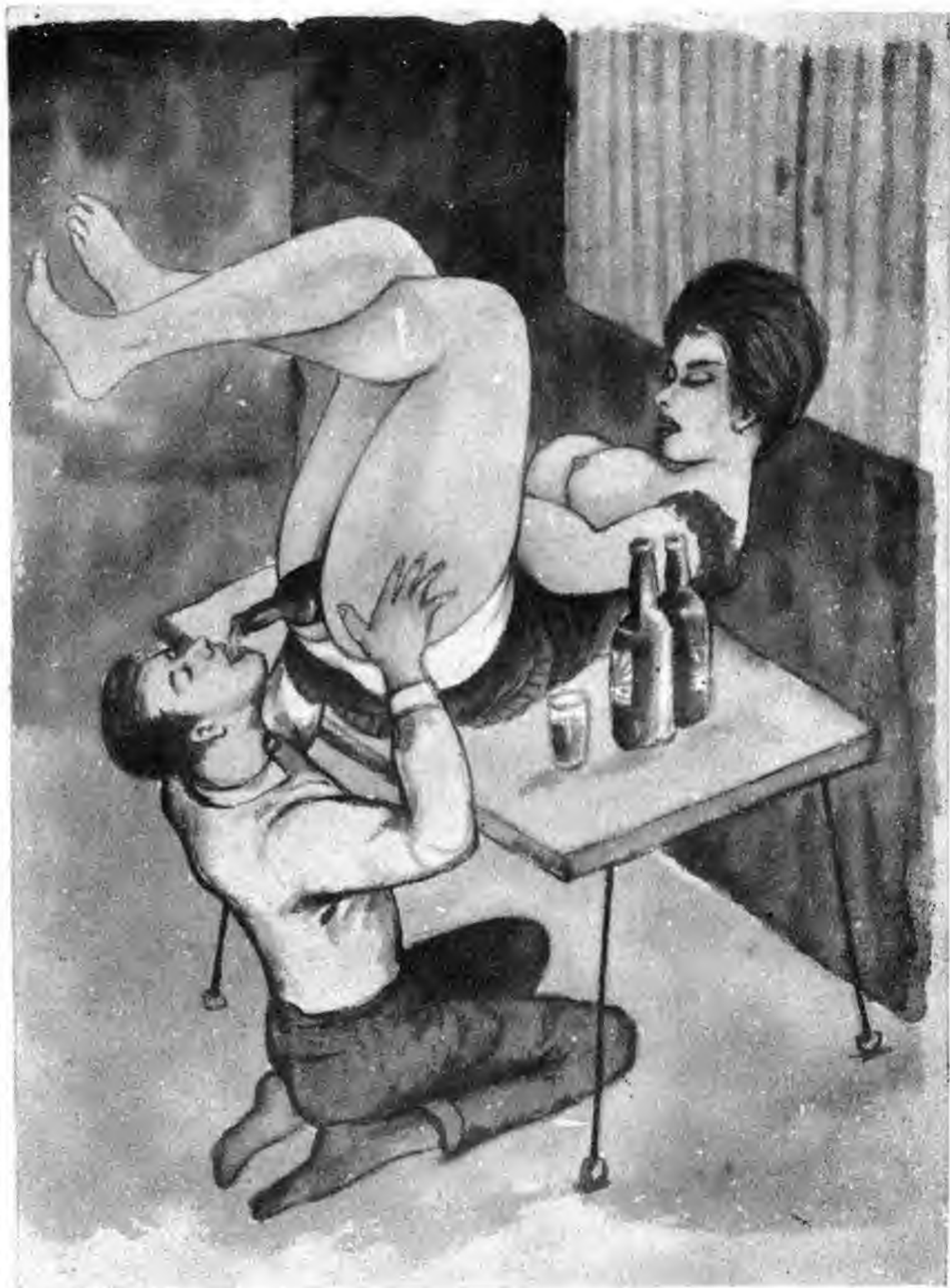
「よその劇場へ出ようたって、そう問屋は卸さねえヨ、その綺麗な顔に傷がつかねえ中に、よく考えるんだナ」

あばら家

(黒川 不二夫 画)

「そう、じたばたしなくたって、暫くの辛抱だ。香港へ着いたらナ、きれいな洋服を着せて貰って、たっぷり可愛がって呉れるんだ」





珍案ビール飲法

(春川 ナミオ 画)

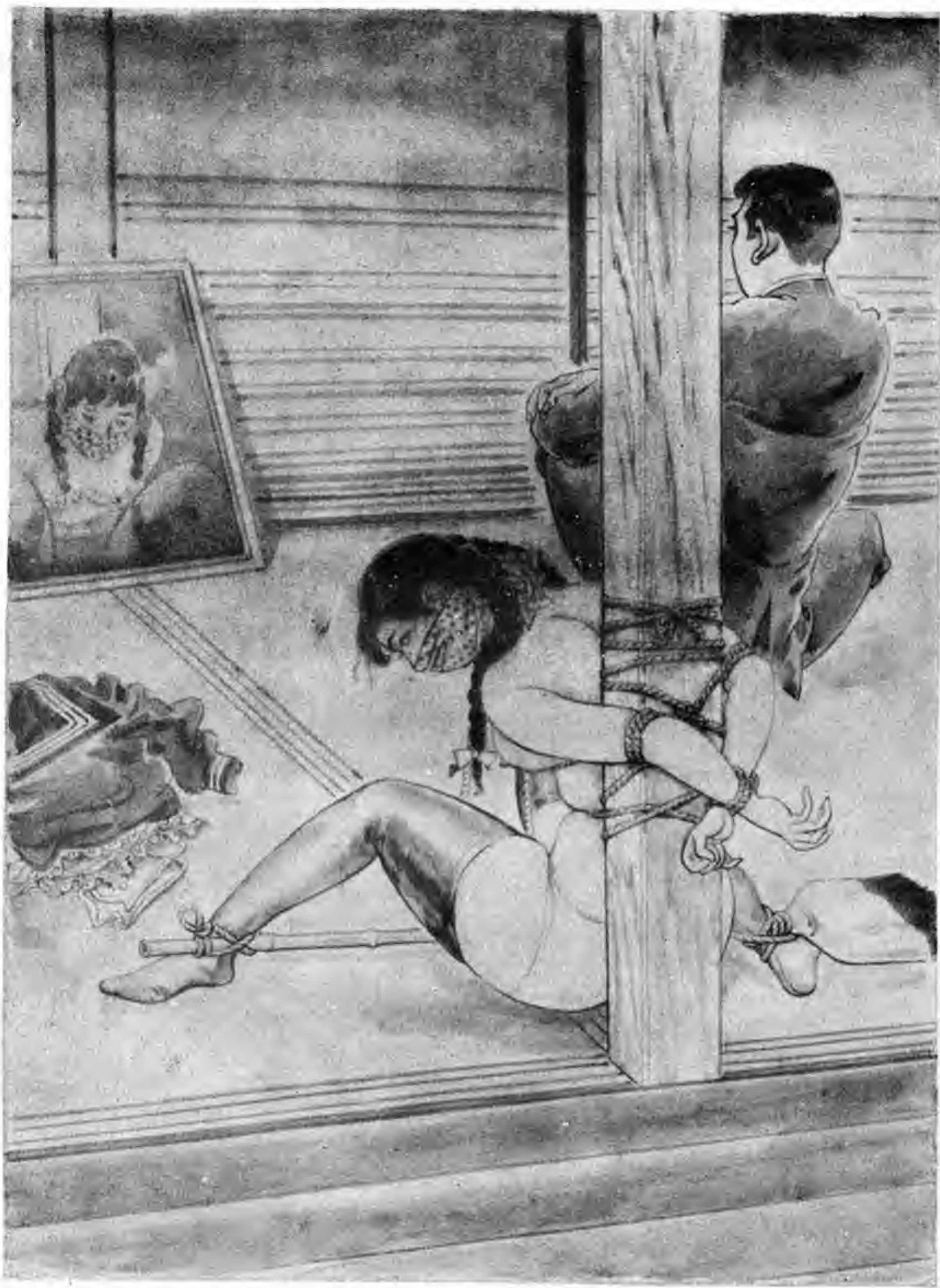
太股の間に挟んだビールを飲ませて貰っている男「うあー、甘露甘露」
ホステス「早く開けちまいな、まだ二本残ってるヨ」



迷える小羊

(南村 俊平 画)

「私は一体どうすればいいの?」「まだ夢を見ているのね、何よ、其の背負っているのは、贅物じゃないの」



柱と鏡

「鏡を見て、とっくりと自分のポーズを研究してみるんだ。どうしたら、一番きれいに見えるかってな。」



晴衣の令嬢

日本女性の優雅な淑やかさの溢れる姿態は、縛られたときに最高の美を発揮すると思いますが、如何でしょう。



懐 愴 の イ メ ー ジ

(瀧 れ い 子 画)

清純な女学生を主人公として、華々しい切腹をテーマとした切腹マニヤのイメージ。

粘著する嵌口具 構成塚本鉄三



妖 奇 の 部 屋

〈責められる女を主題とした〉





梨花悠紀子



せろぐつわを求めゐる女

竹野ひろ子



卓る耐えを排泄

大塚啓子





吸血女郎蜘蛛

(長靴の下に蠢めく男)





連続組写真
女性の血紅切腹





へこの連続組写真「女性の血紅切腹」は十一月号の口絵から
 初まり、一月号と今月号とで前後三回に亘って連続掲載して
 おりますから、併せてごらん下さい。

檻
樓
に
至
る
ま
で



マ
ゾ
の
境
地



“剥玉子と縄”



熱海容子







筐
底



の
牝
豹

絹
川
文
代

女相撲図絵

(雪崎 京人提供)

紅白對抗大将同志の決戦

(十一月号所載
「女相撲物語」より)



奴隷運搬枷

(四馬孝画)

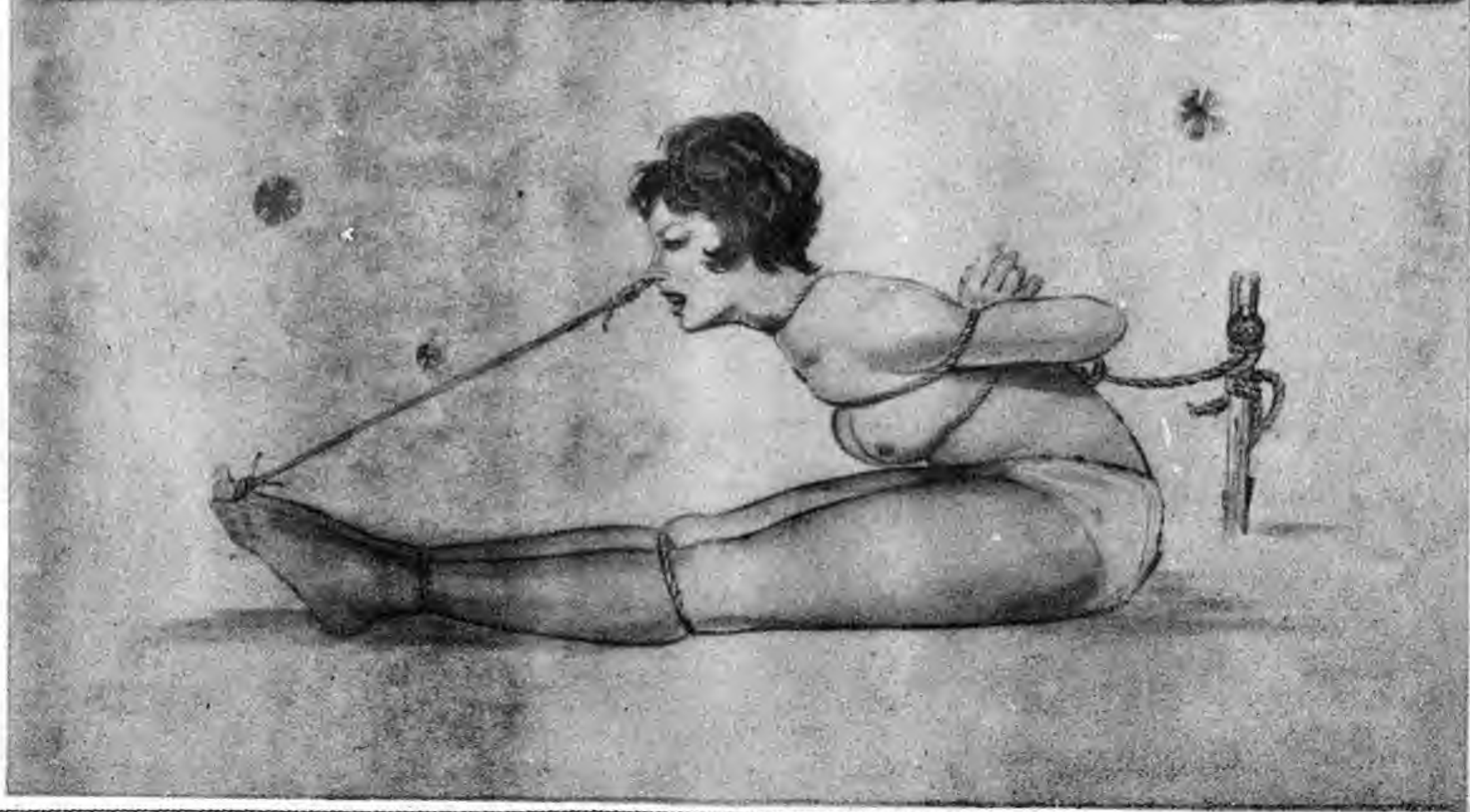
男はまるで鮭かなんかでも吊り下げるようにして、女に嵌めた首輪の綱をつかんで、グイグイ引きずって歩きたした。





鼻と足の拇指

ぐるりっとり囲んだ異様な男の輪の中で、美しい女は身動きもならず、男達の説得にさらされていた。



白いイモ虫

ベッドのシーツの上に雁字搦目に縄を掛けられた若い女は、まるで芋虫のように、恐怖におののいて、うごめいた。



飢えた野良猫

縛られて転らされた女の肌には鯛のつぶした汁をハケで塗りつけられた。
その臭を慕って飢えた野良猫が近づいてきた。



冷えた番茶

「そら、もっと飲め、ふふふ、いくらでも飲むんだ、遠慮なくな。余計飲めば飲むほど、俺にとっては、そのあとがお楽しみってわけだ。」



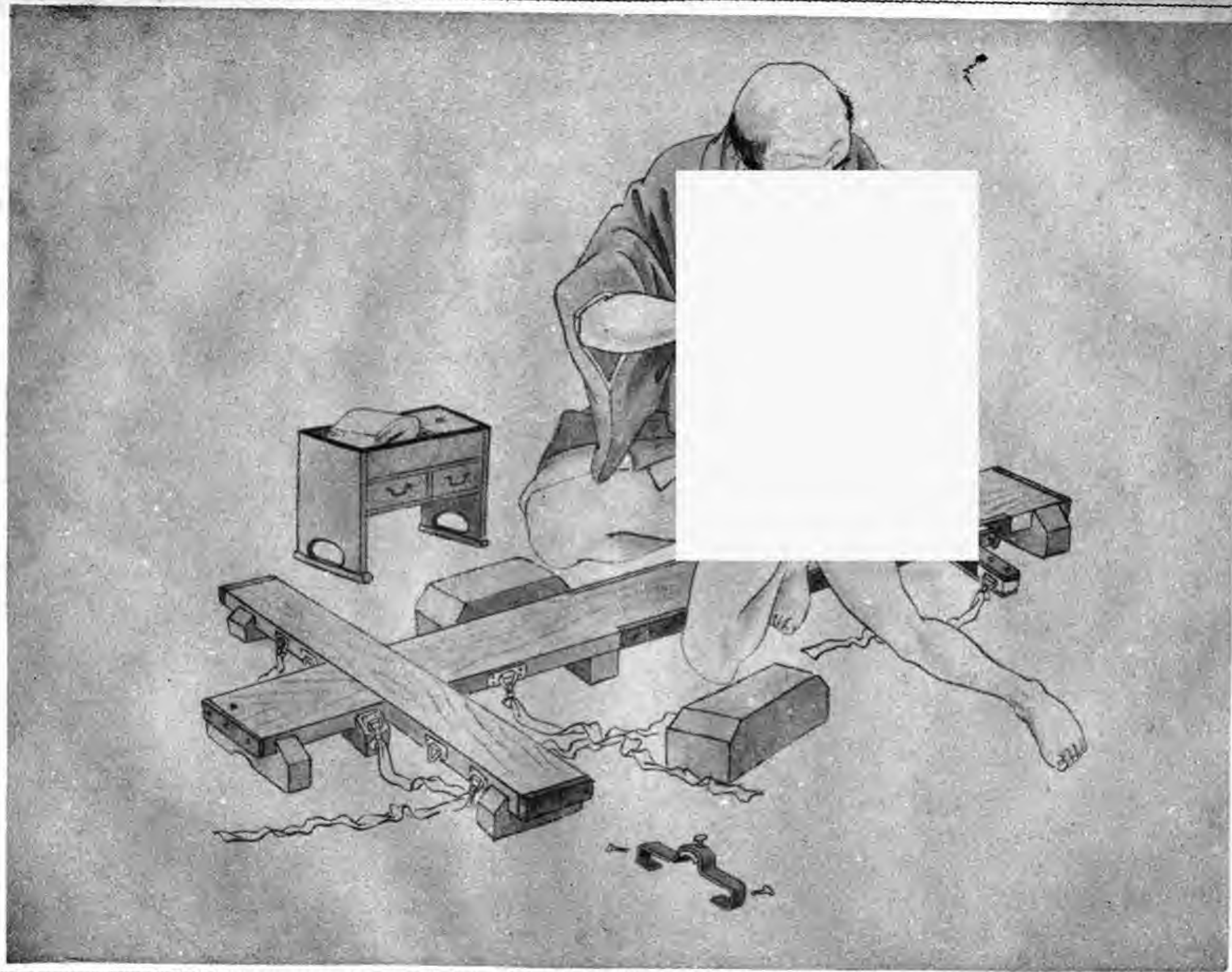
有閑令嬢と下僕

二十三才の美しい令嬢、下僕は三十才、今や奴隸の誓いをさせられて、女の尻の下で、美しい女に従属する幸福を味っている。



新案磔台の実験

俺が初めて作ったこの磔台で、お前のような可愛い娘を第一番に実験してみたかったんだ。むずがらずに言うことを聞いてくれ。





緊縛フォト、撮影の実際

——乳房、臍の強調とビニール猿轡

塚 本 鉄 三

撮影の要領

- 一、モデル……………大塚 啓子
- 一、撮 影……………塚本 鉄三
- 一、カメラ……………ローライ・オートマツト
- 一、レンズ……………ビオメタール80ミリ
- 一、フィルム……………ネオパンSS
- 一、現像液……………DK20・D72
- 一、印画紙……………月光F2・F3
- 一、照明用具……………カコストロボS2型並に
増燈用一個、ウエスト・フラツド三〇〇W二
個、コード、クリップ等若干
- 一、小道具……………古ロープ三本、茶色綿長
靴下、手拭、布片、ビニール布、等
- 一、場 所……………和室六帖

派手なツンパ

派手なバタフライを暇を見て手製で作ったという話を聞いていたので、今日は早速、大塚啓子嬢に持って来て貰った。

白地に紺の模様の入った布地は、すっきりとしたコントラストで啓子嬢の両太股のつけ根に、きっちりと喰い込むように装着されている。自分の身体に合せて作ったというだけあって、一分のすきもない位にぴったりして



いて、三角形型に前を掩った以外は、太股まで、すっかり露出していて、ビキニ・スタイルのお嬢さんが出来上った。

むっちりとした肉のついた両足に、茶色の綿製ストッキングを穿かす。これは、今日の撮影目的である、ビニールの猿轡、乳房、お臍の三点を強調するために、特に脚の方をストッキングで掩ってみた。しかし、一方、靴下フェチのマニヤにとっては、一つのサービスになるかもしれないという気持ちもある。

「乳房」と「お臍」は女体の中でも、最も女らしいものの、悪く云えば女臭いものの代表であるし、良く云えば、女体の美しさの中心をなすものである。それで、豊満で形のよい乳房と、形よく見事なお臍の持主であ

る大塚啓子嬢を煩して、ここに、その美を皆様の目の前に展開して貰うことにした。

勿論、単なるヌード・フォトに於ても、乳房とお臍とは、レンズの焦点になることに於ては変りはない。だが、緊縛フォトに於ては、小道具を駆使して、更に美しさを矯正し強調することが出来るので、同じくポイントを其処に置いたとしても、自ら、そこに差異が生じてくるのは、当然なことだろう。

大塚啓子嬢が自ら作製のビキニ・スタイルで登場して呉れたので、思いきり緊縛し思いきり注文通りのポーズをとって貰うことが出来た。思いのまま、興の赴くままやったので、縄の掛け方はいささか煩しい位、ごちゃごちゃとしてしまったかもしれない。

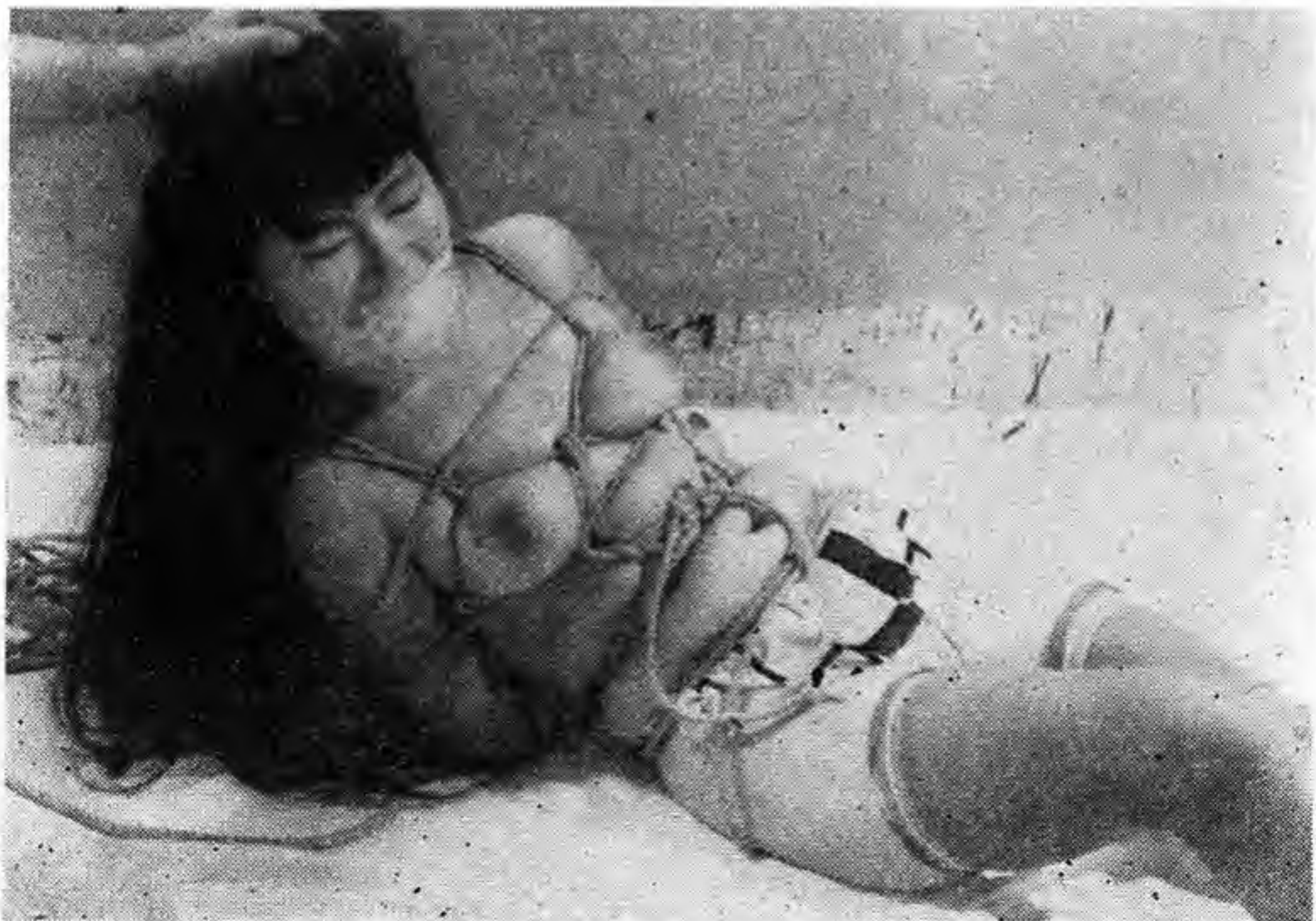
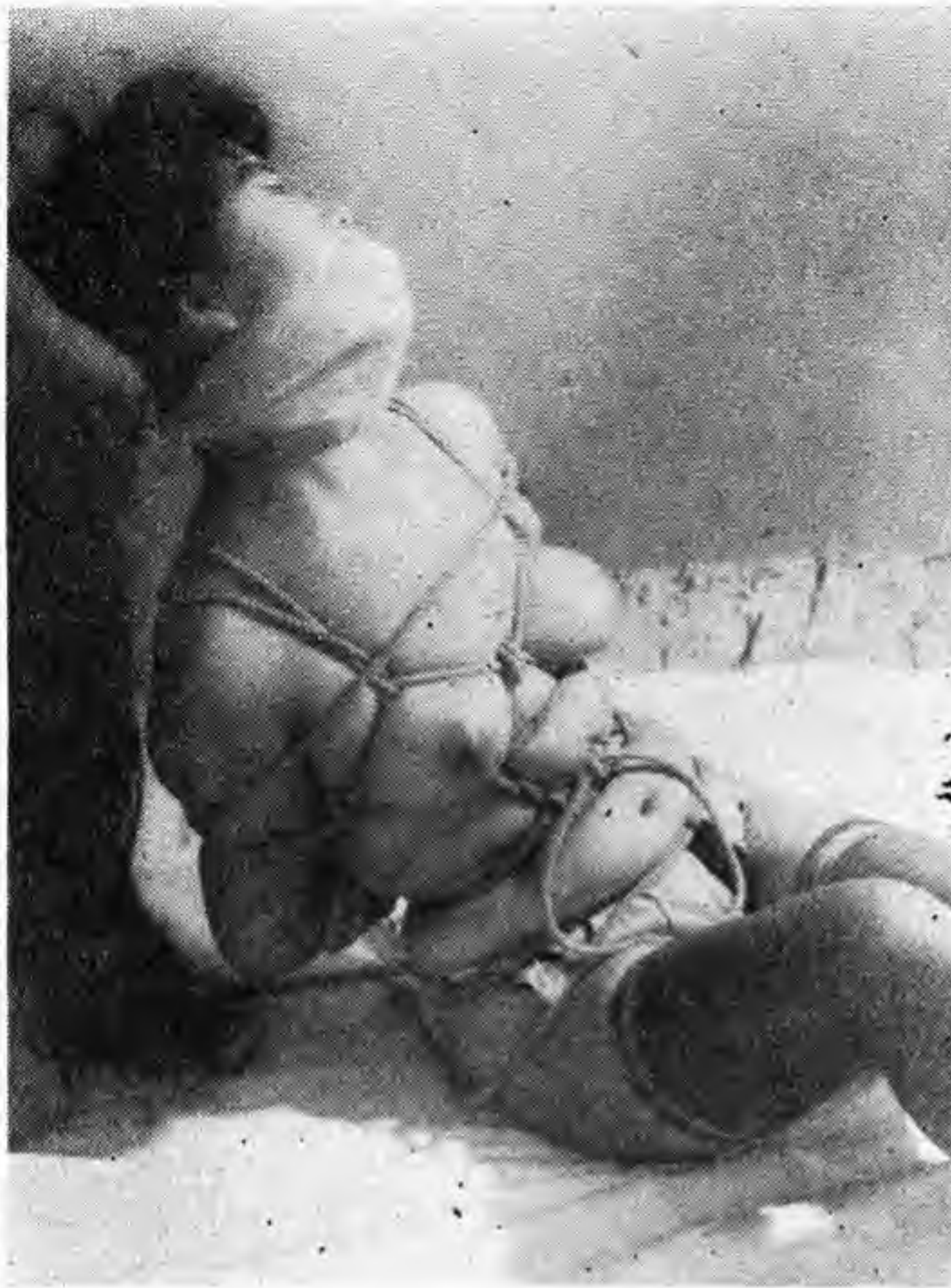
両方の乳房の周りに眼鏡の枠のように彩ったロープの枷が、一層それをむっくりと盛り上げている豊かで張りきった丸い乳房が、中心の乳首をお腕のいとどこに於て、恰好よくせり出している。根本のところ、掌の中にも入りきらない大きな乳房が、ロープでくびられて、ツンと前に突き出たところは、当の女性になってみなくては、この無防備感の神秘はわからないであろう。

胸、乳房の下側から腋の下にかけて、或は

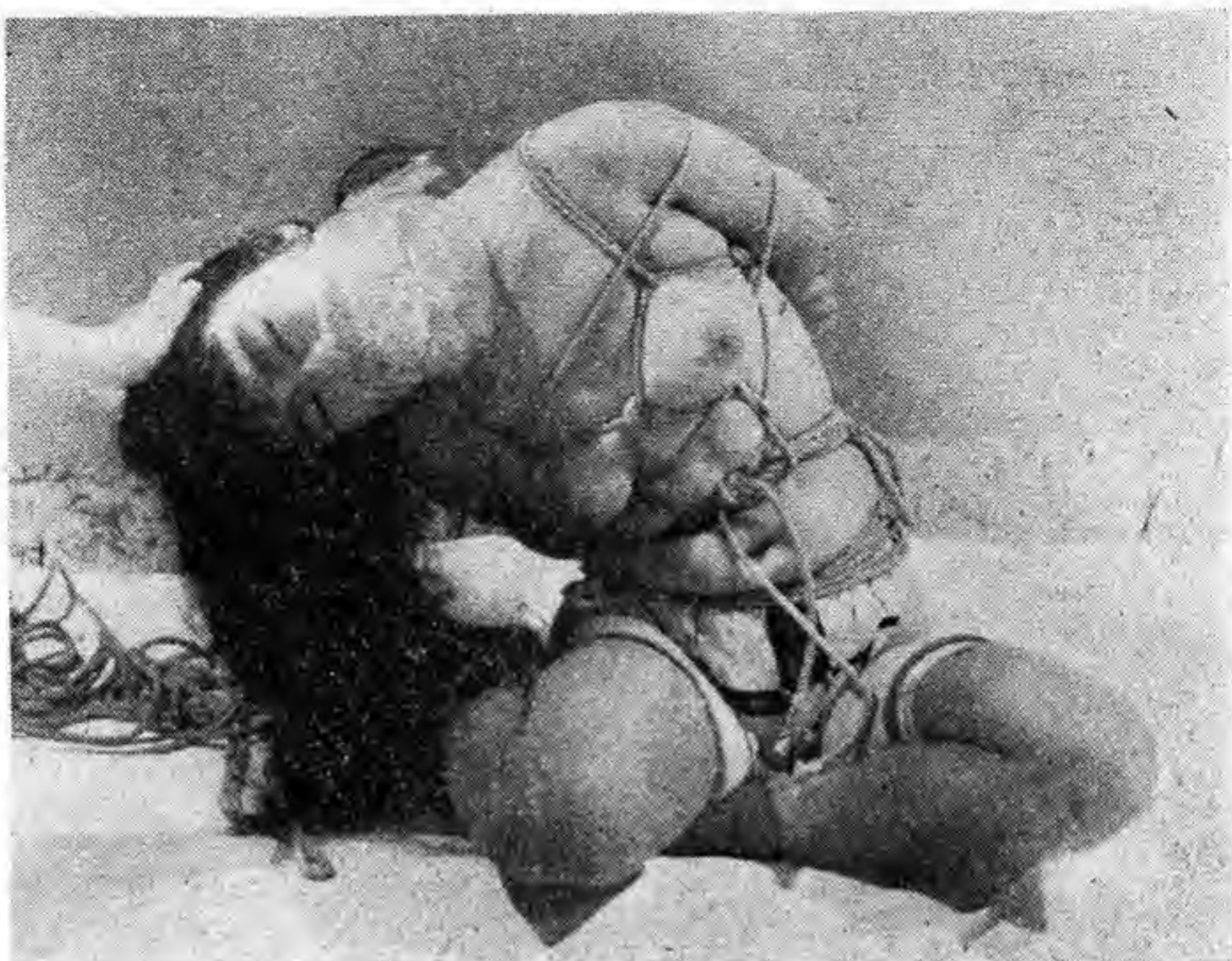
お臍の上と下のロープの締めつけ。縄をふんだんに使っただけあって、大塚嬢の裸身に対する緊縛感は、相当なものがあるだろう。肌も肉もくびれよとばかり、ぎゅうぎゅう、力をこめて締めつけた縄は、胴のところでは、むくれ上った肌と肌との間に完全に埋ってしまっている。

適度の皮下脂肪に包まれて、可愛いく陥没

したお臍、小指の先ぐらいだったら、十分中に入ってしまったような深さ。ひだの奥には、ちんまりとした黒ゴマが恥しげに鎮座ましましている。この可憐なお臍をいじめたい、しかし、このお臍を變形させて醜くさ

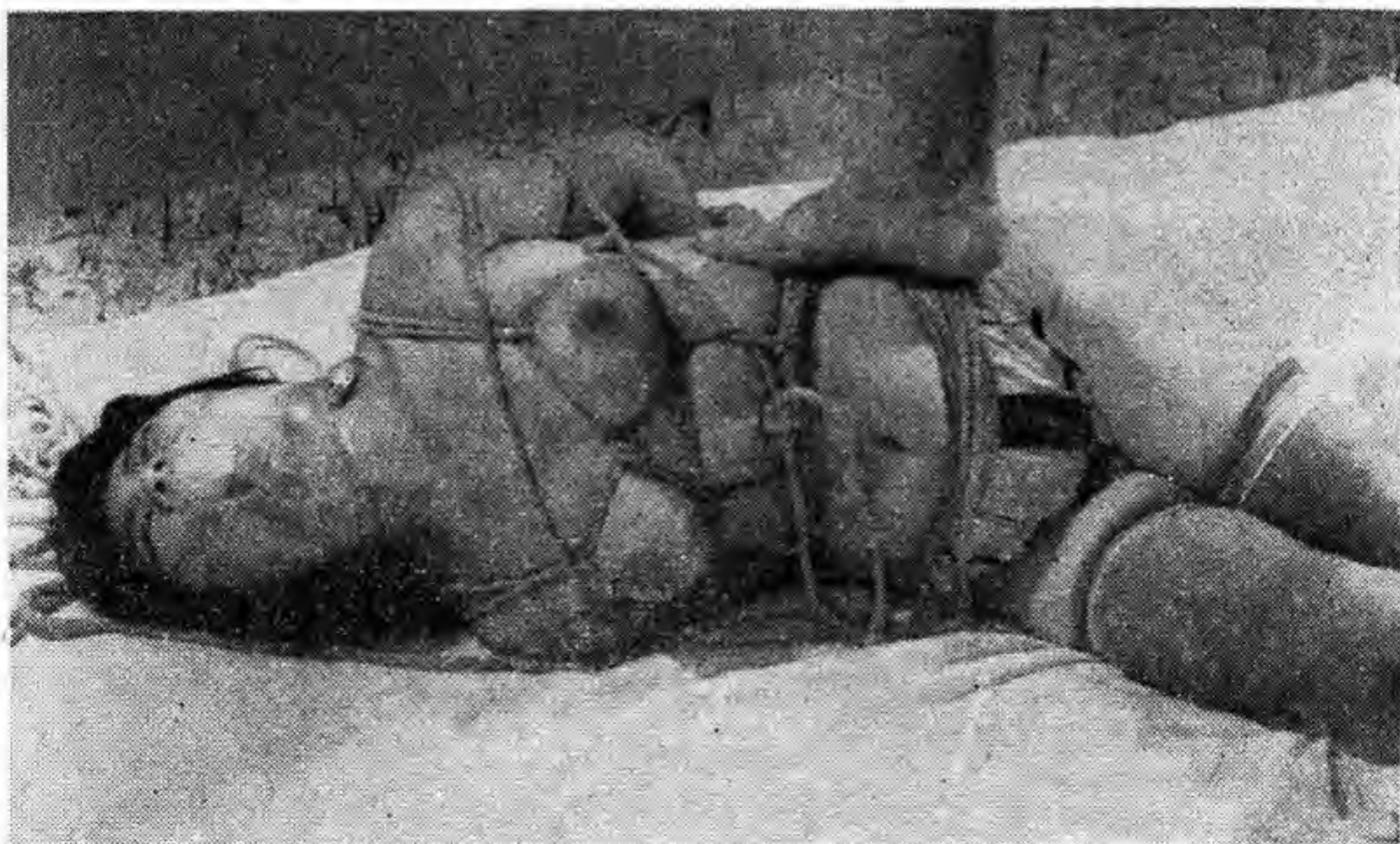


せてしまっでは何にもならない。美しいままの可愛いお臍を、そのままの姿で強調して、そしていじめぬいてみたい。



お臍を中心として、胴と腰とに、縄を比較的沢山使って締めつけていった。ふっくらと盛り上った真白いお腹の中心に、お臍は相変らず微笑んでいる。仰向けになった啓子嬢の胸から腹にかけて、魅惑的な乳房とお臍が、全く無防備にて、開放されている。ここに、この両者に対するの責めの可能性が最大限に秘められている。

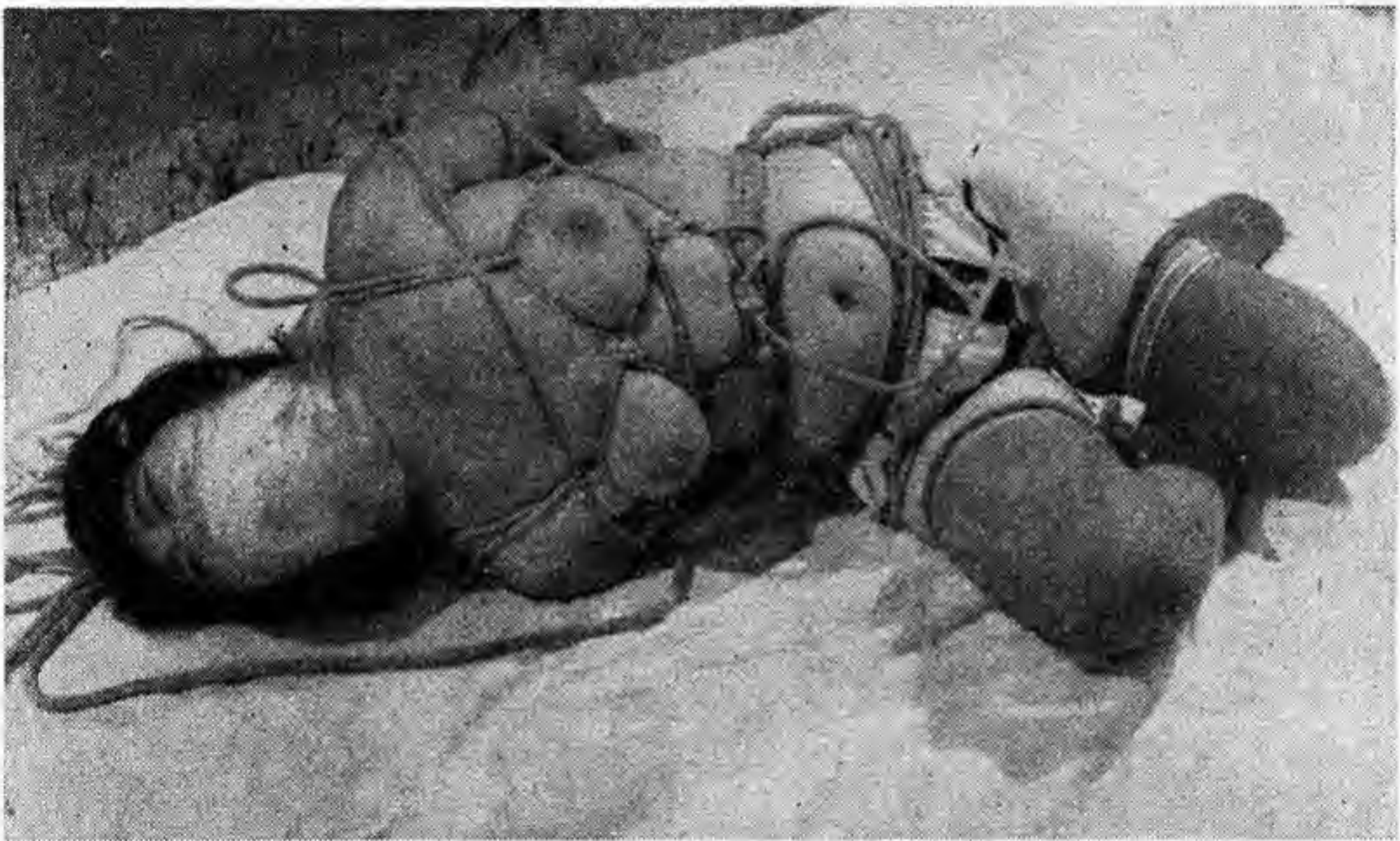
啓子嬢は大の擦りがり屋である。自分でもいつも「私はゲラだから……」と言っているくらい、一言二言喋っても、もう次にはゲラゲラと笑っている。感受性が強いのか、楽家なのか、陽気なのか。と



にかく、ちょっと肌に触っただけでも擦ったがるのは人一倍である。縄捌きのとき、縄尻が肌の上を滑っても、もうたまらなく擦りたいのである。縄の先が足の指と指の間に挟ったとき、そのまま、しごいて取ろうとしたりすると、全身鳥肌が立つ程、擦りたいそうである。

そこで、この開けっ放しの、胸、腹、太股などに対して、執拗な擦りの触手を加えてみたいという嗜虐的な意欲が勃然と湧いてくる。そのときの全身のうねり、猿轡の中の呻めき、このポーズは、一度写真に残しておきたいものだと思う。額に汗さえ浮かべて、擦りたいのを耐え足さくくの字に曲げて苦悶するさまは、本当に見事という外はない。その瞬間の姿を捉らえることが出来たら、どんなに素晴らしいことだろう。

しかし、実際は、その擦り責めが止んだ途端に、その見事さが一瞬の停止もせず消え去ってしまうのだから、写真的にキャッチすることは中々むずかしい。勿論、ここに掲げ

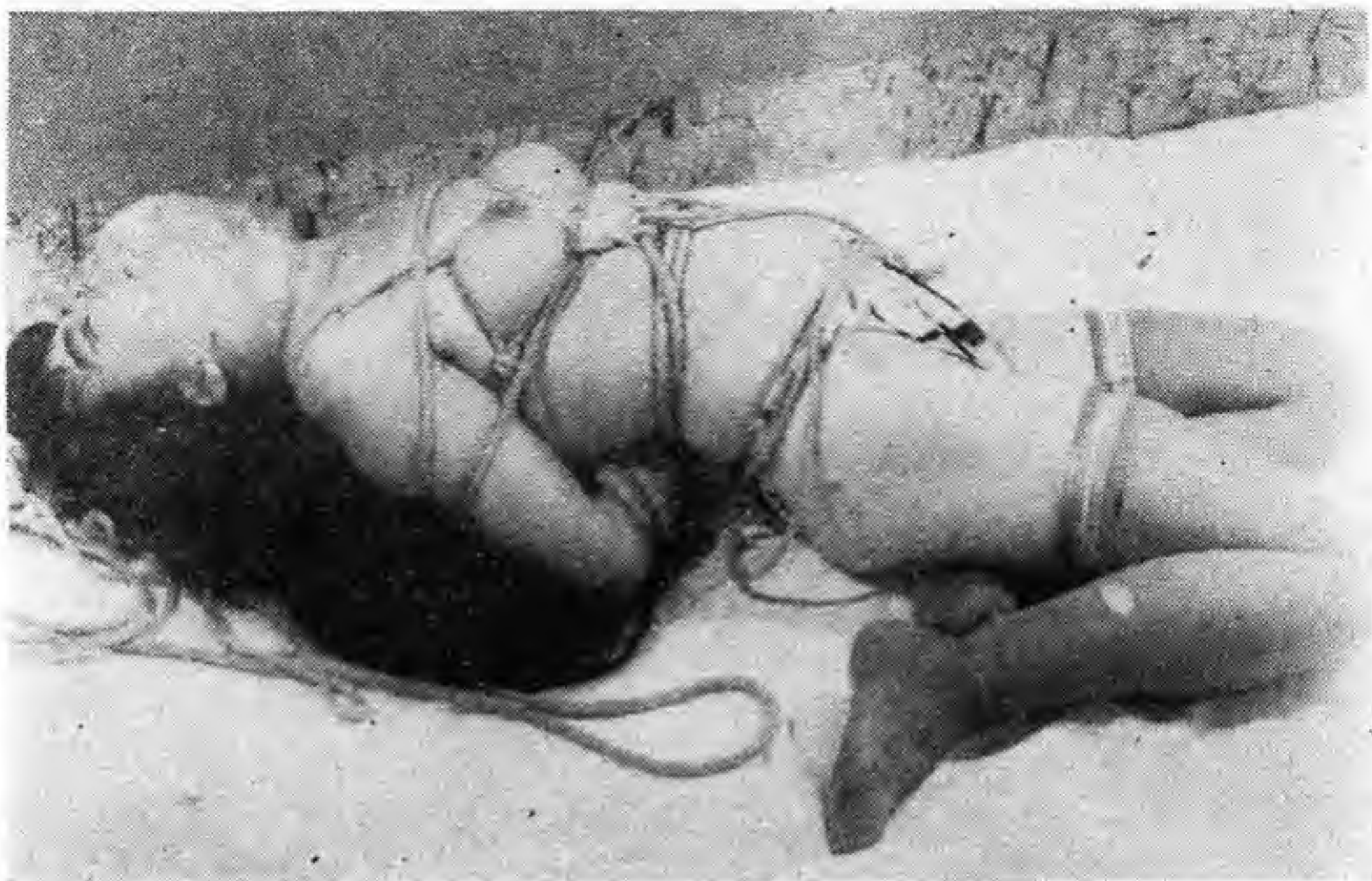


た写真は、その瞬間のものではない。もし、スポーツ写真のように千分の一秒ぐらいのシャッターでキャッチしたとしても、あの真迫した、女体の臭気のむんむんとする擦り責めの醍醐味が再現出来るかどうかは疑問である。

ビニールの猿轡

猿ぐつわといっても、普通、映画やテレビでヒロインの美女が悪人たちの手によって捕えられ、声を立てさせないために手拭で猿ぐつわをされ——という場合、只単に口の上を手拭で掩うだけである。所詮、お芝居であってみれば、猿ぐつわ（発声を防ぐための一つの仕草）イコール、手拭で口を掩うという約束事なのだから、あわや、という瞬間、助けに来た善玉の男がいつも簡単に手拭をほどき、そして、そのヒロインの口の中には、何も詰め込まれていなかったとしても、それはそれなりでいいものであろう。

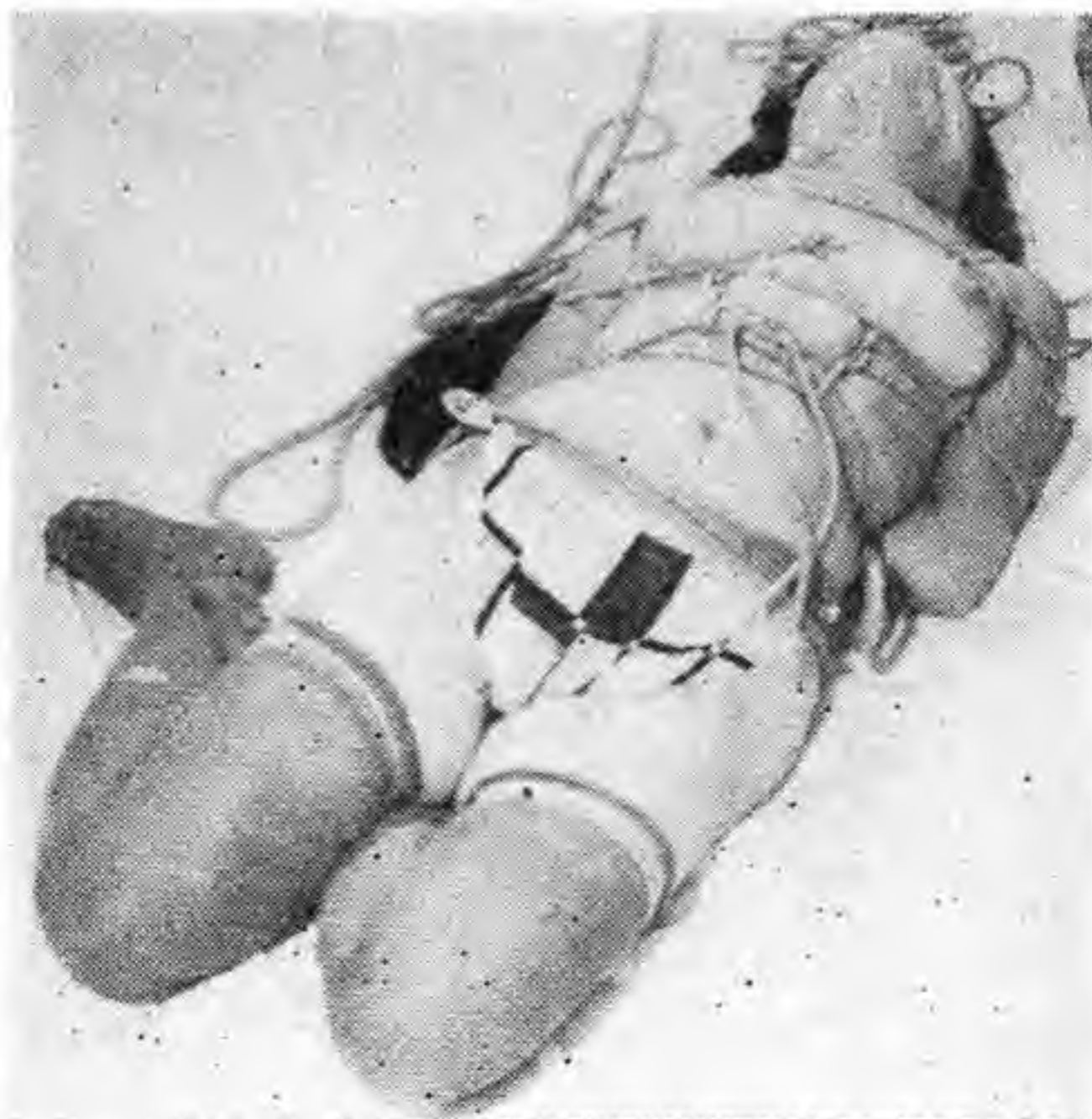
しかし、かりそめにも、本誌に於て、「猿ぐつわ」として取り上げるとなると、本来の目的である発声の自由を奪うということとは勿論であるが、それから派生した、口もきけないくらい厳しく顔の中心である一器管を荒々しく封鎖されたという——凌辱感。更にその



猿ぐつわに使用される布片の種類（例えば使用中の褌の如きもの）による汚辱感といったものに至るまで十分考慮に入れねばならない。

これを施される者の立場から見ると、声を出すことが出来ない——口からは呼吸が出来ない（息苦しい）——押さえつけられた舌が痺れてくる。（ほおばった感じ）といった色々の圧迫感が起ってくる。実際には、口中の布片が小さいものであったら、如何に手拭できつく外部から括ったとしても、やがて舌で押し出されてしまう。

口を動かしたり舌で押ししたりして布片を吐き出させないためには、口を一ぱいに開けたまゝになる位の大量の布片を詰め込む必要がある。



ぐいぐいと沢山の布片を口中に詰め込めば必然的に嘔吐を催しそうになるものだ。舌は隅へ押しやられて、長期間そのまゝだったら痺れてくる。『息も出来ぬくらい——』『息

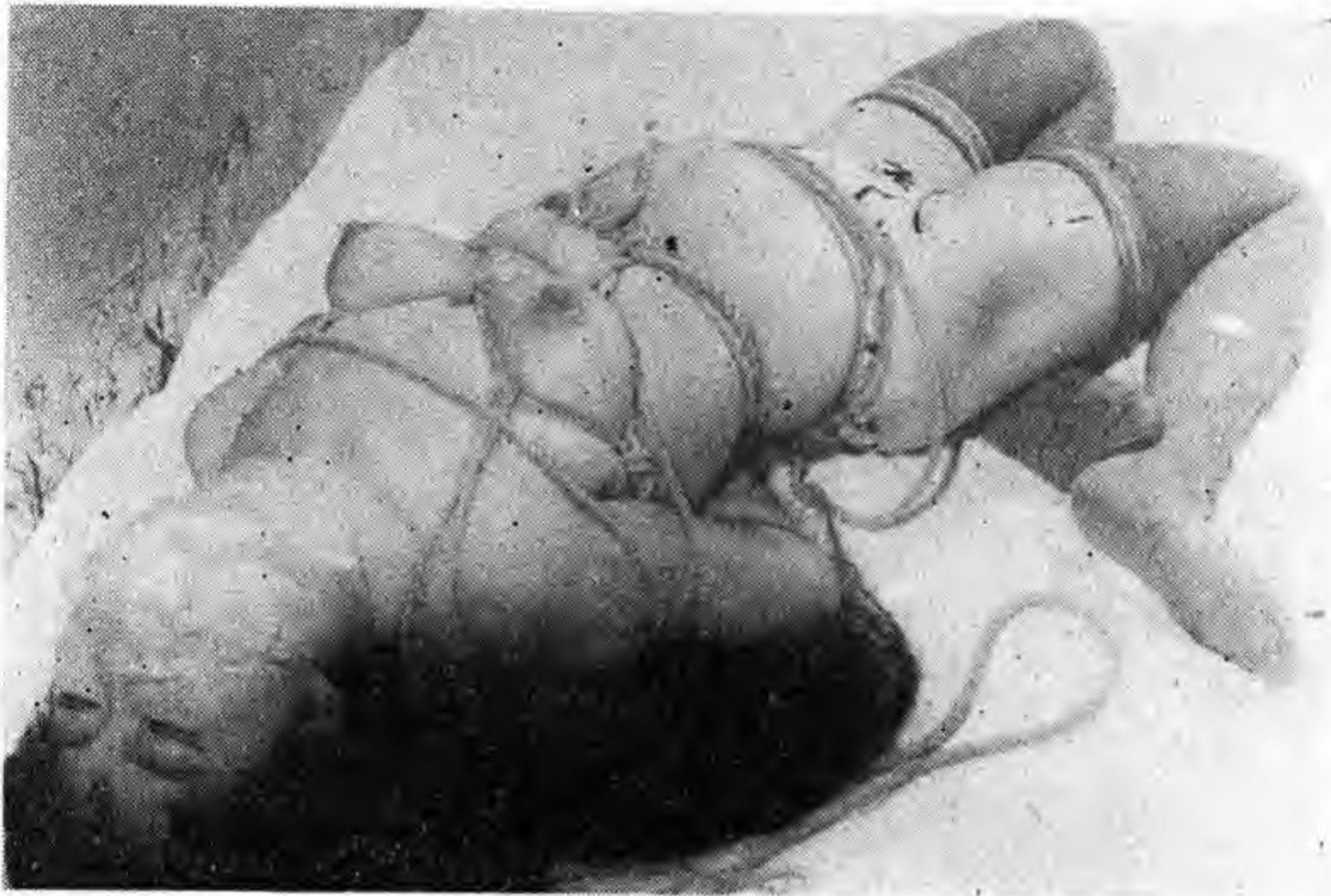
も詰まりそうな——』という猿轡の表現は、こういった猿ぐつわにして始めて言えるのではなからうか。

古川裕子さんの言われる猿ぐつわの充足感、彼女の愛好するあのヌメヌメとしたゴム

の機密性とも多分に関連があるように思えてならない。本当に猿ぐつわの醍醐味を味うとすれば、どうしても、口中に詰め物をして、しかも、それが自由に吐き出すことが出来ないという状態に於て、發揮されるのではないかと思う。

さて、前置きが十分長くなったが、大塚啓子さんのビニールの猿ぐつわも、本格的な息苦しきまでの拘束具としての役目を果たすために、レインコートのフッドを切って（頭のテッペンに尖ったところが丁度口の出ばったところにピッタリなので）鼻と口とを一緒に掩ってしまえる布片を作った。

いろいろの責めを加える（例えば先に述べたような全身に対する操り責めの如きもの）際に、発声を自由にしておいて、呻めき声や悲鳴を挙げさせるのも面白いが、マゾ女性の告白によれば、概して彼女たちは、厳しい



責めが烈しければ烈しいほど、息苦しいまでの猿ぐつわを噛まされている方がよいそうである。写真の撮影ということだけであれば、簡単に手拭で口を掩うだけでも、よかったのであるが、今回は大塚啓子嬢に本式の猿ぐつわを噛まし、更にその上にビニール特製の布片で、きっちりと鼻口を蓋してしまった。

暫くすると忽ち呼吸が困難になってくるのだが、手は後手に嚴重に縛られているので、頭を動かし鼻をピクピクさせて、とにかく、僅かに息を吸い込めるくらいの隙間をつくり出す。今は口中の布片を吐き出すとか、口で呼吸したいとか考える余裕はない。只、鼻翼のところでビニールのやわらかくなった布片が、ペコペコと呼気と吸気につれて動く、かすかな間隙から、生命を保つ空気を求めなければならぬのである。

「今日は本格的な猿ぐつわをやってみるが、辛抱できるかな」と冷やかし半分に言ったとき、彼女は「え、平っちゃらだわ、これでも私、何んでも、辛抱することだったら、誰にも負けないつもりなの」と言っていたが、今になって、広言を吐いたことを後悔しているか、或はそれとも、マゾ性の真髄に触れて感泣しているだろうか。そのどちらとも、と

れる彼女のもがき様だったが、あお向けに倒れて、足をバタバタさせて悶えるのは、まだいささか早かったようだ。

黒髪と足蹴

よく手入れの行き届いた腰の下まで垂れて



尚余りある黒髪。暑苦しいのと手入れをするのが面倒なので何度も切ろうか、切ろうかと相談を受けたのだが、しかし、その度に切ってはいけないと切るのを止めさせてきた貴重な黒髪。だが、今その黒髪が、彼女を責めるのに一役買っているのだから皮肉である。

掌に二巻きして握っても、まだたっぷりと余裕のある黒髪を持って引き倒すと、ごろりと横になる。髪を握っておれば、転がすも起たすも自由自在である。倒れた脇腹に足をかけて踏みまくる。体重を片足にかけて腹を踏みつければ、思わず顔がのけぞって苦悶の呻めきを洩らす。然し、その呻めき声も、ビニールの布片にくぐもって定かには聞えない。

次には感受性に富む大塚啓子嬢の最も恐れる操り責めが、両手を後手に縛られているため無防備に展開された白い肌に加えられようとしているのだ。腰から胴、胸、肩ときびしく締めつけた縄の緊縛感は今や最高度に達しようとしているし、高々と背後で吊り上げるように固定された後手首は、感覚を失うくらいになっているだろう。しかし、いつもの大塚啓子嬢とは違って、派手な悲鳴を挙げようもしない。

並々ならぬ彼女の最初からの決心が、かくも彼女の心を強くさせているのだろうか。諦めきった様に、観念したように、ぐったりと仰向けに伸びた白く輝く姿は、一入のいとほしさを感じさせるに足るポーズであった。

(おわり)

新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

二月特大号

1962年 2月号

(第16巻 第2号 通刊第162号)





私の意見

KK誌はマニヤ誌である

南村俊平

KK誌がエロ雑誌か文献誌かと云う論議は、是迄、屢々誌上を賑わした問題だけれども、今迄に発表された各論旨を拝見して、どうも私には、其のどれもが完全に的を射っていないような気がしてしかたがないので、私は私なりの観方を発表させて戴き度い。

私に云わせるなれば、KK誌は、エロ誌でもなければ文献誌でも無い、マニヤ誌だと云い度い。これほど解り切った事が、案外解らないでいるような印象を受けるといふのは、まことに奇妙な話ではあるが、それにはそうさせる理由があるようだ。

先ずKK誌の大方の読者が是を見る時、どう云う見方をするのかと推測してみると、恐らくは、本誌を通して、頭の中のスクリーンに自己の心底に有るものを投写して見ているのではなからうか。勿論、一般の娯楽雑誌にでも其れは有り得

ようが、特にKK誌を通して写される時には、画面の殆ど全部を、そう云う主観が占領して仕舞っているであろうと思えるのである。

此の場合、KK誌はテキストか、亦は其の映画の監督のよいうな役目を果しているのだ。つまり読者は其の映画に陶醉しているような形になっているから、一度KK誌を伏せてからはじめて陶酔から離れる。丁度、映画が終った時のような気分になって、

「どうもエロがオーバー気味だったんじゃないかな」

「いや文献も有った」

と云う批評が生れて来て、エロ誌だ、文献誌だと騒ぎ出すのだと思う。

ところが其れは錯覚であって、共に、マニヤ誌であると云う本質には触れていない。元より誌面には文献も載ってい



ば、エロと呼ばれる種類のものも有る。だからこそ、そう感じるのだろうか、少なくとも、それは主目的では無く、KKと称するマニヤ誌を構成する為の、付帯条件の一つに過ぎないのだ。

それでは是から、KK誌がマニヤ誌で有る事の理由を段々に御説明申し上げる事にするが、第一に其れを解りやすく説明するには、同じくマニヤ誌的な雑誌と比較して見るのが一番早解りするだろう。

私は十代の頃から艦船と云うものに興味を持った。小笠原長生の黄海海戦や撃滅記等を読み耽ったし、マハンの海戦論等も読んだ。

私などが知っても仕方のない造艦造船の事等も、出来得る限り識ろうとした。そんな訳で海と空のような雑誌は好んで購読したものだ。

こう云う艦船航空誌も、云わば一種のマニヤ誌で、内容はKK誌とは全く違う異質のものであり、目的とする処も全然別であることはいうまでもないが、マニヤ誌であると云う一点には変りない。

そこで両者を比較して見ると、マニヤ誌にはマニヤ誌としての条件が有り、一定のルールが有って運営されているものだ。と云う事が納得されるのだ。

艦船マニヤには、大別して二つのタイプがある。一つは懐古的に、古い物や其の発達過程を識りたがる者と、今一つは現在の最新鋭、或は将来有る可き物に興味を寄せる者とだ。従って艦船マニヤ誌は、双方の要求を満す事が条件になって

来る。

KK誌も其の通りで、色々のタイプのマニヤに支えられている以上、それぞれの要求に応じる必要が生じているのは当然だろう。

次にマニヤ誌には、似たり寄ったりの記載が幾回でも現れるのも大きな特徴で、艦船誌等には、戦艦三笠のような歴史的ものの写真や記事は、何回も繰返して掲載されて来たものだけでも、私は少しも飽きない。これは私のみでなく、恐らく他のマニヤもそうなのであると思う。KK誌に就いても、同じ事が云える。好評だったものは、何回焼き直しても喜ばれるし、それは只単に読者が飽きないばかりでなく、新しい読者には、亦、新鮮な資料と成り得るのだ。学校みたいなもので、二年生には、一年の過程は不必要になっても、新入生には重要なものであるのと似ている。

こんな懇切丁寧さは、普通の娯楽雑誌には無用の事に属するのだ。

今度は読者の投書欄を見てみよう。投書がマニヤ誌に占める重要度の高いのも共通点の一つだが、ある艦船誌の読者欄に一少女の不平が載っていたのを見た事がある。

「私は艦船に限りない興味を持っています。学校で、その事を友達に話したら笑われました。でも私はそれを捨てる事は出来ない。」

と云った意味のもので、彼女がどんな少女なのか私は知らないけれども、文面に現れたその不平、その心根を可愛く思ったものである。



是等はKK誌の読者欄に載った不平や要求と、一脈通じるものがあるじやないか。マニヤ誌なればこそ、人には云えぬ、或は云っても通用せぬ不平が、採り上げてもらえるのであるう。

だから私は、マニヤ誌の読者欄は、或る意味では慈善事業の様な性質を帯びているのだと思う。不平と云う奴は、吐いて仕舞えばサッパリするもので、耐えに耐えた末に用を足した後の、急に身体が軽くなったような爽快さに、其れは似ているものである。

爽快を得て新しい力が湧き、生涯意慾が昂揚され、其れは取りも直さず立派な社会事業と申せよう。呉れて遣る式の薄汚い虚栄に満ちた慈善事業より、実質的でスマートだと思う。

以上述べた処から見ても、私が、KK誌がマニヤ誌であると言ふ所以は御解りになった事と思われるが、然しマニヤ誌と雖ども十年一日の如く単調であつてよい、と言ふものでは決して無い筈である。艦船誌のようなものは、自ら変化を心掛けずとも、外界の事情が日進月歩し、否も応も無く変化を提供して呉れるから、それに注目して便乗さえ怠らなければよいが、KK誌にあつてはそうは参らない。其処で文献とエロの御両所に登場願う段取りと相成るのであるが、此のエロと云う奴が仲々の曲者なのだ。

読者に錯覚を起させるのはまだしもの事、稍もすると庇を借りて母家を奪つて呉れんと云つた、まことに不逞な魂胆を持っているのである。

元来エロと呼ばれるやつは、KK誌に於いては、そのテーマの性格上、片隅に同居している様な形で存在しているものなのであつて、其れがニュアンスにもなるのであるが、同居人は何処迄も同居人であつて、絶対に此奴に主人面をさせてはならないのである。

嘘だと思ふならば、近頃の週刊誌や娯楽誌の大半がエロ本化して仕舞つた現状を見るがよい。あれは同居していたエロに、亦は他から引張つて来たエロに憑かれて、錯覚を起した結果に外ならない。

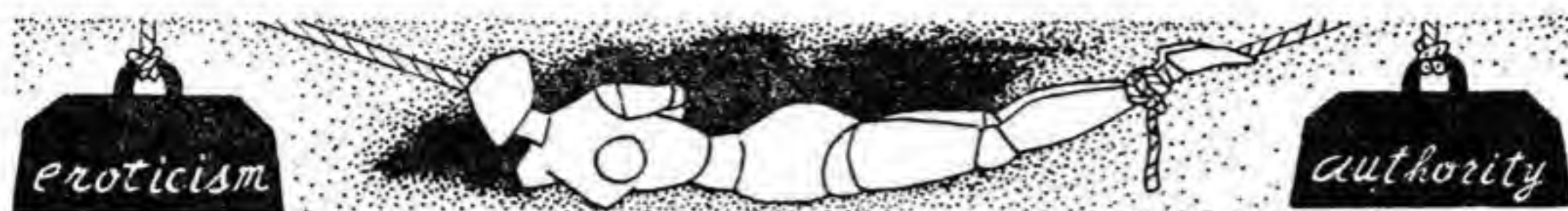
一カ所で錯覚を起し、彼に城を開け渡すと、忽ち連鎖反応が起きて誌面を次々に攻略され、いよいよエロは猛威を逞しくするのだ。

否、そうじやない。エロが風靡しているのは天下の大勢だ、とある人は云うかも知れぬが、大半が陥落したから大勢になったので、云わば骨無しが多かつた為なのだ。

だからと云つて、KK誌が大勢に順応してはならぬと云う道理も無ければ、エロを利用してはまずいと云う理屈も、前に申し上げた処からして通用せぬものだと言ふ事は、納得して戴けるであらう。

其処で、要は扱い方、採り入れ方如何と云う事に成る訳だろうが、要するにどんなことがあつてもエロに主人面をさせぬ事が肝心で、そうするには先ず編集者も読者も、共に徹底してKK誌はマニヤ誌だと云う事を、常に承知している事が大切なのではないだろうか。

私は、文献誌でもあればエロ誌でもある、などと云つた、



あやふやな量見でいると、つい、してやられる恐れは多分にあるだろうと思う。

娯楽誌に本誌よりエロがかったものが多いと云う意見があ

私の希望

四季春彦

私がKK編集部に望みたいことを一言。

先般来、盛んにK誌のあり方を論議されているが、私は、奇巧は同人雑誌とみて愛読している。したがって読者は、真に倒錯性心理に悩む者、少くともアブを自認している者が、ひそかに自己を慰める目的にのみ購読しているものとばかり思っていた。しかるに、一般の雑誌と比較してエロがどうのこうのという論旨にぶつかって、頭を捻らざるを得ない心境だ。

これは一般誌と同様に店頭に並べられるからかとも思うが、混淆も甚しい。なるほど性格上共通点は

確かにある。だが海辺の水着姿と、野外撮影会に於けるモデルの水着姿。風呂場に於ける婦人の脱衣と、出演準備のストリップの脱衣との相違は自ずと明白だと思ふのだが……。

そこで私は、マニヤにのみ通用する雑誌にして、誤解を招くようなエロ臭は、より一層排除して貰いたいと思うのである。安手なエロは一切載せない方針のもとに、読者には牛肉屋では鯨肉は売らないのだということをはっきり周知せしめて、より良き、堅実な専門誌に育てて戴きたく、希うものである。

るのは、未だKK誌が、この厄介な曲者に主人面をさせていない証拠であって、慶賀すべき事ではある。

此処で私は今一度、読者がKK誌を見る時の態度について述べる必要が有るように思う。先に、読者はKK誌を手にした時、恍惚状態で映画を見るような観方をしていよう云ったが、其れはあくまで客観的に観察した場合の話であって、主観的に云うなれば、恐らく読者自身は、そうは思っていないであろう。普通の娯楽誌を見る時と同じように考えている筈である。

何故なれば、艦船誌の如き、他の娯楽物とは全然異質のものを読む場合は、明確に、自分は好む処のものをしているのだと云う自覚が有るのだが、KK誌のような性格のものは、何等かの目安を示されない限り、そう云う自覚を得る事は難かしいのではないだろうか。従って、どうしてもとエロを盛らぬかと云うような、誤算が出て仕舞うのである。

坊主もエロ掛った物を書く御時世だし、亦それはKK誌には、必ず付随する条件の一つであって見れば、兎や角云うには及ばぬ処であろうが、要は本誌がマニヤ誌だと云う自覚さえ持っていれば、必要以上かどうかは直ぐ判断が付く筈だと思う。

KK誌は巷間に流布されているエロ誌とは違った性質のものである。別の目的を備えたものなのである。私は声を大にして其れを云い度い。個々の部分に就いては幾ら論じても、枝葉末節に過ぎぬのだ。此の根本を識っていなければ結局はエロに本拠を奪われるであろう。

淡い想い出

賢

(けんぼ)

母

西田 仁

提琴の西条雅彦が、最近のある婦人雑誌に
 こういうことを書いている。

「……この母は、ぼくが二才のときに西条の
 家に後妻に來た。ぼくがそれを知らされたの
 は中学を卒業した時のことで、生母の写真も
 いっしょに見せられた。父は、妹の靖子が生
 まれるとすぐに他界しているから、母は、は
 たちをすこし過ぎた若さで、二人の子供を抱
 えて未亡人になったわけだ。そして五十三才
 の今日まで、女手ひとつでぼくらを育てた。
 しかも、ぼくにいちばん儲からない音楽の道
 を歩ませてくれ、名マネージャーなどと皮肉

られたこともあった。ぼくが、母をどうにか
 養えるようになったのは、ごく最近のことだ
 ある……」

この記事は、私にかなり強烈なショックを
 与えた。あの美しい西条くんのおかあさんが、
 世に所謂継母であったという事実を、これで
 はじめて知らされたのだ。私は、じぶんが長
 いあいだにめだって育ててきたひとつのイメ
 ージを崩され、そして突然べつの方向から、
 さらに強烈なスポットを当てられたような戸
 惑いを感じた。

——そうだったのか。

私はあらためて、そこに掲げられている写
 真を見た。二十数年の歳月をへだてて見る母
 堂絹さんは、さすがにお年を召されていた。
 しかし、大正美人ふうに整ったほそおもて
 は、むかしのままで、それにいまは、すっか
 り落ち着いた氣品を湛えている。その傍につつ
 ましく、というよりは、小さくなって控えて
 いる平面的な顔の女性が、説明によれば雅彦
 夫人ということであったが、これは新進音楽
 家の若い細君とは思えない。よくいえば質朴
 な、わるくいえば映えない感じの地味なひと
 だった。私はすぐに、当時西条家に奉公してい
 たふみという女中さんのことを思い出した。

あの頃――。

私は雅彦の手記のなかに明示された絹さんの年令を逆算してみる。私たちは小学校の三年、だから絹さんも、三十そこそこだったはずだ。いま手許に在る遠足の記念写真を見ると、つきそいの彼女が児童たちのわきに立って写っている。白っぽい背広型のスーツに踵の高い靴という、当時としては、はなはだモダンな着附のしたに、女盛りの乳房が豊かに息づいているのがわかるのだから、誰の目にも魅力的な若い未亡人に映っていたものになりがたい。げんに私にしても、提琴家西条雅彦の名を見聞きするたびに、この母親のことを思い出し、彼女はいったい当時いくつだったのだろうと指を折ってみるのが慣わしになっていた。現今よりは女のひとが早く老け込んでしまう時代でもあったし、また友達のおかあさんの年令なんか特別な興味を持つような年頃でもなかったもので、私が絹さんの年を知ろうとするには、こうでもするより方法がないのだ。しかし、そんなことをしているうちに、私のほうが当時の絹さんをとくに追い越し、早くも三十半ばに達してしまつた。ところが、そうなってみると、こんどは当時見聞したいろいろの事実にあらたな意味

を附加して考え、大人の意地わるい目を以てそれらを解釈したがるようにもなっている。

水着の女王

忘れもしない日華事変の始まった夏のことだ。私は西条母子に招かれて、逗子海岸の家で二週間ほどの日を過した。今となつてはそれがどの辺にあたるのか、まるで見当もつかないのだが、とにかく庭に大きな松の木が、何本もあるような、かなり立派な家であつた。そのうちの二日間ばかりを夏のあいだだけ借り受けたのだということ、誘いに來た絹さんが私の母親に話していた。絹さんはきつと息子の学友を選ぶのにも慎重だつたと思うのだが、私が恩給生活者の末子であり、学業成績も良かったことが、そのおめがねに叶つたのだろう。また私の家が、きわめて質素な生活を営んでいたことなども、彼女の氣に入つたのではないだろうか。海水浴へは、私は一ト夏にいちど連れていって貰えるかどうかというところであつた。提琴の先生は週に二度東京からやってくる。そしてその日は、雅彦は私の友人ではなくなるのだった。

はもういいおかあさんになつてのことだろうが、ある日の午後、なにかのはずみから、雅彦がこの可愛らしい妹を畳のうゑに這わせ、「ハイシ、ハイシ」と乗りまわして遊んだことがある。私はそのそばに立って、じつはじぶんの番がくるのを待っていた。靖子さんだつておもしろがつて、きやつきやつとはしゃいでいたのだ。だからそれだけで済んでしまえば、たんに無邪気な子供同志の遊びであつたのだが、ちょうどそのとき、唐紙をあけてはいつてきた絹さんのためにべつの事件に発展してしまつた。そして、それが深く私の心に刻みつけられて残ることになったのだ。

絹さんの手にしているお盆には、いつものように、ミルクのたくさんはいつた冷たいコーヒーとゼリーのお菓子とがのつてゐるはずであつた。私の心待ちにしていたおやつだったが、すぐにそれを食べることはできなかった。絹さんは私たちの遊びを見ると一瞬肩をきゅつとひそめて、

「まあ！」

と驚きの声を放つた。もちろんゼリーはお預けだつた。雅彦は照れ臭そうな顔をして、のろのろと妹の背から降りた。そのとき、私

の体ぜんたいは羞恥に染まった。頬にかつと血が昇るのがじぶんでもわかる。人間を馬にすることが決して健全な遊戯ではなく、なにかうしろめいた残酷な快感を伴う運動であるぐらいのことは私も雅彦も知っている。だからこそ人目を避けてやっていたのだ。それを女中のふみさんにではなく、おかあさんに見つかってしまったのだから、これには困った。西条くんのおかあさんは、なんでも見透しだと、その頃の私は思っていたのだ。おそらく雅彦も私と同じ思いだったのだろう、ふだんとはちよつと違う緊張した笑いが彼の頬に浮んだ。

「ふみ！ふみ！」

絹さんは唐紙を開け放したまま、厳しい声で女中を呼んだ。後の雅彦夫人によく似ていたその女中さんが、かっぱう着の顔をびしょびしょに濡らした姿であらわれた。

「お嬢さまをあちらへ連れていきなさい」

「はい」

ふたりが廊下へ出てしまうと、絹さんはぴしゃりと唐紙を閉ざして雅彦の前に立ちはだかった。

「なんてことをするんです。女の子をあんな

ひどい目に遭わせて——」

私のほうは見向きもせず、絹さんは雅彦の肩に両手を掛け、その目のなかを覗き込むようにしながら、少し震えを帯びた低い声でいった。



「もしじぶんがそうされたら、どう思う？」

私はふしぎな期待に、人知れず胸を躍らせた。子供は母親の怒りには敏感なものだ。雅彦も母親の態度から、とっさにそれを感じたのか、はぐらかすように、にやにやしながら、なんとなく卓の上のコーヒークップに手を伸ばした。甘やかされた子供のわがままさであった。

「試しにママがしてあげようか？」

しかし、絹さんはそんなペースには巻き込まれず、矢庭に雅彦の手首を握み、冗談のような調子でいった。

「そこへ四つん這いになってごらん」

「いやだよ」

雅彦は、その手を元氣よく振り払おうとした。が、指の節が太くなると提琴のためによくないからという理由で、野球とか鉄棒のような運動は学科の範囲だけに制限され、その代り縄飛びとマラソンを奨励されている雅彦の手はお豆腐のようにやわらかく、そして驚くほど非力だった。だから母親にぎゅっと手首を握られただけで、もう、それを振り放すことができないのだった。

「いやだよ」

雅彦はすこし真剣な声を出し、体をななめ

に倒してその手を引き抜こうとした。

「綱引きだ。それ、どっちが勝つか」

絹さんは笑いながら、いいように雅彦をあしらっていたが、そのうちに呼吸を計って握っていた手をぱっと離した。力いっぱい引いていた雅彦は、じぶんの力であつという間もなくその場に倒れ、母親のいったとおりに見事に四つん這いにされてしまった。

「はうれ雅彦の負け」

倒れた雅彦の首を押えつけ、片手で簡単服の裾をからげた絹さんが、脚をひろげてその背のうえに跨った。私は目のまえに奇蹟が起きたような気持ちになって目を見張った。子供たちでさえ人目を憚るこうした行為を、女の絹さんがなんのためらいもなく、堂々と実行して見せたのだから驚いた。

「わあ」

大柄な女体の重味に、雅彦は脆くも肘をついてあたまがぐっと下る。それにつれて、絹さんの軀が首のほうに乗り出し、重心が前に移った。雅彦は畳を嘗めた。

「なあに？ 一歩もあるけない？ そら、どうだい」

歩くどころか、雅彦のひよわな体はもう完全に潰されて、腹を畳にべったり押しつけ、

身じろぎもできないほどに捻じ伏せられてしまっている。

「痛い痛い、ママ、痛いってば……」

「……」

「あッく、くー」

「ほらごらんさい、こんなことされたいやでしよう。靖子だっておんなじよ。弱い者いじめはするくせに、雅彦ったら、だらしないのね。さあ、口惜しかったらママを撥ねかえしてごらんさい」

そうして五、六分も経ってから、絹さんはやっと雅彦を許した。それからさっきと同じ口調で女中を呼び、みんなの水着を持ってくるように命じた。そして着ていた服、下着などをつぎつぎにそこへ脱ぎ棄て、それらをふみに片付けさせながら、ゆっくり紺色の水着に着替えた。女がじぶんの脱いだ下着を他人にたたませるのを見たのは、私としては、あとにもさきにも、ただこのときいちどだけである。

この小さな出来事に就いて、後年の私は断続的にはあるが、ずいぶん長いこと考えつづけた。音楽になんの趣味もない私が西条雅彦のことを忘れずにいたのは、彼の母堂絹さんにかかわる、この種の事件のせいだといっ

でも決して過言ではないだろう。

私は思う。絹さんはああいふ形での折檻をいつも行っていたのだろうか。すくなくとも返子の家で、あるとき雅彦の上に馬乗りになって懲らしめてやろうと思いついたのは、はたして、どの瞬間であつたのかと。私たちが靖子さんを苛めているのを発見したときに、それが絹さんの心に芽生えたのか、そうだとすれば、彼女は雅彦に対する嗜虐の期待に息をはずませながら、「お嬢さま」の靖子を部屋の外へ連れ出させ、それから雅彦をからかうようにして突きのめした。提琴の名手にするために、学科以外には荒っぽい運動をしてはいけなくと厳しく禁止しているのは、ほか



ならない母親の絹さんであり、したがって雅彦の体力については、知り過ぎるほど知っていたはずだ。押え込んでしまふのはなんでもない。私という少年がそばで見ているのも、かえって快い刺激剤となつて、長らく孤闘を守っていた絹さんの血を湧き立たせたかも知れない。そして心ゆくまで雅彦のうえに君臨してから、その場で水着に着替えて海へいった。遅ましいその裸身を、われわれの目に遠慮なく晒している。しかも女中のふみが、黙々としてその跡片付けをすることになつていく。それは怖いものなしの女王の地位だ。私はいっそ羨望に似た心を以て、そのように彼女の気持を分析していた。

それが今日になって、ここにまたべつの重要な資料がほかならない雅彦自身の手によって提供されたのである。それに依れば、絹さんは雅彦の継母であり、靖子は腹を痛めた本当の娘であり、そしておそらく絹さんによって選ばれたのであろう雅彦夫人は、あの女中のふみさんによく似た感じ

の女性であつた。
このふみさんについては、またべつの話がある。

覗き見

私たちの担任教諭は南といって、師範学校を卒業したばかりの人だった。ちやうど若い頃の芥竜之介のような風丰の好男子であつたが、この南がいちど雅彦に対して妙な懲戒を加えたことがある。今日と違って、児童に対する体罰が半ば公然と行われた時代ではあつたが、それにしても南先生のやりかたはちよつと異常だった。と、今にして私は思う。

授業ちやうどにわき見をしたという理由から先ず白墨を投げつけた。それは雅彦の顔に当り、彼はびっくりして向き直つたが、教師が白墨を投げたのだと知ると、学科のよくできる子供に特有の仕草で、ちよつとおどけて見せた。

「雅彦」

南先生は、いつもと違つた目で雅彦を睨みつけた。出来のよい児童に対しては、姓を呼ばずに名のほうを呼ぶというへんな風習がこのクラスにあった。だから南先生に名を呼ばれることは、児童にしてみれば、ひとつの誇



りだった。それは凭れかかった甘えが雅彦の態度にありありと窺われた。

「出てこい！」

南先生は、雅彦を教卓のまえに招き寄せると、いきなりぱしん、とその頬を撲った。

「あいたッ」

雅彦は手を挙げて頬を押えた。教師に撲られるときは、直立不動の姿勢をとっていないければならないのが当時の常識だった。

「こらッ。動くな！」

南先生は、そこでじぶんの腰に下げていた手拭を外し、雅彦の両手を前に合わせて軽く縛り上げた。

「あっちを向いて立ってれ」

子供たちはそれを見てげらげらと笑った。縛るのに使ったのは手拭で、しかも一重に巻きついているだけであり、残酷な感じはみじんもなかった。だから子供たちは、平生からヒキさている西条雅彦に対する奇抜な刑罰だぐらに思ったのだ。なかには羨しく思った者さえいたかも知れない雰囲気で、おそらくこれを家に帰って親に話した子供はいないと思う。私だって、母に話さないうちに忘れてい

た。それなのに、私の母はこの事件を知っていた。この情景を見たたった一人の大人がいたのだ。それは弁当のときに使うお湯を容れた大きなヤカンを配ってあるく小使さんのおばさんだった。大人たちのあいだで、どんな噂が囁かれたかは想像に難くない。

西条家と南教諭とのからみ合いに就いて、このほかに私はある事実を擲んでいる。それがふみさんのことだ。このことは、おそらく雅彦も知らないと思う。女手ひとつでじぶんを世に出してくれた美しい賢い母親を、公刊誌上で手ばなしに讃美している雅彦に、あのと時の母親の姿を再現してみせたら、はたしてどんな顔をするだろうか。

その年の暮のことである。南京陥落の祝賀行進が大々的に行われ、私たち学童も程近い明治神宮まで旗行列をすることになったのだが、今調べてみると十二月十一日が土曜日である。それで私は授業が終ってから一度家に戻り、あらためて日の丸の小旗を持って雅彦を誘いにいったのだろうと思う。耳門を潜り、暗い石堀のなかへ足を踏み入れると、湿っぽいなかに、なにか鼻孔をくすぐるような甘い芳香が立ち籠めている。これが西条家の匂いなのだ。雅彦も靖子もこの香りをふんだ

んに身につけている。豊かな家庭の香りであった。

西条くん！と、私は呼ぼうとして、はっと思いとどまった。

家のなかはしんと鎮まりかえっていたが、どこからか細い女の泣声のようなものが聞えてきたのだ。そのとき、私の脳裡に浮んだのは、ほかならない、あの逗子の家での情景であった。その他のこと——たとえば泥棒かも知れないというようなことには考えが及ばなかったらしい。どういうわけか、体がこちこちに硬くなった。あの光景を、見られるものなら、もう一度見たいものだとは私は願っていたのかも知れない。そこで仄暗い樹蔭の窓に寄せて置いてある、なにかの空箱のうえに乗り、おそろおそろ声のするあたりを覗いて見た。二枚のガラス戸のいちばん上だけが素ガラスで、それにふみさんの使っている三疊の女中部屋だった。暗い部屋で、ひらたい笠の電灯がひとつ、天井に高く灯っている。絹さんの着物がその部屋の中央に、いっばいに拡がっているように私の目には映った。それはいつも着ている黒っぽい和服であったが、まるで絵本で見る大蛇の鱗みたい、ぎらぎらと輝きながら揺れていた。そしてその前裾の

あいだに挟まれてあの女中のふみがいた。私は息を殺して伸び上り、わずかな戸の隙間に耳を押しつけた。絹さんがなにかいっているのだ。

「……いえないなら、いえるようにしてやろうか?」

かなり大きな声だった。ふみさんは私のほうにあたまを向け、あおのけざまに押え込まれていた。ひつつめ髪の大かな鬘が女主人の白い指にしっかり握られて、

「ひいッ、ひどい——」

という悲鳴がくいしばった歯のあいだから洩れている。絹さんの着物の前は、その胸のうでふたつに別れ、露わになった片膝がふみの利腕を引き据えていた。そしてもういっぽうの足は青白い内腿を見せて、肩口のあたりを踏みつけているようだった。ひどいものだ。目も口も吊り上げられたようなふみの顔が、私のいるところからも見えるのだ。

「ひッ、ひッ」

ふみは世にも哀れな悲鳴を押し殺しつつづけていたが、片膝立てにのしかかった女主人の桎梏から逃れることはできないらしい。もちろん、現今のお手伝いさんとは違う昔の女中だ。主人に手向いなどできはしない。しかし、

そればかりではない、なにか悪いことをして自白を強いられているのだと、子供心に私は直感した。

「どうだい、まだ強情を張る気かい?」

と絹さんがいった。あとの言葉は聞きとれなかった。ふみは苦悶に身をよじって、唇をもどももど動かしただようだった。

「あッ、あッ、もう——」

「ふん——。いくら暴れたって——」

絹さんは鼻先で冷たく笑うと、こんどは両膝を畳について上体を起し、相手の胴体を膝のあいだに締めつけたまま激しく体を上下に動かした。逗子の家で、雅彦を責めたときとはまるで形相が違っていた。下唇を噛みしめた前歯の金冠が、まるで鬼女面の牙のように尖って見えた。私がその恐ろしさに我を我れ、思わず箱のうえからずり落ちそうになったとたん。

「み、みなみさん——」

という苦しげな声私の耳をうった。それは、上の女主人の口から発せられたものか、下に組み敷かれた女中の唇を割って出たものか、いずれにしても、私がそれを南教諭に結びつけて考えることができるようになるまでには、なおかなりの歳月が必要だった。学校

の教師をさんづけで呼ぶことが、子供としては納得できなかったのであろう。もちろん、ふみの体の上で行われた絹さんの荒々しい躍動に秘められた責めの意味など、想像することもできなかった。

私は、追われる者のように耳門を潜って表へ出た。そして、ちようどむこうのほうから、大きな提琴のケースを引き摺るようにして帰って来た雅彦の姿をみとめたとき、私は本能的に近くの露路に身をかくした。雅彦は、ど

んな行事を控えていても、提琴の練習を休むことは許されなかったのだ。

南先生とふみとの姿は、やがて相前後して私たちの前から消えた。そして学年度が改まると、こんどは西条雅彦の家も世田谷のほうへ引っ越してしまった。

私たちはその後も、しばらく文通をつづけていたが、やがて中学の受験が近づく頃になると、絹さんの代筆で返事が来るようになった。そんなことから彼との交遊は途絶えたま

ま、今日に至っているわけだが、その間雅彦は音楽一途に精進して今日の栄光をつかみ、私は戦災で家族を失い、町工場、駐留軍、喫茶店などを転々として未だに職が定まらない。

私は暗然として、雅彦の手記に採録されている彼の署名を眺めた。それはいかにも形の整った美しい筆蹟ではあったが、ちようど絹さんが手を添えて書かせた子供の頃のお習字のように、どこにも力の籠っていない、弱々しい文字の羅列に見えた。

あるおムツマニアの夢

赤井

茂

マニアの夢は全く無限である。

私はおしめマニアである。物干に満鑑飾のおしめ、アパートのヴェランダに色とりどりのおしめの干してある光景はほゝえましくも亦楽しいものである。最近では化学織

維の進出で、ヌメヌメした柔いゴ

ム膜のおムツカバーが影をひそめて来た事はゴム布に興味を持つ者にとつては全く淋しい限りだ。

然し、マニアにとって嬉しい事は、最近大人用のおムツカバーが

容易に手に入る様になった事だ。

以前は、「大人用のおしめカバーですか、子供のおしめカバーならありますが、大人のおしめカバーはね」とか「エー、大人のおしめカバーですか」なんて一笑に付

されたものだ。それが最近では殆ど薬局でも手に入るので楽しい事である。それに大人用は殆どがゴム製である事がゴム布マニアには楽しいのである。

私がのぞいて見た物ではグリーン、総ゴムの厚手のゴツゴツしたのが圧倒的で、次いでレンガ色の張ゴム製、ネズミ色、それに黒ゴムと云った処で、羽二重式のカバーでは白のウーパゴム製、ビニール製はクリ色、又はクリーム色の程度だ。型は前開両脇スナップ式



と三角型の二種である。前者は綿テープで腰部をしめる、ヒモがついている。又、太ももの部分にもテープをつけて、太さに依って調節出来る様になっている。三角型も殆ど綿テープが使用されている。然し粗雑な製作である。三角型においては、昔の様に貝ボタンが使用されている。

ある薬局の奥さんは、こう話し

て呉れた。

「大人用と云うのは、病人の方に使う物ですから、赤ちゃんのおしめカバーの様に色々な型はありません。実用本位ですからね。これ等は第一に丈夫である事、乾きの早いといった点で厚手のゴム布が使っております。中には交通事故とか婦人科の疾患等で恢復しても知らず知らずの中に粗相する様

な方なんかは柔いゴムの赤ちゃんのおしめカバーの様なカバーを使って見えます。これ等は注文で作って使ってますが、殆どはこの様なカバーです。起きたりしても必要な気の毒な人にはゴワゴワして不便ですからね」

又、ある薬局では、

「大人用はゴムのおしめカバーの方が良いですね、家もゴムとビニールの二種類を扱ってましたが、ゴムの方が良く出てビニールは余り出ませんので、このゴムのおしめカバーばかりです」

と心楽しい話だった。然し、時々大人のおしめが干してあるのを見るが、厚手のゴムのおしめカバーが主の様である。中には大人用のおしめカバーを買うのを憚ってか、又は大人用カバーの存在を知らずに手製のカバーを使用しているのも見かける。すぐ隣の町内におしめを使ってる人があるが、これは手製のカバーだが案外ていねいに派手なカバーを使っている。

茶のレインコートで作った物らしく内側にゴム膜を張った物だ。ボタンも揃った乙なカバーだ。

こんな事もあった。薬局での事だが、大人用のおしめカバーについて尋ねたら奥さんはこう云われた。

「大人用のカバーは、うちにはありませんが家で作ってはいかがですか、腰巻のウラにビニールをぬいつけて巻おしめにしたら、又ビニール布で、おしめカバーを作ってはどうです。うちの子（小学四年生の少女）が二カ月ばかり病氣した時、便器にはなれないのでビニールでおしめカバーを作って使いましたけど調子がよかったですよ。便器は大人でもかゝりにくいですからね、それに浣腸なんかされますと汚れたりして困りますから、その点おしめカバーは便利ですよ。又、ゴム布を買って来て腰巻式にすれば良いですよ。腰のあたるところにひもをつけて使えば充分間に合いますよ」

名古屋のM百貨店で見せてもらったのは、総ビニール製で二重になつてゐるカバーだった。外側は

茶のビニールで内側に昔のビニール布の大きなサイズで私が使おうものなら子供が大人用のカバーをつけたと云つた恰好になる様なカバーだった。又、ゴム製一式の間屋をのぞいた時の、これは羽二重のカバー。内側は白のウールゴムの柔いので外側は、子供と同じナイロン地に柄の入った布地で太モモの部分が、スポンジゴムのおしめカバーだった。使用感は柔いので良い物だと思つた。

ある婦人から聞いた話だが、(施設の子供達の面倒を数年間みてた来た事があると云う人)「おねしょ」する子供が可成りあり、面倒を見るのに大変だった。「おねしょ」する子供にも防衛帯と云つたおしめをさせるのだそうだが、大きな子供だけに時にはカバーからフトンにまで濡らすと云つた事もあった。少女達も可成りおしめ

カバーをさへねば寝かされない子供もいたと云う事であつたと述懐していられた。

私が県病院へ行つた時の事だが物干場は正に色々な人生の生活様式を表わしている。男女のねまき、シャツ、下着と色々であるが、矢張り一番目につくのはおしめである。子供の物もあれば大人のもある。おむつ地は主として赤ん坊の物の浴衣を再生したおムツもある。正に色とりどりだった。カバーも又色々だ。張ゴムのゴワゴワした感じのおしめカバー、注文で作つたのだらう、赤ん坊のカバーと同じ様に柄入りに色ゴムのついたおしめカバー。腰巻にビニールをぬいつけた手製のカバー。ゴムシートに紐をつけたカバーと様々。ヌメヌメしたゴム膜には所々シミがついてゐるのが特徴であり、印象的であつた。案外女性が多いのに、一種の楽しみが湧いてくるのだった。

最近では脳溢血とか交通事故等で大人のおしめカバーの利用者が増えた事は事実で、有名なおしめカバーのメーカーが大人用のおしめカバーの製作にのり出して来て、仲々誠実的なカバーである。ニシキおしめカバーは上質のオレンジ色の総ゴムの仲々肌触り良く丈夫なスナップが使用されており、ふちには白いウールゴムの様な物でフチ取りがしてある。又、腕の鶴印おしめカバーは、男女両用があり色合いがあり無地のナイロンにゴムは白のウールが使用されている。価格によつて使用される物が異なる様だ。まだまだ中小メーカーも大人用のおしめカバーを製作してゐる様だ。

昔はゴム布マニアや、おしめマニアには楽しい事だったろう。おしめカバーといえはゴム布がすべてであつたからだ。未だに忘れられぬ思い出にこんな事がある。

小学校へ上る前の年だった。二月月近く頭も上らない大病をした

時おしめをされたのだった。茶ゴムの三角型でネル地の派手な柄のおしめカバーだった。やっと起きたりする事が出来る様になつても、しばらくおしめカバーをつけられて、西隣の奥さんは子供がなかつたため、暇がある人だったが、良く可愛がつてくれ、時には「茂ちゃんお小便したのね、さあおしめを替えて上げましょうね」と赤ん坊の様にされてグッショリぬれたおムツ、ぬれたおしめカバーをひろげて「くさいくさい」とおどけて取り換えてもらった記憶が、ハッキリと想い起こされて来る。おムツマニアの夢は楽しい。今日も又明日も夢を求めて生きてゆく偏執者の私なのである。

私と同じようなオムツフェチの同好の方々、並に浣腸に関心をお持ちの方々からの御寄稿、御投稿を偏えにお待ち致します。誌上を以つて、なごやかに語りえたらどんなに楽しいことでしょう。

「奇譚三十九夜物語」

——第十一夜——

辻村 隆

師走の慌ただしい空気が、ルームにも何となく流れている、そんな宵でした。

ストーブが真赤に燃えて、窓硝子がすっかり汗をかいて、紫煙が部屋一杯に霧のように立ちこめて、そのなかに、八人の退屈男はめいめいにグラスを手にして、勝手気儘な雑談にひとしきり華を咲かせていたのです。

ここでは金詰りも、核爆実験も、株相場も、すべてオフリミットの、厭な時世を超脱した、獵奇を求める裸の姿の会合であったのです。こんな厭な世の中なればこそ、反ってそれを忘れる為に、月に一度はこうした気儘な会合が必要だったのかもしれない。

「皆さん——ちよいとこれを御覧下さい」

ナイロン氏が一同を制するように立上ると、両手に掲げるようにして、四ツ切の一葉の写真を示しました。

「ホウ——、これはこれは……」

誰からともない嘆声が洩れて、一同はじっとそれに見入ります。「御覧のように、パンティ一枚の丸裸で、両脚を開いて逆吊りにされた美女の写真です。眼を閉じ猿轡された苦悶に歪む顔。犇々と肌に喰い込む緊縛の菱型縛り。逆吊りの左右の足は、太い青竹に股も張り裂けん許りに開かれて、青竹の両端の太縄が、天井の滑車に三角形につながっているのです。彼女の年齢は二十二才。御覧のようなトランジスターグラマーの美人です。さて……」

ナイロン氏は掲げていたフォートをテーブルにのせると改めて一同

を見廻しました。

「この写真を題材にして、皆さんに、今宵の集どいにふさわしいお話をつくって戴こうと思うのです。しかもですよ、ここはひとつ、うんとひねって戴いて、推理ブームにのって、スリラー小説ばりにシヨートシヨートを考えて戴こうと思うのですが。如何です、皆さん、この提案は……」

「賛成——と云いたいが、即興じゃどうもね。自信があり過ぎる」ライカ氏が困惑した顔でつぶやきました。

「二十分間——、この逆吊りの美女に幻想を求め、猟奇を探索して、さまざまに頭に描いてもらおうじゃありませんか——。提案者の私はずるいようではありますが、加わらない事にします。このシーンが最初でも中途でも、最後まで、又彼女が死んでいても、生きていても、それは勿論自由です」

ナイロン氏は、一同の沈黙考振りに愉しげにニヤリと笑いました。

「大変な例会になったよ。こいつは弱ったね。差当りスバル氏なんか、日頃の三文文士振りを發揮して、口火をきいたらどうかね——」ドクター氏が思案に余ったようにスバル氏にうながします。

「一席伺う間に、皆さんに考えて戴くとして、それじゃ、拙いのをひとつ——」

スバル氏は案外あっさりとグラスをおくとテーブルのフォトを手にとって、にらみつけるように凝視し乍ら、やおら口を切りました。

第二十七話 遅配

有馬稻造氏は愕然とした。

無我夢中で振り降していた鞭を投げ捨てると、慌てて八千草みどりの逆吊りの苦悶に歪んだ顔に、自分の顔を近附けて猿轡を外すと彼女の呼吸を探った。白く乾いた唇に息はない。震える手で犇々と縄の喰い込んだ、豊かな胸に手を当てて見たが、鼓動は止まっている。

「失敗った。僕は最愛のみどりを、この僕の手で責め殺して終ったのだ。一体どうしたらよかろう……」

有馬氏は滂沱と溢れる涙を拭おうともせず、腑抜けのように、ペタリとその場に座り込んでしまった。

今の今迄、宙間にのたうっていた女体が、だらりと両足を高々と天井に開いて逆さに、無気味にぶら下がっていた。脳しんとうか、心臓麻痺か、窒息か、死因は何でもよかった。唯、そこには、八千草みどりの嗜虐の対象の死が厳然とした事実で逆さに吊り下っている事だった。

「僕の会社での部長の地位——、女房や三人の子供——、ああ何もかも御破算だ——。僕の前途には死刑だけが待っている——」

有馬氏はほんの数分前までの、嗜虐に狂った姿から、慄然と現実に戻り、今度は、現実の恐ろしい事態に狂わん許りになった。脳の血管が破裂しそうにズキズキ痛む。

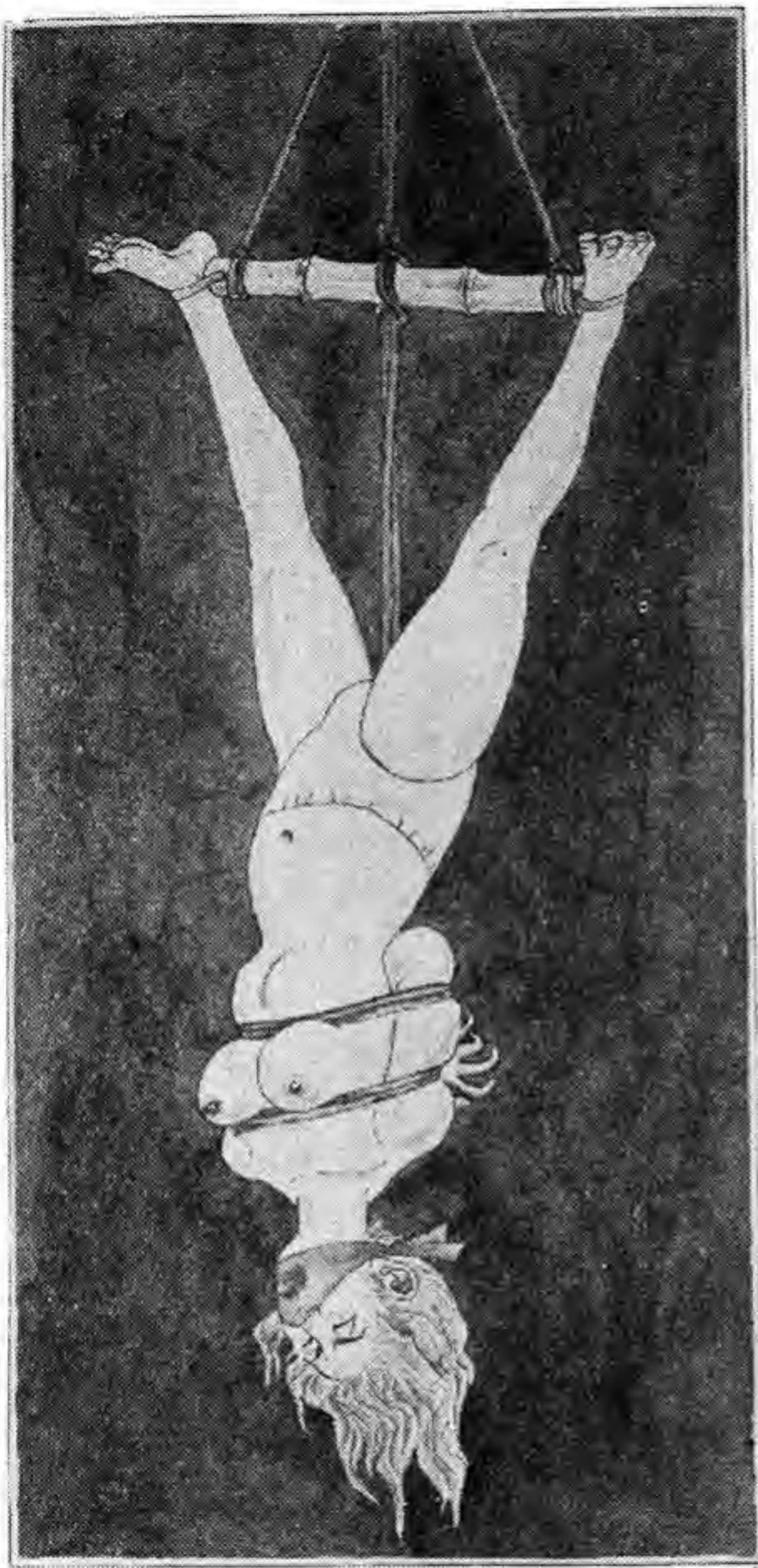
咄嗟の事態に、彼は五十六才の生涯を賭けての、初めての必死の境地に追いこまれたのだった。

放心した眼で彼は辺りを見廻した。昨日引越して来た許りの荷物、未だ居場所も定らず、雑然と転がっていた。

ナラタージュ式に彼の脳裡に、八千草みどりとのいきさつが、鮮やかに逆回転して浮かび上ってくる。

東京本社連中と大阪ミナミのバーで痛飲して、バーを出た時、有馬氏はかなり深く酔っていた。よろめく足どりで道頓堀を本社連中と別れて、ふらふら歩いている彼に、フト一枚の小さなビラが手渡された。酔眼で見つめると、「今宵の貴方のおともに可愛い美女をどうぞ——。クラブ天使」と書かれた煽情的な宣伝文が飛び込んで来た。

この年まで勤続三十五年——、大学を出てから、会社大事に勤めあげて来た有馬総務部長の心に、フト悪魔が囁やいたのは、この瞬間である。



ともあれ彼は、その時は酔余の軽い浮気心からであった。電話番号が刷り込まれてあったが、彼は面倒臭くなって、酒の勢いで、そのビラを渡したオッサンによるよろ近附いた。恰福のいい年配のこうした紳士が、この種のクラブの最もいい鴨である事は間違いない。

オッサンと連れ立って近くの喫茶店で談話成立——。一時間四百円で、二時間分の八百円と云う値にも、有馬氏はアヴァンチュールの安易な値に驚いた。ミナミのバーで支払った一万四千円からくらべて、これは又何と安い事だろうと……。

十数分後に現われた娘が、八千草みどりだったのである。

現代の流行を追った服装であつたが、何となく安っぽかった。

酒の勢いで、年甲斐もなく有馬氏は手を組み、大らかな気になって闊歩した。

喫茶——ダンスホール——

——洋酒喫茶——ホテル——

誰しも似かよつたようなコース。有馬氏は結構、若やいだ気になって大いに愉しんでいた。

事態はそれから急変した。頬を紅潮させてみどりは素肌を曝した儘、すっく

どりに、この団地へ移った事を堅く口止めさせておいた。

彼女が団地に移った翌日、僕は矢も楯も耐らず、会社の仕事を午前中にきり上げると、この団地に車を飛ばした。駅前で車を降り、僕はソフトを目深にかぶって、団地の五六号室を静かにノックしたのだ。

みどりは団地の管理人に独身女性の一人者として報告してある手前、僕は忍ばねばならないのだ。

みどりの待ち兼ねた顔が扉から覗いた。吸われる様に僕は這入る――。

一日逢わねば千日の例え――僕は狂はしくみどりを抱擁し、既に僕等の生活の一部となっている責めのプレイに、早速とりかかったのだ。

白壁の天井にそってスチーム管が通っているのが、恰好の逆吊りに便利な梁の役目を果たした。僕は小型のチェンブロックをみどりに出させると、それを太い縄でしっかりと結び、みどりを見た。以心伝心、みどりは嬉しそうに、にっこりとした。

防音壁の団地のこの部屋なら、力任せに鞭を振るっても、他に聞える気遣いはない。

僕は、既にパンティ一枚になってベッドに横たわっているみどりに近付き、数条の真新しい縄をしごいた。荷造り用として選んで買った縄が、すべて、これからはみどりの体を荷造りする縄に早変わりするのだ。

僕は時間をかけ、悠々と心行くまで力をこめて薙々とみどりに縄をかけた。後手の縄が手首に喰い込むのを、息をひそめてみどりはこらえていた。青竹の太いやつに、僕はみどりの両脚を一杯に開か

せて、縛りつけた。

青竹の両端の穴をあけた個所に縄を通して結び目をつくって通すと、青竹はハンガーのようになった。縄の頂点に更に縄を通して滑車に通すと僕は引き絞った。物理の応用で、さして力を入れなくても、ギリギリギリと足許からみどりの体は宙に浮上った。

すっかり吊り上げたみどりの逆さの顔が、紅潮して僕に笑いかけた。

猿轡をはめて、僕は鞭をとった。

鞭の振るう毎に、ゆらゆらとみどりの逆吊りの体は宙に左右に前後に揺れうごいた。

静かな室に鞭音だけが高く響いた。僕の心は弾みに弾んだ。もっとももっとと云う様にみどりの瞳が訴えるようだ。僕はラジオのスイッチをひねった。

ひる下りのラテン音楽と云うやつが、室に鳴り響いた。リズムに合わせて、僕は打ちに打った。

顔に汗を覚えて、僕はフト鞭の手を休めた。微かにゆれるみどりの顔は妙に青白かった。乳房に、肩にうっすりにじんだ、鞭跡の血痕が凝固していた。僕は愕然とした。

×

×

×

有馬氏は我に還ると大急ぎで辺りを見廻した。昨日移って来た許りだし、近隣の知合いは全然ないのだから、彼を知る者はないと云ってよかった。駅前からの団地まで、午後の数分を歩いてきたとしても、誰一人彼の存在には気付いていないに違いない。

と、すれば、この室から、すっかり彼の存在を消してしまわねばならない。

有馬氏は強いて気を落ちつかせようと、ゆっくりピースに火をつけた。或いはうまく通れられるかも知れない。

彼はここへ這入って来てからの、室中の触ったものをゆっくり思い浮べて見た。

コップ、灰皿、ラジオ、スチーム管、扉の把手——それらを、注意深く、ハンカチで拭いて廻った。指紋を残すことは致命傷だからだ。幸いにも、この部屋に彼の生活の匂いはしみついていない。

それから、みどりの傷ついた体を、いたわるように徐々に床に降すと一旦縄を解き、改めて、今度は無茶苦茶に両手足を縛り、猿轡をはめてベッドに転がして、その上からすっぽり毛布をかけた。強盗の仕業と見せかけるためだった。

洋服箆筒、トランク、ポストンバッグの品物を辺りに一杯にちらばらせた。



彼と繋りのあると思われそうなものは、一纏めにしてポケットに藏いこんだ。

ハンドバッグの中に、有馬氏が渡した十万円のうち、八万円程が手つかずで残っていた。彼はそれもポケットに納めた。

彼女の死因の分らないのが不安だったが、今更、死後に首をしめたとして、刃物で心臓をついたとして、科学捜査ですぐばれる事は、彼もテレビの刑事物語等で知っていた。

この室に彼の足跡を残さぬ限り、或いはと云う気持ちも湧いてくる。

彼は大分気持ちにゆとりが出来た。すると、たかが、ステッキガールひとりの死と、営々と築き上げて今日の地位にある自分が、天秤で計られるのが莫迦莫迦しくなってきた。

『プレイで死んだのなら、みどりもきつと本望だろう。だが死はあくまでも事実だ。僕はこん

な女ひとりの為に将来を棒にふるっては耐らないじゃないか。何と少しでも助かる為に努力しなくちゃいかんッ。▽

有馬氏は長い夢からさめた様に、身震いして、更にあらためて辺りを見廻した。

彼女の持物に儼の指紋はないだろうか——忘れものは……

冷静に念入りに改めて、部屋を出た。

次は不在証明だ——。

映画を見た事にしよう。明日大急ぎで見るのだ。そうだ『釈迦』を見よう。

駅前までの道で、誰一人彼に不審を持つものもなく、街は平常に活動していたし、所詮有馬氏は路傍の一人にしか過ぎなかった。

午後一時半に会社を出て、今は午後五時四十分だった。

所要時間四時間と十分、この間のアリバイを確立させておかねばならない。

ターミナルからタクシーを飛ばして、行きつけの洋酒スタンドの入口を這入った時、有馬氏は時計を見て、その時間が五時四十分である事を確かめておいた。

▲務めて平静で、普段通りでないと不可ない。うんと気を静めるのだ▽

例の如く、彼はサントリーの水割りを注文した。

「ようマダム、早くから御精勤だね——」

「あらッ、部長さん、今日はお早いのね。どうしたの——」

「ウン、会社内で評判なので、久し振りに映画を見て来てね。『釈迦』ってのをね」

「随分大がかりらしいのね」

「ウン、大したもんだったよ——」

有馬氏はそこで『釈迦』に関する、新聞や雑誌の批評、社員の噂を必死に思い出して喋べった。

七〇ミリ映画であること、六本トラックの立体音響であることなどは『ペンハー』を思い浮べて喋べった。

一時間程洋酒スタンド『サニー』で喋べってアリバイをつくると、彼はそこを出て、ミナミのN劇場に電話して『釈迦』の上映時間をきいた。

一時、四時、七時の三回興行で、指定席以外に三百円の自由席のある事も確かめておいた。

午後一時半に会社を出て、タクシーでミナミへ出るとすれば二十分かかって一時五十分。二時から映画を見て五時に終る。ブラブラ歩いて『サニー』に行けば約十五分、その間二三十分のギャップはターミナルの百貨店にでも入っていた事にすればよい。

有馬氏は少し気分が楽になった。

三日後の朝刊に、S団地の殺人がかなり大きいスペースで報じられていた。

新聞は強盗と痴情の双方で犯人を捜査中だと結んでいた。

どう手を廻したのか、八千草みどりが、クラブ『天使』のステッキガールであり、相当多数の男と交遊関係にあったなどという事も一新聞は伝えていた。

会社の新聞四紙に眼を通し終って、有馬氏は稍々蒼ざめていた。みどりの交遊関係を洗えば、必ず彼もその捜査線上に浮び上るの
は必至の事であった。

彼はその時、アリバイをうまく云えるかどうか危険を感じた。聞けば嘘発見器のようなものもあって、心理の動きを追及する事もあると聞いている。

その日の午後、有馬氏に一人の面会者があった。応接室で対すると、予感に違わず、S署の刑事で内海と云った。物腰の柔らかな髭の濃い三十過ぎの男だった。

「新聞で御存知と思いますが、三日前に殺された八千草みどりとは、クラブ『天使』を通じて数度一緒に遊ばれたそうですね。」

「ええ、確かに以前は数度遊んだ事があります。最近は全然逢っていませんが、私も新聞を見て驚いているのです」

有馬氏は極く自然な調子で答えた。クラブ『天使』を通したのは始めの数回だけで、後はずっと、みどりと直接打合せて逢っていたのである。それもなるべく盛り場を歩くのを避け、ホテルもその都度一回きりで、変えていたのが、今になっては大した証拠を残さない結果になっていた。

「あの日の模様をお聞かせ願いたいのですが」

「えーと、三日前ですね。そうそうあの日は社員の間で評判になっていた映画の『釈迦』を見る為、午後は仕事もなかったので早引きしましてね。午後一時半頃会社を出て……」

と、すらすら有馬氏は淀みなく説明した。内海刑事はメモにそれを書き止めていたが、

「すると、何ですね。貴方が映画を見たと言う証明をする者は、貴方一人が行かれたのだからいいわけですね——」

と探る様にきいた。それ来た——

「そうですね。これがアリバイになるなんて考え乍ら、日々行動す

る者もいませんしね。あつ、そうそう、映画を見終って、行きつけのスタンドで、マダムに確か映画の話をしたように記憶していますよ。ミナミのR町の『サニー』という店です」

「『サニー』ですね」

刑事を書き留めると念を押した。

「電話できいて下さっても結構です。ところで彼女の死因は何ですか——」

「心臓麻痺らしいが、強烈なショックによるものと判断されています。全身に殴打した様な傷跡があるので、或いは犯人は異常性格者とも考えられているようです。貴方にそんなお心当りは——」

「さあ——、私はホンの浮気心で遊んだだけで、最近忙がしいし、薩張り知りませんがね——」

「どうも御邪魔しました。ひよっとすると、参考人として来て頂くかも知れませんが、その時はどうぞ——」

内海刑事は、案外あっさりと腰を上げて帰っていった。有馬氏はそっと腋の冷汗を服の上から押さえながら、大きく安堵の溜息をついた——。

助かった——。一瞬でも容疑から外されえた事が、この際何よりも嬉しかった。△もう浮気はコリゴリだ。▽有馬部長は心底からそうつぶやいた。

絶えずみどりの幻影に悩まされながらも、一カ月程は何事もなく経過した。

死の刹那、逆吊りのみどりの歡喜と苦悶にうるんだ瞳がちらついで消えなかった。

みどりと遊んだ数人の男が容疑者線にのぼっては消え、迷宮入りになってか、新聞紙上からもみどりの事件の記事は消えた。

その後捜査本部からは、誰も有馬部長を訪ずれなかった。

彼もどうやら社用に、本格的に精出せるようになり、罪の自我意識が薄れかけた頃、ひょっこり内海刑事が、部下二人をつれて前触れもなく訪れた。

「やあ、突然ですが——一寸参考迄におたずねしたいと思ひましてネ。貴方、みどりの死んだS団地に行かれた事ありませんか」

「え——一向に……」

ドキリとしたが、さりげなく有馬氏は答えた。顔が蒼ざめるのが自分でも分った。

「そうですか——。みどりは殺される前日にあの団地へ移ったそうです。数人の容疑者の誰一人、みどりがあそこへ移ったのを知らなかった。しかし貴方だけがしっていた——」

「そ、そんな、儼も全然しりませんよ——」

「これを見て下さい——」

内海刑事は、さっと部下に合図すると、やおら一枚の葉書を取り出した。

「これはみどりが、故郷の熊本のたった一人の母親に書送った葉書です。さあ、読むのです——」

震える手で有馬氏は葉書を見た。拙ない咄々とした数行の文字が、彼の眼に焼きついた。

——前文御免下さい。お母さん、本当に永い間いろいろ御心配かけました。私も悪い仕事からぬけ出して、やっと大きい団地のアパートに住めるように今日ここへ移りました。これは有馬

稲造さんという人のお世話です。私ももう少しお金をためたら、お母さんのいう通り、熊本の良吉さんと結婚して、大阪でお母さんと三人で、たのしく住みたいと思います。それまで辛抱して下さい。良吉さんには有馬のこと内緒にして下さいネ。お元気で暮しの程お祈りします。かしこ みどりより——

有馬氏の体からスーツと魂が抜けていった。

「熊本の彼女の母の住所が変わっていて、団地に転送されて来たのです。葉書を出した日附は、丁度彼女が団地に移った日になっています。葉書の遅配が一月貴方の逮捕を長びかせたようですね。逮捕状はこれです。本署まで同行願ひしましょう——」

遅配、ちはい、チハイ……意味もなく、そんな言葉が有馬氏のカラツポの胸中をかけ巡っていた——。

………

「即興にしちや上出来だよ。ところで、次は私がやるとしましょうかな」

ワイン氏は流石に酒豪らしく、相当のワインにも姿勢を崩さず、さてと改まりました。

第二十八話 写 真

玄関のベルが鳴った。いつまでも——

△婆やも、みどりも、絹枝も居ないのかしら本当にしようのない人達だこと……

軽く舌打ちして、高峰富士子夫人はテレビを消して玄関の掛金を外した。

ドアが開き、ぬっと一人の見知らぬ紳士が入って来た。髭の濃い若

い精悍な顔立ちに、大きい黒眼鏡が異様に黒く光った。

「高峰さんですね？」

と男はたしかめ、ポケットから封筒をとり出すと数葉の写真を彼女に黙って突きつけた。

「一、一体何ですか？」

「私の口から説明しなくとも、見れば分るでしょう……」

「えっ……」

いわれて富士子夫人は、それに眼をやると、瞬間全身を赤くした。が、途端に愕然と眼を見はった。男女秘戯写真の押売り？と咄嗟に思ったのが、よくよく見ると写真の男の方はまぎれもない、主人の高峰義一郎ではないか——。そして喃喃と戯れる女は、三カ月程以前、新らしく来たお手伝さんの八千草みどりに外ならなかった——。

「で、どうしてこれを……」

富士子夫人は、すーっと体が地中にめり込む想いで、やっと立っているのが精一杯の蒼褪めた顔で喘ぐように聞き返した。

「知らぬは女房許りなりって……」

そんな文句はなかったでしょうかな……免も角立話も出来ませんしね。一寸、御邪魔しましょう」

男は歪んだ笑いを、口許に泛べると、さっさと靴を脱いで、勝手



知ったように応接間へ先に立って入っていった。

「私は興信所崩れの私立探偵です。われながら少々あくどい世界ですね。人のアラをあばいて飯を喰っている男という方が早分りかも知れない。実はお宅の御主人の商売仇のある男より、貴女の御主人のアラを探し出してくれと頼まれましてね。何しろ金次第の私のこと——二つ返事で引受けて、日夜身辺を窺っておりましたが、流石に御老練で一分のすきもない。止むを得ず、夜分密かに参上致しました処、御主人が夜中に寢室を出られて、八千草みどりという若いお手伝いの寢床に忍び込むところを運よく見つけましてね。これ幸いと、パチリパチリという工合にね……。へへ、最近のカメラも随分便利になったものですよ。薄暗くたって、チャンと、はれ、この通り、鮮明に、ありのままの姿が撮っているのですね——」

「貴方は、残酷です！」

富士子夫人は打たれたように、端麗な美しい顔を上げて叫んだ。夫の義一郎をも含めて、世の男性に対する激しい憎しみの感情が、胸で嫉妬と共に渦巻いていた。

「やれやれ——」

ソファから身を起した男は、つと富士子夫人のそばへ寄ると、耳許にささやいた。

「これを敵方に売るか、それとも貴女が買うか、氣持次第です——」
「主人にどうしてそれを……」

「勿論、御主人なら言い値で黙って買うでしょうな……。併し私は親切者でネ。若い女と御主人との情事を、貴女が知らずに居られるのがお気の毒でネ。それに第一、貴女のような世にも美しい奥様を

持ちながら、何が不足で、若い娘に手を出すのか、貴女の旦那のやり方が氣に喰わないのでね——」

「分りましたわ。買いましょう。」

「敵方に売れば百万円——どうですこの安い値で……」

「いいですわ、百万円で……。けれど、私も貴方をお願いが一つあるの……」

富士子夫人は、おもてを掠める嫌悪の色を、辛うじて押えて、陰しい眼付になった。日頃、賢夫人の誉れ高い彼女の、夫に裏切られた傷手は余りにも大きかったに違いない。

「ききましょう……」

男は応揚に構えていた。

図々しい奴の典型的なような男である。

「八千草みどりを殺して戴きたいの……それも最も残酷な方法で……」

「ハハ、御依頼は殺し屋ですね。よろしい引受けましょう。」

男はいともあっさりとうなずいた。

「最近世の中も物騒になりましたネ。あっさり殺しの御依頼をなさるようです。私が引受けただけでも既に十六人、どれも完全にしかも依頼者に御迷惑をかけず、地上から抹殺して居ります。何なら御主人も一緒に……」

「主、主人は結構ですわ……」

富士子夫人は慌ててさえぎった。喋べらせておけば、次々と恐ろしい事を平氣でいう男、冷水を浴びたように身震いした。

こんな不潔な夫と、半年間も、夫婦として暮して来たかと思うと、彼女は自分の体迄が汚れてしまっている嫌悪感にかられたが、

あの義一郎の逞ましい腕に抱かれた時の恍惚感を思うと、矢張り憎しみより、夫のあやまちを許そうとする寛容な愛情が先に立った。

武州鉄道の汚職で検挙された、髭の代議士の賢夫人が、取調べで明るみに出るにつれて、夫が二千万円に近い金を二号の八頭身の三十数才の若いバレリーナに注ぎ込んでいた事情を知って、身も世もあらず病床に伏した気持も、富士子夫人にとっては泌々と分る気がした。永年連れ添った夫は許せても、夫を奪ったみどりは断じて許せないと彼女は思った。

「商談は速やかに成立させましょう。人間消失が百万円、この写真の件が百万円——併せて二百万円——いいですね。手付金はどちらも一割ですので、占めて二十万円、明日頂戴に上りましょう。この写真はお渡しするとして、全部成功の上で金額と引換えに、ネガをお渡ししましょう」

「あのう、みどりの事で私に迷惑がかかるような事は……」

彼女は憂いと疑いできき返した。

「支倉八郎に不可能はありませんよ。一例をあげましょう。A証券専務の自殺、フフあれは私ですよ。それにB物産の社長の自動車事故による即死、あれもネ。わが手にかかれればすべて自然死になるから、ハハ、不思議ですね——みどりの死は、奥様の目前で、はっきりお目にかけましょう。そして殺したあとは私の手で処分します。これならいいでしょう」

「……………」

彼女は恐怖に身のこわばる思いだった。

「失礼します。じゃあ、手付の方は明日戴きに上りましょう」

支倉八郎と名乗る男は、一揖して、出て行った。

男の姿が、ドアの向うへ消えると、富士子夫人は、崩れるように、ソファへ倒れた。

激しい悔恨と慟哭はそのあとに來た。

x

x

x

午後十一時——電話のベルがなる。

富士子夫人はハツとしたように受話器をとった。押し殺した太い聞き覚えのある声が受話器から流れてくる。

——もしもし、二十分後に実行に移します。婆やともう一人のお手伝の娘には睡眠薬入りの紅茶をのませておいてくれましたね。あー、よろしい。御主人は明日の午後六時に御帰宅の事は、私も確めておきました。裏口の掛金を外しておくように、分りましたね。」電話は富士子夫人の声なき声を残して、一方的にガチャリと切れた。

彼女はベッドへ身を硬くこわばらせていた。

二十分——微かに裏口でコトリと音がした。

三十分——四十分——五十分——

チクチクチクチクと秒針の刻む音が、針のように彼女の体に突きささる思いの一刻が過ぎた。その間の富士子の惨めな立場は名状しがたいものだった。

焦燥と恐怖が音を立てて体内を駆け巡った。やはり、意識の底に不吉な予感と絶えざる不安が凄まじく渦を巻いていた。

——コツ、コツ

扉に微かなノックが伝わって來た。

富士子はふるえる手でガウンを纏うと、萎えそうな足をふみしめ

て扉を開いた。

黒眼鏡に黒マクス——支倉八郎が凝然と突っ立っていた。マスクの下から、

「おいでなさい。フフ可愛いらしく震えている……。みどりを見るのです——」

「……………」

無言でフラフラと、憑かれたように、富士子は男に従って廊下に出る——。

奥の間の六帖に灯が洩れている。みどりの居間だった。

「這入りなさい——」

そこに富士子夫人は、みどりの世にも凄まじい姿を見た——。

服も下着も一切剥ぎとられ、パンティ一枚のみどりが、この遅ましい男の暴力によって、滅茶々に破壊され尽した姿を、曝していた。青竹の両端に開くだけ開ききらせた両脚が固く縛りつけられ、ブラリと天井から逆吊りに吊された若い肉体には、撲打の痕跡が血痕をにじませて数条走っていた。両手は後手に、背に高々と高手小手に縛られ、顔に乱れた黒髪の上から、半面を蔽う猿轡がしっかりとかまされてあった。

「どう——お気に召しましたかね。多少乱暴に扱いましたので弱っておりますが、未だ息はあるようです」

男は愉しそうに、みどりの体を力をこめて押した。客間にゆらゆらと女体は揺れ続けた。

富士子は顔を両手で蔽った。心身は氷を当てられたように戦慄している。

その顔は白蠟のように血の気を失なっていた。余りなむごたらし

さに彼女は失心せん許りであった。

「奥さん——殺しに立会って下さい。拳銃は音がするので、刃物にしました。心臓を一突きする瞬間を、よくその眼で確かめて下さい——」

男は感情を殺した、冷たい、低い声音で、要求した——

余裕のない必死の面持で、富士子は怯ず怯ずと顔の両手をはなした。

▲三カ月前、初めてお手伝として住み込んで以来、何処か気の許せぬ、そして反抗的なみどりであったが、ここ半カ月前より、急に太々しくなり、服装が華麗になって、輝くように美しくなったのを、何と自分は迂かつてあった事だろう。その頃から、この女と夫との間に、みだらな秘めごとが囁やかれていたのだ。それがどうだろうこのさまは……。逆吊りに雁字搦目に縛られて、けだもののように吊り下って揺れうごめている。死ぬがいい。それが夫を取られた女の呪いなんだから……▼

富士子は正視した刹那——彼女の脳裡に、悪魔の囁やきのように、ひとつのおそろしい覚悟がかたまった。

▲毒喰わば皿まで……。この男は、これをタネに再び脅しに来ぬとも限らない。いっそのこと抹殺するに限るわ……▼

彼女は男の訪れた日、絶望感に襲われて、何かやり切れなくなつて劇薬を買い求めていた。フト、死にたくなつたのも、自分自身の恐ろしい心が怖くなつたからに違いない。富士子の心は定まった。「スタンドの灯だけにして、薄暗くして下さい。殺人のムードですよ。フフフ」

男は静かな口調でいって富士子に部屋の灯を暗くさせると、懷ろ

から、ドキドキするナイフをとり出した。

微かに揺れる。逆吊りのみどりに近附くと、矢庭に、一突——ぐさり乳房と乳房の谷間をめがけて、刃を突き出した。

くぐもった悲鳴と絶叫が猿轡の口から洩れてみどりはぐったりとした。刃を抜くと、谷間から鮮血が糸を引いて床に垂れた——。

「すべて終わりました。取引きは貴女の寝室で行いましょう。私は跡型も残さず始末をして十分後には、ベッドルームを訪問しましょう。どうぞお引取下さい——」

男は息も弾ませず、例の押し殺した声で、富士子の耳許にささやいた。

x

x

x

下り相場の株であったが、急拠換金した金が百八十万円、富士子の手に握られていた。

「すべて終わりましたわネ。貴方の為に悪魔の乾盃をしますわ。もう二度とお目にかかる事もないように……」

ネガを焼き払って富士子は蒼く褪せた唇を、微かに歪めを、強いて笑った。

テーブルに代償金を積み重ねると、彼女は二個のグラスでとり出した。

カチカチと酒瓶がグラスにふれて鳴った。なみなみと注がれたブランドーが二個、テーブルの前に置かれる。

「みどりの死体は、私のカーに積み終わりました。暇をやったとさえ、皆様にお伝え下されば、万事がOKです。すべて手配通り、私は女に遺言状を書かせました……ハハ、少し手荒な方法でしたがね。これを親許へ投函する。みどりは噴火口へ飛び込む——自殺の報が、ほ



んの小さいく、新聞の片隅にのれば、それでおしまいですよ。なあに、御心配はいらない。若い近頃のハイテンは、至って命を粗末にするものでして、ちよつとしたショックが自殺の原因になることなんて、茶飯事ですよ——」

「そうね……貴方の御商売の発展を祈りますわ……」

富士子は軽い侮蔑の笑みを浮べた。

「ついでにお前もみどりと一緒に送り込んでやるわ。無理心中……女を殺して、男は服毒自殺。男のそばへこの劇薬瓶とウイスキー瓶を転がしておけばいいわ。公園まで走っておっ放り出してやればいい。みどりの事で警察が訊ねて来たって、私達の現在の地位からいえば、何とでもなるわ……。フフフあと数分の命とも知らないで、いやに納まつてるじゃないの。夫も安泰だし、それに、この一件で、これから決して夫は私に頭が上らない筈だわ。いざとなればあの写真を持ち出してきめつけてやるから……。手附の二十万円は惜しいけど、みどりのあんな虐殺図って、お金を出したって見られるものじゃない。フフ、可哀そうな黒眼鏡の道化師さん……」

思い思いの沈黙が暫らく続いた。

ショックが去って見れば、彼女は自分の不幸な宿命から、逸く逃げ去ろうと、悪魔の魅入られたように、毒を以て毒を制そうとした。

男は、白磁に磨きをかけたような、妖艶な富士子の横顔に暫し見とれていた。

「いさぎよく別れましょう。最後の乾盃をして……」

重圧に耐えかねたかのように、富士子は口をきってグラスをにぎろうとした。

「あっ、少し待って下さい。奥さん、こんな話を御存知ですか。ハ

ハ、私はテレビで見たんですがネ。或る殺し屋が富豪の奥さんに依頼されて、旦那を殺す。遺産欲しさの殺人です。金を受取って夫と殺し屋が乾盃した途端、殺し屋の体がぐらりと傾むく。女は男のふところに手を差し込んで、先刻渡した取引の金をとり戻して、ニヤリと凄く微笑む……おや、急に顔色が悪くなりましたね。これは外国のテレビ映画の物語ですよ……」

彼女の能面と化した蒼白の顔面に、冷めたい汗が浮き上っていた。唇はわなないて強い笑おうとして笑えなかった。

「奥さんはそんな事はないでしょうナ。勿論……。と私は思いたい。こうしてグラスを並べる。グルグルと交互に廻す。さあ、どうぞおとり下さい。莫迦に震えていますね。おや、乾杯しないのですか？……。じゃあ吞ませてあげましょう。要らないって……ハハハ。では私も遠慮して失礼しよう。御機嫌よう……」

富士子は完全に見破られた。浅ましい女の卑劣な手段を、男はとくに見抜いていたのだ。あざやかに消えた男の後姿に向って、彼女は身じろぎもせず、佇んで泣いていた心の中には、なんの感情も動かず、ただ涙だけが、意志にかかわらず、ひとみに溢れ、頬を伝って、ポトポトと床に落ちていた。

×

×

×

車は暗黒を疾走している——

黒眼鏡を外した、引締った浅黒い顔に、にやにやと笑みが浮んで消えそうもない。

「うまく行つたな、みどり……。お前が自動シャッターで撮った写真が、こんなにうまく行くとは思わなかったぜ。だけど、お前、あの高峰の野郎に、本当に体を許したんじゃないかな——」

男の肩に顔をもたせかけていたみどりは、物憂げに応えた。

「奥さんを追い出して、本妻にしてくれなさいやだって駄々をこねてやったの。旦那さん、すっかりその気になったところで。でもそこまではないかと、本当らしく見えないでしょ」

「怪しいもんだぜ」

「いやッ、怒るわよ——。だけど今夜のあの縛り方、随分非道かったわ。あたいこそ、あんたが、あの綺麗な奥さんにチョッカイを出さないかと思ってサ——」

「よせやい——。縛られるのが好きなお前が、今更あれ位いの逆吊りで、音を上げることもあるまい——。パネ式の舞台用のナイフ、赤い絵具と、この俺だって随分芝居の道具立に苦労したんだぜ」

「だけど、あとは大丈夫？」

「ふん、見かけによらずあの女は凄いいぜ。この俺を酒で盛殺すつもりでいやがったよ。殺し屋に頼んだり、毒酒をのまそうとしたりする女が、サツに訴えられるわけがねえよ。」

「凄いい殺し屋振りが本当にたのしかったわよ。あたい見直おしちやった。好きよ、好きよ、好きよ」

みどりは八郎の首に齒を当てて、跡型のつく程噛んだ。

全身をくねらせて、運転する八郎にヒタと蛇のようにまとわりついた。

「これで資金も出来たし、早速結婚しようや。縛り上げて、うんと可愛がってやるぜ。あっ、危ない！よせッ」

カーブのガード・レールが一瞬彼の目に飛び込んだ。

『無暴な運転で、転落事故を起し、男女二人即死、スピードの出し

過ぎか——』

「こんな見出しが出ていたら、彼等であつたと思って頂きましたよ。いやもう、オチをつけるのに苦心サンタンでしたよ」

ワイン氏の話は終わりました。

夜はもうすっかり更けて、郊外電車の、わだちのきしみが、眼近に聞える静けさの、大都会の谷間でした。

——さあ、明日から又、手形手形で一苦労か。金融引きしめも、いい加減に願いたいね——パイプ氏が呟やきます。

——ここではいわないこと。それより、ナイロン氏の、問題の逆吊りの美女は一体誰なんだね——

これはゴルフ氏です。

——あたしの、可愛い、可愛いひな鳥さ。名前は八千草みどり。さあさ、せんさく無用、又来年々々……——

ガヤガヤと、退屈男達は、てんでに逆吊り美女の妄想を逞ましくして、散って行きました。

『奇譚三十九夜物語』の会合出席者を募る

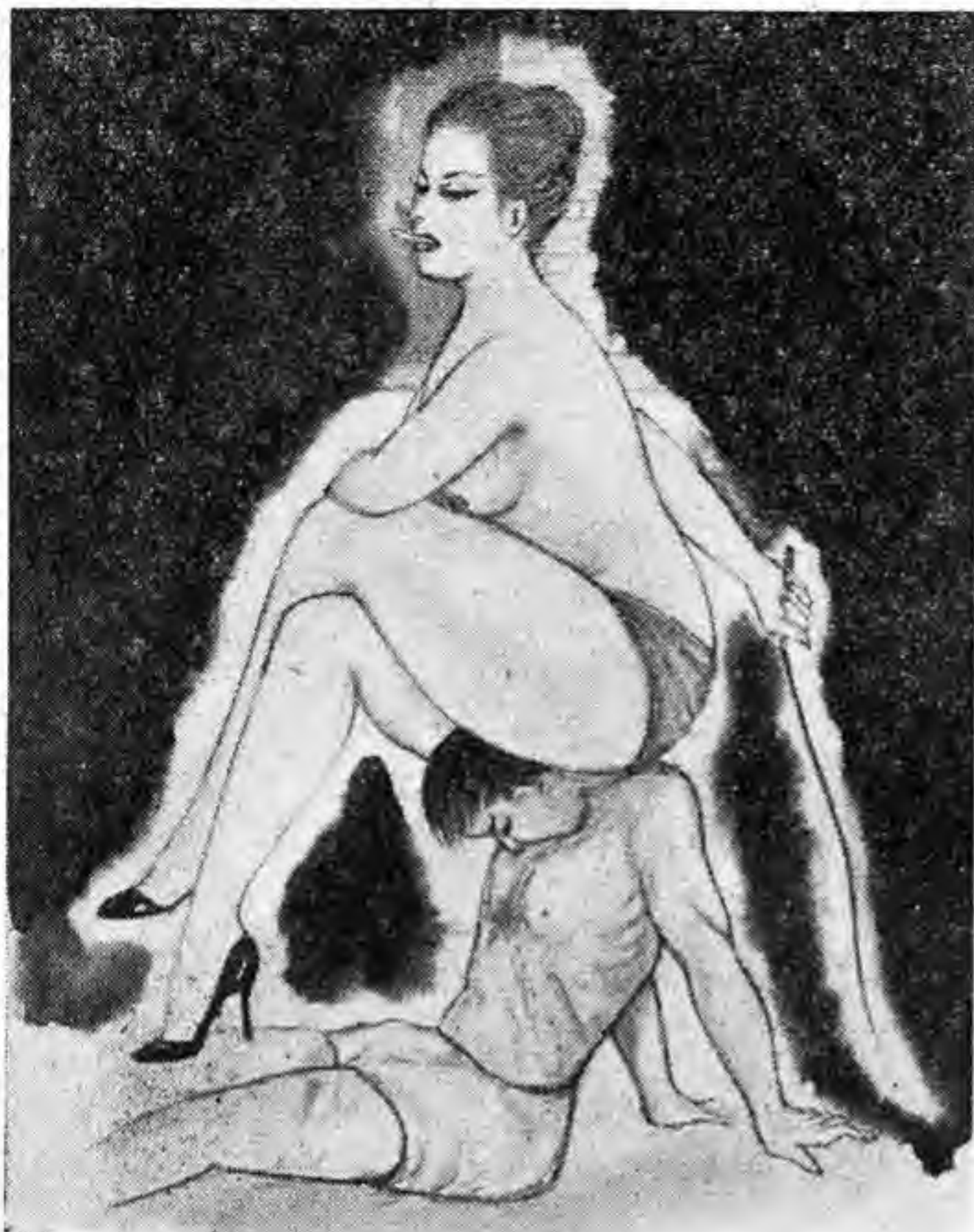
辻村隆主催の「奇譚三十九夜物語」で活躍中の八人の退屈男に勝るとも劣らぬ暇と話題のある紳士淑女をゲストとしてお招きしたく希望者を募ります。連絡場所御明記の上、お申込み下さい。どのようなことをお書き

になっても御自由ですが、詮衡の手がかりになる事項を出来るだけ詳しくお便り下さい。十二月号誌上の募集により、すでに続々と優秀なゲストの参加を見つあります。

△編集部 辻村隆宛V

フアンタジヤ・マゾヒスティカ

(或るマゾヒストの告白)



山 本 節 夫

おはずかしい御話でございますが、是非にと云うことですので――。

さて、何から申上げてよいやら。実はあなたが見える一寸前まで、この部屋で私は独りでマゾプレイを実演して居りました。この年になっても美しい女の方の馬になりたい。馬乗りされていじめられたいと云う悲しい根性は一向に直りません。それどころか益々募る一方の様に思えます。ハイ、独りでやる方法でございますか？ え、それはつまり私が自分を美しい女性、馬乗り好きのグラマー令嬢だと云い聞かせましてね。丸首シャツの裾の方をパンツの中にたくしこんで、パンツをぐいと引っぱり上げると、何だかショートをパンツ姿に見えて来るのです。そう云っては変ですが、私の肌は男にしては白い方で、またそれ程毛深い方でもありません。とはいえ男の素足では、どうしても実感が出ませんので、少し厚手のストッキングをはきます。それに黒い皮の乗馬靴をつけますと、下半身だけはどうか格好がついて参ります。断って置きますが、私には女装の趣味は全くありません。

さて、こうして自分の姿が出来ますと、次

には被虐体の設定になります。いろいろとや
って居りますが、今日の場合で云いますと、
先ず第一に馬でございます。一番下に段ボー
ルの箱を置きます。この頃、引越荷物を詰め
たりするのに重宝がられています。案外丈
夫なものでございます。その上に敷蒲団を
四つ折したのを二、三枚、滑らないようにし
っかり据えまして、更に搔卷きを姿のまゝに
畳んで乗せます。一番上には乗り心地の好い
ように、薄くて弾力性のある掛ぶとんを細く
折りたゝんで乗せ、今日はその上にタオル地
の夏掛けをもう一枚被せました。これで馬が
出来ました。これとは別に敷ぶとんを二枚
始めと同じようにして、その上に柔い枕を置
き、脱ぎました着物を被せます。つまり人間
が仰向けとも俯向けともつかず、うずくまっ
ている感じでございます。最後に小型の腰掛
け椅子を持って来て、座蒲団の二つ折りを三
枚ばかり積みまして、その上に、やはりクッ
ション様の枕を置きます。

さて、これで準備は終了まして、いよいよ
プレーになるのですが、あゝ、その前にもう
ひとつ。大きな姿見を適当な位置に置きま
して、馬乗り姿が鏡に写る様に致します。

順序がある訳でもありませんが、頭の中で
浮ぶ脚本次第でいろいろになりました。例え
ば先ず弱い者いじめに興味をお持ちになる美
しい御嬢様がショートパンツ姿で、美しい太
腿も露わに男性を組み敷いて、その腹の上に
馬乗りに跨るという想定で、蒲団の上にどっ
かとまたがります。

「どうだ。こいつ奴、恐れ入ったか」

そう云いながら股に力を入れてのしかゝり
脚を大きく開いては、また強く締めつけ、枕
の辺りを両手で押えて首を締めて、いじめる
気分。

「お許し下さいませ。女王様、お願いでござ
います」

哀れな犠牲者は目を白黒させてもがく。そ
の動きに一層加虐感をあおられて、思わずお
尻をうかせて、ずいと身体が前に出て行く。
手拭で巻いた枕を顔に見たて、

「この頓間の豚奴。顔の上に跨ってやる。ど
うだ、嬉しいか」

そう云って顔の真上にパカリと跨ります。
そうして如何にも馬乗り姫様が奴隷男を顔乗
り責めする如く、腰を上げてはまたおろし、
つぶしてはまた左右に尻をゆすり、ぎゅうぎ

ゅうと長い間、責めあげるのでございます。
良いところ加減の所でぐいと踏みしきながら
「どうだ。あたしに顔乗りして頂いて嬉しい
か。嬉しかったらヒイヒイとなけ」

尊い御身体の下でかすかにヒイヒイと叫ぶ
声がして姫様を喜ばせます。

「よしよし。お前の正直さに免じて顔乗りは
これで許してつかわす。奴隷になって何でも
云うこと聞くか」

そこでまた威丈高にぐいと力を入れる。押
しつぶされて、今は声も出ない犠牲者を想像
しながら

「今度は馬にしてやる。さあ、早く馬になれ」
乗手はやっと顔の上を立ち上って解放し、

ゆっくり頭の上をまたぎ越します。いよいよ
馬の番になります。腰の上までである蒲団馬の
背中の辺りを愛撫しながら長靴をはき、馬の
傍にきつと立ちはだかると

「さあ、お前の背中に跨るぞ。覚悟はいいか
途中で潰れたりすると承知しないぞ」

と云いかけながら徐ろに馬の背にまたが
ります。すうりと伸びた美しい御み足が静か
に馬腹に触れ、雪の様な太腿は、しっかりと
背中をはさみつけます。鞍の具合を確かめる

為に暫くは腰を上下左右に動かして、やがて位置がきまると、前方から掛けわたした細帯の手綱をぐいと引き絞り、拍車を入れる思い入れて

「ハイシ、ハイシ。ハイシ、ハイシ」

楽しい馬乗りが始まるのでございます。どうもこの辺から、人間馬か本物の馬か、一寸区別がつかなくなるのですが、美しいサジスチンが馬乗り跨りの責めを味って居られる気分を出すのですから、私にとってはどちらでも同じなのでございます。

上体をきりっと起こして、脚をわずかに曲げ、太腿の内側でしっかり馬の腹を締めつけての騎乗をしばし。興が進めば、体をやゝ前屈みにして脚を折り曲げ、馬の背に一層密着して手綱を引きしほります。

「もっと走れ。よた馬め。ハイシ、ハイシ」

脚が少し疲れて参りましたら、力を抜いてぶらんぶらんと並み足の調子で馬乗り気分を味うのも乙なもので、その様な合間には、人間馬であることを意識し直して、膝を高目に前にあげて、きっちりとはさみ上げる形をしていじめたり、又は体重を後に移して、絵によくある様にハイドウ、ハイドウの恰好など

もやってみます。体の前後左右の動揺を速めたりゆっくりしたりして、木馬に跨った時の感じを出す事も出来るのです。どうも手前味噌で恐れ入りますが、鏡の位置によりまして太腿の緊張具合や、腰の動きや、黒い長靴が馬腹を責める様子が、うまく写りますと興味も尚更でございます。

「ハイシ、ハイシ、どうした、のろいぞ。もう疲れたか。ようし、覚悟しろ」

そう云って、ひとまず馬から下りまして、例の椅子にしましたのが、首根ツ子のもりなのです。静かにゆっくりクッションの上をまたぎ、馬乗りになって腰を下すと「首を下げると生命がないぞ。こら、しっかり首をあげている。こいつ」

そして暫く、首乗りを楽しむのでございます。足を地につけてゆるめてやったり、また離して体重を掛けたりしながら、両足を交互に漕いでいたためつける風情よろしく、さんざん馬乗り気分を味って

「どうだ、参ったか。よた馬め。降参ならヒンヒンとなけ」

馬はあわれな泣き声でヒンヒンといなききます。

「よし、じや生命だけは助けてやる。また跨っていじめてやるから暫く休んでいろ」
お姫様は悠々と腰を上げ、乗り心地の良い首鞍から下馬され、これで一巻の終りとなるという訳で。



もう少しで四十才になろうというのに、ほんとうに因果な性分に生れつきました。普通の人なら高校生の子供もあらうというのに独り者のアパート暮らしという態たらくは、全くおはずかしい次第です。

神経が人様より敏感というのでしょうか。妙な話ですが、水着一枚で海岸へはとも行けませんのです。何故って、美しい女性方の露わなお姿を拝しただけでのぼせ上ってしまったからです。それでいながらピチピチした女王様方が、無邪気にたわむれて、ボーイフレンドの肩車に乗ったり、この頃いろいろ出来た浮袋の中でも馬の形などをして、またがる様に出来るものに乗ってはいやいで居られる姿をみては、独りで胸をおどらせているのでございます。それならば勇敢にぶつかって行けるかというと、そこがマゾの悲しさで申しますか、独りでうじうじとするのみで

ございます。

こゝで編集の方に、苦言を呈したいのですが、サド愛好者の方が多いと云われますが、とかくマゾは云いたい事も主張出来ない弱虫でございます、ついつい黙っているんで発言のチャンスが少いのだという事をよく御理解下さい。

閑話休題。繰り返して申しますが、私は幼い時から美しい女の方に馬にされ、組敷かれていじめられたいと願って参りました。ですから縄でしばられたり、傷つけられたり、また排泄物を口にするような、そんな望みはないのです。

美しい女性と申しましたが、そこには理智と若さと、そして健康が必要でございます。もっとも理智といっても才媛というような、学者のようなという意味では無く、生活の智慧と云いますか、いわゆる女性特有の頭の良さということでございます、生硬な感じよりも、ゆたかな、みずみずしい。——それは結局健康に連なり、また、若さにも関連するのでございましょう。こう申します反面は、不潔で無智で野卑で不健康で醜悪で老いさらばえた女性というものは、私にとっては何の

興味もないということになります。女王様に文句をつけることにはなりますが、要するにこの意味では私のマゾも、まだまだ余裕のある、いわば貴族趣味を多分に含んだものになるのでしょうか。

それで何時も考えるのですが「馬に乗る」という不思議さでございます。勿論この場合女性に関してですが……。普通一般に女性の方はつゝましかで風に裾がひらめいても前をお合せになるし、腰を掛ける場合も膝頭をぴたりと合わせて、本当にしとやかそのものでございますね。惨酷な話や場面をみたり聞いたりなさる時は眼を伏せたり、耳を掩ったり、子供達が犬や猫をいじめるとよしなさいとお止めになり、強い者が弱い者を押さえつけると、かわいそうだと同情される。男達があぐらをかいたり、裾をまくったり、椅子や木の柵に馬乗りになったりしても、御自分達はスカートを押えて足を出すにもはずかしそうになる。会話も丁寧にしとやかに。それが必要に「美しい性」である女性の特有性なのでありますが、このように温和しく、しとやかな女性が、あの大きな動物である馬には、何のためらいも無く、両脚を大きく開い

て悠然と跨って騎乗されるのですから、私には不思議でたまりません。

乗られる方にしてみれば、何しろ生き物なのですから呼吸もするし、血も通って居りますのに、それを温和しく四足で立って乗って下さるのを待っているからといって、女だてらに鎧に足を掛け、大股開きよろしく背中にまたがる。手綱を絞り、可哀そうな馬のお腹に無惨にも拍車を入れなさって。いくら馬だとして、重い乗手を背中に乗せて、汗を流して歩いたり、走ったりはしたくないのでしょうか。だからこそ拍車や鞭で馬を責めたて、無理やりに云う事を聞かせる。

いやがる奴の背中にドッシリと馬乗りに跨って太腿で締めつけ鞭打って、気が済むまで乗り廻すというのは、まるでいたずらっ子が弱い者いじめするのと同じこと、少くとも、その根底に流れる心情では同一ではありますまいか。

どうして山に登るのだ、という質問に対して「山がそこにあるからだ」という答がなされますとか。それでは乗馬するのは馬が乗られる為にある「からなのでしょいか。

それにまた、馬に跨るといふ事は云うに云

われぬ気分を伴うものゝよう、乗杉貴代子様も「ダイアナ夫人」の中でくわしく述べて居られます。馬の背の躍動と筋肉の旋律が乗り手の内腿から電気に掛ったようにピリピリと伝って思わず脚を締めつけるという風にも表明されて居ります。そのような生理的乃至肉感的な喜びに加えて、何といひますか征服感と申しますか、有無を云わさず自由を奪って、命令通りに、自分の意志の通りに、もうひとつの別の意志あるものを動かすという絶対的な征服感でございます。ですから始めからあまりに無抵抗では、却って征服感は害なわれる道理で、死物狂いに抵抗するのを押さえつけ、しめつけて責め上げ、潰して降参させるところに得も云われぬ味があると申すのでしよう。

下世話ではよく乗馬と男女の仲をかけ合せて、乗るとか乗られるとか、上とか下とか、馭すとか御されるとか申しますが、このような、恐らく馬という乗物を馴致する前から人類が本能的に体験してきた、案外に根深いところにある潜在観念も、「馬に乗ってみた」という気持。或は馬に乗るように跨って相手の人間を征服したいという感じと関連が

あるのかも知れません。

男性が本来的に開放的であり、子供の時から、或は一人前になってからもいろいろな形で征服感や騎乗感を、大っぴらに発現できるのに対して、女性はなかなかその機会がないので、最も自然に跨れる対象である。「馬」に対して、一層大胆になられる訳でもございましょうか。

こんな記憶がございます。戦前の話になりますが、小学一年生とか二年生という本に、子供の衛生の話がありまして、たまたま脱腸というテーマで先生が説明しているのがありました。つまり脱腸というのは、必要以上に「いきむ」となりやすいという事で、例えば「皆さんは弱い者いじめをして相手を地面に転がしてお腹の上に馬乗りに跨って降参させたり、又はその子を馬にして乗ったりする事がありますが、あまり始終いじめっ子になって馬乗りになっていきむと脱腸になります」と注意しており、挿画では運動帽をかぶったランニングパンツ姿の男の子が相手を組み敷いて馬乗りしている所が描いてあり、御丁寧にも女の子も二人ばかり、男の子と一緒にあって、弱い男の子を馬にしている図がありま

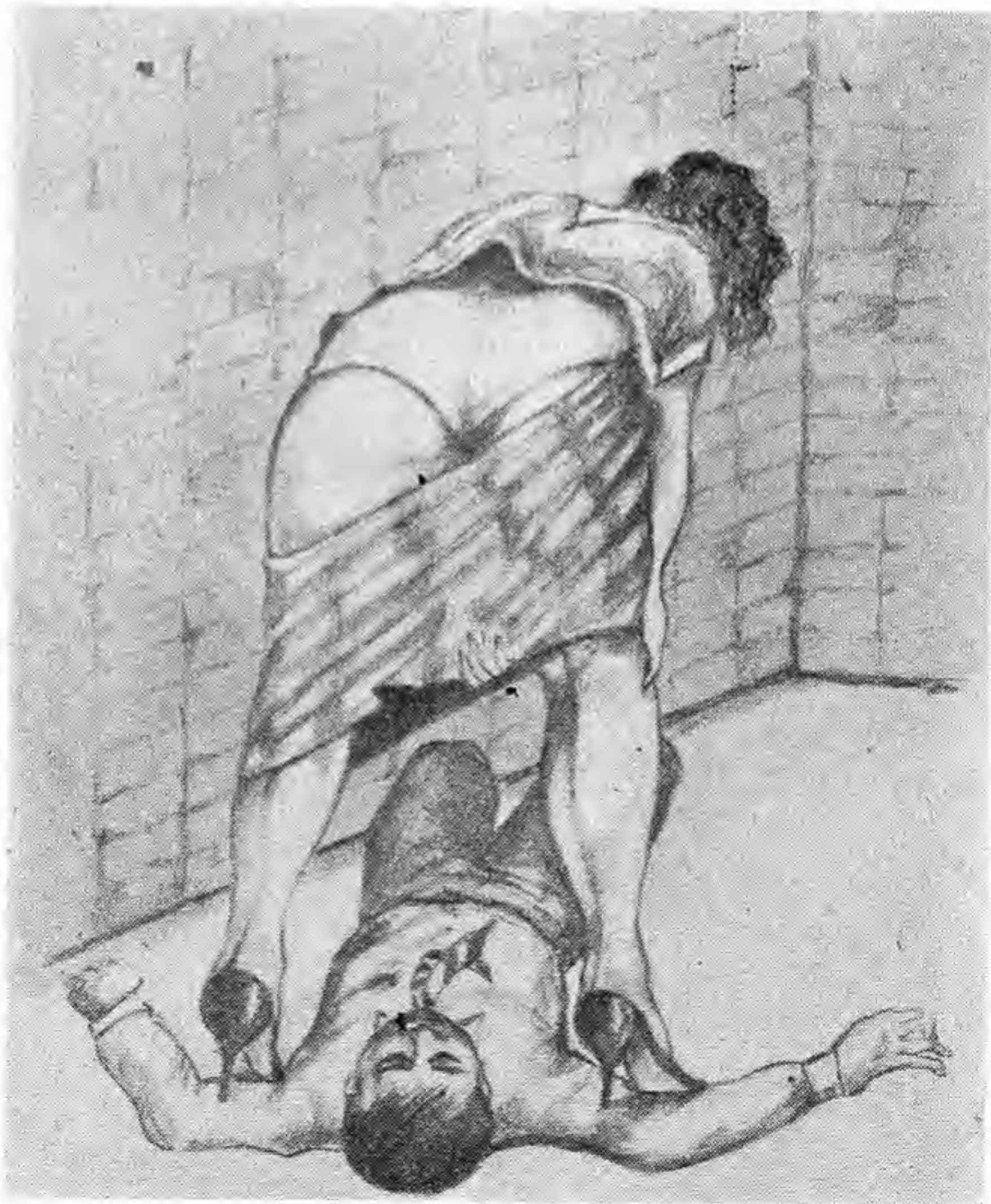
した。女にも脱腸はありますので親切な挿画ではありましたが、このように子供の時から既に征服感を味う為の馬乗り動作はあるのでございます。

やはりその頃の色彩見開きの漫画で、何しろ軍国主義華やかな時代ですから、今では想像できない方も多いでしょうが、日露戦争大勝利の場面で、場所は不明ですが支那の城門に日の丸がひらめき、日本の兵隊が銃をあげて万才を叫んでいる。門の入口では剣をつきつけられて両手をあげて降参するロシア兵。その時ですから水色の軍服に黒い丸い帽子をかぶっているひげ面の大男を小粒の日本兵があちらでもこちらでも馬にして、その背中にいばって跨り、お互に手をあげて笑いながら馬をいじめている構図でした。勿論空想の、しかも子供用の漫画にすぎませんが、勝った者は強いので負けた奴を馬にしていじめるのは当たり前だという前提で、子供心に心をときめかしたものでした。少年小説でも物語りでも、しょっちゅう組敷いたり、馬にしたりする場面が出てきました。要するに相手を押さえつけ、のしかかり、動けぬように自由を奪うことが最も簡単な征服の表現であり、降参させ

た相手を馬にして乗り廻すのは、人格を見下げて馬並みに扱い、家来として奉仕させる最も手っ取り早い形式だからなのでございましょう。云うまでもなく自由を奪うためには体ごと馬乗りになるのが一番いゝのですし、又馬にして跨れば一段えらくなったようで精神的にも気分がいゝものでございます。

くだくだと申し上げましたが、馬乗り動作というものがまことに本能的な征服形式であります故に、マゾヒストにとっては「馬乗りたい」という風に転位しまして、それが更に発展して馬乗り姿を見ると、自分がいじめられているように感じ、或は自分もそのようにいじめられたい。馬扱いをして欲しいという欲望に変形するのでございます。

かくて私という中年のマゾ男は、絶えず女の方に馬にされたいと念じて居ります故に、乗馬姿の女性を拝しますと、どうにも我慢が出来ぬ位、心がわくわくして参るのでございます。そうしてそのような心が昂じますと、単に尊い御姿を想像するのみでは我慢が出来なくなり、始めに申しましたような具合で、自らを乗馬姿の御嬢様にたとえまして、マゾの醍醐味を少しでも身を以て体験したいと思



うのでございます。

◇
どうも独りでおしゃべりしているようで気

がひけますが、まだ退屈なさいませんか。それでは、もう少し続けさせて頂きますが、
「乗馬は立派なスポーツよ」と女王様方はお

っしゃいます。けれど、どう考えましても馬に乗る事と、テニスやバスケットとは違いますので、どこが違うのかと云えばやはり「生きた対象」を伴う点でございましょう。自転車やオートバイも同様「またがる」ことは跨りますが、相手は単なる機械にすぎません。そこへ行くとお馬はヒンヒンと鳴くのでございます。手綱をひかれ、ば、はみのかゝった口が痛いのです。拍車を入れられ、ば皮膚から血も出ますし、鞭を打たれ、ば皮がさけるのでございます。跨って締めつける外に、この三つの責め道具で痛めつけて云う事をきかし、乗手は心地よいレクリエーションを体験するのですから、どうしても一般のスポーツとは異ると云うべきでございましょう。現に馬に乗ることを「責める」と云いますし、又調教という言葉もあります。「鞭をあてる」「乗って責める」「潰す」「拍車を入れる」「騎座で締める」「手綱を絞る」

このサジスチックな言葉の響きに、何か封建時代の刑罰にある「拷問」を憶い出すのは私だけでしょうか。そのような拷問を、馬というまるで人間に乗られる為に生れてきたような生き物に課さなければ「乗馬」というス

ポーツは成立たないのでございますから、乗手が男性ならいざ知らず、虫も殺さないような楚々たる美人が、恐らく御召物を召してしとやかに香水の香をまき散らして居る時は、こんな方かと思うような女性の方々が、勇敢にも、この生きた馬いじめの遊びを、しかも自分の楽しみめの為になさるのですから、私にはどうしても、納得が行かないのでございます。

考えても御らんなさいませ。云うことを聞かない馬に鞭をお当てになる時に乗手の御嬢様が

「すいませんけど、お馬さん。もっと走って下さらないこと」などとやさしい言葉をおっしゃるでしょうか。拍車を脇腹に蹴り込む時に「ごめんなさい。痛いでしょう。今度は静かにやりますからね」などと云っていられるものでしょうか。

例え高貴の女王様であろうと、また憐み深いお姫様であろうと、ひと塵馬上の人になれば全く別人格になってしまうのではありませんまいか。もっとも、さんざん乗り廻し、責め上げた後で、下馬されてからは首すじや鼻面をやさしく愛撫なさる事はありましようけれ

ど。

「この馬ったら、云うことを聞かないこと。

拍車を入れてやる。これでもか」

「もっと走れ、もっともっと。鞭だぞ。ぴしり、ほら、もうひとつ」

「そっちじゃない。こっちだと云ったら、こいつ。抵抗するか、口をさかれても知らないよ。こら、こっちへ廻れ」

「また障害を逃げる。なめてるな。よし、調教してやるから覚悟しておいで」

「ふん、身体いっぱい汗をかいて、口からは泡をふいている。いゝ気味だ。まだ許さないわよ。もっと早く。誰が並足と命じたの。早駈を続けろったら」

「今日は、思い切り責めて乗り潰してやるから」

こんな御言葉が、例え口に出しては云われなくても、御心の中では叫ばれているのです。そうしてだんだん気分が出て来る一方、馬も抵抗をあきらめて、おとなしく云う事を聞くようになると、御自分の美しい乗馬姿に見惚れながら、こんなつぶやきももれる事でしょう。

「どう、お前。私のような若くて美しい女性

に馬にして跨って頂いて、嬉しいと思わないかい。お前なんか、あたしの馬になって責められる為に生れてきたのよ。だから毎日こうして馬乗りして可愛がってやってるんだわ。そら、もう一回り、しっかり走るのよ」

そうして女騎士は心地よい疲労を全身に感じながら、もはや完全に征服され降参している無抵抗の生き物の、乗心地よい背中から下馬され、哀れな奴隷を解放して許しておやりになるのでございます。

これでも一般のスポーツと云えるのでしょうか。どうも頭が悪いので、云う事がよくまとまりませんで失礼致しますが、結局スポーツとはいつているもの、女性の乗馬というのは一種の「いじめ動作」であり、日頃閉鎖的に指向される行動原理に対する或る意味の△捌け口△であると感じたいのでございます。

「朝から気分がむしゃくしゃするので、馬場に行って馬を思い切り責めたら胸がすーっとしたわ」

「こんな時は、大きな馬に跨って野山を思う存分走り廻ったらいゝだろうな」

「馬に乗って遊んだら愉快でしょうね」

「馬って、ほんとに可愛いゝわ。乗りたくなっちゃう」

まあ、ざっとこんな感懷なり、希望なりを美しいお嬢様方は折に触れて胸のうちに抱かれていますのだと信じて居ります。ところで「弱い者をいじめて楽しむ」ことが少しでもその目的に潜在するのなら、「またがる」のは何も「馬」という特定動物には限らないではないかというのが、私の貧しい主張なのでございます。それは犬でもよろしい。羊でもよろしい。而してまた人間乃至男馬でもよろしいではないかというのであります。

勿論、女の人と雖も、時には相手に云う事を聞かせ、また服従を強いる為に、これを力を以て組伏せ、背中又は腹に馬乗りになって押さえつけ、又は顔面に騎乗して降参させるという、男の子同様の動作をなさる場合は存在します。女プロレスなどは、時として男のそれより劇しい事もあります。

そして、そのような弱い者いじめが一步進めば犠牲者、又は被征服者たる相手の男性を四這いに這わせて馬の代りとし、その背や首に跨って、始めに申上げましたような具合で征服感をいやが上にも満足なされるケースも

あります訳で『痴人の愛』のナオミが、その好例である事はよく御承知でございましたよ。

とはいえ、このようなケースは寧ろ例外であり、こゝ迄来れば、私の見解に依ればアブの部類に入るようでございます。綺麗な御嬢様がスカートをたくし上げて大きな愛犬の背中に跨って人前に出れば、皆はおかしいと思ひましょう。大きな犬の正面正座の後方から首の辺りにのしかゝるように跨る風景など男性ならば別に不思議でなくとも、女性が脚を開いてこんな事をすれば、変だなあと人々は首をかしげるに違いありません。

何時の頃でしたか、或る大都会の郊外で二人の恋人の語り合う光景を見ましたが、梅の若木につながれた牡山羊の背中に悠然と跨っているのは、何とやらはすかしいハイティーンで、ボーイフレンドはその木に片手をかけて寄りかゝりながら、この美しい相手の馬乗り動作をにこやかに眺めていたものです。おとなしくじっと動かぬ山羊の柔い背中にスカートをたくして馬乗りした令嬢は、馬上の爽快さを味っておいでのように見受けられました。

「あゝ、あの山羊になりたい」

と私が目をつぶったことはいうまでもございませぬが、こんな事は例外中の例外ではありますまいか。つまり馬には喜んで、否、自ら進んで積極的に跨っても、それ以外のものは仮令それが椅子のように無生物であっても馬乗りなどという不作法な事はなさらない。ましていわんや人間などには以ての外という訳で、馬乗りを楽しまれる姫方に「馬にしてお下さい」などと正面切って願出たら一言の下に「エッチな奴」としてはねつけられることは殆ど必至でございましょう。

こうして心弱いマゾ男は、責めて下さる女王様を求めながら独りで煩悶致すのでございませぬ。この身を馬並みに扱って無難作に馬乗りとなり、馬を責めるように私を思う存分いためつけて下さる御方は、空想の世界にしか存在されないのてございませぬ。



こんな私にとりまして、KK誌はまことに「救いの女神」であり、「砂漠のオアシス」でございませぬ。忘れも致しません。KK誌が現在の版型に変わった最初の頃ですから、もう彼此十年にもなりますか。地方の一都市の売

店で求めたあの「女上位特集号」の感激!

殊に庄巻は鬼山絢策氏の「お座敷ストリップ色勇伝」で、玉勇という芸者が、はこやの留吉を客の面前でお仕置きする場面なのです。

私が幼い頃から美しい女性でも、こんな事をなさる事があると想像していた事が、そのまゝ作品となって発表されたからでして。まずフットボールの様に蹴りまわし、次は馬にして乗り廻す。馬がバテると「尻を浮かせ、首の上に跨り直しハイシハイシと責め」上げて乗り潰す。そして最後には仰向けにした留吉に肌も露わに顔面騎乗を楽しむという構成は、私の夢に描いていた筋書とそっくりでございませぬ。宿の独り寝に私は何べんも何べんも読み返して、そして独り墮落して居たのでございませぬ。

戦前のマゾ文章といえはせいせい『痴人の愛』であり、乱歩の二、三の推理小説のみでございませぬ。敗戦この方「女上位」が大っぴらに喧伝されまして、ほんとにマゾ男冥利と申せましょう。生命があつてよかったとつくづく思うのでございませぬ。

同じ号の、富士芳孝氏の「女剣劇王健在なり」も傑作でして、ナナ子三吉馬を乗り潰

し、スキヤンティ―一枚のグラマー肉体の太腿を、遠慮なく開いて三吉の背中に馬乗りになって、手を腰にあてがい、えはって奴隷を見下す挿画は何ともいえぬ心が躍ったものでいまに私の本棚に大切に飾ってございませぬ。

それから以後は、毎号欠かさず揃えました。が「へばきゆうり物語」「らぶ・すれいぶ」「或るマゾヒストの手帖」「馬化白書」等々と、私の渴仰する教典が溢れるように続きましてありがたい事でございませぬ。

けれども恐ろしいと思ひますのは、人間の慾望というものは際限の無いもので、「色勇伝」のあの感激も、だんだんと更に強い刺激を求めるようになりまして、一体どうしたらよろしいのか、空恐ろしい事でございませぬ。

それにしてもこの十二月号マゾフォトは思ひ切った場面でございませぬ。就中春日ルミ様久方振りの御登場にて、大の男を正面から顔乗りとまでは、もう一歩ではありますが、しっかりと太腿の間に組み敷かれたところは近來の大飛躍と感じ入って居ります。と共に、更に更にという慾がうずうずと湧き上つて来るのでございませぬ。



話が少し飛んでしまつて失礼致しました。

乗馬の話に戻りまして、よく存じませんが馬にお乗りになる前には馬房に並んだ馬達の馬相を一わたり眺めて、さて今日はどれに乗ってやろうか、という馬見の段階があるようでございます。大きな図体をして、長い顔を下げて四つ足で立っている馬達の一頭々々を検分して、責め甲斐のある奴、乗り心地のいい奴を選び出す時の心境というのは、どういふものなのでしょう。想像するだけでも心が脈打ちます。

「どれに乗ってやろうかしら。あいつは昨日跨ってみたけど反動がよくなかったわ。これが前掻きなんかして抵抗がありそうね。よしこいつにきめた。思い切り責めてやる」

「そいつとっても頑固よ。拍車でひっきりなしに蹴らなきや。でもいうこときかせちまえばいい馬よ」

「まだ若いらしいのね。ほっそりして、とってもまたがりやすい感じ」

こんな会話のやりとりをじっと聞いている馬達。そして引きずり出され、乗られ、打たれ、つきたてられ、汗をかきされ、締めつけられて、御気の済む迄御奉仕せねばならない

のです。

いよいよ乗手が決って馬場に引き出されると、女騎士は馬の顔の傍にたつて鼻面をお撫でになりますが、話に聞きますと馬というのは愚かなもので、あの目は、横にある物体がとてつもなく拡大されて映るそうでございます。ですから長靴姿もりりしくお立ちになるお嬢様が、超大グラマーの大アマゾンに見えてしまい、それだけで、もう恐れ入って降参するのだそうです。

「あたしがお前に跨るんだぞ。覚悟しろ」

そしてひらりと馬上へ、それも悠々と姿勢を起してあたりをへいげいしながら。背中にまたがっても右の鍔は外したまゝで長さの規制をゆっくり遊ばし、さて、二回三回、乗り具合を整える為に腰の位置を動かす。これでよし。きゅっと太腿に力が入り、前進の合図。馬は観念してパカパカと歩き出す。ゆらゆらりと並足で馬場を一周される気分はまた何とも云えない様で。これから行方いろいろな責めを考えつゝ、静かに呼吸をと、のえて、準備運動でございます。

長い乗馬時間のうち、最高の気分はいつなのでしょう。私には一向判りませんが、最初に跨る時なども一つの転機なのではありま

すまいか。大きな生き物の背中に、ピチピチ

した若い肉体が勢よく、どっかとまたがる。あゝ、想像するだけでも気が狂いそうになります。重みを一身にさゝえて馬の背中は撓う。そんな事もお構いなく、きゅうと馬腹をしめつけて「奉仕の宣誓」をおごそかに認識させるあの高貴な瞬間！

「どうだ、思い知ったか。おとなしく云うことをきけば痛い目に合わずにすんだのに。抵抗するなんて馬鹿な奴め」

と云いながら征服感にお酔いになる時でございます。最高なのは。

馬場で時々お見掛けしますが、始めは静かに、むしろこわごわ乗って居られた人が、何時のまにか頬の辺りを紅潮させてぎゅうぎゅうと馬を責めるようになってくる、あの心理的变化は一体何でございましょう。やはり「いじめ動作」の発露と申す以外に解釈はつかないようでございますね。

この辺りになって参りますともう私の範囲ではございません。馬乗り姫様の御領分なのでございます。マゾ男は隅っこに引込んで、御情深い女王様、馬にしていじめて下さる御嬢様の御出現を待つのみでございます。

(挿絵・春川ナオミ)

絆

(きずな)

近藤

一

絆

一、鉄格子の中で

裁判は長かった。

葉子が警察に捕えられた当初は、犯罪の動機とか状況とか可能性とかから予想は殆んど葉子を犯人と指していたけれど、どうしても極め手となるものが出なかったため、警察の調べは地道に続けられていた。物的証拠が少く、どちらも証人が中心になって争うのだが、検察側の証人は勿論のこと、葉子側の証人までが葉子に有利な証言をできなかった。

被害者である姑のくみが他人の恨みを買うような人柄でなかったことは明らかにされた

が、それと同時に葉子が余り良い嫁でなく、姑の秘かな心労の様になっていたことが略々推測されたのである。これは葉子にとって大きなショックだった。

——私がおかあさんの気に入らない嫁だったなんて！恨めしい。何故私をビシ／＼叱って下さらなかったの？叱られたら、私だって少しづつ直して行った筈よ。

だけど、何と云ったって自分が憎い。誰にでも、好かれる性質に生まれつかなかったこと、特にあんなに優しいおかあさんに喜んで貰えるような嫁でなかったことが悔やまれてならない。

葉子の馬鹿！お前なんか死刑にされて死んじゃえばいいんだわ。——

話で聞いた絞首台は、自分の身にとってみると摩天楼のように高かった。死に繋がる十三の階段は余りにも峻しかった。両手首は背に廻して腰の辺りでしっかりと括り合わされていた。

覚悟は出来ていた心算だったけれど、足がすくんで動かない。両の膝頭がガク／＼顫えてヘタ／＼と崩折れてしまいそうだった。

「さア、愚図々々しないで！歩くんだ！」
囚衣の背中をドンと突かれて、葉子のはめ

った。動転して、うろたえて、尻込んだ。

「逃げるのか、こいつ！」

男の逞しい腕が葉子の脛をひっ掴んだ。グイ／＼揺さぶるように前へ押出され、思わず悲鳴を上げた。

「キャア——！ ゆ、ゆるしてえ——っ！」

「うるさいっ！ 今更ジタバタするんじゃない！ おとなしく死刑になるんだ！」

「嫌！ 嫌だァ！ 死にたくない！ 死にたくない、死にたくないってばっ！ あうあうあう、ね、お願い、助けて！ ゆるして頂戴！ あっ、嫌、嫌！ 殺さないでっ！ 嫌ァ！」

泣き叫び、哀願し、身を揉んで暴れながら後手に縛しめられた囚女の体は、却って容易に台上に運ばれて行った。反抗の心もすっかり萎えて、ただ嗚咽するばかりの女を、男達の腕が必要以上の数で抑えている。哀れな女死刑囚が生への執念を示すことで、刑の執行に起るかも知れない不手際を案じている男達の力は、極めて事務的に強かった。逃れようもなかった。

縄が輪になって迫って来た。吸い寄せられるように女囚の体は前進し、頸を伸ばして縄を受けた。男の手がキツチリと締付ける。

や／＼仰向き加減で、女囚が一人、台上に残

って立った。魂を既に失っているようだ。

ガタン！ ギ、ギ——ッ！

ぎゃアッ！ きひい——

耳の下にギクツと痛みを覚えて、葉子は囚われの悪夢から醒めた。冷い汗がおぞましく肌を湿らせ、全身が小刻みに慄えて悪感がした。

葉子はやつれた。心の疲れが肉体に表われるのか、すっかりやつれて、眼の周りにも頬にも顎にも、そして肩の辺りにも疲れが著しく目立っていた。

疲労の亢進と全く対照的に葉子の腹部は丸味を増し、せり出して来る。もと／＼腰廻りのしっかりしている葉子だが、流石に歩行は反り気味になり、只でさえ肩の辺りの張りが乏しくなっていく妊りの身が、烈しい心の拷苦に耐え兼ねるように一層あからさまで、肩の骨がクッキリと浮いている。生来色白の膚が透くように蒼さを増し、首筋も細くなって血の管を浮き上らせ、ともすれば荒々しい呼吸が痛々しい彼女の上体をハア／＼喘がせてしまう。

不細工な囚衣の中で、葉子は特大のものを着ていた。大柄な彼女でも普通の状態ならブ

カ／＼するような紺の女囚服が、丸々と張り出た葉子の胴周りには丁度良かった。

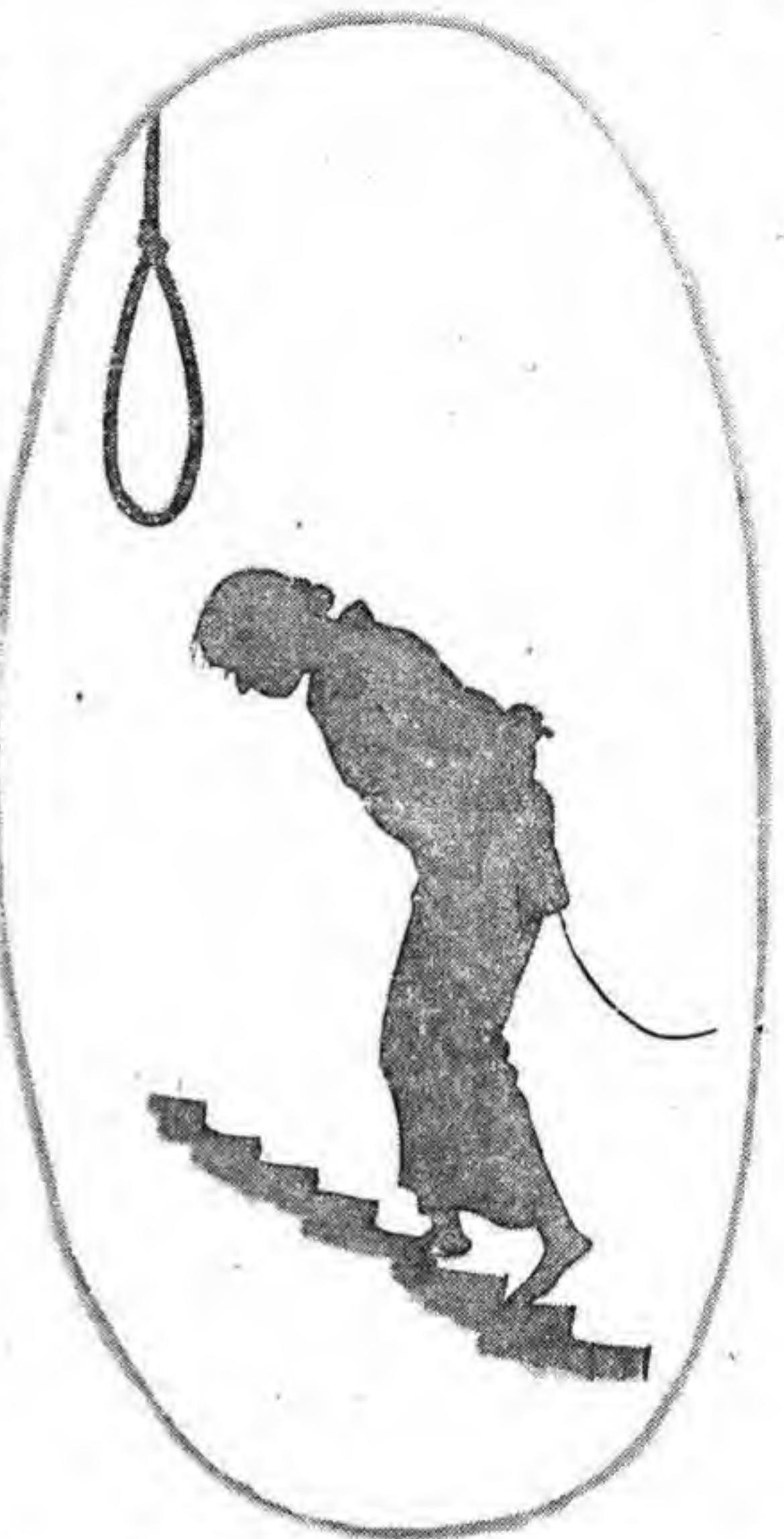
「あんた、お腹、大きくなっちゃって、どうするのサ。今更墮せやしないだろ？」

罪に問われ、同じような色の服を着せられている壁と鉄格子の中にも、薄汚い憎悪や軽侮が渦巻いていた。葉子はいいなぶり者だった。罪とか容疑とかは全く関係なく、同房の女囚達や葉子の社会的地位とも無関係に、葉子は虐げられた。

所謂未決の囚人だから、正確には受刑者ではないのだが、拘置所も刑務所も自由の拘束に交りはない。女囚達のやり場のないウツプンが、殆ど葉子の上に注がれる。肌が白いかポツテリした肉付というだけの理由で頬を張られ、尻を蹴とばされた。自殺を防ぐために紐類は許されないから、責め手も陰険で屈辱的だ。敏捷に動けない葉子は後から入所した女囚達にも服従を強いられた。衣服を剥がれ、白豚としてヨタ／＼匍い廻った。

孕み腹が眼障りだと云って壁際で背を丸め何時間も土下坐をさせられた。蹴られても踏まれても、葉子は重味の増して行く腹部を庇う。

——私の子。雄輔の子だもの、私は、誰が



女の子が知らないけど、私の体の中に芽生えた宝物なんだから。私は生みたい。生むの。どうしたって生まなきゃ。

「悪い事を平気でするような女達が私を苦しめる。馬鹿にしたけりゃいくらでもすればいい。おちたきゃぶって！ いじめたけりゃ、もっとくいじめてもいい。私は平気だワ。立派に我慢してみせる。私の子を生むの。もしも、私が死刑囚と呼ばれる女になったって、子供だけは、きっと立派に生んでみせるのヨ。」

二、無罪と有罪と

長い――一審の裁判が漸く判決となった。

結果は無罪だった。

「被告人を無罪とする。」

裁判長の声は、それだけしか聞こえなかった。何や彼や説明が続けられたが、何処か遠い所から響くような音にしか感じなかった。弁護士に肩を叩かれても嬉しくないのだ。唯、幾日でもぶっ続けに畳の上で眠りたいとだけ思った。

葉子は父親に連れられて、ひとまず実家へ帰った。我が子不憫さの父親の情も、却って

何て云ったって、どんなことがあったって、立派に生んでみせる。それまでは、どんなに苦しくたって、じっと我慢しなきゃ。――

赤線上りの売春常習犯の女が親切ごかしに無智を丸出しにして話しかけた。

「ネ、あんた、ほんとに生むつもり？ よしなヨ。こんなところで生まれたら子供だって可哀想だよ。おふくろが懲役女じゃネ。ムシヨにいつまで赤ン坊がいられるもんだ。あんただって娑婆へ出てコブ附じゃ行き場もないだろ。堕しなヨ。堕した方がいいヨ。少し遅い

感じだけどまだ平気サ。妾がやったげるヨ。今迄何度か見たことがあるもン大丈夫サ。」

妊娠した女を仰向けに寝かせ、丸く盛り上った腹部を蹂躪し、挙句の果にはドツシリと体重をかけて妊婦の腹の上で足踏みを続けられ、女はモロに流産するという。話を聞くだけで血の気を喪った葉子は、その惨い作業に大乗気の女囚の前に跪いて、涙を流した。文字通り手を合わせ、唇をワナ／＼震わせて、精一杯の許しを乞い続けた。

――私を愛してくれた雄輔の子。男の子か

仇となる程、実家を包む空気は違っていた。生まれた家であっても、嫁入りした身には何となく敷居の高くなる想いも湧くものを、まして、ニュースの渺い土地にあって、人殺しの女の、それも優しい姑を絞殺した親殺しの身内と指さされては、同じ血の繋がりでだけに肩身の狭い生活をしていた家族として、自然の成り行きだったろう。唯の好奇心が、葉子に連なる総ての人々を苦しめたのだ。

真実葉子の犯した罪であっても、葉子の実家の人々に責任は無い筈だ。非難は見間違いだし、好奇心は無責任極まるものだ。だが、そのような不合理な社会意識は、酷く強力だった。葉子を愛する身内の人々が束になって立向っても、戦う術のある相手ではない。最も賢明な生活態度は葉子から離反することであり、家族の誰彼となく、好むと好まざるとに拘らず、厄介者の葉子として憎悪するようになっていたのだ。

「ナ、葉子は無罪だったんだ！ 潔白だったんだ！ 口きいてやれよ、なァ！」

父親の縋るような言葉にも沈黙だけが応じるのだ。

「葉子が入殺しなんて間違いだったんだ。みんな機嫌よう迎えてやってくれよ。」

「よしなヨ！ 今更何になンだい。俺達が笑ひ者にされて、後指さされて、明るい所を恐れてコソ／＼隠れ歩いたのが消えでもするのかい！ 俺達ァ、まともな結婚なんて、もうこの土地じゃ金輪際できやしないンだぞ！」

葉子は口をききなくなかった。そこに立っているのが辛かった。黙って上り端の隅に腰を下ろした。父親だけがオロ／＼し、血肉を分けた者の間に気まずい静けさが漂った。

翌日の朝早く、雄輔がハイヤーを頼んで迎えに来た。

「雄輔サン、葉子の奴がとんだ間違いをしでかしちまって、えらい迷惑かけちまったナ。たとえ、裁判がどうなったって、こいつァ追ッ出されたって文句は云えない。お前さんには、どんなことされても仕方ないンだ。葉子も俺も気の済むようにして、勘弁しておくンなさい。」

髪に白いものの混った父親が、腰を屈め、泣き顔で訴えるのを葉子は不思議そうに眺めていた。

「お父さん、馬鹿なこと云うンじゃない。葉子は俺の女房だ！ 本当なら真直に家へ連れて帰るンだけど、お父さんが是非って云うから一晩だけ預かって貰ったンじゃないか。葉子

は俺の女房だし、死ぬ迄俺のものだぜ。」

父親は嬉し涙で言葉も出ない。家族の中にホッと心の蟠りが解けるようだった。朝飯もせず、髪も撫でつけただけで、葉子は車に乗せられ、雄輔の家へ帰った。

幾日、否、幾月ぶりの我が家だろうか。雄輔に肩を抱かれ、敷居を跨いで土間に立った葉子は、安堵のようなくつろぎを感じ、思わず梁を見上げた。黒光りする柱も炉端も以前のまゝだったし、台所の流しの辺りは却って清潔に整頓されていた。

「そこへ坐れ！ 云って聞かすことがあるンだ。」

夫の雄輔からの命令は久々に懐しかった。厚い壁で無理に遠ざけられていた慣わしが甦えって、そのまゝ土間に膝を揃えた。身についたポーズだったが、家事に従うべき女の方が長い間家をあけ、夫への奉仕を全く怠っていた申し訳なきが、自分のして来た以上に家の中が整頓している実情を眼の辺りにして、自然に肩を落とし頂垂れさせるのだ。

「今日まで随分長い間、お前は家をあけ続けたナ。」

葉子は土間に両手をついていた。

「何の為に自分が手錠をかけられ、鉄格子の

中へ入れられていたか知ってるナ？」

「ハイ。でも、私、」

「お前は殺人犯だ。罪は尊属殺人つまり親殺しの大罪だ。俺の家の系統には初めての不幸事だし、お前はあくまでも知らんと云うだろうが、たとえ間違ひにもせよ、親殺しの汚名を着た者はこの家系にいなかったンだ。処で、裁判所では何と云われた？」

「ハイ、アノ、私は無罪ですって。」

「その通りだ。だが、お前が親殺しじゃないとは云わなかったゾ！」

「？」

葉子は夫の言葉を理解しかねた。

「いいか。お前が殺したらしいとは云える。

だが決定的なものが足りないのだ。お前が殺したのじゃないと云う証拠は勿論無い。然し、仮にお前が親殺しだとしても、それはお前が正常な気持でやったンじゃなくて、云わば気が狂って殺しちゃったというのだ。間違ひの犯罪には普通の刑罰は役に立たない。だからお前は俺の所に帰されたのだ。お前に一番適した処置は俺がやる。文句はないナ。」

「ハイ」

「お前は健全な人間ではないのだ。少くとも、当時は正常な心理状態ではなかったのだ。

俺はその心算で扱う。いいナ。」

「ハイ」

「お前は今後俺の云いつけを復唱する、つまり、もう一度はっきり繰返して云うのだ。それから、今後一生、お前は俺を御主人様と呼べ！いいか。」

「ハイ、私は今後お云いつけを復唱致します。私は今後一生、御主人様とお呼び致します。」

「よし。」

葉子には雄輔の意図がおぼろげに感じられるのだ。復唱も自然に出る。

「お前は永らく女としての勤めを全く怠って来たし、親殺しの罪で囚われたりして妻としても完全に不適格だった。当然お前は、妻としては勿論、女としてもその地位を剝奪されるべきだ。」

葉子の脳裏に、離婚！の予感が走った。

「法律上お前は俺の妻だ。一旦厳肅に結ばれた以上、この関係は変わらない。然し、それはあくまでも外見の、いや、法律上の形式だけだ。実質的に、お前は俺の奴隷だと誓ったこともあった。今後は外見も奴隷になるのだ。生命のある限り女奴隷に堕ちるのだ。」

葉子は内心ほっとした。以前受けた女奴隷

の扱いを、葉子の体が甘く受止めていた、めかも知れない。

「私は今後一生、御主人様のものとしてお仕えさせて頂きます。一切の反抗は勿論、お云付に疑いを持つことも致しません。常に奉仕させて頂くことを歎びとし、御主人様のお気に召すような女奴隷になります。」

雄輔の命令を繰返しながら、葉子は自分が妻の座を逐われていなかったと思った。一寸被虐的な表現というだけで、世間並な妻が女として抱く感懐そのものだし、雄輔との結婚生活を経ている葉子にとっては、決して無理な桎梏でないと思われたのだ。そのような誓いを唱えながら、精神的拘束を覚えるよりも、却って、いかにも我が家へ帰り着いたという実感が湧いて、心の重圧から解放されるような気がしていた。

葉子は本当に久しぶりに、いつまでも夫の足許に土下坐したまゝでいた。

三、 鞭が欲しいのよ

雄輔を夫と思い、甘える気持があるせいか、口にはどれ程激しい奴隷の誓いを唱えても、葉子の期待は生ぬるく優しい幻想に満ちていたのだ。

だが、女奴隷は正に女奴隷だったのだ。こまやかな愛情の故に妻を仕置する夫。総てを信じて夫の加虐に身を委ねる妻。そのような夫婦生活を基調とした女奴隷の姿を自らの上に描いていた葉子は、現実の我が身との懸隔にまず戸迷い、そして慌てた。

家に連れ帰られた日、土下坐で誓いを済ませると一切の衣服を剥ぎ取られた。嫁いであら短期間に呆れる程のくびれを見せたウエストが、皮膚の許す限り膨脹して、丸々と張り切った腹部がドッシリと重みを添えている。骨盤の支えも充分に堅固で、腰は臼のようにシッカリしていた。

葉子は縛しめを受けた。両手を前に交叉して、愈々柔らかみを増した乳房を抱くように、ふくよかな胸と腕とを縛られてしまった。牢獄の穢れを脱ぎ捨てると言う口実で身につけていたものを奪われ、みじめに縄目を受けた葉子は、それから夕方まで無理矢理、睡ることを強いられた。

「何か用はないの？」

「いいよ。」

「何かさせて。私、働きたいのよ。」

縄目の苦痛は殆ど無く、括られた両腕も前手なので痺れも少かったが、それだけに、長時間の放置が心細く、全身を悶えずにいられない切なさが増すのだ。

「いいと云ったらいい。第一、お前に何ができる。妻としても女としても役に立たない奴に、して貰いたい用はないさ。強いて探せば、お前を思いつきり答で叩きのめすか、ギリ／＼にふん縛って拷問する位だな。」

「それでもいいワ。」

意外のような言葉が、意外でない葉子だった。彼女の心と膚が呵責を苦痛と思わず、む



しろ恋慕する悦虐性に没りきっていたのだ。唯縛られているだけでは、何もされていないのと思いは一緒に、勿論愛されているなどと思えない程に、葉子は烈しい愛情の慾張りになっていたのだ。

「御主人様！私を笞で撻って下さい！ 私の思い上がった気持がケシ飛んでしまうように、おちのめして下さいませ。御主人様のお手を煩わせて申し訳ございませんが、どうか生意気な女奴隷が心からの服従を誓うまで、厳しい拷問にかけて下さいませ。少しも御遠慮はいりません。私を半殺しの眼に遭わせて下さい。お願いです。私は御主人様に責められるのが嬉しいのです。何よりも大きな欲びなのです。嬉しいのです。お願い致します、御主人様！」

葉子は顔を上げ、被縛の裸形を輝やかせながら、雄輔をふり仰いで訴えた。

女奴隷は首輪をつけられた。両の手首だけを前で括られ、土間に正坐した。妊った女体の膝は合う筈もない。

「なか／＼神妙だナ。どうだ、姿勢を崩さずに俺の鞭を受け通してみせるか。」

「ハ、ハイ」

「よし、これとこれで、どっちがいい？」

「どちらでも、御主人様のお好きな方をお使下さいませ。」

「じゃ、両方だ。覚悟はいいナ。」

「ハイ」

一メートル位よく撓う篠の笞と、三センチ巾の雄輔のベルトが鞭になる。

びっ！びっ！びっ！びっ！

ウ、ウッ！ウウッ！うっ！

篠は鋭い音で空を斬り、肌を撻った。細い笞痕が赤く膚を走り廻る。豊満な葉子は笞の的として充分過ぎる。紅の筋が縦横に描き出され、同じ線の上に重なり、「ううっ」と悲痛な呻きが咽喉の奥で圧殺される。柔らかみのある上体が苦悶に揺れ、姿勢を崩すまいとする努力が縛られた掌に現われる。

「どうだ。少しは応えたか。」

「ウ、ハイ。」

「今度はベルトだ。行くぞ！」

「ア、待って、待って下さい！」

「何だ！まだ音を上上げるには早いぞ！」

「違ふんです。口を、猿轡をはめて！」

布片が丸められて押入れられ、手拭がキュッと頬を噛んだ。

バシッ！バシッ！バシィン！

男の力任せの鞭がぶち当たる瞬間、女の体が

ヒクッと慄える。鞭は膨満の腹部を避けてはいたが、その打撃の強烈さには少しの手加減もない。巾広く、ふくやかな背面ばかりでなく、珍らしい程見事な乳房やうっすらと汗の匂うような首筋にも、真向から振下ろされる。のけ反った途端、横なぐりに喉笛を払われて、白い体は横倒しになった。ヒク／＼慄えて蠢く妖しさ。

「どうした、参ったのか。」

雄輔の手が、唾液を吸った布片を葉子の口の中から掴み出す下から、女はかすれた声で喘ぐ。

「もっと、もっとおつて！ 御主人様！」

“女奴隷葉子”という女肌の獣は、常に所有者を表わす首輪をはずせずにいた。男が女の首筋を洗う必要を認める時のほか、ごく僅かの例外を除いては、首輪の錠がはずされないのだ。その首輪は、鉾打ちの頭丈なもので、体の大きい犬に施すものだった。それを一杯に締めて留められた時、葉子の全身はジーンと痺れた。

「ア、苦しいワ。すこし緩めて。」

「生意気云うな！ 我慢するんだ！」

「ハ、ハイ、御主人様。」

頸が圧迫に馴れたのか、葉子の咽喉が細く
なったのか、始めの痺れるような息苦しさは
薄れ、楽になると同時に物足りなくもなった。

「首輪をもう少し締めても、大丈夫よ。」

女奴隷は男を誘ってみた。だがその実、小
指一本を押込む程の余裕しかなかったのだ。

「女奴隷らしく、手錠もはめてやろう。」

葉子の両の手首には、それぞれ頑丈な犬の
首輪がピッチリとはめられた。両腕を背へ捻
じられる。

カチッ！

小さな金属音がした。二箇の革製の輪は、
留金がしっかりと噛合い、女の両手首を腰の
辺りで繋ぎ止めてしまった。肥満体の葉子が
妊っているのでは、それだけでもう両腕の自
由は利かない。腕は両脇にピタリとついて、
腋の下の皮膚がよじれて歪むのだ。

「お前は、これからその姿で暮すのだ。」

「用は？ 用ができないワ、貴方の事も。」

「お前にして貰う事はないサ。お前自身の用
事も減るのだ。」

男は愉しむようにゆっくり宣告する。

「女奴隷に着物は要らない筈だ。従って着換
えや洗濯や裁縫は用がない。女奴隷は食べて
寝て、俺に服従していればそれでいい。餌は

俺が作ってやる。お前は皿に口をつけて喰え
ばいい。寝床は新しい藁で土間の隅に作る。
お前は俯って行って丸くなればいい。お前の
体が汚れないように、毎日二度ずつ洗ってや
る。まアお前の仕事と云えば便所へ行くだけ
だが、それもわざ／＼行かないでいいように
俺が砂箱を作ってやる。だからお前は砂箱の
中へ上手に用を足して、時々中の砂を取換え
るだけでいい訳だ。」

葉子の面上には、何の疑いも抗いもなかつ
た。雄輔の宣告に背いている態度も平静その
もの、愛される女の嬉々とした処も見られ
ず、自我を捨て去った女奴隷の姿があるばか
りだった。膝について項垂れた女の肌には、
奇妙な艶が輝やいていた。

四、明渡す妻の座

膚色の殊に白い、豊かなヴォリュームにめ
っきり柔らかみを見せる葉子が、腹部を丸々
と突出して、しかも両腕の無い体を、ヨタ
／＼ともて余している図は、エロティシズム
のムン／＼立昇る奇妙な見物だった。

雄輔の足許に跪いて鞭撻たれる時も、両膝
をかなり開いてつかなければ、体の重みを支
えることが出来ない。

顔を歪め、唇を噛み、葉子は唸える。もし
て打たれた乳房を、尚も突出するように胸を張
る。

ビシッ！ ビシッ！ ビシッ！

うっ！ ム、ムウッ！

「お前は卑しい女奴隷だ。子供を生む自由も
許さない。偶々お前の腹に子供ができた。お
前は俺が『よし』と云うまで子供を腹から出
してはいけない。いいか、お前は予定日より
早く子供を生むな。命令するぞ。俺はお前を
責める。妊娠したからと云って容赦はしな
い。今までよりもっと／＼残酷に痛めつけ
る。どんな責苦でもお前は進んで受け、そし
て充分に苦しまなければならぬ。だが苦し
まぎれに、早産してはいけない。お前は俺の
仕置を唸える時、腹に力を入れるな。腹の力
を抜いて胸を張れ。息を一杯に吸込んで膨ら
ませれば、俺の鞭ぐらいいはお前の胸で受止め
られる筈だ。」

冷厳に云い切った雄輔の言葉を心の内に反
芻しながら、女奴隷は忠実に鞭を受ける。

首輪に鎖をつけて曳かれ、藁の寝床と砂箱
との生活に馴染んだのか、葉子の健康は良好
だった。便秘もせず、殆ど衣服を纏わなくて

も風邪も引かない。朝の起抜けにタップリと水を浴びせられ、全身を大きなバスタオルで拭かれたあと、一しきり鞭の雨を浴びて火照るのが日課だし、夕食後は就寝前に一日の汚れを風呂で洗い流す。革製の手錠に繋がれ放しの両手首と頸は、すっかり透くような膚になり、細くなっていた。後手首が腰の辺にあるので、高手小手と違い神経麻痺を起すこともなく、血行障害も起らないで、葉子を雌獣として成長させて行くのだ。

「女が欲しい。」

「え？」

「俺の女房にふさわしい女が欲しい。」

背中をどやしつけられるような衝撃を持つ雄輔の言葉を、葉子は虚ろな心で聞いた。「お前は俺の妻として不適格だ。だから女奴隷にしたのだ。一旦女奴隷になった奴は、俺の妻になれる筈がない。お前は今妊娠中だ。俺の妻になる女は、お前が俺の女奴隷であ

ることを認め、お前に最もふさわしい待遇を与える女でなければならぬ。お前よりも美しく、魅力があり、俺を欲ばせる女でなければならぬのだ。」

葉子の胸の中には何の反感も湧いて来ないので、おかしい程平静だった。

「多くの条件を考え合わせてみたが、結局お前の知っている女、それもお前の女友達の中

からお前が選べば総ては好都合だと思う。なまじの女より、お前の女友達が俺の妻になれば、お前にとっても幸せというものだ。」

咄嗟に葉子は、小村百合を思い浮かべていた。母と娘の二人暮らし、京浜地方から移り住んで来たというだけに都会風の洗練された処があった。若造りの母親は事実四十になるやならず、可愛い女として以外に生きる途の

ないような種類の人だった。その母親が十幾つの時に産んだという娘の百合にも、同じ血の流れがあるのだろう。色白で下ぶくれの顔、二重瞼で切れ長の大きな瞳、左の眼の下に泣きぼくろが一つ、小学生の頃からナヨ／＼としなを作る全身に奇妙な艶めかしさがあって、男の子達の鬨り物にされていた娘だった。「家のお母ちゃんたら、あたしの生まれる前からずっと二号さんなの。あたしとあんまり違わないでしょ。あたしのこと妹さんですかって訊く人もいるわ。お母ちゃんの旦那様って今何人目かな。分らないや。」



母親の中の哀れな女を平然と眺めているような百合が、葉子の心に浮かんだのは何故だろう。

求められるままに、葉子は友達の名を幾人か挙げたが、その中には百合の名を故意に挙げずにいた。ある者は既婚者であり、ある者は係累が多く容姿や才能に難があった。一人ずつ失格と決まる度に葉子の肌は鞭を浴びる。全員不合格の罰に、首輪につけた綱が梁を渡って強く引かれ、葉子のズシリとした体は爪先立って涙をこぼした。「イイイ……云います、云いますから。苦しい、ゆる、許して！」

胸と背をビシ／＼打たれた葉子は、小村百合について知る限りを話した。写真を見て雄輔も満足したらしい。殊に百合が困い者の私生子で、しかも見るからに娼婦型の女だという点が大いに気に入った様子だった。

同じ屋根の下で一人の男を二人の女が愛して行く生活。そんな不倫な関係を、たとえ当の葉子が妾として極端な譲歩を承知したとし



ても、誰にでも頼める筋合の話ではない。それなのに、余りにも自信に満ちた雄輔の態度から、葉子は百合の拒絶など考えもしなかった。葉子と百合はかなり親密だったし、学校を出てからも往来していた。葉子が囚われの身となった時も、警察へ差入れに来てくれた上、拘置所へも二度、帰宅後も一度、体を案じて逢いに来てくれた。色気ばかりでなく、思いやりの深い優しさも典型的な女だった。雄輔が代筆した手紙で飛んで来た百合は、身重の体で匍いつくばる葉子の獣じみた姿に眼を瞠った。

「ネ、葉ちゃん、あたしは確かにお妾さんの子よ。自分でも堅気な結婚ができると思っちゃいないし、またそんな結婚なんか性に合わないでしょ。あたしはお母ちゃんと同じに気ままなお妾さん暮しがいいと思うわ。だからあたしは葉ちゃんの旦那様のお世話になるのも、ちっとも嫌じゃないわ。平気よ。でもネ、一つだけ云っとくけど、あたしは自分の生活だけはきちんと守りたいの。世間態なんか構わない。お妾さんでも二号でも情婦でも何でもい。只あたしは、その中で奥さんになるの。誰にも干渉させないで、あたしが実権を握るの。」

「私は女奴隷なのよ、百合ちゃん。両手もうずうつと背中が繋がれているし、首輪をつけられたまま裸でいる女なのよ。」
「あたしの生活の中では、葉ちゃんだって口出しさせないわ。雄輔さんはあたしの旦那様、いいわね。あたしは雄輔さんの二号だけど、実質的には奥様になるのよ。それさえ承知なら、あたしはOKだわ。」

「私はいいの。百合ちゃんが主人を欲ばせてくれたら、私は感謝しなけりゃ。こんな無理なこと頼むんだもの。私は縛られっ放しの女奴隷だから何もできやしない。独りじゃ食へることもできないで餓死しちゃう獣なの。だから百合ちゃんは奥様でも何でもいいの。ただ私に赤ちゃんさえ産ませてくれたら。ネ、産ませてくれるでしょ？ 産ませてくれるわネ、百合ちゃん。」

五、酬われたもの

雄輔からどのような仕打を受けようと、自分自身の身も心も奴隷としての日課に馴染んで行きながらも、葉子の心の底には、法律の掬り所があった。葉子という女の体を縛り、永い間囚女として責め抜いた強い力は、一枚の紙片であり、それは法律という奴だった。その法律によれば雄輔の妻は葉子なのだ。何人、何十人の女が雄輔の前に現われ、雄輔に気に入られたとしても、法律の認めた妻は葉子以外にはない筈だった。

「今日から百合は俺の妻だ。俺の妻は俺と同様お前の御主人様だ。だからお前は百合を奥様と呼べ。そして忠実に仕えるのだ。」

「ハイ、私は今日から百合様を奥様と呼び

します。御主人様と同じく心から崇め、忠実にお仕え致します。」

葉子は百合の足許にひれ伏して、眼の前に突出された足の甲に唇を当てた。

雄輔と百合はピッタリと呼吸の合ったカップルだった。極めて仲の良い夫婦が最も順調に愛し合う時のように以心伝心の間柄で、とても間に合わせの男女とは思えない。

「あたしは葉子が憎かった。あたしは雄輔さんに一目惚れだったのに、葉子があたしの恋を滅茶々にしちゃったんだもの。でも、もういいの。あたしは葉子に負けやしない。あたしの方が今じゃ葉子より雄輔さんのことをずっとよく識ってるし、何よりもあたしの方が雄輔さんにふさわしい奥様だものね。」

百合は働らき者だった。見かけによらず、野良仕事にも精を出したし、家の中のこともクル／＼立働らいて処理して行った。主婦としての実権は完全に百合の掌中に握られ、百合は葉子の存在など全く無視して、自分自身の家風を創り上げて行く。

葉子に肌着を許したのも百合の策だった。女奴隷は野獣ではない。人間の雌としての色気を喪っては飼育する意味が無いというのだ。ブラジャは肌色のナイロンだった。

「何さ、恥ずかしいの、生意気ね。嫌ならこうしてやるからいいわ。」

覆われながら丸見えというのは流石に恥ずかしい。だがその代償は細引のブラジャで胸をキリ／＼と締上げられるのだ。

「この方がお前にはずっと似合いだわ。いい気味！」

パンティの着脱は後手のまま自分でさせられるのだ。

「お前は卑しい女だから、替えはこれよ。」

パンティの予備は、使い古した体操用のブルマーだった。葉子の陽に当たらない膚に黒い色が際立ち、ムク／＼と張り出したヒップに丁度手頃な大きさだった。

「あたしもやっていいでしょ？」

「え？ 何を？」

「お前は女奴隷なのよ。あたしにとっても卑しい女奴隷なんだから、神妙にして！」

鞭を取上げて立はだかった百合に、葉子は慌てていずまいを直した。両膝をつき、やゝ前屈みに背筋を伸ばしながら、呼吸を深くして胸を張る。

エイ！ エイ！ えゝい！

アッ！ うっ！ つうっ！

百合の気合は高く鋭い。夫以外の鞭の味は

新鮮で苛烈だった。まして、実質的に妻の座を奪い、葉子に奥様と呼ばれて君臨する女友達の鞭は、衝撃といい戦慄といい、葉子の全身を揺るぶるのだ。胸の奥がズキ／＼痛み、羞恥と屈辱の悶えがドロ／＼と押寄せる。

「お前は女奴隷の癖にあたしの恋人を奪ったのだ。今、お前は本来の女奴隷に還り、あたしは恋人を取戻した。でもお前の罪は消えない。あたしの味わった苦しみを、お前は生涯味わい通すのだ。いいね！」

女主人は魅力的な奥様だった。それだけに飼畜に対しては峻厳な調教師だった。なかなか演技力も確かで、表情は豊かだし、時代小説のファンらしく責め言葉も見事だった。「どうォ、口惜しい？ 何とか云って御覧！ 何さ、女奴隷の癖に旦那様のお胤を宿したりしてさ、女房の恨みが、どんなものか思い知るがいい。」

百合は葉子の髪を鷲掴みにして仰向けに引倒した。ムチ／＼と艶のある白い脛がすりと伸びて、足の裏が生贄の咽喉を捕える。

「うっ、うぐっ！ く、くるしいっ！」

「嬉しいだろ、嬉しいっていつて御覧！」

「う、うれ、うれしい！」

「嬉しい？ そうだろね。じゃ、ここは、こ

うしたらどう？ 嬉しいかい？」

「ぐ、ぐうっ！ 苦、苦しい！ やめてっ！」

「嬉しい？ 嬉しいんだろ！」

「ぐっ！ う、れ、し、いっ！」

咽喉から肩口そして両の乳房まで、百合の容赦ない重味が踏みしだき、その苦痛が無理矢理に葉子の口から嬉しいと叫ばせるのだ。

百合を迎えてから、葉子は漸く涙を思い出して来た。人並の、女の羞恥を取戻して来た葉子に、百合は時折後手の拘束をも許すことがあった。便意を催した葉子を、百合は首輪に鎖をつけて、犬の様に戸外に連出す。砂箱の使用が面倒な以上に、葉子を罰する方法なのだ。柿の木の根方に左膝をつき、犬と同じように放尿させたこともあった。便所の中で後手を解かれた時は、葉子の反抗と逃亡を防ぐためという名目で、鎖は便所の梁に結ばれて用便を強要された。

遠慮なのか警戒心なのか、初めは雄輔のやり方に従って葉子を拘束していた百合が、葉子の奴隷性を見抜いたように、大胆になる。「葉ちゃん」は「葉子」になり「お前」になった。一緒に風呂へ入って背中を流させるし、仕事疲れを直すため葉子の手で全身を揉ませたりするのだ。そして葉子も黙々と従

う。まるで魂の抜けた女のようなだった。

(あたしは負けたんだわ、ほんとに)

葉子は百合の振る鞭のまゝ無心に動いた。

町の病院に入院したのは、予定日の四日前だった。人目を憚り、闇に紛れるように家を出た葉子だが、百合がずっとついていてくれた。葉子は家から黙り通しだった。陰うつなだけでなく、口をきくのが面倒の様子で、そこには暗さが微塵も無かった。予定日の翌々日、葉子は無口のまま出産した。

痛いでもなく苦しいでもなく、百合の行届いた看護に身を任せてはいたが、葉子は何も云わず、水も食物も与えられるだけしか求めなかった。

「一週間程たってポツリと訊いた。

「子供は？ 赤ちゃんは？」

「葉子の赤ちゃんネ、死んでたのよ。」

左手を百合の掌中に預けながら、「そう」というように小さく頷いた葉子は、百合を見上げてニコリした。何の恨みもなく、心からの安堵が現われていた。

(おわり)



わたしは奉仕がしたい

——愛^{マニヤ}好家の記録——

とやま・かずひこ

味つけ

週刊新潮に次のような記事がでていた。

——「和製の洋酒など八割に英国製や銘柄不明の洋酒二割を混ぜ、香料を加えると高級洋酒に化ける」……五年間に約五万本の高級洋酒を密造していた姜徳薫（二五）ら一味〓七日までに上野署に逮捕〓の手口であるが、「ネズミの小便を混ぜる」ことも高級洋酒のコクを増す秘決のひとつだったという。「ネズミの小便」に金を払っていたとは……（自供内容から）——

相手がネズミでは、いくらかずひこでも願い下げだが、女性のそれならウイスキーに混ぜて試みた経験は数回ある。

ネズミのでも役に立つのなら、若い女性のなら尚更に神秘的な力があるのではなからう

か、とひそかに考えている。

階段

下関から、取引会社の業務部長が久しぶりに上京して来たので「山形」という店で一杯ということになったが、かずひこの座った席が突に気に入った。

二階へ通じる店員専用階段の真下だ。カベによりかかっていると、美しい女店員の上り下りするたびに、踏板のひびきがストレートに感じられるのだ。

酔ったフリをして眼をつぶり、トントングタガタと階段の震動を味っているうちに、まるで、美女店員に踏まれているような、快よい錯覚に没入することができた一刻だった。

オシメ患者

知人が交通事故で入院したときき、見舞に行く。幸い大したことはないらしい。

「オレなどケガのうちにははいらんヨ。ひどい人があるぜ」

彼はいう。

二十才とかの娘さんが隣室の患者だそうだが、ダンブカーにはねられ、骨盤損傷で寝たきりだという。

気の毒にも神経をやられて寝返りも出来ないそうで、しものほうも自覚しないとか。仕方なくオシメを使っているというのだ。

「お母さんがつきそってるが、まいにち泣きながらオシメ洗いをしてるそうだよ」

いろいろはなしを聞いているうちにかずひこ一流の願望が頭をもたげはじめる。

かずひこがそのお母さんなら……。もちろんオシメなどは使わない。それでいて快適に

療養生活を送らせて上げる自信はあるのだが……。あたらしい花の盛りを不慮の事故に遭われて一生を暗黒に塗りつぶされた御本人には申しわけないが、かずひこは、ついそんな不逞な空想をしてしまう。

奉 仕

まいにちのように電車が一緒になる女性がある。この女性、いつも文庫本を読んでいるが、いつも吊皮も持たずにゆれる車内でフラフラしながら読みふけるのがくせらしい。

先日、偶然に背中合せて乗りあわせたところ、いつの間にか、絶好の壁とばかりに背凭れの代用にされていた。

以来、かずひこは必ず彼女の背後に立って奉仕することになっている。

いやしきドレイは、改めて命令されなくても、女王様の欲するところに従うのがぎむである。女王様は知ってか知らずか、毎朝、平然として凭れたまま読書にふけっぺいられる。

おかげで、かずひこは日常のたのしみが一つふえた。明朝もまたよろこんで奉仕させていたかどうかと思う。女王様はごぞんじなくとも……。

早稲田から上野をはしる39号系統の都電が与えてくれる、うれしい朝のひととき。

診 断

社の食堂従業員に欠員が出来た。早速募集すると二人の採用予定に十三人の応募があつて、二十四才と二十二才の感じのよい女性を選挙できた。

だが、なにぶんにも食堂係のこと、全従業員の健康に重大な関係を持つだけに、外観の美しさだけでは決定できない。

神経質な社長の厳命で、入念な健康診断を行うことになったが、嘱託医がかずひこの中学時代の同窓生だった関係で、係と一緒に課のちがうかずひこも、医院へついてゆくことになった。

検診は、普通社員の入社健診のほかに、検尿、検便が追加されるという係のなし。

この美しい娘さんが検便をうける、ときいだけでかずひこの胸はさわぐ。

別室でまわっていると、看護婦さんに案内されて一人一人別々に、前の廊下を通過してトイレに行く。ひきかえす看護婦さんの手には、なかみのはいった容器がもたれている。

やがて健診を終えた二人が、ややはずかし

そうにしながらはいって来て、係に済んだことを報告する。

他に患者もいないようなので、みなを残してかずひこは診察室へはいっていった。

「しばらく顔をみなかったな」

中山医師はペンをはしらせていたカルテから眼をあげて、かずひこに椅子をすすめる。

だがはいったときから、かずひこの眼をひきつけているものは、横の棚におかれたコップだ。相当分量のなかみが、はられた名札の上からのぞいて、かずひこの注意をひきつけるのだ。

「ゴクリ」

思わずツバを呑む。

看護婦さんが、その一つをとって医局の中へ入った。

「いま、検尿中だ。便の方は異常ないから、たぶんOKだろうな」

中山医師は、そういって、立ち上ると、残った一つを手にして、ちよつと振るようにし、光りにすかしてみた。

眼の前に、あこがれのものをみながら、手にもとれないもどかしさ。このときほど、医師がうらやましく感ぜられたことはない。

長篇連載MS小説

宇宙のどこかで

.....△或る奴隷囚の告白より▽.....

佐 治 麻 造

炭坑主の妾宅にて

三カ月程して、彼女、美しい女奴隷十四号は何処かへ売り飛ばされて行きました。檻の鉄棒を独りで磨き、床拭きをして居ますと、淋しくなつてホロホロ涙がこぼれました。労役は再び私が全部引受けねばなりません。

「少しお前やせたわね。腰枷も鎖褌もゆるんでるじゃないの。淋しいのかい。ホホホ」

今迄、彼女が嵌められていた腰枷を無理に嵌められてしまいました。輝の鎖も彼女の分だったのを無理矢理に締められ、少し腰を動かしても喰い込む痛さに呻きます。

「せめて、そうしてたら、少しは嬉しいだろ。」
鎖をしやくられる痛さ。

独りで横たわる檻の広さの堪え難い寂しさも次第に薄れました。さしも活況の続いた石炭業界にも不況が忍び寄り、秋も深まる頃になって、旦那様はどうとう奥様と、いやお妾さんと手を切りました。家と私は、そのまま奥様に与えられました。

「私もね、何か商売して身を立てるわ。此の家も処分して手切金に足して。」

お清も暇を取り、奥様と二人切りの淋しい日が暫く続いた後、奥様はいいました。

「お前は売らないよ。けど、奴隷を使える様になる迄、どこかに貸

しておこうと思ったんだけど、面倒臭くなったからね、暫くお役所に預けておくわ。」

「監、監獄でございましょうか？」

「ホホホ、震えなくてもいいのよ。どこにブチ込んで繋いどくか知らないけど、大きなお店を持ったら出して来てやるわよ。」

「きつと。きつと、お願い致します。お側で仕えさせて下さいまし。」

此の奥様にどんなひどい扱いをされようとも、監獄暮らしよりはましだと考えた私は、必死に哀願しました。

「ホホホ、じゃあね、此の家をピカピカに磨くのよ。少しでも高く売れて資本が増える様にね。」

お清も居ませんし奥様の身の回りや食事の世話等も見様真似で勤めました。そして朝から晩迄、家の内外を磨き立てます。

「そんな仕事は矢張り、そんなにされてちゃ無理な様ね。」

ままならぬ手足を切なげに動かして立ち働いて居ますと、昼寝からさめた奥様が近付いて来られ、私は鈍い仕事振りを叱られるのかとビクッと致しました。

「これからは、働く時には手足を自由にしといてやるわ。」

袂から小さな鍵束を取出して手錠足錠を外し、鼻環と鎖揮の下についた鎖も除いてしまわれました。

「あ、ありがとうございます。ほんとに、ありがとうございます。決して逃げたりは……」

「フフフ、誰がそんな心配するものかね。さ、しっかり働くのよ。」

此の部屋が済んだら晩御飯の支度をおし。難かしいものを作らせる訳じゃないんだから、上手に早くやらなきや駄目だよ。此の前みた

いに妙なものを食べさせると承知しないよ。」

無理矢理に嵌められて居る腰枷と鎖揮だけは体を動かす度に未だ痛くて堪りませんが、手足の拘束が全くない快よさは思わず鼻歌が出る程でしたが足を動かす度に自然に膝が曲ってしまうのには、我乍ら哀れに思えました。奴隷食以外を口にすることは勿論許されては居ませんが、台所で独りで料理して居ますと、切れ端位は口に出来ます。御飯が炊き上がる香りをかぎますと生唾が湧いて堪らなくなり、夢中で生煮えの御飯を一口ばかり盗み喰いしてしまいました。炊き上がってからでは、蓋を取って見れば直ぐ分ってしまいましたから、とても出来た話ではありません。咽喉を落ちる米粒の感触と香りに泣けて来ました。

「大分上手にはなつて来た様ね。これなんか中々いい味だわ。」

奥様は、生唾を呑み呑み給仕して居る私を賞めてくれました。

「あ、そうか。お前つまみ喰いしてるのね。うっかりしてたわ。嘔吐かなくてもいいの。お前が人並の物を喰べたいのは当たり前よ。けど、それは駄目。明日から面倒だけど嵌口具ね。」

喰べ残された料理や御飯は、鍵付きの冷蔵庫に入れ、又、錠前付のごみ箱に捨てさせられ、私には味気ない乾燥奴隷食が漸く与えられました。其夜奥様は十四号の残した胸枷を私に嵌めようとされましたが、それは到底無理でした。

「面倒ねえ。一々檻を開けてやらなくちゃいけないんだから。」

朝のおそい奥様が目をこすりこすり下りて来られる迄は休めますから、其の点は楽でした。

「おや、あ、そうか。鼻の手錠は除ってやったんだね。あら昨夜は足錠もなかったの。楽だったろ？」



「ハ、ハイ。その代り、嵌口具を……」

奥様に運ぶコーヒーを淹れて居ますと、ちよいちよい盗み飲みしたその味を切なく思い出し、固く固く嵌められた嵌口具を顎の骨に痛い迄に感じました。

家の手入れも私の及ぶ限りは殆んど済み、奥様は外出する事が多くなりました。私が磨き立てた奴隷車も、どこかに引き取られて行きました。奴隷は人間ではありませんから、奥様が外出する折には

戸締りをして、私を檻に入れておきます。

今日も午後から御出掛けの支度で、私は切ない香りに悩み乍ら帯を締めるのを手伝ったり、足袋をはかせられたり致しました。

「戸締りは済んだかい。じゃ、おいで。」

地下の檻へ追い立てられました。

「私も、こんな支度しちやっだし、胸枷は堪忍してやるわ。手を後へ回して」

跪まずいて後手錠を嵌められ乍ら、私は訴えました。

「奥様。何も檻へお入れにならなくとも、御留守の間にいろいろな仕事をさせて頂けますのに。」

「ホホホ。それやそうよ。其の方が私もいいんだけどさ、奴隷と云うものはね、人間様の眼の届かない所では動けないの。あ、又足枷を忘れたわ。嵌口具も。何故云わないのさ、馬鹿。いいから、檻に入って。そしてお尻を上げて四つん這いになって。と云っても手はつけないのね。私の手が汚れない様にしなくちゃね。もっとお尻を檻につけるのよ。」

高く上げたお尻を檻の鉄棒につけ、後手の上体を前に倒します。尻をウンと上げる様に云われ、顔を床に押当て、膝を床につけたまま、鉄棒一本を挟んで両足の脛を檻の外に出しました。

「やっぱり足錠嵌めとくんだったわ。」

カチツと音がして、鉄棒の金具と鎖の金具が連結されました。「やはり小さいのね、此の褥。フ、フ、フ、凄くきつく喰い込んでること。じゃそうして留守番しているのよ。心配しなくても今月中には帰って来るからね。」

奥様は私の尻を思い切り振り上げ、悲鳴を上げる私に笑を残し



て出て行ってしまいました。私は喰い入る腰枷と鎖鐐の痛さ切なさ
に身動きも叶わず、みじめな姿で呻き乍ら、お帰りを待ちに待ちま
した。激しい飢えと渴きから考えて夜も大分更けたと思いますが、
シンとしたままです。心細くなって泣けてしまいました。泣いた所
でお帰りになる迄はどうともなるものではなく、泣き乍ら少しまど
ろんだ様でした。

灼きつく様な股の痛みと腰骨の疼きに目をさまし、必死に耳を澄
まして待ち侘びました。やっと帰って来たのは翌日のひる過ぎでし
たが、本当に永く感じられました。

「フ、フ、フ、お待遠だったね。つい話込んでしまつて。悲しかっ

たかい。泣いたりして何よ。三日や四日放つといても、どうって事
ないじゃないの。」

檻から出され後手錠を外して貰った私は、奥様の足許にひれ伏し
て鳴咽してしまいました。

「お前も案外可愛らしいところあるわね。話も大体うまく行つたし、
ホラおみやげをやるわ。」

私は投げ与えられた蜜柑にむしゃぶりつきました。

忘れも致しません、其の翌日のことでした。旦那様と別れたと聞
いてから早や一ヶ月余り。日も暮れて、風呂から出た奥様は、ベッ
ドに横たわって私にマッサージをさせて居ましたが、フトかち合っ
た奥様の両眼の黒目が妖しく輝いたかと思ひますと、矢庭に身を起
して鍵を取り出し、私の全身から鎖錠を外してしまわれました。鼻
環だけ残して全部です。奥様の柔い手で約二年振りて全部の錠が外
された時には、嬉しいというより、何か全身が戦慄しました。

「お風呂で体を洗つておいで。早く、綺麗によ」

奥様に監視されてブルブル震え乍ら全身を洗いました。十数年振
りで浸るお湯の味も碌々分りませんでした。

命じられるまま、ベッドに運び、死んだ様になってじっと目をつ
ぶって居る奥様の黒い髪に手を触れたとき、突然横面を張られまし
た。

「何するの！ 奴隷の癖につけ上ると承知しないわよ。さっさと鎖
をつけて、食事を持つといで！」

ベッドから白い御脚で蹴り落された私は、ハッと分際を思い出し
ました。ベッドに横になった奥様の白い腕が延びて、再び錠を嵌め
込まれた私は、自分の境涯と云うものを泌々思い知られました。

窮屈な鉄枷を無理に我が腰に嵌め短い鎖を、齒を喰いしぱり乍ら締め上げて嵌めます。

男泣きに泣けてしまいました。自分で首環を手探りで嵌め、両腋にそれぞれ鎖を潜らせて締めつけ、ベッドに身を屈めて検査を受け、何ということもなしにビンタされた後、手伝って嵌口具を嵌められて台所へ急ぎました。ベッドの上で食事をした奥様は

「食べさせてやるわ」

と残りを私に与えて下さいました。

「フ、フ、フ、そんなにガツガツして食べなくても、誰も取上げはしないわよ。喰べたかい？ 後始末して戸締りを見ておいで。今夜からベッドに繋いでおくからね。」

立ち戻った私には手錠だけが待って居ました。

「手錠だけは嵌めとかなくちやね。前で勘忍してやるわ。」

女奴隷十四号に用いられて居た手錠が無理に嵌め込まれ、短い鎖で鼻環をベッドの脚に繋がれました。許されて厚い敷物に背をつけて寝ますと、もう本当に楽で体がフワフワする様でした。

翌朝、眼を覚まし、置時計を見て、ハネ起きました。奥様が夢うつつで投げて下さった鍵で鼻環の鎖を解きました。おそろおそろ手錠の鍵孔にも試みましたが駄目でした。目ざめる迄位、手錠のままでも何ということはありませんが、床に転がって居る嵌口具を嵌めなくてはいけません、起すのもいけないから自分で嵌めて見ようかとも考えましたが、そのまま寝室を出ました。雑用を済ませ、時間を見計ってコーヒーを運びました。細い女の手首に合わせて作ったU字環の手錠は骨に喰い入る痛さです。

「少し寝坊しちやったわね。」

ベッドに起き直ってコーヒーを啜り乍ら、奥様は白い腕も露わに髪を撫でつつ私を見下ろしていました。

「ホホホ、お清さんが居なくなっておまえも楽になっただろう？ けどねえ、考えて見るとお前も辛かっただろうねえ。二年ばかり鎖から外してもやらなかったんだから。」

ホロホロと訳もなしにこぼれる涙を痺れた手の甲で拭きました。

「あら、手錠外してなかったのね。」

奥様は身をよじって、小引出しのダイヤル錠を私に見えない様に回し、鍵を取り出しました。

「此の手錠は少し痛かっただろうね。中々抜けないじゃないの。」
私は手首をさすり乍ら哀願します。

「あの、お慈悲でございますから、鎖を外して下さいまし。用便が、もう……」

「ホホホ、そうだったねえ。お立ち。此の鎖は苦しかったかい？ 帰りにお前の分を持つといで。替えてやるわ。」

限度に来て居た用を足し、再び寝室へ戻って、腰枷と鎖を私の分に替えてもらいました。

「此の鉄の鎖だけは外してはやれないよ。」

両手を膝において尻を突き出し、中腰で後向きに立った私の鎖をギョツと引き絞って腰枷に嵌め込み乍ら奥様がいます。

「しかし考えて見ると、お前もずい分と痛めつけてやったものね。こっち向いてお坐り。鎖がゆるくて気持ち悪いだろ。フ、フ、フ」

奥様は紫煙をくゆらせ乍ら、うなだれた私をジロジロ眺めます。
「胸や腰の鉄枷のあとが可哀想な位ね。ま、暫く手離しとくけど、今度使ってやる時には少しはゆるく扱ってやるからね。ホホホ。ど

うお？ 私を恨めしく思ったこと、ずい分あったらうね？」

私は、黙って啜り泣くだけでした。

「さ、庭に出るのよ。鞭をどこへやったの？ 持っというで。暫く鞭を当ててやらなかったわね。私も少し運動しなくちゃ。」

何日振りかで全身に当てられた革鞭の痛さも、何か甘い様な味が混って居ました。

十日程経った或日のひる近く、一人の婦人が颯爽とした足取りでやって来ました。ピンクのタイトスカートに先のとがったハイヒールをはき、小麦色のキリッとした顔立ちの卅才前の婦人です。良家の御嬢様の様に見えましたが、奥様との話し合で、婦人着守と分りました。私を連れて行くために来たのです。恐しさに腰が抜けそうでした。どこへ曳かれるにせよ、囚われの身のこと、同じ様なものではありますが、やはり新らしい境遇が心配です。

「ほんとに御苦労様ですわ。まあ、少しお休みになって……」

「ありがとうございます。私ね、休暇で家に帰ってたんですよ。休暇が済んだら、お宅から保管奴隷を一匹連れて帰る様に云われて。其の代り一日余計に貰っちゃったの。いえ、丁度帰るついでなのよ。あら、これね。」

紅茶を捧げて運んだ私に、婦人は顎をしゃくりました。

「えーと。年はと……。未だ五十になってないのね。あと十八年程あるのね。おとなしそうじゃありません？ 罪状の割には。」

婦人看守様は書類をパラパラと調べました。

「手続きは全部済んでるんですね。じゃ、これ受領書ですわ。」

「お手数かけて済みませんねえ。これお前。此の方に連れてって頂くんだよ。庭に下りて坐っておいで」

鼻環だけ残して、すべての鎖錠を解かれた私は、庭先に正座して鎖錠の手入れをし乍ら待ちました。暫く談笑していた二人は、やがて庭に下りて来ました。

「綺麗に磨いたかい？ いずれ又、嵌めてやるからね。」

我が身を苛なみ抜いた鎖錠を押し頂いてはお礼を云わされ、箱に納めました。

「奥様。長い間ありがとうございました。なるべく早く、又使って頂ける様お願い申し上げます。」

ひれ伏した私の脇腹を、とがったハイヒールの先が小突きました。「さ、捕縄をかけて上げるから、手を回して。」

どうせ縛られるのは分って居ますが、さっき会ったばかりの娘の手で束を解かれる捕縄を見ますと、流石に口惜しくなりました。

「あら、縄で縛りになるの？」

「ええ、だって重くて持って歩けやしないですもの。」

今なら手足が自由だから逃げられる、と考えますと、全く久し振りに反抗心が湧き、矢庭に逃げ出し度い衝動が起りました。しかし逃げ出して見た所で何になりました。

直ぐ捕まるのに決って居ますし、其の後の運命の恐ろしさを考えた途端、全身の力も抜けてしまい、後向いて跪まずいた私は両手を後手に重ねてうなだれました。

「そんなに力んでたら縛り難いじゃないの。捕縄を掛けられたことないの？ もっと体の力を抜いて、柔かくしてなくちゃ駄目だよ。折角面倒な本縄を掛けてやってるのに、そんなんじゃ、きつく締め上げてしまうわよ。そら立って。」

ヒシヒシと肌身に喰込む捕縄の味を、じっと味わっている私の尻

をハイヒールの先が蹴り上げます。

「少し脚をひろげて。」

腰骨の内側辺りから、それぞれ鼠蹊線に沿って潜った二条宛の捕縄が一つに結ばれ、集まった四条のうちの二条がグイと上方に回って腰縄の真後ろに結ばれ、更に上に伸びて、首縄に吊った両手首に結ばれました。縄の中央の結び目から垂れた二条の捕縄が、グイグイと前後にゆすぶられ、今迄の冷い鎖縛とは異った、より鋭い痛みと屈辱感に私は呻いて身もだえしました。

「ほんとにお上手なこと。そんな縄の掛け方なんか、私とても覚えられないわ。けど鼻環に縄をおつけになりますんの？」

「ホホホホ。此頃はね、ここにつけた縄や鎖で以て引き立てるのが流行ってるんですよ。そりゃ正規には鼻環につけることになっては居ますけど。」

「あら、錠前、もって来てないんですの？」

「いえ、それだけは持って来てますよ。」

婦人看守はポケットから小さな錠を取り出して、ニコリと笑いました。

「男の囚人なんかには、余計なものが要って面倒ですわ。」

「あら、ちよっと見せて下さらない？ 新式ですわね。これなら大きさも自由に加減できるし、絶対に外れたりしないですわね。」

婦人看守は手早く錠を装着してしまいました。化粧品の香りを強く感じます。両膝がゆるく縛られました。

「じゃ失礼致しますわ。おいで。」

手を洗った婦人看守は前方から曳き縄をグッと引張りました。門を出る時、思わず奥様の方を振返った私はよろけて倒れてしまい、

容赦なく引かれる曳縄のみじめさに身をもだえしました。奥様の含み笑いが背後に聞えました。

本式に捕縄をかけられた恰好は矢張り珍らしいと見え、人々はジロジロ眺めますし、きつく掛けられた捕縄の切ない苦痛に喘ぎ喘ぎ曳かれて居ますと、私の両脚の間から伸びた曳縄を右手に握って目の前二米をさっさと歩かれる婦人看守様のピンクのタイトスカートに包まれた腰のあたりの線の動きが本当に悩ましく切なくて、我が身を此の様に縛り上げてしまった彼女が恨めしく堪りませんでした。駅のホームで列車を待つて居る間は、跪まずかされ、後へ回した曳縄を短く握られ、額を床に摺り付けさせられました。

「恥かしいの？ 鼻環をつけられてから何年になるのさ。」

列車が着いて立上る時、曳き縄を乱暴にしゃくり上げられ、悲鳴と共に倒れ伏して人々に嘲笑された私は、分際も忘れて体中を赤くしてしまいました。

車内は空いて居り、私は座席の間の床に正座して平伏します。

「もっと頭を下げるのよ。そうそう。」

シートの高さまで平らにする事を命じられた私の背に婦人看守の両足が載せられました。曳き縄はどこかに結びつけられた様です。

「少しお縄をゆるめて下さいまし。お慈悲でございますから……」

肩は抜ける様にだるく、肘から先は痺れ切ってしまい、首縄と股縄の苦しさに堪え兼ねた私は必死に哀願しましたが、雑誌にでも読み耽る彼女は全然相手にもしてくれず、身動きしたからと云って脇腹や尻を振り上げるのでした。

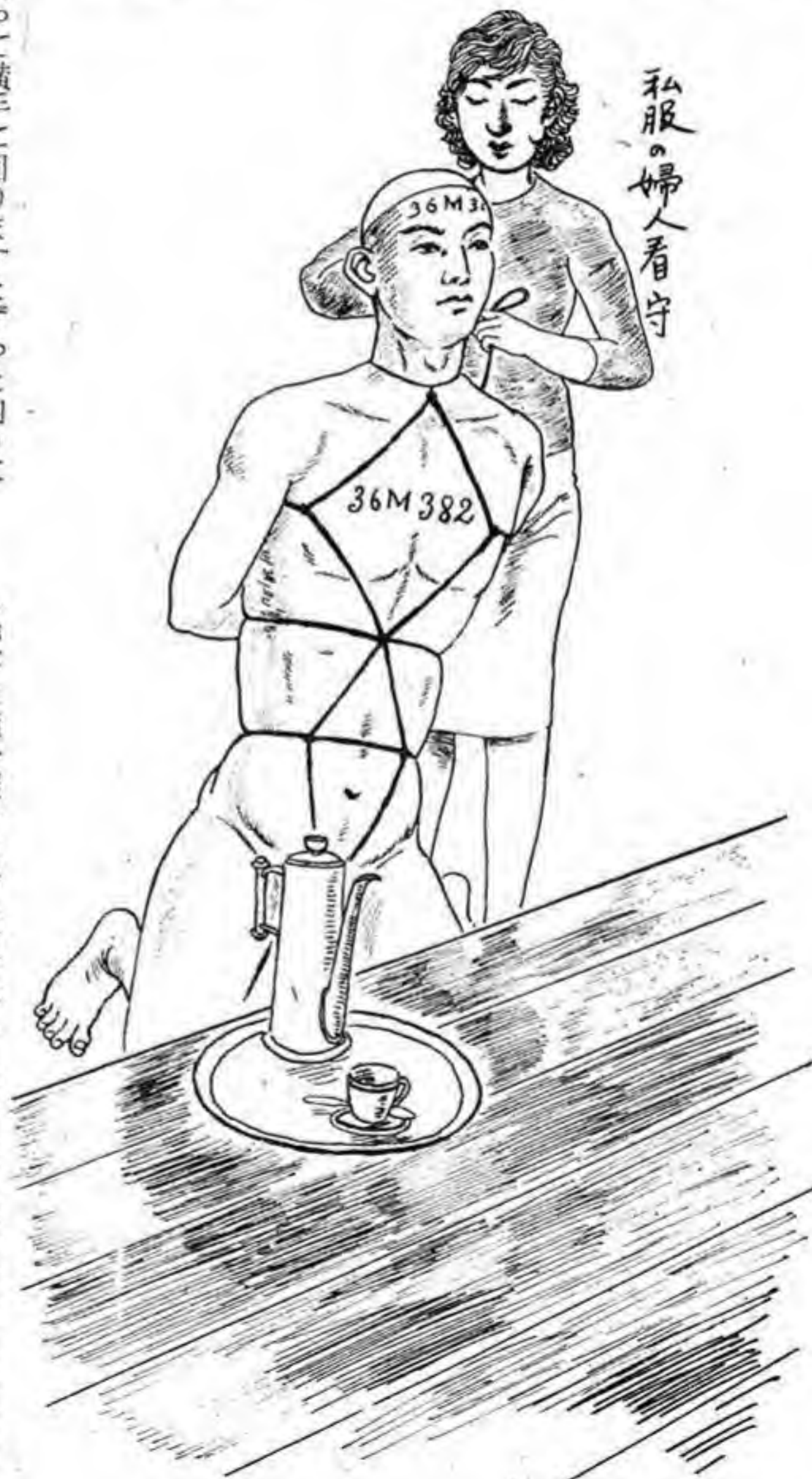
「ど、どこへ繋がれるのでしょうか？ 奥様は、いえ御主人様はどの位のおつもりなんでしょうか？」

「うるさいわねえ。申込みは一応六カ月になってるわ。場所は拘留所よ。黙っといで。」

三時間程の後、私の背中の上で靴をはいた婦人看守は、通路に立って曳縄を引張り上げ、立つ様に命じましたが、中々立ち上ることが出来ませんでした。

保管奴隷(一)

地方の或る都市の停車場に降りた私は、今度は後から婦人看守の縄尻に追われ、雑踏の中を引立てられました。いかめしい裁判所の建物が見え、高いコンクリートの塀に沿って横手に回りますとずっと向うに拘留所の門がそびえて居ました。門の近くで縄尻を持った婦人看守は立ち止まりました。塀の際に沿って道端に五十センチ位の幅の溝がグルリと回って居り、その溝の中で一人の男がうごめいて居ます。鼻環、首環、腋鎖、そして足錠を嵌められた既決囚でした。鉄の腰枷、鎖鐐を施され、両足首には一個宛の重そうな鉄丸を結びつけられて居ます。前でキツチリと揃えた両手首には8字型の手錠をガツチリと嵌められ、一本の棒にされた両手に一つの小さなスコップを握って溝の泥土を道の上に掬い上げて居るのでした。鎖帯の中心か



私服の婦人看守

ら伸びた鎖を握った婦人看守が一人、片手に鞭を持って道傍に立ち制服姿で監視して居ます。

「只今あ。」

私を曳く婦人看守が声を掛けました。

「あら、お帰りなさい。それ何? 一体」

「これね、保管奴隷よ。炭坑町から引張って来たの。帰り道から早々に勤務させられちゃったわ。」

「ホホホ。それは御苦労さん。私もね、此奴の御陰で朝から、ずっと立ち詰めなのよ。」

「どうしたの？ 其奴」

「此奴ね。小金持の与太息子だったのよ。仕事なんかしたことないのね、遊んでばかり居てさ。だから、ちよっととき使うと、すぐにダラダラするのよ。五日程前に鼻環つけてやったんだけど、兎も角すぐ顎を出してフーフー云うのよ。だからさ、今日は朝から付き切りでね、労役ってものがどう云う風なもんだか教えてやってるの。」

ホラ、ね、よだれなんか流してだらしないったらないのよ。」

「ホホホ、それは又大変ねえ。大分弱ってる様ね。お前はそこへ坐っておいで」

私は向脛を蹴られて道ばたに正坐しました。早いとこ曳かれるべき所へ連れて行かれて、此の苦しい捕縄を解いて馴れた鉄のいましめを受け度いと思うのですが仕方ありません。首縄は益々締めまり、股縄はすれてひりひりひりと痛く、両腕の感覚は夙に失われていました。

「こらッ。休んでいいと誰がいったの？」

ピシッピシッと、無数の鞭痕のむごたらしい背や脇腹の辺りに鋭い鞭が鳴り、哀れな囚人は弱々しい悲鳴を洩らして、泥の上に突伏していた顔を上げ、ノロノロと両手を揃えたまま動かししました。

「お慈悲です。少し、ほんの少しだけ休ませて下さいまし。もう朝からずっと……」

溝の中でうごめく囚人はかすれ声で哀願しました。返答は鞭の一撃でした。

「其の鞭、鋼線入の鞭なのね。狭い所で狙って打つのににはそれに限るわ。あら、嵌口具噛ませてないのね。」

「ええ、わざと嵌めてないのよ。悲しそうな声で泣いたり喚いたり

して面白いんだもん。もう今じや碌々声も出ない様だけど、始めのうちはいろんなこといって赦しを乞うの。やれ、足の鉄丸だけは取ってくれとか鎖褌が痛いとかいってね。最初は手錠だって普通のだったのよ。それが手錠の鎖を長くして呉れとか、外して呉れたらよく働けるのとか生意気なの。だから8字型のメガネ手錠嵌めて両手を棒にしてやったのよ。」

「フフフで朝から飲まず食わずなのね。」

「モチよ。先刻から水溜りを吸ってるわ。」

「じゃ、私の見込みでは、あと先ず一時間でブツ倒れるわね。」

「ホホホ。けど此奴、案外しぶとい体してるのよ。」

囚人は両足の鉄丸を溝の横のコンクリートにゴロゴロと響かせて少し進みます。鎖褌の曳き鎖を握った婦人看守もゆっくりと、一、二歩動きました。両手をガッシリと捉えてビクともしないメガネ手錠の痛さに痺れているのでしょうか、泥土を道路の上にすくい上げようとして、囚人はスコップを取落しました。鎖褌が手荒くしやくられ尻に鞭が飛びました。

「此奴、ほんとにしぶといのよ。最初のうちは鞭を当てればキリキリ働いてたの。其のうちに鞭を当てても倒れたままで動かないのよ。余り早く参ってしまったので念の為に尻に焼鑊を当ててやったの。そしたら飛び上って動き出すじやないのさ、欺そうとした訳ね。ほんとに腹が立って、それから全然手加減なしよ。さっきも三回目の鑊を当ててやったわ。ホラ、鞭でつぶれてるけど火ぶくれの痕があるでしょ。けど、鑊を当てても動き出すのが段々おそくなってるわね。」

彼女は鞭を脇に抱えて煙草に火をつけました。

「あなた。勤務中でしょ。見付かるとうるさいわよ。」

「フッフ、ずっとどぶの臭いを我慢してるのよ。タバコ位吸わなきゃ。ところで休暇は楽しかった？」

二人の婦人は私達の苦しみ等全く眼中になく、暫く駄弁り合いました。

「お立ち!!」

眼をつぶって正座していた私の曳縄が、思い切り引上げられました。捕縄の輝の真中の結び目がずるっと後へ動き、私は腰を浮かせたまま上体をのたうたせて呻きます。

「ホホホ。ちよつと痛かったようね。この捕縄大分汚れたわね。大分使ったしね。もう捨てようかしら。これッ膝でお歩き。」

いざって門を入った私は執行課に曳かれました。いかめしい拘置所の建物や看守達の制服姿を見ますと、恐ろしさに全身がブルブルと震えて来ました。課長の前で正坐平伏させられます。

「課長さん、どこへ行ったの？ あら会議？ほんとかしら。まあいいわ。ハイ、これ、こ奴の書類よ。私着替えて来るから頼みますわ。」

苦しい捕縄は未だ解いて貰えません。喘ぎ喘ぎ、額を床にすりつけて苦しんでいますと近くの席から一人の職員が立って来ました。「ずい分きつく縛り上げたものね。お前苦しいだろう。起きていいよ。解いてやろうかね。」

「仰ぎ見ますと髪に白いものが混った婦人でした。手際よく捕縄を解いてくれます。痛い股縄も、苦しい首縄も解かれました。」

「少し休んで、手が動くようになったら、その股縄の結び目を解くのよ。いい？ あの人ずい分ときついねえ。どう？ 楽になった

だろう？」

有難涙がホロホロとこぼれ、胸が詰って声が出ませんので手を合わせて拝もうと致しましたが、全然手が動きませんでした。

「給仕さん。そこらに手錠ない？ これに嵌めという頂戴な。前だね」

未だ髪を編んで両頬に垂らした少女がやって来て、馴れぬ手付きで、それでも少し面白そうに私の両手に手錠を嵌めてしまいました。

「おや、折角嵌めてやったのに、お礼をいわないの？」
腹が立って情けなくなりました。

漸く動かせるようになった手で、股縄を拾い上げ、久し振りの第一種手錠の固さを両手首に味わいながら、固い結び目を解き始めました。捕縄の其の部分の辺りは、薄赤く血が滲んでいました。

「ああ、よく寝たよ。矢張り徹夜の麻雀はいかな。」

若い課長が上衣のボタンをはめながら現われました。あわててひれ伏した私は又、長いこと放つとかれた末、漸く声が掛りました。

「さてと、こ奴か。おい三六Mの二八二五号。当分ここで保管してやる。キリキリ働け。」

それでおしまいです。眼障りだというので、室の隅に追われ、担当の看守を待ちました。私を曳いて来た婦人看守が、よくアイロンの利いた制服に着替えて現われました。

「あら、捕縄解いたのは誰？ あ、係長さんなの。相変らずお優しいのね。ホホホ。あら皮肉じゃありませんのよ。さあ、おいで。」

婦人看守が私の鼻環に革紐の金具をつけようとした時、さっき堀の所で会った婦人看守が鞭を宙で振り振りやって来ました。

「とうとうつぶれちゃったわよ。今度は、いくら顰当ても駄目。」

白眼剥いてガククリしてるのよ。」

彼女は大声で云いながら、執行課を通り抜けて戒護課へ行きまし
た。引返して来た彼女は、

「ちよっと其の奴隷を貸してよ。病院へ運ぶんだから。」

私の初労役は半死半生の囚人を病院へ運ぶことでした。鼻環の革
紐を取られたまま溝の中の囚人を引き上げて、泥だらけの体を消火
栓の所で洗ってやり、グッタリしたのを肩に担いで運んでやったの
でしたが、全身の鞭痕は兎も角、尻や両腿の焼爇の痕は、本当に見
るも無残でした。其の後、二カ月近く経った頃、彼の姿をチラと見掛



けましたが、看守の御気に召すようおそれおののきながらひたすら苦役に服している様子が遠くからでもハッキリとうかがえたことでした。

彼を運んだ私は曳かれて帰り、既決囚と同様の処理を体接受了。

重い第三種手錠足錠の鉄枷の

重量感と冷たさに体が引緊まるように感じました。肌に赤く刷られた八〇三号の番号の横に、Sの字が黒く刷り込まれます。保管奴隷の記号なのでしょう。監房区画の中に入る時には昔の記憶が甦って来て、膝の力が抜けガクガクしてしまいました。鉄とコンクリートの威圧感は、囚われの身を心の底から打ちひしいてしまいます。「奴隷三六M二八二五号。八〇三号としてここに繋がれて保管して頂きます。神妙に致しますから、お慈悲をかけて下さいまし。」中央監視台の看守に申告を済ませ、監房に蹴り込まれました。「お手数をかけました。ありがとうございます。」

「ほんとに邪魔な荷物だったわ。獄則は憶えてるだろうね。」

鞭と鎖錠と、そして思い出してもゾツとする懲戒の数々で骨身に叩き込まれた獄則のきびしさを、どうして忘れることが出来ましよう。

壁に向って正座し、後手錠の上体を真直ぐに起した私は、保管奴隷として拘置所の監房の夜を迎えたのでした。

保管 奴隷 (二)

正規の既決囚達の労役は朝のひとときだけですが、保管奴隷の私は朝から晩迄こき使われました。建物の外へ出ることは禁じられ、次々に命じられる雑用を懸命に済ませては、事務室の入口の所で坐って次の御用命を待つのでした。建物の外の労役の場合には必ず両足首に一箇宛の鉄丸を鎖で結びつけられました。保管奴隷は私だけでしたので、のべつ幕なしに追い立てられ、退出する男女の職員の方々の御世話を済ませ、出て行く人々を物悲しく見送った後は、鎖を引摺ってトボトボと自分の監房区画へと独りで帰らねばなりません。そのまま監内で過せる日も次第に少くなり、便利な奴が来たものと、当直の職員や看守の人達が夜おそく迄こき使い、なぶり物にして暇つぶしの対象にされるのでした。

其の頃は行刑当局においても鎖押の類を懲戒的に使用するようになったらしく、押の鎖が喰い込んだ姿の囚人も屢々見受けられました。或日、隣接した裁判所の正面玄関に近い広い廊下を、古靴を持って靴屋に急いでいますと、曲り角の所で社会の方の背にぶつかってしまいました。振向いた若い男は忽ち私を蹴倒します。嵌口具がなければ、凄いいんたを喰ったことでしょう。ひれ伏してお詫びを

し、痛みを堪えて起き上ってフト見ますと、二人の囚人が並んで床を這って磨いていました。

一人は女囚で、男女とも未だ新入りらしく鞭痕も少い中年の体つきでした。こんな有様は別段珍らしくもないのですが、裁判所に入りする人々が立ち止っては眺めて行くというのは、彼等が特に浅ましい恰好をさせられているからなのでした。手錠足錠の身を四つ這いになっていて、彼等の鼻環が鎖で繋ぎ合わされ、そして喰い込む鎖押の中央の金具も鎖で結ばれ合い、彼等の体は御互いに五寸と離れることが出来ません。二人の婦人看守が前後に立って鼻環の鎖の真中、押の繋ぎ鎖の中央に、捕縄をつけて引き摺り、追い立てていたのでした。社会の方々が繁く通るこの辺を、こんな風にして這いずらせるのは、おそらくは屈辱を与えるのが目的の懲罰だと思いました。

哀れな彼等は顔を伏せることも許されず、真すぐに立てた頭を少しでも伏せますと前に立った婦人看守が曳き縄を乱暴に引き上げます。吊られる鼻環に鼻はいびつに押しひしがれ、うつろに見開いた両眼からこぼれる涙は頬を伝い、喘ぐ口から涎れが垂れている嵌口具なしの彼等の顔には、曳き縄を引く若い婦人看守の両親にふさわしい位の年月が刻まれて居りました。吊り上げられる鼻の痛さに手錠の手が床から少しでも離れますと、尻の後ろに立った年かきの婦人看守の縄がグイとしやくられ、又、進み方が鈍くなると鞭が飛びます。

「これ、どうした奴等なの？」

通り掛りの婦人の問いに答えて

「こ奴等はね、娼婆では夫婦だったのよ。いい年をして、大きな子

供もあるというのに悪い事をして。何ね、収賄したのよ。」

「あーら。じゃ新聞に出てた何とか省の部長さんなのね。へーえ。ちよっと可哀想みたい。」

「ホホホ。しかし、こうなっちゃあ、もう部長も課長もないわ。私達はただ刑を執行してやって、罪を償わせてやるだけのことよ。こらッ又手を離すッ。馬鹿」

喰い込む鎖の痛さと、みじめな思いとに彼等は身をよじって呻きました。

「こ奴等ね。頭の中じゃ分ってるんだらうけど、つい生意気な仕草が出てしまうらしいのよ。だから今日はこうして恥かしい思いさせて、分際の程をちよっぴりと体に叩き込んでやってる訳なの。」

「ホホホ、そうお。あら、元部長令夫人の体が真赤だわ。矢張り恥かしいのね。私だったら舌嚙んで死んでしまっわ。」

自殺防止剤ノイロンを知らないんだな、この娘は。と私は考えながら傍らを、こそこそと通り抜けました。

ある日、保管奴隷の女が一匹送り送まれて来ました。三十半ばの小太りに太った白い体の女で、鞭痕も割りに少く乳房がとても大きく腰も豊かです。私も少し荷が軽くなり、夜分にかかわれることもなくなりました。勿論、口を利き合うことは出来ませんが、その女奴隷が折さえあれば私にすり寄って来るのには参りました。

今日も裏庭の草むしりを二人でやらされていましたが、避けるようにする私に、無理矢理しだれかかり、鼻をふくらませて流し目等するのです。そんな有様をとうとう発見されてしまいました。嘲笑と共に近づいた二人の中年の婦人看守の鞭と足蹴が飛び、女奴隷は悲鳴をあげて地べたに引っくり返りました。更に内股に二、三撃。

「この女、未だ性根が直らないのね。あなた、あの卑らしい恰好見た？」

「ホホホ、見たわよ。けどこ奴一体何なの？ 八〇四号か。あ、保管奴隷なのね。女は珍らしいわ。それで素姓は何なの？」

「密売春で捕まってブチ込まれた婦人矯正所を逃げ出して、又ぞろやってる所をショッ引かれて一年余り監獄にいてさ、奴隷に売られたのよ。うまいこと遊廓あたりで性に合ったこと、させられていたんだけど、お店の代が替ってね。廃業するっていうんでさ、織物工場に売られたのはいいけど、今迄が今迄でしょ。会社でも持て余してさ、少し叩き直してくれっていう訳なのよ。フフフ」

「けど中々男好きのするらしい体つきしてるわね。男が欲しくて堪らないって顔してるわ。あなた、どうするの？ 戒護課へそういつて絞め上げてしまっわ？」

地面に打ち伏して身をよじって居る八〇四号の白い腿の辺りを這っている蟻を見ながら、私はその場を離れようと思いました。

「これ。八〇三号。お前、この女の尻でも鞭打っておやりよ。鞭打って男から貰った方が嬉しそうだから。ホホホ。そら、鞭……」

十数年の間、鞭打たれぬ日とてない私は、音だけで痛みはひどくないような打ち方も知ってはいましたが、先刻から、寝た子を起して私を疼きに苦しめたこの白豚のような女奴隷が少し憎たらしかったので、両手首の重い手錠に反動をつけて、思い切り鞭打ってやったのでした。

「フフフ。八〇三号、もう赦しておやり。大分堪能したらしいからさ。それから……。窄衣でも着せてやろうかね。太ってるから締め応えがあるわ。」

丁度その時、二人の娘さんと、その後から一人の懲役囚が看守に曳かれて建物から出て来て、裏門の方へ行きました。鎖縛の曳き縄を後から引き絞られて、門の際で土下座した若い懲役囚の頭上に、何か辱かしの言葉でも投げたらしい娘さん達は、笑い合いながら門の外に消えました。

「あ、丁度いいじゃないの。ちよっとお、それ、ここへ連れて来てよ。」

婦人看守に呼ばれた年かきの看守はニヤニヤしながら二六二号囚を引摺って来ました。長身で引締まった体、浅黒い、彫りの深い顔は、今迄与えられていた屈辱のためか蒼ざめて涙を湛えています。

「その禪貸してよ。いいでしょう？」

本誌最近号在庫一覧

新装10月特大号 (35年10月号) 定価百四十円

グラビヤ——緊縛艶姿五十態

口絵物語——暗黒集団(四馬孝)

新装11月特大号 (35年11月号) 定価百四十円

画集——被虐の白い花びら

グラビヤ——夢の緊縛アルバム

新装12月特大号 (35年12月号) 定価百四十円

写真——恍惚女体ハイライト

画集——吊責遊び方教室

新年増大 (36年1月号) 定価百五十円

画集——新妻教育(こんな愛し方)

アルバム——表情とアツプセレ

クション。蛇倉の恐怖

新装二月増大 (36年2月号) 定価百五十円

絵物語——漸降りの男、グラビヤ

——美しきいましめ、珠玉の餌物

新装三月増大 (36年3月号) 定価百五十円

口絵写真、緊縛女体ポートレート特集、読者の声と通信、口絵

——美と幻想の構図

新装四月増大 (36年4月号) 定価百五十円

グラビヤ、華やかなモニタージ

ュ。口絵——異常光線の綾

新装五月増大 (36年5月号) 定価百五十円

口絵——吊責めの種々相

写真——甘美と清潔の構成

新装六月増大 (36年6月号) 定価百五十円

グラビヤ——清美と艶容の造形色刷口絵——美女力士の激突

新装七月増大 (36年7月号) 定価百五十円

グラビヤ——脱化と婉曲美の探究(写真による散文詩)口絵——傑作責画特選、倒錯絵巻選

新装八月増大 (36年8月号) 定価百五十円

グラビヤ——余韻の陰微と断面

緊縛フォト撮影の実際(亀甲縛りの一例)

新装九月増大 (36年9月号) 定価百五十円

グラビヤ——アブ・シン・アラカルト、緊縛フォト撮影の実際(高手小手縛りの一例)

新装一周年記念号(36年10月号) 定価二百円

告白特集——偏執記録の断層、

「いいよ。何ね、娘さん達が見たいというので、つけてやったんだから。おい立て。」

二六二号囚の腰から外された鎖縛は、すぐに八〇四号に締め施されました。金具でY字形につながった太い鎖です。流石の八〇四号も痛さと恥かしさに身もだえし、股の付根の鎖を撫でて、しやくり上げて泣いたようでした。

「そら、お前嬉しいだろう。ごらん、今迄あんな好い男が締めてたんだよ。ホホホ」

八〇四号は恨めしそうに婦人看守を見上げ顔をしかめて腰を屈め、鉄丸を引き摺り引き摺り草をむしり始めるのでした

(未完)

グラビヤ——SMMードの組写真集、緊縛フォト撮影の実際(ゴムの感触とフェチ好み)

新装十一月特大号(36年11月号) 定価二百円

特集——私を責めて下さい(雑踏の中の孤独)グラビヤ——緊縛

美の祭典、アブ双曲線

新装十二月特大号(36年12月号) 定価二百円

特集——読者通信の女性を縛る

(ひろ子緊縛記)緊縛フォト撮影の実際(前手縛りと縄抜けの一例)

新年特大号(37年1月号) 定価二百円

特集——カバー・ガールを縛る

グラビヤ——美しき緊縛

緊縛フォト撮影の実際(逆エビ縛りの一例)

話 秘 腹 切 体 女

鳥 舌 百 (もず)

造 章 井 石

あくまでも深い青さをたたえた空の中にくっきりと浮んだ八ヶ岳の頂きには、中秋の白い雲がふわりと薄くかかっていた。すみ通った空気がゆらいでさわやかに肌を撫で、草木は草いきれから解放されていきいきとして蘇り、葉末は露にぬれた。

斐崎の町はずれにある無量院の庭の草のしげみから若やいだ女の声がした。

「まあ、きれいだこと、藤袴がこんなに咲いて」

声の主は家中の佐田茂信の娘千代だった。

「どれ、拙者にも見せて下さい」

それに答えたのは書院の縁側に立った仙丸だった。仙丸は、三河国作手の城主奥平貞能の二男で、今川氏真に従っていた奥平は今川の勢力が衰えると甲斐の武田頼勝に鞍がえをし、仙丸、家老の日近但馬の娘阿和、その他三名を武田の許に人質として送って恭順の意を表した。強きに従うのは戦国のならいである。武田方では人質を分散し、仙丸は斐崎の無量院に預けられ、佐田茂信にその監督を命じた。

千代は仙丸の無聊をなぐさめにしばしば無量院を訪れたが、女にもまがう仙丸の美しさに何時しか想いを寄せるようになり、二人が

同じ年の十七才であることは仙丸にも親しみを感させた。

千代は藤袴を手折って仙丸に差出した。

「せっかく咲いているのに、折っては可哀そうではありませんか」

「本当にそうでした。仙丸さまはおやさしいのね。でも藤袴は仙丸さまのお傍へ来たいんですって」

二人は顔を見合せて笑った。

「千代どのは海を見たことがありますか」

「いいえ、だってこんな山国に生れたんですもの。海ってきれいでしょね」

「拙者はこんな青い空を見ていると遠州灘を思い出します。拙者が十才のとき母と一緒に母の生れ故郷の浜松庄へつれて行って貰いました。毎日のようにせがんで海辺へ行きました。青い海から白い波が絶え間なく磯に打寄せ、風のある日は沖まで波頭が立っていました。あの果しない海の向うには何があるのだろうか」と母にきいて母を困らせました。それから国へ帰ってから海が見えるかと山に登ってみました。海は見えませんでした。拙者はもう一度、海が見たい」

うっとりとして聞いていた千代は溜息をついて



「まア素敵、今度仙丸さまが海においでなさるときは、きつと千代も連れて行って下さいね。きつとですよ」

「でも拙者は人質の身、何時どうなるか自分

にもわかりません」

仙丸は淋しげに目を伏せた。

「どうかそんな淋しいことを仰有らないで。私も悲しくなります」

と肩を落した千代は、話をそらすかのように急に

「あつ虫、虫がー」

と叫んでうなじを押え

「あれ、中に入っていく」

と大仰にいうと背中の方に手を入れた。

「何処、何処に」

仙丸がのぞき込むと木の葉が一枚、さつき髪についたのが落ちたのであろう。

「なんだ虫ではありません、木の葉です。取って進めましょう」

仙丸の手が首筋にふれると千代はくすぐったげに体をくねらせ、軟いうぶ毛のはえたうなじから耳たばまで、ぼうつと赤くなった。

仙丸は

「何時までも仲よくしてくれますか」

と千代の手を取ると、千代も燃えるような目で

「何時までもきつと」

と仙丸の手をかたく握り返した。

千代が帰ると仙丸と付け人の乙羽と二人きりになった。百舌鳥がしきりに鳴いた。新しい贅の獲物でも得たのであろう。

「ああ百舌鳥。乙羽、百舌鳥が鳴いている」

「本当に。作手のお城でも、よく鳴いていましたねえ」

「母さまは、どうしていられるかしら」

「また近くお便りがありましょう。楽しみにしてお待ち遊ばせ。今宵は十六夜でお月さまは国のあたりからお昇りになりますよ。お供えをして拝みましょう」

「それがいい。そうしましょうね」

短い秋の日足ははやく、白い雲は赤みがかかり、八ヶ岳にも夕方の色が加ってきた。風もなくなり、訪れる人もない無量院はしんと静まりかえった。

そのしじまを破って慌しい足音が門の方から近付いてきたので、二人は思わず顔を見合せた。息せききった千代が裾を乱して駆けてくるのが木の間にぐれに見えた。乙羽は不吉な予感におそわれた。

奥平貞能は徳川家康に寝返りを打ち、滝山城に寄って武田の出勢を迎え、戦いがはじまったので、武田勝頼は直ちに増援の軍勢を差向けることになった。これが後の長篠の戦いの序口になり、やがては武田と織田、徳川連合軍との決戦にまで発展して行った。

甲州に送られていた奥平の人質のうち、塩山と甲府にいたものは、今日三河に向って送

られたから、日ならずして故郷の空を仰ぎながら殺されるであろう。韭崎へは早馬がきて出陣の用意が命じられ、仙丸たちは明日は送られるだろうとのことである。

父茂信からそれを聞くと千代は取るものも取りあえず、夢中で知らせにきたのだった。

「さア直ぐ逃げて下さい。三河に向ってはいゆえ一先ず信濃路をさして逃れ、時を待って下さい。私が途を知っています。今宵は幸い十六夜で月明りに山路も越せますから」

千代は息をはずませていった。乙羽は

「かくなりましてはもはや逃れ方なき御運の末と存じます。人質はお味方から見える所に引出され、磯けにかけられるのがならわし、逃げれば卑怯の汚名は消えますまい。何とぞかねてお覚悟の通り」

と手をついていうと、涙が頬に伝った。

「乙羽、私とて裸にされて磯けにかけられるような恥を受けたくありません。かねて覚悟はきめています。仙丸とて深く切腹しますから介錯を」

「それでこそ仙丸さまです。妾もお伴いたします。蕾のうちに散らねばならぬとは何の因果でございましょう。ただおいとしゅうて」
 そういつて乙羽はせきを切ったようにわっ

とばかり泣き伏した。傍で聞いている千代はびっくり仰天し

「いやです、仙丸さま。御切腹だなんて、そんなむごいこと、私はいやです」

「千代どの、それが悲しい武家の習いです。恥辱は死ぬより辛いことなのです。あなたも武士の娘ではありませんか。拙者の気持をわかって下さい」

「いやです、いやです。どうか死なないで」

千代は仙丸の膝にとりすがって駄々っ子のように泣きわめいた。

「さア討手のこぬうち、少しも早く」

乙羽は奥から刀と短刀を持ってきた仙丸を促した。

「千代どの。一年足らずの間、仲よくして下さい、私は嬉しく思います。私のなき後は御回向を頼みます。どんな有難いお経よりも千代どののお声が嬉しい」

千代は泣きぬれた顔を上げた。仙丸は言葉を続け

「これまで千代どのをあざむいていた心苦しさ、何とぞお許し下さい。今わの極みに何を隠しましょう、私は」

帯をといて胸を押開くと、そこには白い肌の中に腕を伏せたような両の乳房があった。

「あッ、仙丸さまは女―」

「そうです。仔細あって、男の子として育てられ、名も仙丸とされていました」

武田方からも仙丸を奥幸の次男として人質に要求されたので、そのまま、男になりすまして此地へきたのだった。付添う者も男では何かと困るので、柴山佐兵衛の後家の乙羽が付け人として伴をしてきた。

「千代さま、もうおさらば」

仙丸のせんは短刀を抜き放って構えた。

「知らなんだ仙丸さま。千代は仙丸さまを男とばかり思い込みお慕い申しておりました。

恥かしい。でも千代は仙丸さまが女でもお慕いする気持に交りはありません」

「嬉しう存じます。千代さま許して」

膝にとりすがった千代の手をつき放すと、せんは短刀をグサとばかり腹に突立てた。千代ははっとして目をつぶったが、恐る恐る薄目に明けたときには、せんはすでに引廻しはじめていた。一寸、二寸と手が右に動くにつれ、せんの下腹から血潮がしたたり落ちた。

「ああ、仙丸さまはどうとう」

と再び仙丸の膝にとりすがった。

だが千代は恐さを忘れて不思議な、言いようのない興奮にかられていった。じりじりと

引廻してゆくせんの白い手の動き、軟い肉が切裂かれて行く聞えない音、疵がまぐれて黄色い粒々の脂肪がはみ出し、その中から細く血がしぶき、こぼれ落ち、やがてせんの下腹をべっとりと赤く染め、短刀を持つ手を血ぬらして行くのを、一瞬たりとも見逃がすまじと、胸は締付けられるように早鐘を打ちながらも千代の瞳はせんの腹に吸付けられ、まばたきもしなかった。

五寸ほど引廻すと、せんは腹から短刀を引抜いて前に置き、手を合せた。

「乙羽、介錯を」

その声はさすがに苦しげだった。

「お見事なご切腹、天晴れでございます」

乙羽は刀を振上げて、ご免という声もろとも振下した。バサツと音がして、せんの首は前に落ちコロコロと転った。首の斬口からさまざまの勢で太い血柱がはね上り、天井まで飛散った。後から後から血を吹き上げながらその虹の柱は、弧を描きつつ前に傾いて行った。首のないせんの体が前に倒れた拍子にバシャツと血溜りはしぶきを上げた。全身の血をすっかり絞り切ったかのように首の斬り口からはもう血は噴出しなかったが、それでもまだ肉の間からだらだらとこぼれてきて、べ

っとりと固まりかけた。肉が空しくはせている間に頸の骨が白く見えた。

乙羽は介錯し終ると右膝をついて立て膝になり、胸を開くと刀の切先を鳩尾に当てがい力一ぱい突立てた。廿六才の乙羽には、若後家の豊婉な脂ののった肉体があった。刃は三寸ばかり突刺さり、乙羽の体は前にのめったが、急所を外れたらしく死ねなかった。苦痛をこらえて刀を引抜こうとしたが厚みのある肉は刀をしっかりと喰込んで抜けなかった。乙羽は呻りながら転っていたが、その声は次第に弱まって行った。

千代はせんの首が転ると、つと手を伸して首を取上げた。気味悪さも打忘れ、袖を引裂いて血を拭うとしっかりと抱きしめて頬ずりした。首は重く冷たかったが、その目はぱちりとみひらき、まだ生き生きとしていた。静かに首を下に置いた千代は血の海の中からせんの短刀を拾い上げて血のりを拭った。せんの腹を裂いた短刀には若い女の脂がぎらぎらと浮んでいる。切先をじっと見詰めている内に千代の目は異様にかがやき、目尻が釣上ってきた。

仙丸さまのお腹から吹上った血の美しさ、目をくらむような脂肪の黄色さ、抜けるよう



に白い仙丸さまのお肌、切腹は美しい、そんなことが断片的に入乱れ飛交うように千代の頭

をかすめて行った。血に酔った千代は仙丸と同じように自分の腹から血を流すこと以外に

は、もう何も考えなかった。

帯をとき腰紐をゆるめて胸をあけ下腹まで露わにすると、千代は短刀を握りしめてすくと立上り、柱の側に寄った。左手で短刀の切先を下腹に当てがい、柄頭を柱に押付けておいて右手を柱のうしろ側に廻して柱を抱くようにした千代の眼は一層つり上り血走っていた。うんと声をかけて柱を引寄せるようにし、思いきり体を柱に押つけた。

左の下腹に焼火箸を当てられたような痛みを感じたが、見ると刃の先端は五分ばかりしか腹に突刺さっておらず、焼刃の大部分は白い光を放ってまだ腹の外に残っていた。しまった、もっと深くと思うと、今度は腹が丸くふくらむほど力を入れて、体を思いきり強く柱にぶつけると、ブスツと大きな音がして、短刀は腹の中に二寸ばかり深く突刺さった。アーンと声を立てた千代の顔からは、さっと血の気が引いた。

思わず右手を柱から放すと、はずみで千代の体は、くるっと廻転して柱にもたれかかった。夕陽が最後の息づかいをするように赤々と障子を照し、千代の影をくっきりとその中に浮出させた。

カッと目をみひらいて怒ったような顔付き

になると、短刀に両手をかけてグツと右に引いた。ブリブリッと肉が切断される音が手に伝ってきたが、あまり痛くはなかった。千代は二、三遍大きく息をつくとき、また一寸引いた。疵口は仙丸のより大きく口を開けて、溢れるように血が吹出した。やっと臍の下一寸ぐらいの所まで引廻したが、もうそれきり何としても刃が血で滑り、手がふるえてどうにも動かすことができなくなってしまった。

切ない息使いとともに腹は波立ち、その響きは胸に伝って、ふくよかな乳房を揺り動かした。

息をする度に、かい出すようにゴポツ、ゴポツと音を立て、腹の中から溢れ出る血潮は千代の下腹をべっとりとあけに染め、たらたらと流れ落ちて行った。

ふと思ひ着くと、千代は短刀を腹に押付け、たまたま鋸を引くようにグイと少し引抜くと、今度はあまり抵抗もなく腹の肉はすっと切れた。次にはその反対に短刀を押しながら突込むと、今度も楽に切れた。それを二三回繰返すうちに、腹は六七寸ほど切開かれてしまった。疵は凸凹にうねりながらも、どうやら一文字になっていた。腹の中からプクツと何かふくれ上ってきたかと思うと、血にまみれた

大腸がドロツとはみ出し、喘いで息をするごとに、ぞろぞろと下に垂れて行った。

柱にもたれながら遂に立ち腹を切り終えた千代は、障子に指で血染めの穴跡を残しながら障子伝いに二三歩あゆむと、短刀はひとりでに腹から抜けて畳にグザツと斜に突刺さった。腹を押えて、体の重心を失ったように、ふらふらとせんの方に歩みかけた千代は裾を踏んでパツタリ倒れ、そのはずみに着物は片肌が肩から滑り落ちてしまった。這うようにして、じりじりとせんのなきがらにすり寄ると、腸は畳をひきずり、血はむき出しになった太腿から膝のあたりまで幾筋かの線を引いて流れ、一面に血を吸った裾はべったりと畳を雑巾がけでもするように引ずって行った。やっこの思いで、せんの首をかかえた千代はそれを胸にひしと抱き

「仙丸さま、もう離れません」

そう言うつもりだったが、急に目の前が暗くなり、そのまま意識を失って血の海の中に身を投げるがごとくどっと倒れ伏した。

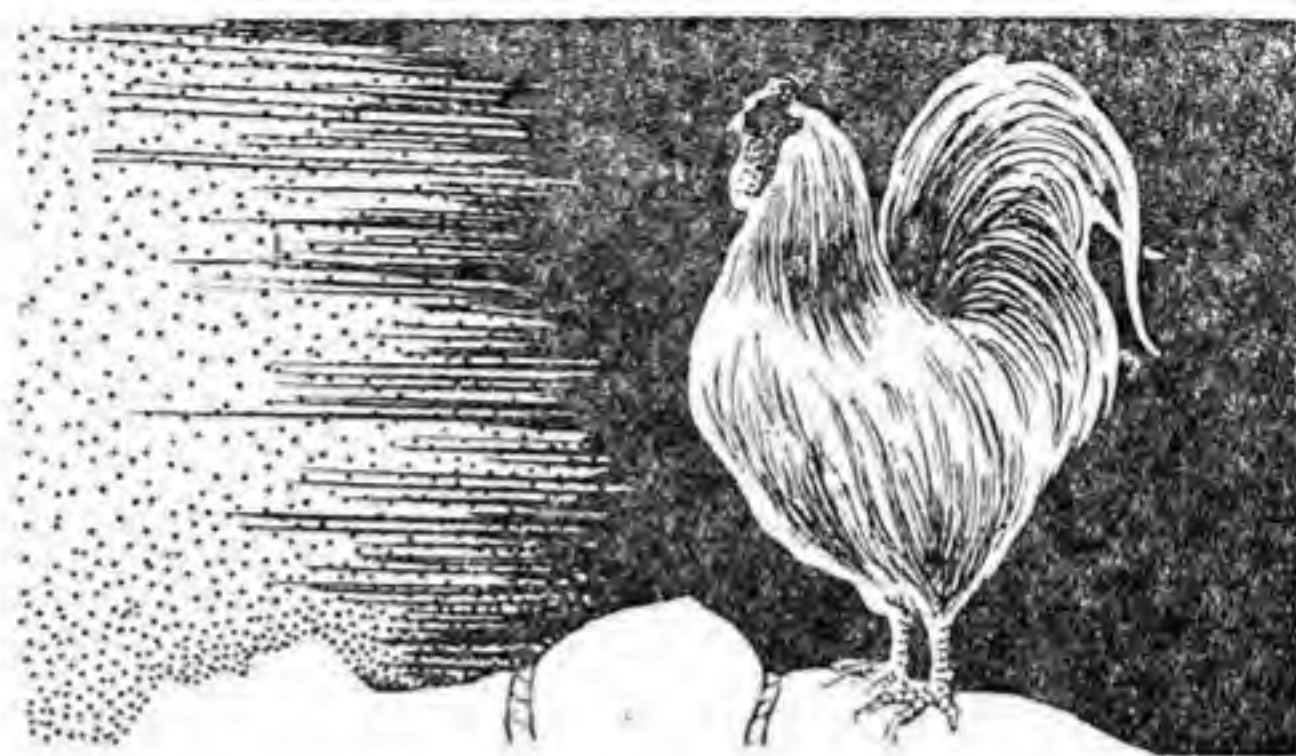
百舌がまた鳴いた。たそがれの迫った灰色の空気を鋭くふるわせながら、八ヶ岳の方に消えて行った。

せんの死を知った家中は大騒ぎになった。殊に仙丸が女であったことに對し、たばかって人質をよこしたと激昂した重臣たちは、かばねを三河の国に引出してはた斬りにせよと強硬に主張した。はた斬りとは生きている者なら裸にして磔柱に縛りつけ、四肢の付け根を縛り出血を防いでおいて、上肢は腕の付け根から、下肢は股の付け根から切断し、胴を輪切りに切放し、最後に首を切落すという惨忍極る刑である。

しかし戦の仕度に忙しい家中は屍体を三河まで運ぶ余裕がないので、葦崎の城下で仙丸の首に竹を刺して胴をつなぎ、衣服をはぎとり、はた斬りを行って出陣の血祭りにした。すきとおるほど蒼白い若い娘の腹に残る切腹の跡の生ま生ましさ、その直ぐ上の臍のあたりから真二つに切断されて落ちて行く胴体のいたいたしさに、なみいる群衆の中からはすすり泣きと、念仏の聲が段々とたかまってきた。

この日も百舌鳥がしきりに鳴いた。時に天正元年癸酉九月廿一日であった。

(おわり)



提案

私は訴える

高崎 勉

本誌が昔の、どちらかと云えば煽情的な興味と娯楽本位から一步も二歩も前進して急速で脱皮しつつある事は、号を追って感じられ、此の事はまことに当を得た態度というべきであります。

それにしても時代の変化には今更の如く驚かされます。本誌も此の時代と云うものの動きに沿って行かねば、その存続すら危いでしょう。どんなに強情我慢でも、どんなに猛烈な反逆者でも末だ曾って時代に逆らって無事

に命を完うし得た者は無く、栄えたためしはありません。如何なる天才も時代に刃向かつては、置き去りを喰うか亡ぼされるのがおちであります。

それにひきかえ、時代の流れにうまくさお立て、時代の流れのままにうまく舵を操る者は必ずそれ相当に栄えて行きます。これは賢い処世術で、平凡ではあるが本誌がこういう編集方針になって行かれるのは、私も大賛成であります。我が愛する本誌が時代に逆らわ

ず、平和な落ちついたアブ雑誌として栄えて行く事は、何という安心感の伴う嬉しい事でしょう。

処で、本誌編集者に私が訴えたいのは、何故本誌は今まで探偵小説を採り上げなかったかと云う事です。ずっと昔、本誌が未だ大判時代には、少しではありましたが、探偵小説に似たものが載っていました。最近はその片リンも無いのですが、探偵小説を新しい編集方針のもとに採り上げて見では如何でしょうか。探偵小説とサジズム、マゾヒズム、アブノーマルの関係は案外深い所につながっています。この関係を研究すればする程、その深いつながりに驚かされます。例えば江戸川乱歩の「虫」「いも虫」のようなものや、横溝正史の「悪魔が来たりて笛を吹く」のようなものはアブノーマルを取り扱って我々を瞠目させてしまいました。本誌がこういう異色探偵物に目をつけないのは間違っています。アブ・ファンをうならせるような傑作は探偵小説の中には実に多いのです。是非採り上げられるよう切望致します。しかし、本誌が探偵雑誌になっては大変です。あくまでも、それは一部分として、アブ研究資料として掲載する程度でよいと思います。尚、参考までにつけ加えますと、本誌の採り上げるべき探偵小説の種類は次のようなものです。

一、陰 獣（江戸川乱歩）

乱歩の持味と構想力を極度に發揮している作品で、あらゆる意味での代表作ですが、女主人公山田静子に依頼されて、彼女に執念深くつきまとう脅迫者の正体をあばこうとする『私』が、彼女とのただれ切った、悪夢のようないびきの末、サジズムに陶醉するという作品です。

二、いも虫（江戸川乱歩）

両手両足は殆ど根本から切断され、僅かにふくれ上った肉塊となって、その痕跡を止どめているだけ。しかも五官のうち、視覚と触覚とだけしか残らない畸形の肉独楽になった廃兵の夫がいまわしき、みにくさの故に、どんな他の対象物よりも、麻薬のように妻の情慾をそゝり、彼女の神経をしびれさせる力を持つという、二匹の獣に他ならない激しい性愛の描写は圧倒的で、面をそむけさせる程です。この異常で奇怪な肉慾のガキの斗争絵巻は、氏一流の恐怖を掘り下げて余す所のない稀代の傑作です。

三、老人と看護の娘（木々高太郎）

殆ど動けぬ老人の身の廻りの世話にやとわれた娘が老人の要求に従って、その体に跨り首をしめると呼吸が止まってしまふ。娘はあわてる、その時の状況を検事が調べ、大心地博士の意見を徴すると、老人が安楽死の目的を達せんが為の手段で、首をしめていた時間が其の時に限って長かったのは少女が忘我の

境にあった為だという解釈に落ちつきます。四、少女の臂に礼する男（木々高太郎）

海辺の小屋で少女のうしろ向きに下半身をすっかりまくり上げた尻に向かって幾度も礼をしている青年を巡査が発見する。人妻を愛している青年は、その女より他にいゝ女がないと確信し、永遠に縛られていゝと信ずるのです。それで僅かな金で肌を許す少女に接して、心の解放が得られます。今度こそ縛られずに、その昔の女を愛する事が出来るという自信を得、少女によって救われたのだからその象徴におじぎをしたのが為でした。

木々高太郎には江戸川乱歩と全然違った味があつて、複雑な情緒を一見エロティックな素材にからませて、そこに新しいモラルを見出だそうとする勇敢な試みが何時も感じられます。で、こういう大胆な筆法は完全に読者のドギモを抜くのです。こゝには、ほのかなエロティシズムがそよいでいるのではありません。前者は悲しい人間の生理によって心の底から愛している老人を手にかける運命の残酷、非情さを叙しており、後者は無期徒刑囚と自覚する青年が、永遠に解放してくれた恩人のうすよごれた体部に感激のおじぎをくり返すという残酷なほどの表現は、氏の構想に於いて、あらかじめ設定された重要なキィをなすものでした。

此のように例を挙げれば殆ど無限です。少

くとも毎月一篇位は、すぐれた探偵小説を掲載し、細かな分析を試みられては如何でしょうか。

次に私は読者諸兄姉に、訴えたいと思います。諸兄姉はぜひ分、筆がお達者です。その達筆で開眼ものをどしどし發表して頂きたいのです。『開眼もの』というのは、その事にまるで無理解、無智である読者の為に親切に平易に、わかりやすく、其の動機、過程を解説するので。例えば土俵四股平氏の「女斗美開眼」というような読物です。その他、私達がどう考えてもわからない切腹ものや浣腸ものです。何故あゝいう残酷ものや汚ならしなものに魅力があるのか、不可解の読者が多いのです。そういう読者の為に是非解説して欲しいのです。本誌の旧号に「緊縛への誘導」という読物がありました。が、あゝいうものは緊縛への興味の無い読者にも、その真意を理解させる力があつて愉快です。開眼ものは本誌のような文獻誌にふさわしい読物だと思います。

沼正三氏の空想マゾ小説のようなものは全く新しい試みとして大いに共鳴致しました。

本誌の悦虐記事や読物を見て、世の人々は誤解する事があります。甚だしいのになると此の悦虐記事や読物が風俗を壊乱するおそれありと考へて爪弾きする事があります。之はとんでもない偏見です。悦虐心理は万人誰の

心にも潜んでいる秘願です。愛そのものが悦虐なのです。只、それが色々変貌して現れるに過ぎません。

「虐」について、少し考えて見ますと面白いものにぶつかります。人々は死を恐れ、いよいよ乍ら人の死（自殺、情死、殺人、戦争、斗争、勝負、等々）に異常な興味を有するものです。文学的作品や演劇、映画から、こういうものを一切抜いてしまったら定めし味気ないものになってしまう事でしょう。「悦虐」を嫌いだといふ乍らも、こういった事にまるで興味が無いなどとはいえないでしょう。ですから万人誰でも悦虐心理は多かれ少なかれ持っているのです。しかも、時には死を選ぶ人さえあります。死によって無機物に還元しはじめて安定したいという、死の願望に強く動かされる人、まさに悦虐でなくて何でしょうか。禁慾も悦虐の一種です。殉教、しくじ

り故意の事故、いたずら、病氣への逃避、自虐的現象やアルコール中毒、麻薬中毒、反社会的行為、犯罪、等々、すべて悦虐心理のあらわれです。

つまり、生き、愛し、築き、創り上げる事に喜びを持ちたいと望み乍ら、人間は心の奥底に破壊し、摩擦し、虚無に葬ってしまおうとする「死の本能」がある為、絶えずこの二つの二大本能が相斗い、人間を妥協した形にさせて生きて行くのです。時には死の本能に負けてしまう事もあります。悦虐本能を無事に、最も無害に、完全に発散させる方法は大きく分けて二つあります。一つは結婚して健全な生活を営む事。一つは悦虐専門誌によって内攻せるもののハケ口を見出す事です。

健全で真面目な悦虐専門誌は人間の持っている悦虐心理の最も安全なハケ口で、爆発せんとする悦虐本能の安全弁の役目を果たして

呉れます。本当をいえば雑誌の活字に現れた残酷等たかが知れているのです。何も目の色を変えて大騒ぎする事はないのです。水爆一発の死の灰の被害を思えば、一冊の雑誌の活字に驚くより、もつと世の中には残酷きわまる事件が毎日発生しているのです。交通事故がそうです。

それから火事という大破壊、之も活字の破壊どころではありません。更に酒の害！麻薬の害！煙草の害！これ等の目に見えぬ徐々にむしばんでくる恐るべき害毒に比すれば、本誌一冊が如何に凄惨な描写をなそうとも、その影響等は本当にたかの知れたものなのです。雑誌等に騒ぎ立てる方がよほどアブノーマルです。しかも人間の悦虐本能は実行性に乏しいのです。空想上では、どんなに物凄く残酷行為を夢見ても、之を実行に移すのは大抵の人は殆ど不可能なのです。「鶏が鳴くから夜が明ける」という諺があります。之は原因と結果を間違えてはいけないという戒めの諺です。鶏が鳴くから夜が明けるのではなく、夜が明けるから鶏が鳴くのです。世の中が悪くなったのとは本誌の記事とは実は余り関係がないのです。むしろ安全弁の役割を果たす雑誌や書籍がすっかり姿を消した時こそ危険なのです。煽情的読物を見て、よし、俺も一つやつて見ようと本当に実行する人は万人の中に一人もいないでしょう。

洋画の縛り映画

東 山 映 史



最近、洋画にショッキングな縛り映画、特に拷問映画などが多く、愛好者を喜ばせている。

まず「恐怖の振子」では身の毛もよだつような地下の拷問室を展開する。「鉄の処女」「引き伸ばし機」「ヤキゴテをあてる

釜」などが、一寸見ただけでも種々の中世紀の宗教裁判に見るような拷問器具が蜘蛛の巣のはたっただけの地下室の中に並べられている。エドガア・アラン・ポーの「穴と振子」と「早過ぎた埋葬」を映画化した恐怖もの。メディナ家の先代、残虐で知られたセバスチャンの拷問室が何回となく現れる。主人公ニコラス（ピンセット・プライス）は、幼い時、父が自分の母親と恋人の不義密通を発見して、この拷問室で虐殺されるのを目の前で見せつけられ、それから変人になる。この母親が拷問にかけられ、両手を壁に鉄輪でつなぎとめられてから、生きたまま殺される。そのシーンはショッキングだ。そしてニコラスの妻エリザベス（バアバラ・ステイル）が死ぬが死んだエリザベス以外に弾き手のない楽器が鳴りわたる。いよいよクライマックス。ニコラスはエリザベスの声に招き寄せられて墓所へ行き、生前のままの妻の姿を見て驚く。逃げるニコラスをエリザベスは拷問室の一隅に押しこめる。そこへ医者レオンが現れる。かつてエリザベスと深い仲のレオンは、彼女が変質者ニコラスのため、

生き埋めにされた直後を救い出し、復讐の機会をうかがっていたのだ。ニコラスは余りのショックに発狂し、同時に父のいまわしい思い出と混同し、エリザベスを「鉄の処女」の中に生きたままとじこめ、物音にかけつけたフランスを振子の拷問台の上にくくりつける。振子の先の鋭い牙が空を切ってゆれ、次第に頭上に迫ってくる。迫力がある。猿ぐつわをされたエリザベスが鉄の処女の中から恐怖の目を見はっているシーンも凄い。

「髑髏砦の血斗」海洋活劇だが、ダリエン王朝の姫カルメン（S・ロペス）はラストで、悪人パナマ総督モンテリマル侯に捕えられ、遂に髑髏砦で、拷問にかけられる。吊り上げの拷問で、歯車の噛みあった機械で、吊り上げられ、ムチ打たれた。このシーンが長く、S・ロペスも痛々しいシーンを見せる。こういう所は邦画よりも洋画の方がずっと迫真的だ。最後に救われる事はわかっていても生々しい。

その他「死霊の町」では、鎖でヒロインをがっちり緊縛して火あぶりにするなど、邦画では見られない迫力がある。

あれば野蛮人か狂人です。しかも野蛮人も狂人も本を読まないから安心です。本誌のような特殊な雑誌を読むのは、可成りの知識層です。インテリは実行力に乏しいものです。憶病でおっくうがりで、その点まことに安全なものです。本誌が、例えば如何に赤裸々な記事や読物を載せても、驚くに足らないと私は思います。

本誌を愛する私は、本誌を讃美し、弁護するだけではないかなと思います。お小言も少しだけ申し上げたいのです。本誌が非常に多く採り上げるマゾ的読物の中に女王様とドレイの物語があります。マゾの人なら大抵一度はあこがれる女王様とドレイの関係。しかし高級なマゾ族はこの段階から一步も二歩も前進していません。もう、とうの昔に卒業したマゾ族も多いのです。我々ももっと高級な、もっと複雑なマゾ読物が欲しいと思います。何時までも女王様とドレイでもありません。その点、沼先生のマゾ読物は読みごたえがあります。

それから鞭でひっぱたくサジズム読物も少々食傷気味で、又かと思わせます。もっともっと複雑なサジズムの記事、告白もの、読物が欲しいと思います。それにはすぐれた探偵小説を大いに参考にすべきです。そこには非常に複雑なサジズム、マゾヒズムが潜んでいます。

さて、以上とりとめも無い事を色々述べたてましたが、本誌の発展と充実を祈って今回は之で擱筆します。

（おわり）

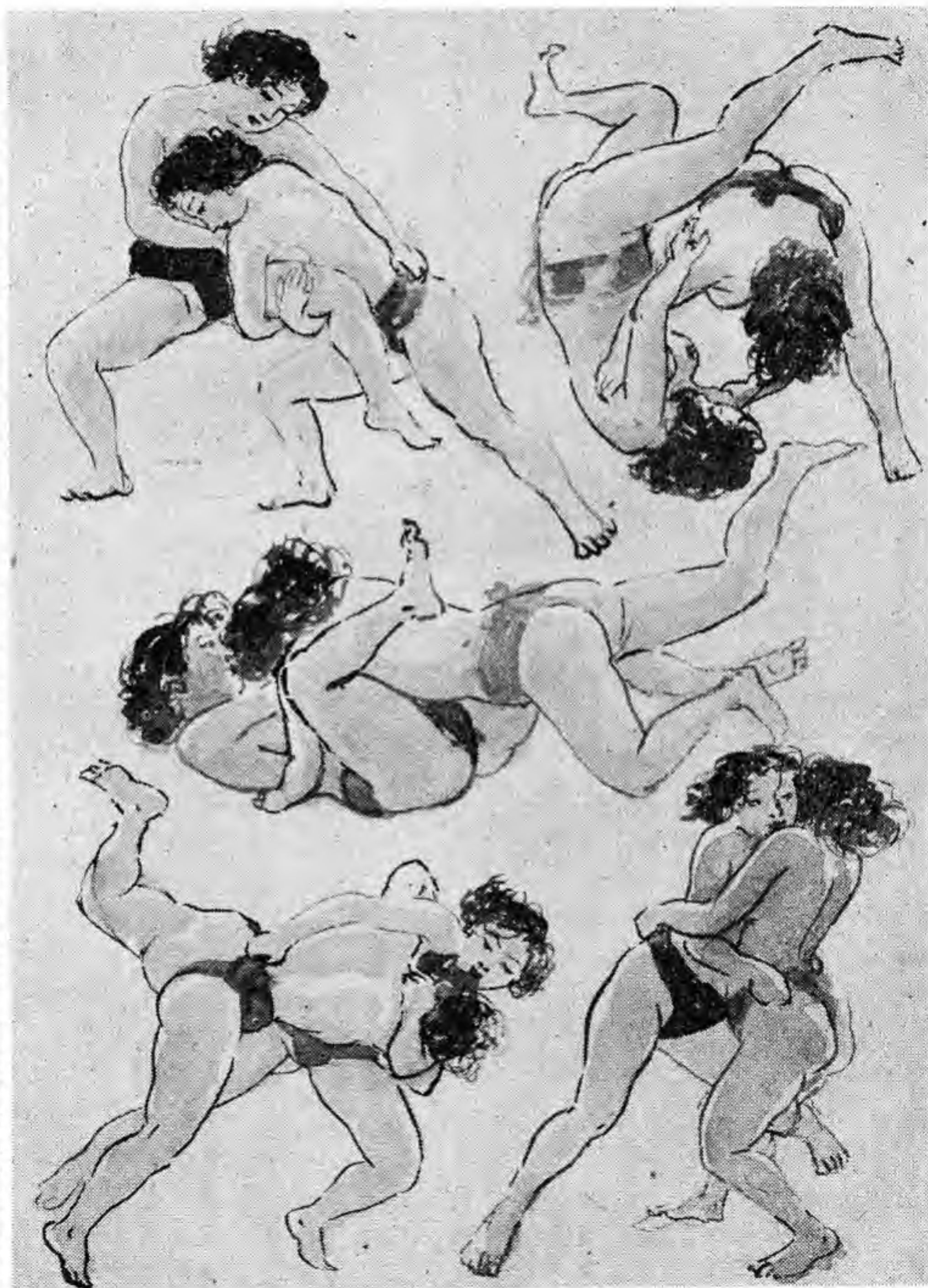
女斗美絵巻

シリーズ No. 8

芳 汗 淋 滴

提 供

雪 崎 京 人





新聞や雑誌では、大分以前から「悩みに答える」という相談欄がブームのような恰好で読者に歓迎されていたし、最近ではラジオまでが、直接電話で回答するという新手まで編み出されて、このところ大流行のようである。

編集部では興味本位のものばかりを選ぶのか、或は作り話であるのか問の方には、まことに珍妙なものがあって、私なんかも馬鹿らしいとは思いつつも、つい、その方に目をやってしまう。

この前も、人を待つ車の中で何の気なしにスイッチを入れたラジオから、淡谷のり子か或はカオル

何んとか女史だったかの回答者で十八の娘が三角関係で悩むという質問があった。電話だからウソや八百チヨウではないだろうが、これが本当だったら、十八の娘が中年女のような爛れた三角関係に悩むというのも、まことにアブノーマルであるが、いゝオバサンが真面目くさって電話で回答するのも全くノーマルでないと思った。

それから、気をつけて、新聞や雑誌を見ているのだが、私達がみても内容が性的にアブノーマルだといふのもあることはあるが、それよりも、こういうことを他人を煩して回答して貰わねばならな

い、というところに、私は非常なアブノーマルを感じた。

これは、現今の世相が新興宗教のハビコルのような素地を持っていて、と一脈相通するようにも思えるが、二十前後の若い者が占いやおミクジを信じた、中には病気に祈禱をして貰ったりして、何らの疑いを持たないといふことなどからして、なにかしら、そこに私なりのエキセントリックなものを感じる。

その点、本誌なんかは、まことにすっきりしていて、内容的に性的のアブノーマルを扱っていないが、好感が持てる。そしていささかもエキセントリックな感じを与えないところは立派である。

世の中には、政治でも経済でも或は人事の機構に於ても、常態でないものが多いし、現世相そのものが歪(いびつ)であるといふことも考えられる。そういった社会の(ひずみ)を明らかにすることがジャーナリズムの仕事なのだが「臭いものには蓋をしる」式の秘密主義と御都合主義とが、煩しているといふことが言える。

「悩みに答える」欄の回答者諸氏はどのような思っているのか、御高説を伺いたいものである。

―天声虬言―

○久米仙人は若い女の脂ののりきった白い脛を見て、神通力を失って天上から下界へ転落したそうだが、げに女の魅力というものは恐ろしいものだ。女の髪の毛は大象をも繋ぐとか、兼好法師も徒然草で云えり。

○夜目遠目傘の内、とかいって、余りはつきりせぬのが、女の美しさに於ても極上らしい。蛇の目の傘を透して見た日本女は滅法美しく見える。今という劇場のライトのようなものですな。

○ライトといえば、ヌード喫茶のあの暗黒に近い淡い光りの中に浮かび出た薄絹のコートだけの女体は夢幻的な美です。もっともバーなんかの薄暗いボックスで彼女を見染めても駄目ですな、昼間見たらお化けみたい。これは失礼。

○平安朝のお姫様、几帳のかげで淡い光りに、美しかったでしょうな、源氏の君ならずとも、こりゃ通いたくなりませう、全く。

○月の光で恋を語る。ねえ、脚でも腕でも、お腹でも。ましてお顔だったら尚更のこと、月の光ばかりで見ていると、この世の女体はなんと美しいことだろう。

悩みに答える

森中 伸

<論稿>

奇ク論争に寄せて

中村 清



この間からの、奇クの性格について、論争、大変に楽しく有益に拝見しました。

勿論、数ある読者の中には、東一郎氏（十二月号読者通信）やいぬい・ときお氏（十二月号奇クサロン）のように、奇クがエロであろうとなかろうと問題じゃない、ただ楽しくありさえすればいい、奇クはひたすら泥中の蓮たれ、というような御意見もありますし、わたくしにも其の気持は良く分るのですが、しかし、わたくしは矢張り、論争も時には大いに結構、と思つて居ります。

何故かと申しますと、奇クの世

界は、元々人間性の奥深い神秘に

発しているの、それに接すると

いうことは、物事を真面目に考える人にとっては、単純な喜びや楽しみだけでなく、同時に、迷い、疑い、悩み、苦しみ……などの交錯でもあり（この点については、十月号で中谷正夫氏が挙げられた五十幾つかの豊富な読者の声にもよく現われて居ります）、その結果、それらのことについての感想とか、意見とかも誌上に活発に展開される。異った意見同志は、時として火花を散らして論争にも発展する。その場合、論争の目的とテーマと方法が適切である限り、それは奇クの進歩に大変に役立つ一と思うからです。凡そ、思考は進歩の原動力、論争はその促進力とも言うべきもので、ただ楽しん

でさえ居れば良いという行き方からは、進歩も発展も余り期待出来ないのではないのでしょうか。恰度それは、人間が星空を仰いで人生を思い、悩みを抱いて神を求め、自然の不思議に接してその解明を試み、其処に哲学や宗教や科学が生れ、そして、その間幾多の論争も繰り返えされては発達を遂げて来たようなもので、固より哲学も宗教も或は科学さえも、ただ食べて寝さえすればいいという人達には無縁のものかも知れませんが、人間というものは、矢張り「満足せる豚」よりも「考える葦」であつて、常に進歩を求めてやまない因果なものなのでしょう。次に、奇クは現在既に泥中の蓮に近いと思うのですが、此処まで来るには並大抵のことではなかつたろうと想像します。ただ十年間ぼんやりして居て、此処迄来たわけではないでしょう。それは、奇クの歴史を一目見ただけで分ります。初めの中は、失礼乍ら暗中模索、五里霧中で、それから、段々と、号を追うにつれて、読者の声を求めて、そして、ただ、読者の声を頼りに：一号、一号、又一号と、お濠の石垣を積み上げるように、その石垣をよじ登るように、

此処迄来た。それも、何時も順調だったわけでもない。昭和三十年頃には、情勢利あらず休刊の憂目にも遭つて居る（今でも、何号台風かで一寸発行日が遅れると「さでは廃刊？あんまり心配させないで下さい」——十二月号読者通信東一郎氏——というふうなもので、事実、全国青少年協議会——会長総理府総務長官——の動きとか、大阪のそれに似たものの燦りとか、手放して樂觀して居ていいのかどうかは分らない）。やっと復刊した直後など、今から見れば惨めな姿です（当然乍ら）。其の間に、風俗草紙、風俗クラブ、千一夜、あまとりあゝ両手の指を使つても数え切れない程の雑誌は皆潰れてしまつた。其の間にあつて、奇クだけが十年の風雪に堪えて、大抵の台風にもふつ飛ばなかつたのは、奇蹟と言うか、要するに急ごしらえのバラックでない上に、何よりも土台がしっかりしていたからで、それは、読者と編集部が一緒になつて、誌上を通じて思索と体験で練り上げて来た思想的基盤の上に立っていたからでしょう。その現在の表面だけを見て、花さえあれば根や肥料はどうでもいい、楽しくあればいい、太平楽：

と言ってみても、これも、奇クがス
ポーツやショーなら、それでよい
でしょうが、もし読者が皆そうな
ってしまったら、現在の奇クの姿
は有り得なかったし、もう迅っく
の昔に潰れていたでしょう。

それで、今度の論争を見ても
と、発端は、以前から読者通信欄
にいろいろな人々から「もっとど
ぎつくせよ」「エロ味が足りない」
「物足りない」と言う種類の投書
が、それこそ繰り返えし出て、そ
れに対して前記の中谷氏が奇クの
在り方として論ぜられたものが口
火となって、千草忠夫、衣軍一、
榊一、岩崎一生、宇宙人の各氏が
参加して奇ク史上大きな論争に発
展したもので、これは論争される
だけの意味と価値が充分あったわ
けで、又結果からみても、これら
の論議を通じて、奇クの性格や在
り方がより深く掘り下げられた
し、今後再び起るかも知れない嵐
に対する思想的基盤も強まったか
も分らないし、其の他有形無形の
効果は充分あった一単なる「兄弟
牆にせめぐ」ではない、と私は思
います。

それで、大いに効果を収めた此
の辺で、一先ず打ち切りにするの
が賢明だと言う気は致します。

生活の中のM

最高のキス

春木 俊野

「週刊文春」十一月六日号のピン
クコーナーに面白いのがあった。
題は絵具というが……。

その夜のパーティーに出たマーサ
の服装は黒ずくめだった。黒いセ
ーターに黒のスカート、黒いスト
ッキングに黒の靴だった。

「そんな真黒なストッキング、よ
く売ってたわね」

友達に言われてマーサは答えた
「実はこれ、素足に黒い絵具を塗
ったのよ」

「太腿まで塗ったの？」

「勿論よ」

やがてマーサはボーイフレンド
と夜の庭に出て行った。しばらく
して室内にもどってきた時、その
ボーイフレンドの顔をみて他の男
が言った。

「どうしたんだい？ 両方の頬が

真黒だぜ」

私はこれを読んでうれしくなっ
た。最高のキスをしたことがあり
ありと判るが、始めに太腿まで塗
ったの？ と伏線をつけたうまさ
に感心する。この最高のキスはな
にもM族の独占する処ではないが
Mの第一歩は、これだと思う。
そして体位がハッキリ上と下にな
って、跨がるとか、馬乗りとい
う言葉が入ったら、最早や何も言
うことはない。

連作「少女」

牧村 興次

「未知の恐怖」

「一つ泣かせてやるッ、さ
あ、こっちへ来るんだ」

「いや！許してッ」

か弱い乙女は、毛むくじ
やらの男の荒々しい動作だ
けで、もうおろおろして、
未知の世界に対する恐怖で
全身をわななかなすのであつ
た。そこには冷たい鉄の手
枷とギヤグとがあった。



私のサド遍歴

所 沢 勉



○私は大正十二年九月生れの関東大震災子であるから、すで三十八才を数える自称独身男性。

○八才の頃、父につれられて見た活動写真(今の映画、但し天然色なんかはなかった)の中で女性の緊縛場面を見て悦に入ったのだから、相当早熟だったらしい。

○小学校の頃から映画は大好きで或る雨の降る日曜日の晩、晩酌を飲んで寝ようとする父にせがんで無理矢理連れて行って貰って見たのが『四谷怪談』、お岩殺しの凄惨な場面が子供心に好きだったのだから、サド好みといえよう。

○小学校六年の時、隣りの未亡人の子供の一年下の女の児と仲よくなり、いじめて泣かしたり母親の留守に縛って遊んだりした。色の

白いなよなよとした優しい子で、なんとなく、いじめたいという気持ちを起させた。

○中学校へ入った頃から、古本屋を漁って女の縛られた絵を集めたり、或はなんでもない手を後へ廻したような写真にペンで縄を書いたりした。その頃はどんなに探したって、若い女の裸で縛られた写真なんか、どこにもなかった。

○ヌード写真なんか、特に興味はなかったが、それでも外国物なんかを集めた。雑誌は『変態資料』『グロテスク』『犯罪公論』『犯罪科学』『デカメロン』等をはじめとした当時の軟派誌を集め、切り抜きも相当溜った。

○一度若い女を縛ってみたいという衝動はあったが、当時は男女間の

の規制が今では想像できぬくらい厳しく、そんな野望は果されなかった。

○学校を卒業して勤めに出たが、すでに大東亜戦争は激しく召集を受け、幹候出の下級第一線指揮者として前線の各地に転戦、具さに困苦と欠乏を味うと共に、サド的な面の発散をなし、昭和二十一年の秋、南方より裸一貫にて復員。

○厳しい生活との戦いは始まったが、いつも私の脳中を駆けめぐる情熱はサジスチックな夢であり、若い女の緊縛姿態であった。

○戦後復員したカストリ雑誌の大氾濫は私の夢を現実になぞ高めた。以来、KK誌愛読へのよすがともなった。そして殆どの泡沫誌が消え去った昨今、今尚、私の胸の奥深く巣くう絶えることなきサドの情熱を温かく慰めてくれるKK誌に、大きな喜びを感じている。

○或る時は紅燈の巷に、あてなき対象を求めてさまよい歩き、時には狂喜し時には失望し、やがて紅燈の灯の消ゆる時と共に、私の散策も止んでしまった。

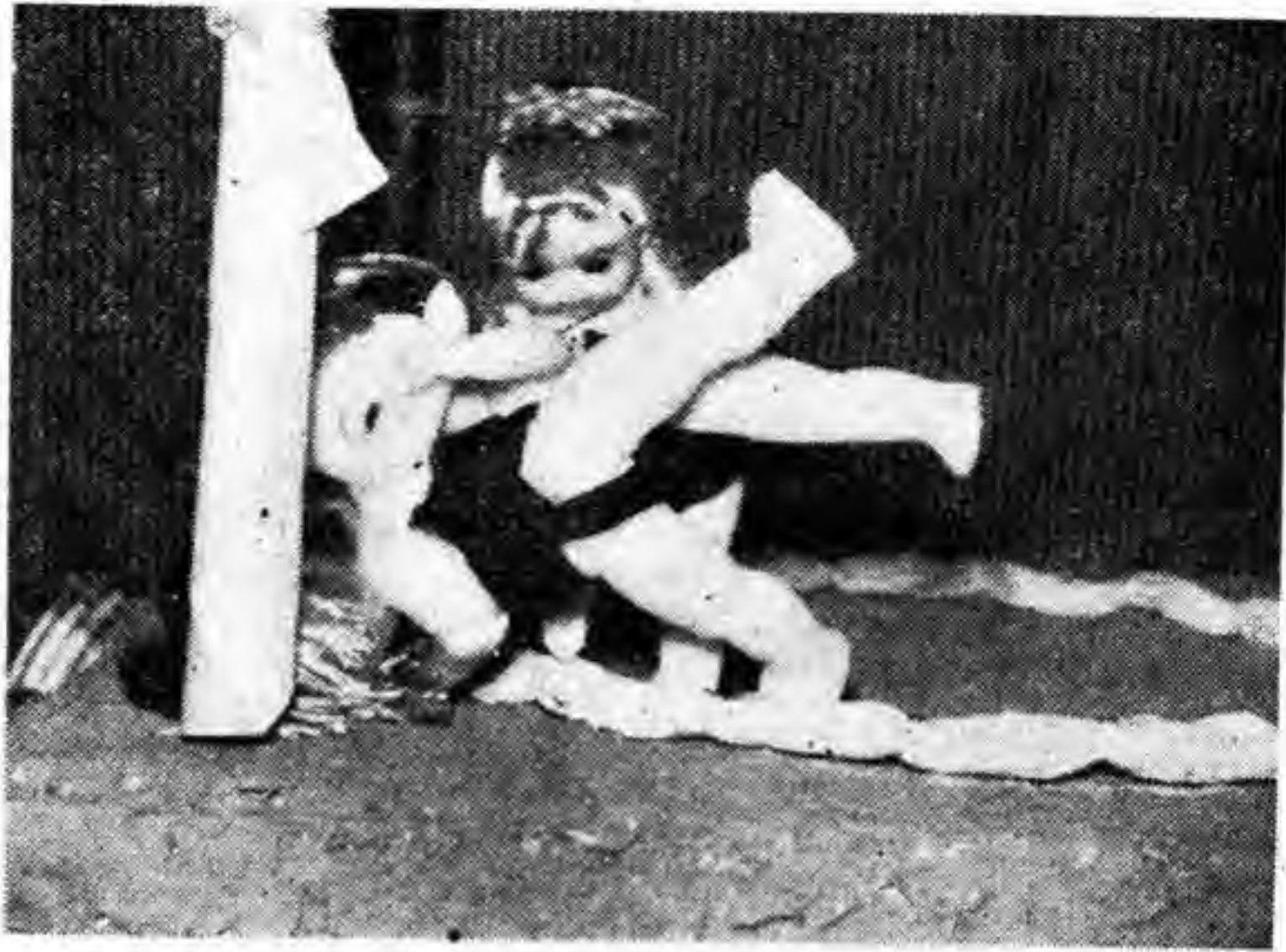
ようで、きまりが悪いくらいだ。○戦争前のことを思えば、今の読者は余りゼイタクは言わないものだ。サド遍歴者はかく思う。

○私は前にも言ったように、現在は独身である。と、いっても結婚の経験は持っている。復員当時、自分で商売をしていた自由市場の公衆便所で知り合った、といえは変に聞えるが、私がいつも利用する野天便所の近くの八百屋の娘を見染めて結婚したのだが、誠に女房運がわるく、苦勞のかけっ放しで病死させてしまった。

○その後、友人と共同で始めた事業がトントン拍子に当り、今では億と名のつく資本金の会社を経営しているが、未だに正式に妻と呼べる女性はなく、かく自称独身とおこがましくもいう次第。

○既に年も若くなく、再び妻を貰うなら、自分の性癖に理解の有る女性と考えるのだが、これは言うは易くして実際は中々容易ではない。生活が安定しながら、私が後添を貰わない理由の一つである。

○周囲の者は、私が死別した妻に貞節を感じて結婚しないのだと思っているらしい。そうとられる私は有難いのだが、本当の理由は他にあることを告白するのを許して貰いたい。亡き妻よ。



—相撲雑記—

「禪について」 岩井義人

禪について『相撲』の八月号に秀ノ山親方の興味有る記事が載っていたので一寸御紹介して置く。

第四十回東日本学生相撲選手権大会に、早大の選手の廻しの下着使用が問題となつて居る。廻しの下に水泳用パンツか、又はメリヤスのキャル又のような、廻しから出ないような下帯を使用するもので、提案者は

一、廻しを直接肌につける事は非衛生的。

二、廻しがゆるかったり、立みをつを引かれて肛門を露出するが如き不体裁をなくす。

三、廻しを締める時、陰部を出すのを嫌うのでパンツをはいていたら気軽に裸体になれる。これによって相撲をとる者を多くする。

とパンツ使用論が出て居り、又相撲協会の規則としては理由なくして締込みの下に下帯を使用する

事は出来ない」と記してある。

秀ノ山親方は廻しを直接肌につけるのは下腹部でなく陰部の事でこれが非衛生的とは廻しは毎日のように洗う事がない為であろう。しかし、あの厚い生地、廻しの下にパンツをつける事は更に陰部を蒸すようなもので更に非衛生的。第二に、廻しがゆるかったり、立みつを取られると陰部や肛門がのぞける事がある。それを防ぐ為に理由は同じでも水泳の時、禪の締め方が悪いか、水泳用パンツの下に更に何かを使用しなくてはならなくなる。と言っている。

尚、同誌には柏戸が青竹の鞭を持ち、若い者に「此の野郎」と気合を入れて居るグラビアや、出羽ノ海部屋では竹刀を十本も買つて来て、折れたら取換え、幕下連中は負けた方が勝った方に叩かれるという、兎に角スパルタ式鞭打ちが復活して来たようだ。

—M謎々—
強いものは?

春木 俊野

強くなったものは『女性と靴下』
という言葉が、いろんな処に使わ

れる。これは世相を諷刺した一般的なものだが、私のようなM族には、もっと大きく身にしみて感じる。女性に弱いのは勿論、靴下にも男物はあるが此の場合、女性のストッキングと思いたい。片倉ハ

ドソンとか、グンゼ、厚木のストッキング等の広告には全く素晴らしいものがある。ポスター紙面一杯に見事な脚線をみせる脚が全く美しく躍動している。

あゝ、という本物の脚に抱きつきた

い。キスしたい。ふまれみたい。蹴られてもいい。とはM愛好者の誰もが思うことだろう。強いものは女性と靴下、これは我々のためにつくられた言葉のようでもある。



毛利敏久

あるカメラマンの自伝 女体と縄の反応

毛利が第一回の作品を完成して依頼者に手渡したとき、彼は別にその写真に対して、とやかく批評は言わなかったけれど、その写真に対して大きな失望をしていないことは、彼がその場で更に第二回目の依頼をしたことによっても、よくわかった。

彼は着手金として二万円を支払い詳しい注文をメモして帰った。毛利は第一回目の撮影の経験からして、この仕事の大部分はモデルを探すということにあるというところが、よくわかっていたので、何とかして、いゝモデルを掴みたいものだと思った。

毛利が第一回の作品を完成して依頼者に手渡したとき、彼は別にその写真に対して、とやかく批評は言わなかったけれど、その写真に対して大きな失望をしていないことは、彼がその場で更に第二回目の依頼をしたことによっても、よくわかった。

時計屋の片隅を借りているD Pの店へ行ったが留守だったので、彼の職場である街頭へ行ってみると、黒のベレー帽に別珍のジャンパーを着た飯野が手製の16ミリフィルム装填の固定焦点のカメラを首にかけて、雑踏の中で盛んにシャッターを切っていた。

こゝはターミナルから百米ばかり離れているのだが、歓楽境の新

世界や通天閣への通り道になっているので案外人通りが多く、それに、殆どの人が遊びを目的として来ているので歩止まりも比較的にようだった。

毛利が来意を告げると、飯野はビラ配りをしている助手にカメラを渡し、昼食を食べたり休憩に使ったりしている飯屋へ誘った。学院で一緒だった頃から、飯野はヌードなんかを盛んに撮っていたしモデルを見つけたる名人として知られていたもので、一つよいモデルを世話して貰おうと思ったのだ。

先日逢ったときの飯野の自慢話では、スナップ写真を撮ってやつた娘と心易くなり、とうとうヌードの撮影にまで進展したとか。又映画館の前で、三十分ばかり人待顔で立っている娘があるので、それとなく話かけてみると、約束したデイトの相手が来ないのだと言う。そしていつの間にか、代用の彼氏に成りすまし、お定まりの純喫茶のコーヒーから映画館、バーからホテルへと進んでヌードフォトを物にしたとか、しないとか。とにかく、そのおこぼれの一つでも頂戴したいものだ、今度の自分の第一回作品の御披露に及んだのだが、飯野は女体緊縛フォト

になんか一向に興味はないらしく「それでは、此処へ行ってみな」と女のアドレスを教えてくれた。

郊外電鉄の急行で三つ目の駅は近年急激に発達したベッドタウンの一つで、駅前から山手へかけて夥しい様々な住宅やアパートが櫛比しており、目ざす鈴風荘は、それらの新しい建物の通りを行きすぎた旧村のはずれにある佻びしいバラックじみたアパートだった。

受付もなにもない、下駄を脱ぎちらかした玄関で暫く立っていたが、誰も出てくる気配がないので泥や砂のたまった薄暗い廊下を靴下の汚れるのを恐れて爪先立ってそつと上ってゆくと、突然、目の前の扉が開いて三十ばかりの髪をばさばさにした女が、にゅっと出て来たので、驚いてメモを見ながら、飯野の書いてくれた藤野珠子という名を聞いてみた。

「あゝ、藤野さんなら、奥から二軒目だよ」と教えてくれた部屋のドアは固く締まり、人の気配はなかった。引きかえして、共同の炊事場で火をおこしている件の三十女に、「留守ですか」と尋ねてみたら「あの人、昼でも夜でもアパートに帰ってるより、外出している方が多いのさ」と冷たい返

事だった。

早速、家へ帰って手紙を出し、その返事では、アパートは人の目もうるさいので、ということなので店へ来て貰ったのが、飯野と逢って丁度十日目の午後だった。

彼女はチェリー・クレパスの専属のモデルとかで、市内の各地は勿論、時によっては四国、中国、九州などへ泊りがけで出張することもあるとのことだった。

どうして飯野と知り合ったとかその他、家庭の事情など聞きたい

ことは沢山あったが、どうも余り彼女は話したがらない風だったので、深く立ち入ることは止め、とりあえず報酬額と日時とだけをきめて帰って貰った。

その日は、朝から雨が降ったり止んだりして外出するには億劫な天候だったが、毛利は新しいモデルに対する意欲で大いに張りきっていた。

藤野珠子は洋服を着ていると、幾分痩せ気味とさえ思えるくらいのはっそりしたスタイルであった

が、裸にならしてみると、さすがに若い女だけあって、お乳、お腹、腰なんかには十分肉づきがよく、恰好のよい膨らみを見せていた。

この女の身体に依頼主の希望するようなガンジガラメの縄を巻きつけることは、最初のことでもあり、どうかと思われたが、しかし毛利にとっては、この藤野珠子という女をモデルとして、是が非でも、依頼主の所望する作品を作成しなければならなかった。

珠子は何度も何度も、多くの人

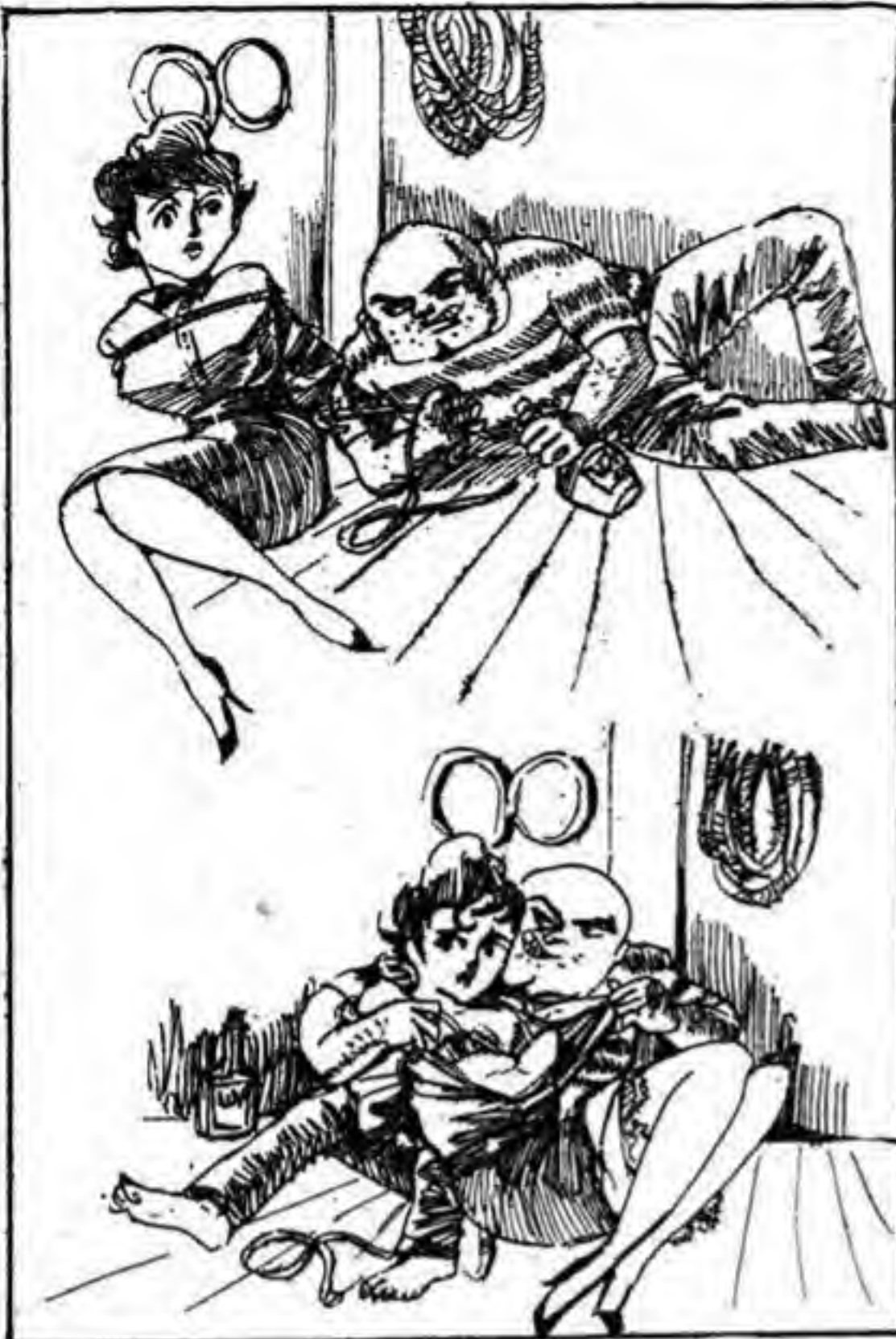
連作「少女」

牧村 興次

「船倉の少女」

ならず者の船員が欺して船に連れ込んだ港町の喫茶店のウエイトレス。かわい十六の少女だが、船はすでに東支那海に出ていた。シンガポールから香港へ向けて航海する、このボロ貨物船の薄汚れた油くさいボースンの船室に捕われた少女の運命や如何に？

々の前で裸身を晒した経験を持つ女の落着を持った態度で、事務的にポーズを取っていた。毛利は鞆から、縄を取り出して自分の撮影意図を告げると、「えッ？」と彼女は軽い驚きの声を放ち、そんな方法もあったのか、という、いぶかしげな表情で毛利の顔を見た。女ほど環境に早く順応する動物はいない。と、よく言われる。珠子も毛利の捌く縄の下でよくその痛さに耐え、彼の出す要求の表情をつくろうと努力した。慣れない毛利が、無意味にきつく縛り上げて腕が逆手となって耐え難かったり、二本の縄と縄との間に肌を挟んで、思わず悲鳴を挙げたりしたこともあったが、同一目的に共同して努力しているという親密感が、しまいには何かほのぼのとした楽しさに変わり、ヌード写真撮影のときは違った特別の感情が湧いてくるのを覚えるのだった。予定の撮影が終り、外へ出たときは、すでに暮色が迫っていた。毛利は一刻も早く現像して今日の結果を知りたいという気持で一杯だったが、珠子の方は、このまま何となく別れたくないといった、妙に去り難い気持だった。



MS 対話

ある女とある男

中野 三郎

利夫——これ百万円です。

英子——あら、早速持ってきてくれたの、悪いわね。でも、いただいとくわ、その方があんたも嬉しいんでしょ。うふふふ。

利夫——あの、結婚は本当にしてただけるんでしょね。

英子——そうあわてないでよ。私まだ学生の身よ。あんたに想像もつかないだろうけどさ、大学生って勉強が大変なのよ。今は勉強の事で頭が一杯。結婚は卒業してからよ。

利夫——では卒業したらすぐに。

英子——でも私、ひよっとしたら大学院に行くかも知れなくてよ。

勉強がすごく面白いから、学者になろうと思ってるのよ。そしたら又すごくお金がかかるし、結婚どころじゃないわ。

利夫——お金のことは心配しないで僕にまかせて下さい。大学院は何年かかるのですか。

英子——修士が二年と博士が三年

でしめて五年ってところね。

利夫——で、五年間で、どの位かりますか。

英子——そうね、ざっと一千万ってところね。

利夫——僕の財産を全部処分すると、丁度一千万位になりますから全部さし上げます。

英子——うふふ、悪いわね。

◇ ◇ ◇

利夫——英子さん、大学院合格おめでとうございます。

英子——それより、例のもの持ってきたかい。

利夫——はい。家も全部処分しまして大体一千万になりました。英子さんの名義にしてあります。

英子——銀行預金ね。どれ、うん成程。これでいいわね。

利夫——あの僕、家を売ってしまった、今旅館に泊っているんですが、何時になったら……。

英子——まあ、そうあわてないでその内に連絡するから。それ迄私



マゾ画廊 “首絞め”

春川ナオミ画

こうして首を絞めてもらうのがお前の本望だろう。どうだい

のところへ来たらだめよ。

◇ ◇ ◇

英子——何しに来たの。

利夫——英子さん、何時になったら結婚してくれるんですか。

英子——結婚ですって。私もう一カ月も前に結婚したのよ。

利夫——ええ？ じゃ。

いっそのこと、このまま息のねを止めてしまってもよろうか。

英子——そうよ。私、お友達の橋本さんと結婚したのよ。私と同じ大学院の学生よ。

利夫——では僕との約束は、どうしたんですか。

英子——あんたと約束？ 笑わせちゃいけないわ。誰があんたなんかと結婚の約束するの。中学卒のあ

んたなんかとさ。私、結婚するといつたのは、橋本さんと結婚するって意味なのよ。それをお前ったら、馬鹿も程があるわ。

利夫——僕は財産全部をあなたに捧げたのです。

英子——それがどうしたのよ。第一さ、大学教授になろうという私が、中学校しか出ていないお前なんかと、結婚するわけがないじゃないの。

利夫——僕はどうしたらいいのですか。

英子——どうもこうもないさ。さっさとどっかへお行き。

利夫——行く処もないんです。

英子——ふん、じゃ、私達夫婦の奴隷になるか？

利夫——奴隷？

英子——そうさ、私も橋本さんも弱いものいじめが大好きだから徹底的にいじめろわよ。一寸ためししてみようか。お前馬におなり。うんそう。よし、どっこいしょ。さあ歩け。つぶれたら承知しないわよ。それ、もっと早く。うふふ、いい気持。橋本が帰ってきたら二人で乗ってやるからね。重いだろう。それ、もっと早く。うふふ。

(了)



夢を托して

竹野ひろ子嬢へ

平井 明

待望の新年号を手にして、カバー・ガールひろ子と銘うったグラビア写真、最大の歓喜と興味とを以って、雑誌を求めるなり真先にそこを開いた。

十二月号で辻村隆氏の「読者通信の女性を縛る、ひろ子緊縛記」を読んで、実は大いに期待していた。胸がわくわくするような、自

分の夢が今にも実現されそうな期待であった。十二月号の百七頁から百二十二頁までの十六頁に亘って洋装からシユミーズに剣かれ、やがて上半身裸にされた竹野ひろ子の緊縛ポーズは、私にとっては最大の魅惑であった。

それが、待ちに待って手にした新年号で「カバー・ガールを縛る」として実現したとき、期待が期待通りになった嬉しさで、本をひもとく手もわなわなと慄え、やがてグラビアを見、内容を読むに従って、痺れるような喜びを感じた。

そして、自分が辻村氏と代って竹野ひろ子を縛っているような錯覚に陥った。しかし、やがて、ひとときの興奮が静まって、よくよく文章を読んでみると、一入辻村氏が羨ましく、やがて嫉ましくさえなってくるのを押さえきれないのだ。

辻村隆氏や塚本鉄三氏の写真や文章に接していると、私は本当に身近かに感じ、まるで百年の知己のように親しく思える。それと共にモデル嬢に対しても、鮮明な写真が載っていて、私達にいつもにこやかに微笑みかけていてくれるだけに、他人ではないという親密感が湧いてくる。

殊に竹野ひろ子嬢のように、私達と同じ読者として、読者通信を通じて、誌上に姿を現わされたということは、一層の親密さを抱かせられるし、その勇氣に敬意さえ払わせられる。

私は十二月号百十八頁の裸の上半身に縄がくるぐると巻きつき手拭で今まさに猿ぐつわされようとしているポーズが大好きである。ひろ子さんの美しさが最大限に発揮されているように思う。どうか私達のために、一層の御活躍をお願いする。

「女禪」へのあこがれ

室井英山



『ふんどを締めた女』こういう言葉が自由にいえるのは、奇巧の誌上のみかもしれない。アブ趣味、殊に倒錯趣味の中、私は特に小姓姿をした女性にあこがれを抱いていたが、それがいつしか、『女禪趣味』となってしまう。

ふんどしを締めた裸奴姿も、一種の女性の男性化と、いつてもよいと思う。日本趣味の私にとって、は女性禪美は日本髪的女性のみでそれ以外は余り興味はない。私のイメージの中には、様々のふんどし一つの裸女の姿態が去来してやまない。

江戸紫の縮緬のふんどしを、熟れた身体にきりとしめた芸妓、濡羽色のきれいに結い上げた髪、白い身体はふんどしで、いやが上にもひきしまつて見える。

燃えるような緋縮緬のふんどしを、まだ熟れきらぬ裸身にしめて、いる小町娘、髪は島田に結って未通女らしい初々しさが、全身に溢れている。

小麦色のひきしまった裸身に、黒縹子のふんどしをきゅっと締め、た姐御、洗い髪又は櫛巻の髪に珊瑚のかんざしを一本さし、七首をふんどしにさしている。

その他、色とりどりのふんどしを締めた奥女中達の群像が脳裏に次々と浮かび上ってくる。しかし私は絵が書けない。これを救ってくれるのは奇巧の他にない。奇巧よ、この哀れな女のふんどしマニヤを救ってくれ。

私は女のふんどし一つの裸体画に魅せられてしまっているのだ。そして、私は、この女のふんどしの悪魔の虜から抜け出すことが出来ないでいる。私は自分の性癖が奇妙であり、珍稀であるだけに、それを満足させることが出来ないで悩んでいる。

重ねていう。奇巧よ、素晴らしい女のふんどし姿を探り上げて、恵まれぬマニヤを救ってくれ。

月経（メンス）の数学

出血持続日数	3—5日	(平均4日)
月経型	25—35日	(平均32日)
出血量	15—20CC	一日V
全量	30—50CC	平均40CC
月経綿使用量(一回)	6—12g	(平均8g)
取替回数	4—8回	一日V
全回数	15—25回	(平均20回)
月経綿総使用量	約一六〇瓦	
月経初発年令	13—15才	(平均14才)
月経閉止年令	45—55才	(平均50才)
月経年令人口	約二三〇〇万人	
妊産婦数	約四五〇万人	
月経人口	約一八五〇万人	
現在月経人口	約二三一万人	
(一八五〇万人×4/32)		
総月経量	40cc×二三一万	
全量	九二四〇〇立	
一日	二三一〇〇立	
総月経綿量	三六九・六トン	
日本中の女性が一日に出す経血	一二八の経血風呂を沸かすこと	
が出来、その経血のしみた綿で、	三つ組の夜具が二〇〇揃い出来る	
という計算である。(古井真哉)		

昭和三十六年度

アブ誌探点表

昭和三十六年一月号より
昭和三十六年十二月号まで

長 良 孫 一



最近では、かなり充実した類似誌が店頭に並んで居り、この辺で本誌を含めて比較評価するのも興味ある事と思いますので、自分勝手に遠慮なく採点して見ました。まず、採点するには、対象を何に置くかという事です。これには色々意見はあると思いますが一応(1)読物。(2)写真。(3)挿絵。の三点にしぼって考え、採点は五点法に

よりしました。尚、私自身S派でありますので、相当片寄った結果になる事は予め御承知下さい。

(1)読物

K誌四点。U誌四・五点。F誌二点。

K誌四点の採点に不満の方が多いかも知れませんが、最近少し低調なので仕方ない所でしょう。本誌の奮起を望みたいところです。

U誌の読物は幾分通俗的で、妙に妖しい雰囲気を持った本誌のそれとは、その点劣るとは思います。が、何といっても構成がしっかりとして居り、読者の要望を満たす場面など多数とり入れ、相当充実しているといえましょう。本誌に「魔教圏」又は「ヤプー」のようなものが入っていれば、文句なく本誌に軍配をあげるのですが。

F誌については、いう事はありません。それ程劣っています。

(2)写真

K誌五点。U誌四点。F三・五点。

本誌は、長年の伝統がものをいって断然、他誌を遙かにひき離しています。その上、意欲的なので写真に関する限り、仲々他誌も追いつけないでしょう。

U誌は多少点が甘いかも知れませんが、動的で雰囲気ユニークなので増点した次第です。

F誌は最近の充実ぶりを買いました。

(3)挿絵

K誌四点。U誌四・五点。F誌三・五点

U誌が、この部門で秀れている事は、誰でも認める所でしよう。五点あげてもよいかも知れま

せん。本誌は、四馬、杉原両氏の実力を買った次第です。

F誌は、他誌に見られない外国ものを紹介している点を重んじました。尚、F誌は十二月号までで廃刊になるとの噂ですが、そうなら昭和三十七年度の分野は、大分変わってくるでしょう。

以上を総合すると次のような結果になります。

K誌十三点。U誌十三点。F誌九点。

最後になってしまいました。一つお願いがあります。手錠ものの写真を載せていただきたいのです。読者通信でも時々、希望として書いてあるし、手錠に興味を持って居る人は相当いるのではないでしょう。十二月号には竹野ひろ子さんの手錠ものが載っていますがシュミーズ姿では如何にも不自然で、作りものといった感じをまぬかれないと思います。やはり手錠には洋服を着ている事が必要条件でしょう。囚人服の場合は、コンビネーションのような身体の線をはっきりと出す、横縞の入っているものも、面白いと思います。ぜひ載せて下さるようお願いいたします。

△読者サロン▽

韓信の股くぐり

牧野 富夫

小生のようにKK十年の愛読者にとっても(あるいは十年の愛読者だからこそ)いつも不安が断えない。それはKKがいつストップするか分らないという不安。国の法律からいえば、憲法は検閲を禁じているし、刑法はわいせつしか取り締っていない。法的にもKKは何んの憚るところもないはず。ところが世の中では、輸入映画については「税関カット」と称して堂々と検閲(憲法違反)が行われているし(これは如何に弁解しよう)と検閲でしよう)出版物に対しては、検閲をやれない代りに販売ルート、配給網に干渉したりするやからがいます。

それはさておき、現実がもしそうなら、それに対処しなくてはなるまい。KKが白い眼で見られるのは、巻頭に緊縛写真がずらりと並ぶからだ。それで、もし嵐がきついのならば、残念だがこれを巻中か巻末かに配置換えしたらどうだろうか。ファンにとっては一寸(あるいは大いに)物足りないか

も知れないが、内容的にどういうことにはならないし、それでオジサン、オバサンへの刺ゲキが多少緩和出来るなら、韓信の股くぐりとして一考に値するのではないか。それとも、こんなことは小細工で一顧の価値もないものか。しかし、好む者にとっては、どんなにうれしい漬け物でも、これを玄関や床の間に置いては苦情が出るということもあるかも知れない。

× × ×

まぞ川柳自註

はしぎれ

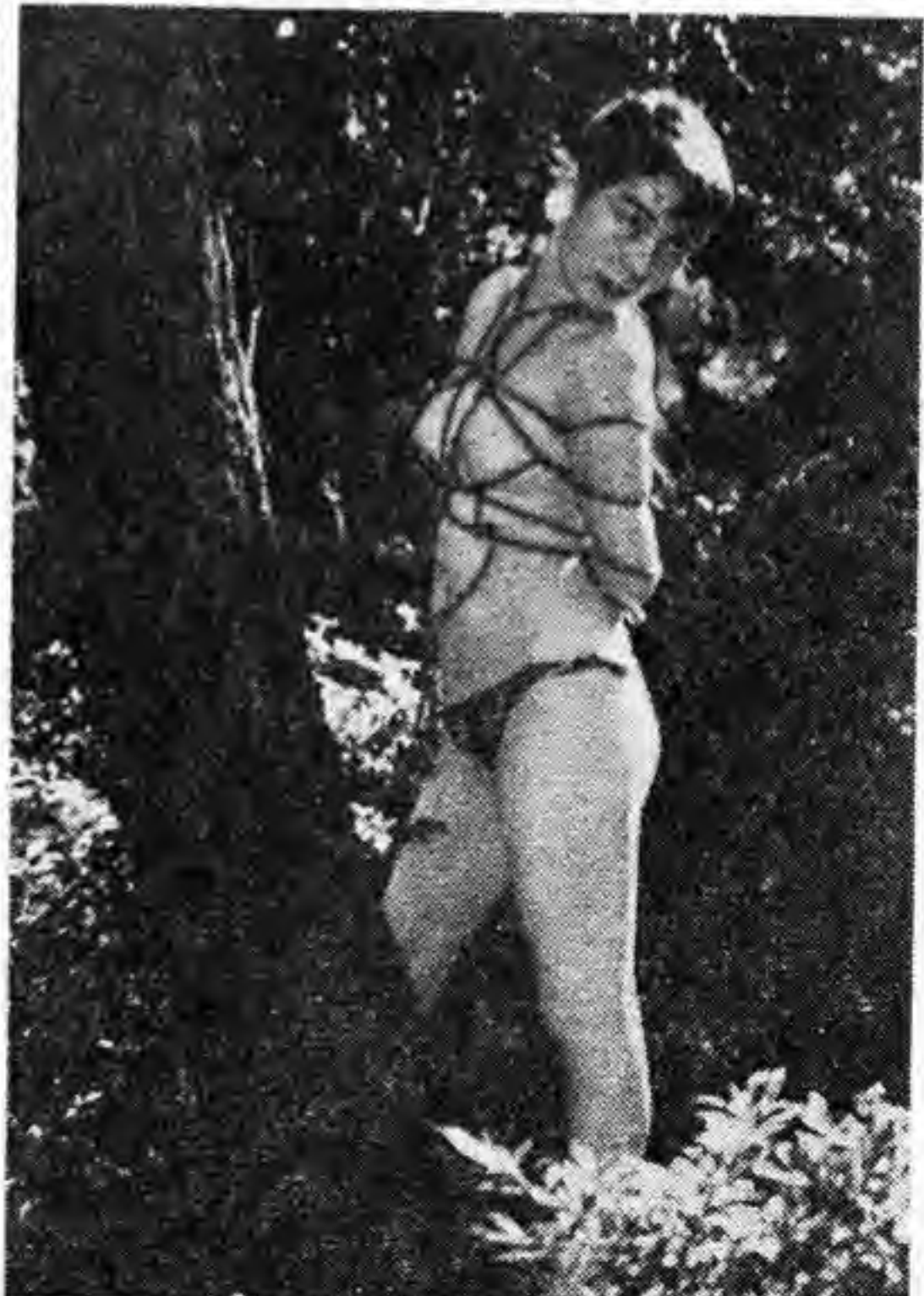
西田 仁

はしぎれがサドルを跨ぐ勇まし

さ
怖いことショーツにきしむバー

すこし旧いが「オール読物」十月号のグラビヤ。ショートパンツ特集とて、内外名流婦人の御柱がずらり十数本。自転車に乗るもありインタビューに應ずるもあり。「よくぞ女に」というのが、そのキャッチフレーズだが、いや強くナリマシタ。

マゾの目を承知でさらす玉の肌あられもなや姫御前、はたまた



マダムのその姿。まんざら無心に涼をもとめているとは思えないのだが……

乗馬など好きですかとさぐり入れ

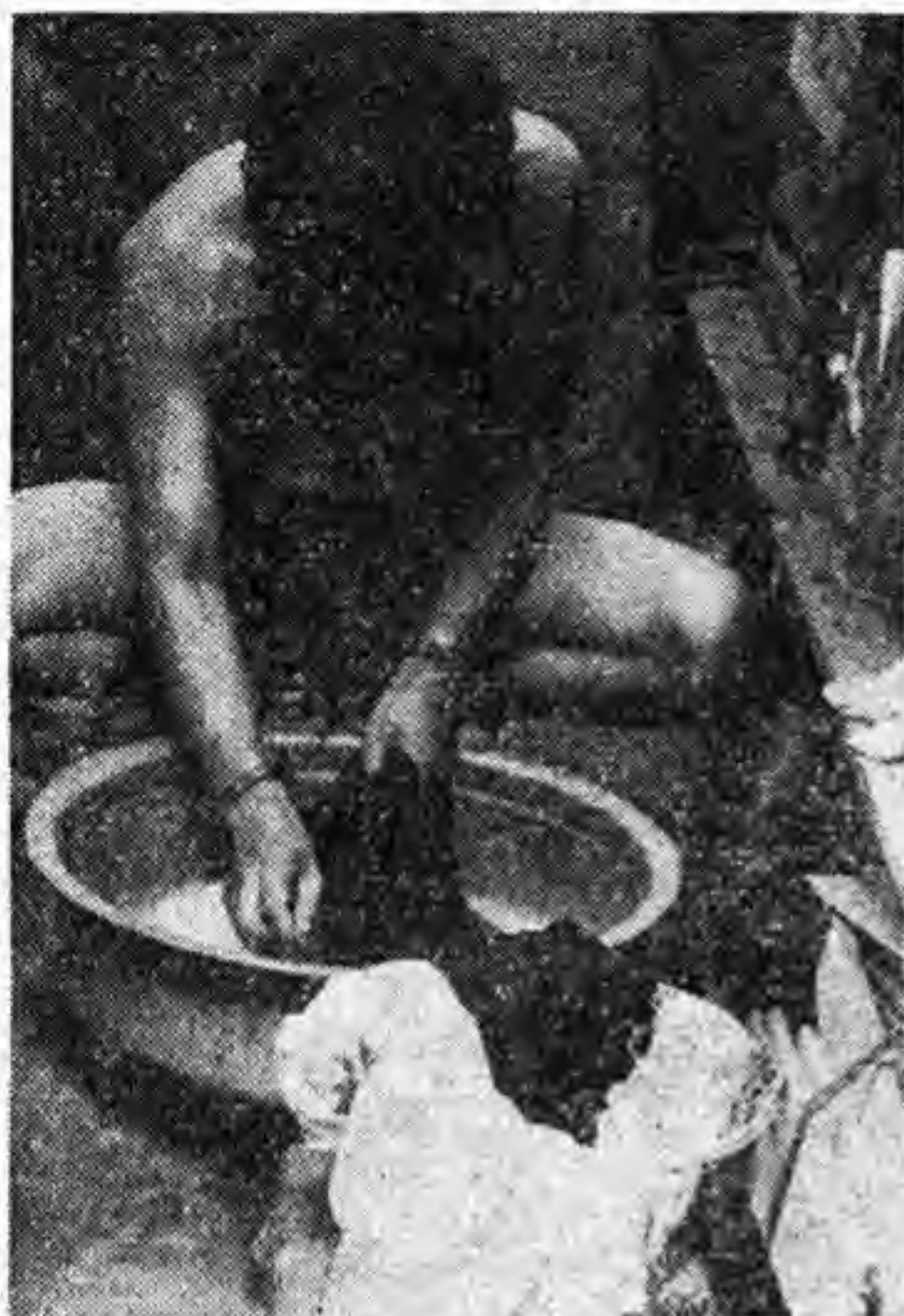
「NHKとんち教室」の生徒たちが社会科の勉強で府中競馬場厩舎を見学。前稿で触れた美しい女生徒が帰郷のため退学したのは残念だが、もしゴルフ・ウイドウなどにひるめしでもおごってもらう機会があったら、聞いてみることに。ナニ、失礼にはあたりません。な

にしるレジャー・ブームの花形なんだから。

孤児院でアルバイトして覚えたり九月十日付「読売新聞」で、不幸なこともちの施設を紹介。五、六人ずつヒモで結んで、じぶんの腰にまとめておかないと、どこかへいってしまおうし、夜中に三度起こして便所にいかせても、おねしよをするとは、娯母さんもたいへんな苦勞。女子大生のアルバイトだったら、カンシヤクおこして、ついということになりかねない。

M写真 (奴隷の一日)

美 枷 輪 生



奴隷の洗濯



沓脱台の奉仕

△読者サロン
「アブチック・アフリカより」

1、勇者の資格

もう相当前になるが「キング・ソロモン」というアフリカものの映画があった。その中で勇者と呼ばれるためには、野越え山越え猛獣大蛇と格闘し、これに勝って帰らねばならないアフリカ某種族の若者の姿が大変印象的であった。ここ数年アフリカ・ブームにのってアフリカ探険の本は色々出版されたが、その中のある頁で大変興

味ある個所におつかった。やはり某族では猛獣大蛇に勝つことで勇者と認められるので、そのためには十五才ともなれば「キング・ソロモン」の若者のように出かねばならないのだが、それには資格が必要というのだ。而もその資格とは何と若い雌象との聖なる(？)交接儀式終了とは、又奇異ではないか。さぞかし彼はその儀式と共に益々勇者への挑戦者にふさわしいエネルギーな若者となることだろう。それにしても正にアフリカは文明と原始の同居する大陸と呼ぶにふさわしい。

2、M的部落

同じくアフリカはクネーネとかいう部落は、男性M派にとつては何ともシゲキ的な所だそうである。それはここでは、女性の方が夫を何人も所有出来るというショッキングな地域ということだ。どうして、こんなけつたいな事になったかといえ、その理はいとも簡単で、つまりこの男性は頗る小型なのに一方女性には皆キングサイズ。体格の大小の他にこの種族の男女数の比は4:1でもある。(そういう風に出る由) かく

て女性は、その強力肥大な体力にものいわせて自分より遙かに体軀劣弱な男どもの上に君臨、男どもを奴隷的にこき使って、その堂々たる肥体の側に侍らせるといふ。体軀精力強大なる超キング・サイズの女性ともなれば、何十人もの夫を従えて威を示すとは——何となく未来の文明社会もかくやと想像されないでもないし、それにしても、天は時々奇妙な配慮を示すものではある。

(阿仏利夫)

“切腹”のS M性

沖田 寿

(画は「美姫城主の最期」と題した女体切腹画)



自分は二年程前、ある書店で奇クを発見して以来、熱烈な愛読者となり、現在に至っているものです。女性の切腹マニアとして、若い女性を責めてみたいというサディズムを持っていますが、それと共に、自分を責めるというマゾヒズム的なところもあります。

自分の体験としては、戦後間もなく、敗戦の絶望のため、切腹による自殺未遂を企てたことあります。これは又改めて投稿させていただきます。ここに描きました六枚の絵は、自分のサディズム的な気持を満足させるために試みたもので、まことに未熟なものです。御参考までに投稿させていただきます。女性の豊満な腹部をたち割り内臓の露出するといった凄惨な場面に、自分のS M嗜好の昇華があります。この外、妊娠して大きく膨脹し

切腹俳句

須藤 律夫

歌舞伎座のPR誌、「歌舞伎案内」の十月号だかに、▽刀△と言う題で切腹俳句が載っていた。同誌十一月には引き続き、▽腹切△の題で、珍らしい切腹俳句が載っているのを、併せて収録御紹介したいと思う。

▽刀△

月うけて本身の刀や殺陣

東洋城

秋雨や銀の刀の処はげ

同

白木三宝腹切刀そゞろ寒

清譚

▽腹切△

秋扇児に腹切らす仕草かな

石木

陰腹や秋に後るゝとしもあらず

同

判官勘平腹切り分ける夜寒かな

清譚

ことわけや腹切るまでの夜寒なる

東洋城

きった女性の腹部に心ひかれますが、妊娠女性の縛りとかヌードなど、グラビヤで実現して頂きたいと思います。自分の希望としては

腹を切る間やちゝろ、ちゝろ鳴く
東洋城
腹切やかまきりの腹にさも似たり
東洋城

(切腹レポート)

路上で割腹自殺

ハ十一月十七日付「内外タイムス」紙▽

十七日午前九時四十五分ごろ東京都渋谷区恵比寿東二の一四の一さき都電中通り停留所そばの都交通局渋谷営業所前の路上で中年の男が刃渡り二十センチの出刃包丁で右腹をかき切り苦しんでいるのを通行人が見つけた。広尾病院に収容したが一ヶ月の重傷。

渋谷署の調べでは豊島区池袋一の六一一大内方職業労務者岡田健次さん(三九)で所持金、遺書もなく出刃包丁を買ったばかりの新品であることなどから自殺とみられるが原因不明。

(須藤律夫投)

腰元が白足袋をはき、両膝を扱帯で縛り諸肌脱いで下腹部を十分開いて切腹する場面もお願いしたいと思います。

田舎の温泉場で

脱げないパンティ

湯山 泥介

星のよく輝く夜のことであった。私はとある温泉郷に一人旅した。ここは川底から湧く湯で、誰彼なしに無料で入湯できる野天風呂でも有名だったが、私は、男、女とのれんを垂らした共同風呂を選んだ。表は男湯と女湯と別々の入口になっていたが、中へ入ってみると浴槽は一つの男女混浴だった。うっかりすると滑りそうになるヌルヌルの板を通って、湧口にある湯の溜りへ近づいたとき、次第に馴れてきた私の目に、女の白い肌映った。黒い自然石の中に浮んだ肌は、まだ三十には大分間のある若い女だった。

湯桶を手にした私は、向うむきに湯舟を前にして中腰で湯加減を見ていた女の背中近くまで進んで無遠慮に肌を観察して、はっとした。ピンク色のパンティを脱がずに若い女が湯につかっているのである。

私は掛り湯するのも、もどかし

く、ドボンと湯に飛び込むと、興味を持って女の裸を観察した。良く見ると、それは勿論パンティではなくて、脱ぐことの出来ない入墨のパンティであった。肉づきのよい腰から臀へかけて、実に丹念に墨を入れてあり、それが、湯の温味でピンク色にほんのりと美しく染まっているのであった。

あでやかなピンク色のパンティには、本物と寸分交らぬ位にフリルやシチュウ模様も入れてあり、一見して見違いうくらい、精巧な仕上げであった。肌が抜けるように白いだけにピンク色の入墨の色合も一層なまめかしかった。

まだ年は若いのに、一体どんな境遇の女なのだろうかと、いろいろ空想を逞ましくして、入浴中の一ときをこの女客のために大変楽しく過すことが出来た。しかし残念なことには、旅先のことでもあり、名前も住所も知るすべもなく、初めて知った脱げぬパンティを私はいつまでも頭に浮かべながら、帰りの車中を一人楽しい思いに耽って、あの妖しい裸身の入墨を今更のよに再想してみるのだった。



【写真】 私の切腹 須賀綾女

△読者サロン▽

愛と束縛と

中塚綾子

風の強い日、吹き飛ばされそうになりながら、風の吹いてくる方向へ前むきに倒れそうになりながら歩いてゆく私。

口にも鼻にも、強い風が吹きつけて息も詰まりそうになるのが、まず力強い異性の掌で口も鼻も掩

われているようで快い。私の全身は燃え、風も寒さも感じない。むしろ、冷たい風が強ければ強いほど若い私の身体には快い。

でも、私には男の友達は一人もいない。だから、私は空想の中でだけ、異性に苛められたいと強い風の吹く日は、薄衣のセーラーの上にオーバーを着て、街を歩く。風の方へ向って。こんな私は異常なのだろうか。



△読者サロン▽

M 女性への手紙

水木清一 (横浜)

中川まゆみ様。

貴女の一月号での読者通信拝見致し、出来得るものなら貴女のよ
うな教養の高いお方と、心の支え
となる、例え文通なりとお互いに
慰め合えますれば、これに優る喜
びはなく、以って光栄の至りとす
るもので、無縁とは存じましたが
敢えてこの欄をお借りしてお呼び
かけ致した次第でございます。

空想と現実とは必ずしも一致する
ものではなく強いて一致させるも
のでもない場合もありましょう。
世間一般の観方は、M・Sともあ
る一定のラインを越せば精神異常
者とか精神倒錯症等といわれる訳
ですが、これは何によらず、すべ
て越えてはいけない三十八度線は
堅く守らねばいけない訳で、現代

の同好者間のモラルからしては、
又、エチケツトとしても相互の理
解あるプレイまで発展させる、と
いうより即座に実行に移す事が、
却ってノーマルだと仰言るでし
う。確かに私もそう思います。

内攻的に成ってしまふのは、却
って煩悶しバラ色の青春も灰色の
殻の中に閉じ籠った孤独な世界を
歩んで行くよりほかないのかもし
れません。

それに致しましても十二月号よ
り秀麗なる緊縛姿態をグラビアに
拝見させて頂きました竹野ひろ
子様は、やむにやまれぬ性(さが)
が、偶然にも現実のプレイへとい
うイタズラにもって行ってしまっ
た、と申し上げては失礼千万と叱
られるかもしれませんが、「世間

は広いでしょうからひろ子の本名
でよい」と仰言るあたり、只々決
断力と勇氣ある、本当に割り切っ
たお方というよりほがなく、Sか
らしても羨望の限りと存じます。

何によらず現実に情熱を傾けて
生きてこそ、そこに幸はあり得る
事です、紳士的行動となるとある
程度消極的に成ってしまうのは
やむを得ないでしょうがやはり余
り短兵急な常識を逸脱した行為に
煩悶致すものです。私は男性とし
て、やはり女性に対してはSの傾
向を抱くものです。女性はやはり
貴女のように、Mの要素を多分に
具えもったお方こそ男性側(S)
から観れば美しいと想います。こ
れがM・Sとも四十五度まで傾い
てしまつては、やはりアブノーマ
ルとして、人生の壊滅者にはかな
らないでしょう。相互の理解ある
理性のセーブがあつてこそ、プレ
イも救われるものだと思ひます。
兎に角刊行誌としてのKK誌に
聊かなりと名ある堅い家庭に育つ
た以上、私にとって住所をこの欄
へ公表する事は非常に勇氣を要し
た事です、やむにやまれぬ想ひ
で十一月号に掲載させて頂きまし
た三十才の独身者です。

○アブストラクト○

△人間は皮膚と粘膜との境界線に
快美帯が分布している。舐めると
いうことは、美味しいものを食べる
ということと一脈相通ずる。

△圧点と痛点と冷点と熱点の皮膚
感覚の中で、ある刺激に対して痛
点が快点に変化することがある。

その条件はなにだろうか。
△女性には分娩という生理上、男性
と異った大役を持っているため、
神様は痛覚に対して男性よりも鈍
くされたことが、女性のマゾ化と
ある程度関係があるだろう。

△マゾとサドとを比べて、マゾの
方が外界に対して順応性が大であ
り従って生活力は旺盛といえる。

△もし仮りに、生活環境が次第に
悪化して来たとしたら、マゾの方
が生存の可能性が大である。

△アクティヴは奪うものではなく
て与えるものであり、パッシヴ
は与えるものではなくて、奪うも
のである。

△文明が複雑化すれば、そこに自
ら頹廢を生ずる。非文明的な原始
生活は単純であり、そこに生活の
複雑さはない。文化の爛熟は人間
生活の高度化であつて、そこには
益も害も共存している。

懸賞〔告白と手記と体験〕

黒い夢を抱いて

△女性となって強盗に犯されたいことを
願う、ある青年の手記▽

京 信 司

1

夜半、ふと目ざめると、人声

がする。なんだろう。この深夜

に？ ものもしい声音だ。

「静かにしねえと皆殺しだぞ」

強盗だ。ああ！ 私は、自分

の手で、胸のふくらみをぎゅっ

と抱きしめ、おのゝく。

父と強盗との、やりとりが聞

えてくる。

「娘の寝ている部屋は、どこだ

ッ？」

「娘は、今夜いない。よそへ泊

りに行った」

「嘘をつけ。家さがししてやる

ぞ。見つけたら最後、ただじゃ

おかねえぞ」

「お願いだ、娘には、何もしな

いでくれ」

心臓が、ずきんと冷たく疼く。

あゝ、私は若い女で、相手は

痴漢よりもずっと兇悪な、強盗

なのだ。

私は、頭からすっぽりと掛布

団をかぶって、ふるえる。ミシリ、ミシリ、と恐ろしい足音が近づいて来て、枕もとに立つ。

「起きろ！」

キャツと一声、短い悲鳴を小さく放っただけで、あとは齒の根も合わずに、私は、ぬつと突立っている侵入者を、見上げる。

浮浪者に近いような汚ない身なりの四十男だ。覆面はしていない。赤銅色に陽やけた顔、ばさりと前に垂れた油気のない頭髮。頬に刻みこまれた傷痕が、私の網膜にやきつく。ほんとうに、獐猛そうな、人相の悪さ！

鼻先に突つけられたドキドキ光る刃物。騒ぐと殺すぞ、という真に迫った戦慄の言葉。それよりももっと不気味なのは、濁った眼が野獣のようにきらきらと光り出したことだ。桃色のパジャマに包まれた私の全身を、粘っこい視線が、なで廻している。私は、生きた心地もなくおのゝきながら、そのくせ心の片隅では、正気の沙汰ではない願望が、むくむくと、こみあげている。

——この強盗に、暴行を加えられたい！だから、男がその場では何もせず、私を父の居間に連れて行って、他の家人と同様に縛りあげ、そして同じように汚ない身なりの仲

間と共に、仕事をすましたとき、私はほんとに安堵すると同時に、ふしぎな失望を感じる。

だが、私の傍へずかずかと近づく汗と埃のまじった体臭——はっと顔をあげると、あの傷の四十男の、ぎらつく眼が迫っている。

次の瞬間、私は軽々と抱きあげられ、押入に投げこまれていた父母の悲痛な唸り声をよそに、期待に満ちたような気分さえ、襲われている。

私は身悶えしながら、早くこの傷男に凌辱されてしまいたい、願っている。

その傷男は赤銅色で、そして黒い毛で一面に蔽われていてゴリラのように醜悪なのだ。

不快な猿ぐつわが外され、口中に詰めこまれていた布片が取り去られたかわりに、もっとと不潔な悪臭が、唇をびったりと蔽う。

垢でべたつくような傷男にしっかりと掴まれながら、私は、強盗に押入られた家の若い娘の、残酷な義務に甘んじているような奇妙な恍惚感に浸っている。

体がにわかにすーっと軽くなる。私はやや汗ばんだ中で、夢からさめる。

私はこんな夢を見る自分を、不自然だとは思えない。男に愛されたいなどと夢にも思わないし、女装なんかしたくない。女性に対す

る慕情は人並みにあるし、愚連隊が若い女性に襲いかかる現場を偶然に目撃した後でさえ、そのことを夢には見なかった。

だが、あの傷痕も醜い四十男にだけは、女の身に生まれかわって犯されたいという、理屈では説明のつかないものが、私の心に根強くしみこんでいるのだ。十数年前のあの忌まわしい体験が、私の精神をそんな形で腐蝕してしまったのだ。

2

昭和二十一年の秋——。

当時私は、姫路市から少し東に寄った、とある田舎の小さい町にいた。その町では屈指の名家である叔父の家に、戦時中から疎開をかねて身を寄せていたのだが、戦後もそのままそこから姫路市内の中学校に通っていた。

厳格な父や、どことなく冷たい継母のいる実家よりも、亡き母に似てやさしい叔父のいる家庭のほうが、ずっと楽しかった。義理の叔母も私の我儘をよく聞いてくれたし、四つ年上の従姉は、よい姉さんだったし、私と同年の栄一という男の子がいて、よい遊び相手だった。私も栄一も、同じ中学の同じクラスで、共にまだ一年生だった。

その夜——。

ふっと、珍らしくも夜中に私は目ざめた。広い邸内に、人声を聞いただけでも、何かぎょっと息をのむ思いだった。

「下手にまどつくと、皆殺しになるぜ」

叔父夫婦の部屋のほうから流れくる、その声が、私の心臓を凍結さしてしまった。強盗だ、と思っただけで、しばらくの間は、ものを考える力さえ失ってしまった私だった。

終戦の混乱は、まだまだ回復されてはいない頃だった。空襲の被害もなく、占領軍の姿も見ない所ですら、無警察状態に近い不安な社会の影響を、受けずにはおられなかった。

はじめは、第三国人の横行が恐怖の的だったが、さすがに戦後一年もたつと、白昼公然と倉庫を襲うような事態は影をひそめた。

かわりに登場したのが、雨後の筍のように発生する強盗事件だった。

戦前のように、職業的手腕を誇る泥棒という生易しい存在はなくなって、金がほしいと徒党を組んで、他人の家に押入ることが、はやり出した。警察の力も、ただの強盗事件までは、なかなか手が廻らないことを見こしたのか、それとも顔や指紋を隠すということすら考えない粗暴犯が多かったのか、後日警察

関係の人から聞いた話では、当時県下で発生した強盗事件のうち大半が、覆面もしなければ手袋もはめていなかったという。

叔父の家を襲った強盗たちも、その点では



同じことだった。もっとも、この平和な小さい町では、それまでそのような兇悪犯罪に見舞われたことはなかったので、私たちは血なまぐさい噂を聞いても、他人事のように安心

していたのであった。

だが、その恐怖が現実となった。私は、がくがくふるえる手で、枕を並べている隣の栄一をやり起した。

「おい、強盗だ……五、六人いるらしいぞ。叔父さんたちも、婆やたちも、縛られているらしいぞ」

私が、声を出すだけのゆとりを取戻したのは、叔父の応待ぶりがしっかりと落ちていたからであった。皆殺しの目には、どうやらあわずにすみそうだ。

しかし、恐怖が去ったわけではむろんなく私たちは暗闇の中で抱き合ったまま、ぶるぶるとふるえるばかりだった。

「どうしよう。どうしよう」

勉強はできないが、クラスでもいたずらっ子の右翼に属する栄一も、泣きべそをかくばかりだった。声を出して騒ぐのは危険だし、邸内が広いので、隣近所に容易に届かない。こっそり抜け出して救いを求める勇気など、いざとなれば、まだ子供の私たちにあるわけがなかった。

「坊主どもは、どこに寝ているんだ」

中年者らしい、ダミ声が聞いている。

「子供たちには、乱暴しないでくれ」

叔父が、この部屋を告げている。二つの不気味な足音が廊下から近づいて来る。私たちはそれぞれ掛布団を頭から引つかぶって息を殺していた。そうせずには、いらなかった。枕もとに恐怖の足音が止まった。パチリとスタンダードのスイッチをひねる音。

「起きろ！」

ぱっと、荒っぽく布団をはがされた。

「おとなしくしねえと、殺してしまうぞ！」

それが、あの頬に傷痕のある四十男の声だった。浮浪者まがいの汚ない服装で、油気のない頭髮と、垢に光る上着の袖口が、不潔な感じをいっそう強くする。

栄一のほうを脅していたのは、身なりは同じようなものだったが年はずっと若かった。

二人とも泥のついた地下足袋をシーツの上にふんまえ、刃物を突きつけていた。

栄一の腕をつかんで、すぐ引き立てにかゝった若い男は、ふとつぶやくようにいった。

「このガキは色の黒い奴なのに、そいつは、女みたいな面してやがる。ぼちゃぼちゃと、肌まで白くって、娘っ子みてえだぜ」

これが、その頃私の、いちばん恥ずかしがっていたことだった。病身ではなく、背も高いほうなのに、そんな生まれつきの体質なの

か、肉づきも女のように柔らかく、頬のあたりもふっくらしていた。

「信ちゃん、女ならよかったのに」

よく従姉がいったが、私は、軍国時代に育ったせいで、女のような男と、学校でからかわれるのが、死ぬほど辛かった。

そのくせ私は、女学校五年生（今の高校二年）の従姉がひくピアノを、静かに聞いたり従姉から文学やなんかの、さゝやかな手ほどきを受けるのが好きだった。だから従姉も、ボールばかりいじくっている栄一よりも、私のほうを実の弟のように可愛がった。

若い強盗が、栄一を部屋から連れ去ろうとしているのに、傷の四十男は、じっと私を見下したまゝだった。

栄一はパジャマを着て寝るが、私はそれが肌に合わず、ふつうの寝巻だった。その裾がはだけて、パンツまでのぞいていた。むろん男の私は、なんら恥ずかしいことはなかったが、むき出しとなった太腿のあたりへ、妙に粘っこい視線が注がれるのに気づいたとき、なにか異様な身ぶるいを感じた。

険悪にとがった赤銅色の顔を、私はただふるえながら見上げるだけだったが、濁った眼が気味悪くきらつくのが、形容しがたい不安

の中で、印象的だった。

やがて私も、栄一のあとを追って、叔父夫婦の寝室へ連れて行かれた。

既に、殆んどの家人が、そこに集められていた。中年をすぎた女中が二人と婆やは、手足を縛られ、猿ぐつわをはめられて、六畳の間の片隅へ押しこまれていた。

叔父と叔母は、二つ並べて敷かれた寝床の上に坐っていたが、これは上半身を縛られていただけだった。

「信ちゃんも栄一も、おとなしくしているんだ。こわいことは、ないのだから」

と叔父はいゝ、

「子供は、手荒く扱わないでくれ」と頼んだ。しかし、強盗たちは容赦なく、

私たちを嚴重に縛りあげた。私は栄一と並んで、女中たちとは反対側の、押入れのほうの隅に、窮屈な恰好で腰を下ろしていた。むしろ女中たちのように、転がしてくれたほうが楽なのに、と私は思った。

強盗は全部で五人だった。

みんな肉体労働を戸外でしているのか、そろって赤銅色の膚をしていた。服装がよれよれの汚ないことも同じだった。四人は作業服や作業シャツを着ていたが、一人だけ薄黒く

シミのついた復員服を身につけていた。

がっしりといちばん頑丈な体格をした、四十ぐらいの男だった。四角ばった顔の眼が残忍そうにぎよろりと光る。見るからに兇悪そうな人相をそなえていた。この男が頭分かしらぶんのようであった。

頭分の復員服と、傷のある強盗だけが、四十男で、あとの三人は、三十にはまだまだ間があるようだった。しかし、手に手に刃物を持った彼等の、見るからに低能そうな、それだけに野蛮な感じの強い顔を見ると、とても青年などという形容は、つけられなかった。「もう一人、娘がいるはずだ。おやじ、娘の寝ている部屋は、どこだ」

先程からのダミ声は、この復員服だった。

「娘は、娘は、いないのだ、今夜は」

「ええそうです。親戚の家へ行ったのです」

叔父と叔母は、不安な声を出していた。

「嘘をつけ！」

復員服は、叔父の腰のあたりを、乱暴にも蹴った。

「よし、家さがししてやらあ。居やがったらたゞじゃおかねえぞ。お前たちもそうだ」

兇暴に、眼がぎよろりと光った。叔父は、苦しそうな表情で、ついに折れた。

「娘は二階に、寝ている。あ、待ってくれ。」

お願いだ、娘には何もしないでくれ」

この言葉が、かえって強盗に刺戟を与えたのかも知れない。しかしそのとき私には、叔父の心配が、半分もわかっていなかった。

中学一年といえは、性に対しての関心が、次第に高まりつゝある年頃だ。私も栄一も、その方面の噂話に耳を傾けると、異常なほど好奇心をそゝられたものだった。だが、家庭も学校も、その当時でもしつけのきびしい所だったせい、私たちの性の知識は、こっけいなほど浅かった。

だから、なぜ叔父が特に従姉の身にだけ、そう不安がるのか、もうひとつピンと来なかった。強盗というものは、人を殺したり金品を奪ったりする恐いものであるが、ただ、それだけの存在だと思っていた。恐怖のあまり、他に考えが及ぶゆとりがなかったせいもあった。

復員服の四十男が、自らの手で、従姉を二階から連れ下して来た。

「お父さま……」

部屋の中へ一歩ふみこむと、従姉は今にも泣き出しそうに、蒼白な顔をゆがめた。その腕をしっかりとつかまえながら、復員服の強盗

は、赤い縦縞のついた桃色のパジャマに包まれた従姉の、顔から胸のふくらみ、そして白い素足にいたるまで、無遠慮にじろじろと眺めていた。

「おやじが心配しやがるだけあって、いいきりようをしてやがるぜ。昼間ちらっと見たときよりよ、ずっとべっぴんだ」

他の三人の視線も、わなわなふるえている従姉に集中した。たゞ、あの傷男だけは、ちらと眺めただけであった。

叔父と叔母が、不安そのものゝ表情になったが、復員服はすぐ従姉を縛りにかゝった。私たちと同じように、猿ぐつわまではめられた従姉は、私の隣へ押しやられた。

叔父と叔母とだけが、強盗たちに、金品のある所を案内させられた。その低いやりとりをこちらで聞きながら、私たちは生きた心地もしなかった。部屋には、一人の強盗の姿も見えはしなかったけれども、叔父たちがいつ傷つけられるかも知れないという恐怖が、重苦しく垂れこめていたのだ。

「もっと金があるだろう！ 隠すと、こいつで、ズブリと一突きだぞ」

そんな言葉が聞えてくるたびに、私は心臓がしめつけられる思いだった。秋もまだ始め

なのに、夜の空気がまるで真冬のように、寝巻を通して、背中に冷たくしみこんでくる思いがする。従姉も同じらしい。桃色の肩が、絶えず小さきみにふるえていた。

私をまん中にして、従姉と栄一との三人は暖を求めるかのように、いつしか肩をくっつけあっていた。私は、縄をかけられたが為に、よけいふくらんでみえる従姉の胸の隆起を、痛々しく眺めた。

その頃は、数え年で呼んでいたのだから、女学校五年生で十八才の従姉は、誕生日は夏だから、満年令だと十七になる。弟の栄一と違って勉強もよくでき、一年のときから優等で、望みは来年三月、首席で卒業することだった。まだ戦前の気風が強く残っていた、その当時のその地方では、それが縁談にとって大きな有利条件でもあった。

もっとも、そんなことをしないでも、背もすらりと高く、この夏、水着姿で見せたように成熟に達した肉体美をそなえ、家も相当以上に富裕な従姉には、早くもいくつかの縁談が申込まれていたのだ。

叔父と叔母が、連れ戻されて来た。二人とも、足と口とを嚴重に縛られ、押入れの中に投げこまれた。

強盗たちが仕事をすましたとき、私は、初めてほっと一息つくことができた。

「さあ、いゝかげんに早く切りあげようぜ。お楽しみが待ってるからな」

復員服が、こちらを見てにたりと笑い、それから仲間をうながして、台所のほうへ姿を消した。

いよいよ、立去るのだ。やっと、恐怖から解放される。そう思って安堵したとたんに、今まではそれほど感じなかった身の不自由さが、ひしひしとこたえてきた。

従姉も栄一も、同じ思いらしかった。従姉はしきりにもぞもぞしていた。ちらと眸が合うと、あゝこわかったとお互に眼で語り合い、大きな溜息を、猿ぐつわの下から洩らすのだった。

3

強盗たちが部屋に戻って来たとき、私はがっかりした。酒の瓶や、コップを手にしていなかった。まだ、ずうずうしく居すわるつもりなのか。

「こんな、広い、りっぱな家へ入ったのは、初めてだぜ」

タバコまでふかしつゝ、強盗たちは、そんなことをいった。そして、私のほうへ、じろ

じろと不気味な視線を注ぐのだ。

「いゝ寝巻、着てやがる」

私は、ぞくつと肩をすくめた。粘っこい視線が集中しているのは、私と肩を寄せ合っているうつむいている従姉なのだ、ということをも、まだ私は悟れなかった。

「どれ、おたのしみに、かゝるとするか」のっそりと、復員服の強盗が立上った。ずかずかと、近づいてくる。

はっと、恐怖で呼吸が止まったとき、私の体はぐいと押しのけられていた。

汗と埃と、そして得体の知れぬ不快な臭いが、むっと鼻腔をついた。その体臭に包みこまれて、あつという間に軽々と抱きあげられた従姉の顔は、極度の恐怖と驚愕とに歪んでいた。

「おやじ、金や物を貰った礼に、娘にいゝことを、たっぷりと教えてやるぜ」

従姉の体を、叔父の寝床にどざりと置いた復員服は、嘲けるようにいった。

「おれたちは、これがたのしみでやって来たんだ」

従姉を見下して、舌なめずりしながら、「こんなきれいな、しかもまだ女学生だぜ」

えへへへ、と世にも淫卑に笑った。
それから後は、少年の私の魂を糞尿の中へ押しこんで足でふみつけたような、衝撃の連続が眼前の無残な光景となって展開した。

「いやア！ お母さまア」

従姉は、猿ぐつわを外されて初めて悲鳴をあげたが、すぐそれは、復員服の唇の陰に消えてしまい、そのまゝ、口の中に何かを詰めこまれたような唸き声に変わってしまった。

それから、よってたかつて桃色のパジャマが剥ぎ取られる。

「いや、いやア、お父さまア」

泣き叫んで身悶えする従姉、押入れの中の叔父夫婦は、悲痛な唸き声をあげていた。

ふと私は、あの傷のある男だけが、この悪魔の饗宴に参加していないのを知った。

彼は、ひとり離れて、酒をついだコップのふちをなめていた。

それをふしぎに思っているひまは、なかった。私の関心は、復員服の四十男の醜悪さに、集中していた。

そのとき、私はむんずと肩をつかま

れたのだ。私は従姉にばかり注意が奪われていた。だから、あの傷痕のある四十男が、異常に目をきらきらさせて近づいたのを、そのとき初めて知ったのだった。

私は、従姉がそうされたように軽々と抱きあげられ、従姉のすぐ横の、叔母の夜具の上へ、どきりと放り出された。
形容しがたい恐怖と、わけのわからぬ驚愕



に、猿ぐつわを外されても、私は声も出なかった。

傷男の唇が迫って来たとき、私はたゞ驚きに目を見はっていた。男が男に接吻するなんて。しかも、従姉という女を傍らに置きながら。不潔で大きい粘膜が、私の唇をぴったりと蔽った。タバコのヤニの臭いと、酒のプーンとした香。それがくさい唾液でまぜられて私はゲゲツと嘔吐をもよおしていた。

私は、自分が犬に変えられたような気持ちを、そのときから神経の一部に永久に刻みこまれたのだ。

4

夜が白んだ頃、やっと私と従姉とは、解放された。野獣どもは、息も絶え絶えにあえいでいる哀れな生け贄たちを荷物のように再び縛り上げ、にたにたと舌なめずりしつゝ、ゆうゆうと引き揚げていった。

不幸中のさいわいは、婆やお松が縄をゆるめることができたことだった。老婆と侮って、縛り方がゆるかったせいかも知れない。そうでなければ、縄をときに来た近所の人の眼に、もっとも恥ずべき姿をさらけ出して、従姉は自殺でもしたにちがいがなかった。いや

私だって、そうしたかも知れない。

私は、数日間、床についた。動物として扱われた不潔な屈辱が、ひどい打撃を私に与えた。私は半病人になった。

従姉にいたっては、ひと月たっても、床から離れられなかった。世間の目を恐れて、口の固い、親戚同様の老医師を大阪から呼び寄せるまでは、素人手当ですませたのが悪かった。強盗は、悪い病氣まで置いていった。

それを機会に、私は忌まわしい記憶の残るこの家を離れ、父のもとに戻った。思いは従姉も同じと見え、女学校の卒業も待たずに、一家は姫路市内に移転した。

従姉と再び会ったのは、翌々年の春休のときであった。叔母がやってきて、こっそり私に囁いた。

「信ちゃん、なんとか美佐子を立直らせてくれない」

従姉には、恰好の縁談が生じていた。叔母は、娘の忌まわしい秘密を見抜くことのできないウブな青年を、相手に選んだのにちがいがなかった。

従姉も、その青年には好意を持っているらしい。しかし結婚には、自信がないという。「あのことが、祟っているのよ。結婚するの

は、いやだと云い張ってね」

「でも、僕がどうして、美佐子姉さんを？」

「同じような目に会った者同士で、慰さめ合うのがいちばんだと、お豊がいうの。美佐子も信ちゃんと、十日でいゝから、昔のようにピアノでもひいて遊びたいというのよ」

お豊というのは、あのとき、その場にいた女中の、年上のほうで、美佐子の乳母なのであった。

私は、従姉がひどくはでに変ったのに、驚いた。こつてりと口紅を塗り、厚化粧をし、香水の匂をぶんぶんさせている。

「私がやけになつて、墮落しているとでも思っているのね、信ちゃん」

従姉は、淋しく笑った。

「男とふしだらができるほうが、ずっといいわ。私は接吻ひとつ、できないのよ。あの不潔な記憶に脅かされるの」

一年半の間に、従姉の体は、完全に成熟していた。前よりも張り出した胸にも、むっちりとした豊かな曲線をえがいている腰にも、艶美さがみなぎっている。この白く、つややかな肌の下の血管に、四人の豚のような男たちの汚れを含んでいるなどゝは、どうしても思えなかった。

「信ちゃんも、いゝ体格になったのね。でも相変らず、色は女のように白いまゝね。すてきだわ」

従姉は、熱っぽく私の手を握りしめた。

従姉は、私が帰るのを、堂々と駅頭まで見送った。晴れ晴れとした顔だった。しかも、婚約がととのうばかりになった青年と、腕を組んで、幸福そうに笑っていた。

あの異常な体験以来、私の性に対する関心は病的に高まったが、まだその機会には恵ま

れなかった。

私が、娘であったならば……。女の身で、あの傷男に凌辱されたのであったならば……

そのほうが同じことなら、ずっとましだ。

それなら、従姉のまねもできるのに。

その気持が、いつの間にか夢となって、おりにふれて私を女に変えるらしい。

私は、昨夜も夢を見た。

夢の中の私は、あのとときの従姉のように、桃色のパジャマを着ている。相手の強盗は、

きまって傷男だ。そして私は、この四十男に犯されたいと思い、どこかで夢であることを、かすかに知りながら、それが続くことを願っている。

女となった私は傷男に組み敷かれる。

従姉がされたようなことが傷男によって、私の女体に加えられて行く。私は、いっしか恍惚感に浸って行く……。

(了)

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(9×6.5寸) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

Y 6	Y 5	Y 4	Y 3	Y 2	Y 1
麗しの緊縛裸像	浴室股間縛り	見事な飾り物	観念した胡坐	乱れ黒髪裸見本	全裸荷造棒しぼり
(愛川悦子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)

Y 22	Y 21	Y 20	Y 19	Y 18	Y 17	Y 16	Y 15	Y 14	Y 13	Y 12	Y 11	Y 10	Y 9	Y 8	Y 7
退ましきヒツプ	追いつめられた裸女	豊満双丘くらべ	全裸全身自慢	庭園ヌード縛り	セーラー後手吊り	全裸脚股間縛り	ヌード股間しぼり	初々しき裸全身像	蒲団裏裸またぎ	全裸フットンむし	なまめかしき緊縛	全裸ねの縛り	逆エビ後手足吊り	裸身の捕われ人	逆十字後手縛
(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(川辺登子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(岩井知子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(花坂道子)	(田中芳代)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)

Y 41	Y 40	Y 39	Y 38	Y 37	Y 36	Y 35	Y 34	Y 33	Y 32	Y 31	Y 30	Y 29	Y 28	Y 27	Y 26	Y 25	Y 24	Y 23
ハダカ縛り人形	強烈後手首縛	椅子またぎ後手	妖艶闊のしぼり	全裸椅子またぎ	亀甲股間縛正面	縛り腰巻色模様	開股一番一直線	ベツト縛りのポーズ	全裸強烈股間縛	囚女後手柱縛り	鎖座する縛り女神	全裸縛りの全身	むしられたスロース	もつこれで許して	麗人受難の巻	胸のポリウム自慢	縛り正面正坐	大の字晒し
(絹川文代)	(田原美佐子)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(平野笑子)	(平野笑子)	(花坂道子)	(益田房子)	(益田房子)	(愛川悦子)	(絹川文代)	(絹川文代)

Y 60	Y 59	Y 58	Y 57	Y 56	Y 55	Y 54	Y 53	Y 52	Y 51	Y 50	Y 49	Y 48	Y 47	Y 46	Y 45	Y 44	Y 43	Y 42
エビ責めの表情	聖壇のさらし者	股間縛開股の絵	前手錠全裸像	膨隆突出した臀部	緊縛女体の開陳	カメラに晒す全裸	不行儀姿態の美	柱縛り観念の図	手吊り裸身の乱舞	ワンピース縛り	長襦袢後手しぼり	振袖令嬢後手責め	全裸寝台羞恥責め	全裸後手壁ハリツケ	後手立木吊り	全裸変形股間正面	あられもなき開股	濃艶ハダカ縛り
(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(愛川悦子)	(村井知可子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(絹川文代)

願望告白

ドレイ・ボーイ

津久井 毅



僕は二十一才の青年です。体格も顔も自分で云うのは変だけど、まあ一人前です。足も割と長い方です。頭はさっぱりとGIカットにして居ます。僕、Mなんです。

それも縄に憑かれているんです。唯同性の人に責められたいんです。三十才位までの男らしい人に責められ、縛られる事が出来たらなあと思っています。そんなイカ

ス男性に僕は奉仕したいのです。ハウスボーイとして酷使して下さい。僕をドレイ的ボーイとして使して下さい。

僕が出来たら格子の入った小さな(一坪位)室と云うよりも牢へ入れて下さい。そして仕事のある時は引き出して酷使され、仕事をサボったりミスをした時は充分にお仕置して矯正して下さい。服としては上半身は裸、又はシャツ一枚、下半身は素肌に直接Gパン(特につよく食い込む程ピッタリしたもの)のみはかせて下さい。それはボーイに最適です。非常に丈夫です。尻、ももから足にかけて、身体の線がクッキリと出ます。さて、ボーイの生活は次のよう

にさせて下さい。

朝六時に起床、直ちに牢内を掃除させられます。そしてそれがすむと、朝食を与えられた後、外へ引き出されます。と云ってもドレイの身です。反抗出来ぬ様手錠をかけて下さい。そして足には短い鎖で結ばれた二つの輪をかけて下さい。これは早く歩けぬようにする為です。そして家の掃除等に支障のない限りはこのまゝで仕事をさせて下さい。出来るだけ多くの苦痛を与えられるのは当り前なのです。ドレイ・ボーイにふさわしい事です。唯場合によって手錠の鎖の長さを調整するだけです。

次にドレイの言葉を制限して下さい。それは次の二つです。

一、有難うございます(又は有難うございました) 二、ハイ。とこれだけです。一は何か与えられる時、それがお仕置であっても同じです。二は何か命ぜられた時です。ドレイボーイには他に言葉の必要がありません。何故なら僕は

貴方の命ずるまゝに行動し、奉仕しなければならぬからです。

仕事の無い時（そんな事は少いと思いますが）は、何卒僕の身体を有効に使って下さい。次に一、二その例を挙げて見ます。

A、人間灯台

僕と云うドレイ・ボーイが居るのに電灯等使うのは面白くありません。時には座興にこんな事をさせて下さい。先ず僕を後手に縛って下さい。そして背中に棒をくくり付け、その先にローソクを結びつけて火をとますのです。僕は縛られたまゝ何時間でも灯台として動かずに立たされ続けるのです。しかも壁に向かって立たされるのです。一寸でも動けば直ちに尻を竹竿等でピシリと打たれます。一回につきムチを五ツ下さい。

B、人間椅子

これは僕を四つんばいにさせ、その上にクッションを置き、椅子としてお使いになることです。勿論、失礼にもドレイの身でちよっ

とでも動けば、直ちにお仕置を加えて下さい。一回につきムチ十に処して下さい。前の人間灯台に比べれば楽なので、それに反した時のお仕置はそれだけ重くして下さい。

亦、反抗したり、仕事を怠けたりした時は、充分に矯正の為にお仕置下さい。これには縄が是非必要です。ギリギリと縛り上げて罰して下さい。ドレイ・ボーイとしてどんな処分でも喜んで受けます。次に二、三その例を示します。

A、後手棒縛り

ドレイ・ボーイを縛る時は、厳重に縄目をかけて下さい。今日、囚人等を縛る様な腰縄だけでは足りません。先ず徳川時代の囚人の様に、後手に高手小手に縛り、その上足をもキツクキツク縛って頂きます。唯でさえGパンでピッチリと包まれた尻からも、この縄目が食い込むので、倒れない以上は動こうとしても動けるものではありません。そしてその上で柱に

なり、又色々の器物を利用して、色々のポーズにくくり付けて下さい。又、竹竿等で尻をピシピシと打って下さい。時間は三時間位まで。

B、タヌキ縛り

タヌキ等をおつかぐ時に四つ足を一つにまとめて棒にくくりつけるのを絵で見ますが、その様に僕の四肢を棒の一つに縛って頂く罰です。これは割に楽なお仕事ですが、時間は長くして下さい。そして、その間は、食事も与えないで下さい。又、その時の気分でも尻にムチを下さしても良いです。僕はその間用便（但し大便は除く）も許されず、不自由な形でこの刑を甘受致します。何時間でも充分にお仕置して下さい。もし粗相してしま

ってもそのままにして置いて下さい。多少の気持悪さは、お仕置として当然の事です。時間は十時間位。

C、木馬責め

これも後手縛りにした上で、木

馬責めに掛けて下さい。僕は中腰の形で木馬（それは三角にとがっている）にまたがせられて縄で足を固定されます。唯、このまゝでは木馬との間に少し間があり、尻は木馬につきません。ただ、中腰のまゝ尻をピシピシと打たれた後、長時間放置されるので、段々とくたびれて来ます。そうするとどうしても尻が下って終には木馬の痛さに耐えながら腰を下してしまい、唯でさえ縄目に痛めつけられている上に木馬の三角にとがった先端が食い込んで来ます。しかし余りにも痛いので又腰を浮かします。このようにしながらも、お仕置は続けられて行くのです。時間は六時間位。

このようなお仕置と、酷使を甘んじて受け、しかも奉仕のみが許される唯一の行動であるような、ドレイ的ボーイになりたいと願っているのです。イカスお兄様、どうか僕の前に現れて、僕を責めてやって下さい。



〔緊縛映画雑感〕

私がプロデューサーなら

こんな映画をつくりたい

南方佳男

殆んど二年近く、映画から遠ざかってしまった。今年などは、ただかだか五十本程度しか見ていないようだ。一頃の二百二、三十本も見ていた頃とは雲泥の差だ。

忙しいせいでもある。

映画への興味を失った——ことはないだろう。ただ、当分、脚本を書かないから、情熱が薄らいだ

ような気もするが、ともかく遠ざかっているのである。

その間に随分、スターのうつりかわりがあったようだ。

新東宝（私にとっては、一番有難い映画をつくってくれていた会社だった）が……から、各社へ分散したせいばかりではないだろう。おおかたは新陳代謝のようだ。

女優さんも沢山新しい人がでてきたようである。そして時代劇では、例外なくよく縛られているようである。私の秘蔵の映画メモをとり出して、数少いことし一年間に見た映画から、縛られた女優さん達を抜き出してみる。

「鉄火大名」花園ひろみ、「若殿千両肌」青山京子、藤田佳子、その

他大勢「尾張の暴れ獅子」青山京子「剣豪天狗まつり」大川恵子

「又四郎行状記・神変美女蝙蝠」

青山京子、藤田佳子、久我恵子

「忍術使と三人娘」水木淳子、三

原有美子、永井三津子、その他十

人ばかり「濡れ髪小姓捕物帳」中

里阿津子、三沢あけみ、など「丹

下左膳・濡れ髪一刀流」丘さとみ、

桜町弘子「宮本武蔵・第一部」木

暮実千代、風見章子「ちゃりんこ

街道」青山京子「葵の暴れん坊」

磯村みどり「霧丸霧がくれ・南海

の狼」花園ひろみ、藤田佳子「続

黄金孔雀城・七人の騎士」第二部、

第三部」三沢あけみ、三原有美子、

水原みゆき「素っ飛び二人三脚」

久我恵子「柳生十番勝負・無頼の

谷」中里阿津子「百万両秘帳・後

編」円山栄子、千原しのぶ、星美

智子、その他大勢「お奉行さまと

娘たち」千原しのぶ、三原有美子

「お役者変化捕物帳・血どくろ屋

敷」扇町景子「柳生武芸帳・夜ざ

くら秘剣」花園ひろみ「朝霧街道」

北沢典子「逆襲天の橋立」扇町景

子、水原みゆき「妖花伝」加茂良

子、三田登喜子「風と雲と砦」水

谷良重「刺客屋敷」加茂良子「好

色一代男」近藤美恵子、中村玉緒

「美少年変化」尾崎和江「竜の岬

の決斗」尾崎和江「高原の掠奪者」

万里昌代「三つの竜の刺青」白木

マリ「助っ人家業」中原早苗――

以上。

東映も大川恵子、丘さとみ、桜

町弘子の三人娘が大作などに廻っ

ているせいか縛られる機会が目立

って減っているようだし、大映も

山本富士子、浦路洋子、宇治みさ

子の縛られ姿がない。松竹は時代

劇が消えたのだから捜しようがな

い。瑤峨三智子、高千穂ひずるも

過去の人というのか。

また、見たたえのある縛りシー

ンも少なくなった。ことしの作品

でいままなお記憶に残っているのは

「好色一代男」の近藤美恵子のオ

イランが、男に義理をたてて、女

郎屋の亭主の折檻をうける場面。

腰布一枚の半裸（乳房は木の枝蔭

でうまくかくし、ふくらみだけみ

せていたが……）で立樹に立ち姿

で後手グルグル巻きにされ、青竹

で打たれ、悶えながら意地を通す

ところは見事だった。

それから厳密には縛りでなく折

檻だけだが、「宮本武蔵」で木暮

実千代のお甲後家が、戦場の死骸

から金目のものを盗んだため、野

盗の連中に責められる。縄を口に

かまされ、その縄を後頭部で締め

あげられて悲鳴をあげてのたうつ

ところは見たたえがした。

あとは、これといったものがな

い。しいていえば「剣豪天狗まつ

り」で大川恵子の演技の上達ぶり

や「高原の掠奪者」の万里昌代の

表情などはマズマズいただいてお

こう。

見たいような作品が無いから映

画への足が遠くなったのだと思う

んだ――が、しかし内容は見なけ

れば判らないのだから、この理屈

はこじつけになりそう。

それにしても、最近の若手監督

の作品は綺麗ごと過ぎる。もっと

感情をむきだしにした演出をすれ

ば、責めの場面、縛りの場面にそ

れらしい雰囲気が見られると思う

んだが、どうも表面的な空々しい

サド・シーンしか描いてくれない

ようである。そういう点、伊藤大

輔氏などは私の尊敬している監督

である。荒ら事師の第一人者であ

る。まだ見ていないが氏の最近作

「反逆児」は是非ともみたい。シ

ナリオは拝見したが、桜町弘子の

美也が折檻を受けるシーンを想像

して心をときめかせている。

○

最近、自分が創作をおこたって

いるせいか、小説をよく読む。

好きな作家は南条範夫、山田風

太郎、角田喜久雄、柴田錬三郎、

ETC……。山田風太郎氏の作品

はとくによく読む。同じ忍者もの

が得意な司馬遼太郎氏の作品も読

むが、山田氏のほうが心をひく。

ところで氏の作品は不思議と映

画化されない。

画面の構成上、非常に難しいと

ころが多いからかも知れない。

それでも私の知る限り、最近二

度ばかり企画された作品がある。

東映で東千代之介主演の「江戸忍

法帳」と、ごく近々に大映が山本

富士子、本郷功次郎で「おんな牢

秘抄」改題の「美女判官」である。

偶然といおうか二作品とも、私が映画化してみたいと思った作品だった。そしていろいろ書き直しを考えてみたものである。

しかし、その後二つとも、とんと着手する話を聞かない。

「江戸忍法帳」は昨年正月ごろの話だから、おそろくたち消えになったものだろう。登場人物に特異な体質の忍者がいたり、ラストの刑場の場面など、碟にされる娘が、いつの間にかお姫様にすりかわっているのを気付かない——などということ、映画では容易にどこまかせない問題点だろう。それほど良く似かよった二人の女優は東映にはいないし、一人



東映作品「いれずみ判官」

木暮実千代
丘さとみ

二役も一寸無理な場面である。しかし、そこらは何とか工夫できないものだろうか。全編を通じて忠実に描いたら、私たちを満足させるシーンでは幾らでもあるようだ。

「美女判官」すなはち原作「おんな牢秘抄」は、オムニバス型式の内容である。大岡越前守の娘が、恋人と結婚したいばかりに越前と賭をし、死刑の判決を受けていた五人の女囚の無実をあばく。その結果、天一坊事件の裏をさぐり当てるというものだ。

女囚一人の事件でとくに女牢の中の様子を書かれ、興味を

ひいた。ことに奉行の娘が女囚に化けて牢に入り、伝法口調でまくしたてるところは私の好み。

八……三日ばかり穿鑿所へ呼び出されていたお竜だが、相かわらず責苦のあともみえない、けろりとしたきれいな顔だ。しかしその胸には南町奉行所専用の紺染め縄がかけられ、その縄じりを八丁堀同心が厳然とにぎっている。……Vといった一部分の文章など、囚衣にピンクと紺染め縄がうたれ、連行されて行く美女を想像しただけで楽しくなる。

しかし、この作品も、原作がオムニバス型式で、長編化するおそれもあり、現実的に映画化困難な点が多いのだろうが、やはり是非とも実現してもらいたい。

一寸、蛇足だが、この作品のヒロインの姫君お竜（実は奉行の娘霞）の役が、山本富士子では何だか不満だ。この役は美人でないと駄目ではあるが、愛くるしいというところが必要条件。その点、お富

士さんでは才をとり過ぎ（失礼だが）ているようだ。私ならさしずめ……なかなか適役はいないようだが、富士真奈美あたりに、思いきり茶目っぽくやってもらいたい感じである。

○

虚無的な主人公を描くので、柴田錬三郎氏の作品も好きである。

「源氏九郎颯爽記」だとか「孤剣は折れず」など氏の作品は多く映画化されている。

こんど東映は正月映画に氏の作品の「赤い影法師」を大川橋蔵主演で製作するらしい。幕府の隠密と優れた女忍者の間に生れ、深山で人間性を身につけぬように育てられた「影」とよばれる忍者を描いたものだ。この「赤い影法師」の続編に「南国群狼伝」がある。引き続き、これも映画化してもらいたい。

「南国群狼伝」に登場する「斉の宮」という高貴な女性が、切支丹信者と間違われ、虐殺される信者

の群れに混って逆さ磔にされる。

（無論「影」が救出するが……）

映画の上では逆さ磔にはできないだろうが、磔でも火焙りでもよい。ともかく多数の切支丹処刑シーンをスクリーンにあらわしてもらいたい希望だ。かつての「青銅の基

督」のラスト・シーンを上廻わる圧巻でありたいものだ。そして、薄幸のヒロイン「斉の宮」には、もし本当に引退しないのなら大川恵子あたり、お得意の役柄だけに期待がもてそうである。

○

大映が映画化権をもっているという角田喜久雄氏の「悪霊の城」も製作が待ち遠いが、これも実現の可能性には疑問符がうたれる。

とはいっても、角田氏の作品は「花太郎呪文」「風雲将棋谷」「閻太郎変化」「妖花伝」などかなり多く製作されているが、いつも大幅に書き直され失望するものが多い。そういった意味では「悪霊の城」も、手直しされてスクリー

ンに登場することにも成ろうが、それでは心残りである。

ヒロインが常に恐怖の底を追いまくられるという角田氏独特のストーリーを、そのまま描く作品はできないものか。

地下の穴倉の中で、上半身裸の娘が、両手を左右に開いて杭に縛られ、ポトリポトリとしたたる、つめたい地下水を浅く傷つけられた乳房の間に受け、やがてその傷から身体が腐敗し、死に追いやられる——といった、角田氏一流の責め場はどう工夫してもできないものだろうか……。

○

加賀淳子女史の「海賊大名」も映画化したい。兄や伯父などへのにくしみから、何ら罪のない女性があぐい目にあわねばならない——という戦国時代の女性のあわれさを、画面で見たいものだ。

筋書きの中に答打たれたり、犯されたり、恐しい言葉でおびやかされたりする女性が登場する。だ

が決して画面にできないような技術的な難かしさはないようだし、題名のわりに海上シーンもセット撮影ができる程度と思えるので、いまから企画しても遅くはないと提唱しよう。

○

昨夜、洋画の「恐怖の振子」を見る。——この種の映画が、邦画にもできないものか。勿論、現代劇では難しい面がありそうだが、時代劇の、それも怪談ものシリーズに活用したい。

おそらく、そこに目をつけているプロデューサーはあることだろう。できれば、一番危険な目にあう役は女性でありたい——。

○

洋画の模倣——ということは何か規約のようなものがあって出ないのだろうか。かまわないのなら幾らでもあることと思う。

例えば「三銃士」「アイパンホー」など王朝ものは、そのまま日本の戦国時代にあてはめることが

できると思う。

脚本家の村松道平氏が「勝手につくらせてくれるなら、怪盗ルパンの日本版を時代劇化したい」と、二、三年前の同人雑誌に書いていたことを思い出した。実は私も、ルパンものを研究している。日本左衛門(駄右衛門が本当か?)なら、ルパンと対抗できそうだが……。

そのルパン小説の一つに「三十棺桶島」というのがあった。

迷信狂のある貴族が、予言を信じ、ある自分の所領している島で生じる予言通りのできごとに魅かれて、とうとう予言に従い、自分の妻を磔にしてしまう。ところがルパンの活躍で実際に磔にされて殺されたのは、すりかえられていた悪女の妾だったというオチがついている。この文のはじめほうに書いた「江戸忍法帳」の時と同様、

人物のすりかえは映画では難しいようだが、この「三十棺桶島」では、大きな猿轡をかまされて顔が

わからないはずになっているから、この問題点は解消できそうである。

私の空想の一つである。

○

時代劇の責め場というと、女性の場合たいいてい後手縛りで笞打ち、後手吊りなど相場が決まっている。男責めはかなり変わったものを見る事ができるが、私のように、男責めにはほとんど興味が無い者には、女責めも同様にあつかってもらいたいと要望する。

水責め(口から流し込むもの) 双手吊り、駿河問いは無理でもエビ縛り、烙印押し、ソロバン責めも、石をだかすだけでなく、ちゃんと膝下に三角の木を敷いてもらいたい。座るところだけ、ゴム製にでもしてゴマカスくらいのは出来るはずである。

○

そういえば、現代劇でも、アクション・ドラマには、もっと女性を責めるシーンをとり入れて、損

はないはずである。

日活の作品など時代活劇と同じ筋書きのものが多いのだから、遠慮せず、女の責め場をみせたらどうだろう。

姫君II令嬢、B・GII武家娘。

そうすれば、ほとんど縛られたことのない女優さん達——日活なら芦川いずみ、笹森礼子、東宝なら白川由美、水野久美、大映なら叶順子、大空真弓、東映なら三田佳子、小宮光江、松竹なら桑野みゆき、瞳麗子……ETC、の縛りがみられそうなのだが。

それから責め場も、グンとすさまじいのをとり入れることは、プロデューサーの意欲一つで考えられることだと思う。

東映の佐久間良子がシュミーズ姿で木馬責めにされたり大映の弓恵子や日活の清水まゆみなどが、パンティとブラジャーというあられもない姿で、X型の刑架に縛られ、ムチ打たれたり、焼ゴテをあてられて悶えるようなサド場面は

空想しただけでも楽しい。

いや大映あたり、前にも書いた「好色一代男」の近藤美恵子の例もあるのだから、東京撮影所がその気になれば、裸になれている新入社の筑波久子、万里昌代らを使えるはずだし、日活だって中原早苗や白木マリなど、こんな私刑シーンに応じられるだけの訓練?はできているといいたいのだが……

○

これまで度々各地の投稿者が書かれていたことだが、私も――。

映画における縛り方のだらしなさ加減への批判。くどいようだが残念なことである。とくに肝心な悲壮な雰囲気盛りあげるべきときに、目立つことが多い。

磔刑などその代表的。

いやこれは縛り方だけの問題ではない。

磔縛りなどというのは、縛りのうちでもかなり派手なものだから画面で受ける印象は、圧感的でなければならぬはずである。

日活作品 「銃声に浮ぶ顔」

丘野美子



「」ところがたいていの場合、架木のうえで両手をひろげて形をつくっている程度、縛っているという感じさえ受けないものが多い。

演技者の意欲のとはしきか、演

出の手加減か——ともかく絶対の自由を奪われて死に追いやられる恐怖と、女性の場合、あんな姿になることは多少の羞恥心もあってよいと思う。

これを描くには、死から逃がれようと荒れ狂う女を、荒らくれ男たちが数人がかりで手とり足とり柱に押えつけて縛りあげて行く過程や、磔柱のうえで髪もおどろにみじめに泣き叫び悶える女の姿を撮してみるくらいの親切心がなければ、迫力のある作品にはならないはずである。

それから十から十までリアルにとはいえないが、お姫様が振り袖姿で磔、というのは困る。やっぱり囚衣をきるか、下着に剣がれるか、せめて帷子姿でありたい。それから胸にも縄をかけ、着衣の脇腹を一部裂りとる。槍の刺さるのは脇腹だから、そのあたりだけ定法通り少しやぶりとることだ。そういう縛り方が女優さんの演技への精神的な誘導であるということとも忘れないでもらいたい。

美人達にこんな要求は、監督さん達もさぞやいいだしにくいだろうが、そんな努力が一人でも多くの客を招くものだと言職業意識に徹

してほしい。

○ なんだかこう「はりつけ談義」みたいになってしまったが、私はやっぱり、そんなものを映画に描きたい欲望があったようだから、お許しを乞う。

投稿者のうち二三の方は「はりつけ縛り」なんぞには興味がない——などといっておられた方があったように記憶する。しかし、私が本編で書いたような縛り方が実現したとしたら、サジストなら必ず再認識願えると思う。

そうして想像してみて下さい。可愛い町娘の花園ひろみや、シンの強そうな武家娘の桜町弘子、おとなしい大川恵子のお姫様、ういういしい若妻の山本富士子、あばずれの年増の近藤美恵子——などといったところが、あわれな姿をさらしてくれる夢を——

テレビ攻勢に悩む映画界に、こんな一寸の工夫が、案外お役にたつんじゃないですか。

(了)



夕方のお買物にゆく途中、私はドブ川のそばを必ず通ります。都会のドブ川は、それは汚なくて、顔をそむけ、鼻をつままなければ通れないようです。

傾斜がないため、流れもごくゆるやかで、所々よどんでおり、川の中の石ころや何かの所には、空ビンや、紙屑や、果物の皮等がひっかかったまま流れないでいるのです。

私はいつも、そんなドブ川の側を通る時、足ばやに走るように買物籠をさげて通りすぎるのですが、或る日、どうしたとか、何とということなしに、そのドブ川をながめやりました。

丁度川の真中に、大きなコンクリートの固りが横たわっていて、そこに紙屑や、野菜の

空の浣腸器

山岸 悠子

切れっぱなしなんかがひっかかっています。

「おお、きたない」

そうつぶやきながら、不図みると、ごみにまじって、丸っこいピンク色のものが、一きわ鮮かにプカプカ浮いているのです。

「おや、何だろう」

足をとめてよく見ると、おお、それは空のイチジク浣腸でした。空の浣腸器、何でもなものです。普通の方がみれば。でも私にはそれが網膜に焼き付いてしまったのです。

浣腸器、空の浣腸器。空である限り、誰かが使用したに違いありません。誰かが、誰かに浣腸したのでしょう。浣腸された人は恥ずかしさと、苦しさに身もだえしたかも知れませんが。男の人、女の人、若い人かしら、或いは子供かしら、病人かしら、或はマニアかしら。それにしても、大概トイレに捨てられる筈の空の浣腸器が、どうしてドブ川に流れているのでしょうか。

私の空想は、きたない、くさいドブ川に浮ぶ一個の空の浣腸器のために、とめどもなく次から次へと拡がってゆくのです。

その日から、私は注意深くそのドブ川をながめるようになりました。昨日の空の浣腸器は、今日も矢張り同じ所に、相変らずプカプカと浮いていました。

「まだ居るのね。どう、さびしくない？」

私は小声で話しかけてみるのです。プカプカと浮いた空の浣腸器は返事をしてはくれませんでした。

その夜、可成りの雨が降りました。翌日のお買物の時、昨夜の雨で増水したドブ川は、一応屑を洗い流してしまい、水面からやっと顔を出したコンクリートの固りのまわりには濁った水が、小さな渦を巻いているだけで流された空の浣腸器は今頃もう海へ流れ出ているでしょうか。

その翌日、翌々日も、水がへって又もとの

ように屑のひっかかっているあのコンクリートの固りの所をよく見ても、空の浣腸器は見当りませんでした。

所が、四日目に、おお、丁度いつかの所に今度は、小さな小さな空のイチジク浣腸がひっかかっています。正しく子供用の十グラムのです。馬鹿に嘴管が長く見えるのですぐ分ります。どこかの七つ位の女の子が、いやいやするのをお母さんにつかまえられて、お尻をピシャピシャたたかれながら浣腸されたその殻なのでしょう。

私はそんな馬鹿げた空想をしながら、ドブ

川のはとりにつつ立っていました。人がみたら何してるのかと変に思うでしょう。私は気づいて歩き出そうとしました。丁度その時、すぐ目の下を、今度は大人用の空の浣腸器が一個流れてくるではありませんか。

「あ、そこにひっかかりますように」

思わず私は小声でいいました。大小二個の空の浣腸器がアベックでプカプカ浮いていたら、と思う間もなく、流れて来た大きい方は、スーッとコンクリートの脇をかすめ、渦に乗ってクルクルと一回転すると、そのまゝ川下に流れていってしまいました。私をあ

ざ笑うように。

小さな空の浣腸器は相変わらず、外の屑と一緒にプカプカと浮いていました。

その小さな空の浣腸器も何時しか流れていってしまいました。でもこのコンクリートの固りの所には、今日も、屑が集って浮いています。やがて又、別な空の浣腸器がひっかるでしょう。

それにしても、何と空の浣腸器の多いことか。私は空想を逞くしながら、今日もお買物が楽しいのです。又、新しい空の浣腸器がプカプカとわびしげに浮いてはいないかと。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い廃院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円

復刊第83号	(悦虐小説と緊縛写真)	三百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第二集)	三百五十円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第二集)	定価三百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第三集)	定価三百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円

復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦特第四集)	定価三百円
復刊第60号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第61号	(昭和35年6月号)	定価三百円
復刊第62号	(悦特第五集)	定価三百円
復刊第63号	(昭和35年7月号)	定価三百円
復刊第64号	(昭和35年8月号)	定価三百円
復刊第65号	(昭和35年9月号)	定価三百円

特に定価の半額に奉仕いたします。

(第一号より第六十五号迄の内、本欄に欠号の分は全部売切れました。)

仮想見学

少年モデル訓練所

杉

俊夫

え、勿論日本では最初の試みです。しかしファッションモデル専門の養成所というものもあるし、或いは、アメリカ辺りには、映画の子役だけの為の演技学校もあるらしい。それと必要があればこそ出来たものなのでして、此の少年モデル訓練所が生れた理由もそれ等と全く変りはないのです。

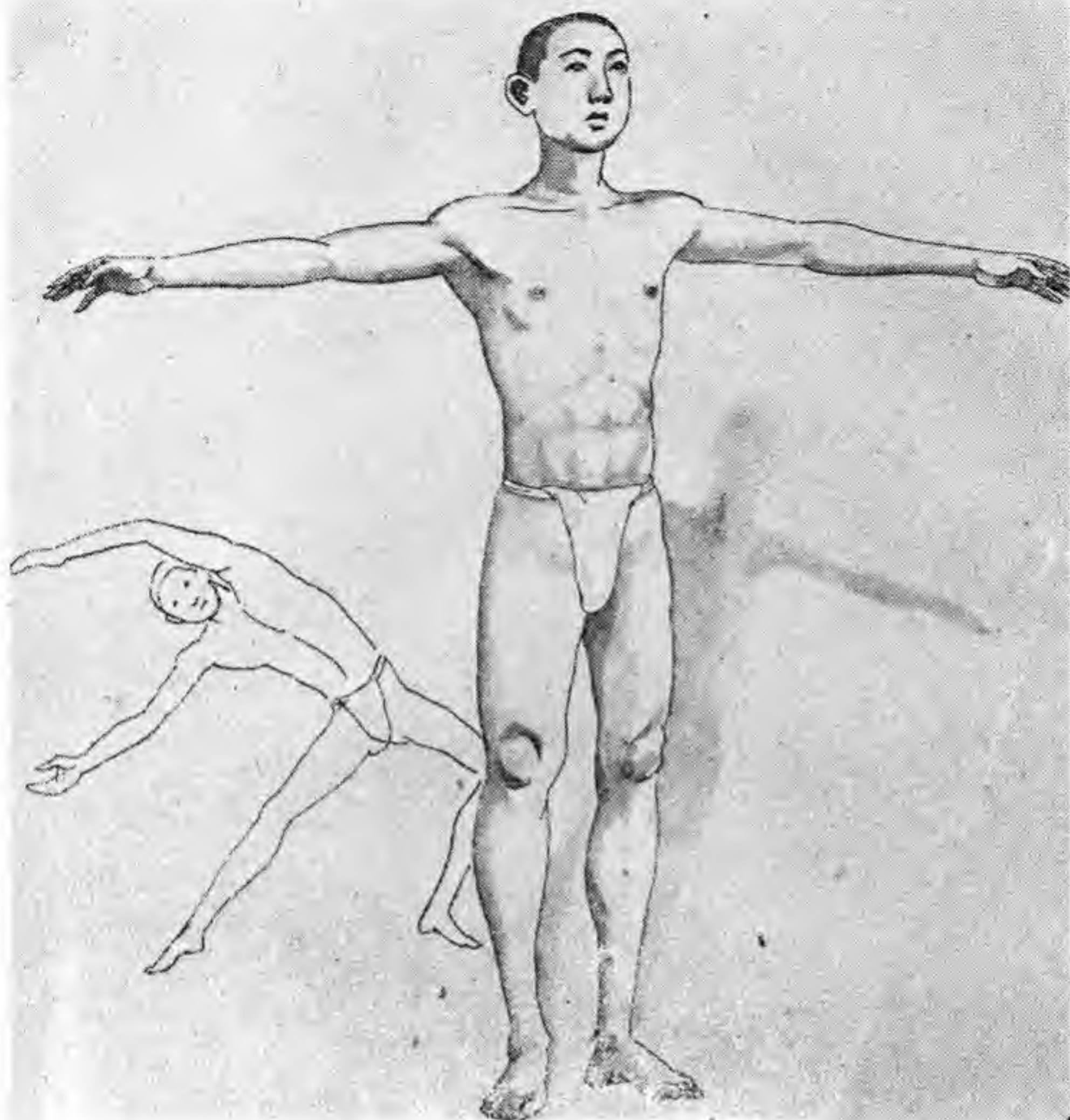
いわゆる少年美というものは、非常に短い期間の中に消えてしまうのですが、此の年代の少年の身心両面の清純な美しさは、正に造化の神の傑作の一つといえましょう。此の訓練所を開きました目的も、少年達に自分自身の肉体の、その様な美しさを充分に自覚させ、益々それに磨きをかける様、あらゆる機会を

とらえて修練を積ませ、理想的な少年美モデルとして需要家の許へ送り出す事、そして種々の作品を通して出来るだけ多くの人々に、少年美に対する理解を深めて頂くとする処にあるのです。まあ、此の点に充分な御理解と御関心をお持ちの事と承っている貴方には、こんなつまらぬ前口上は、さぞ御退屈でしょう。そうですね。今丁度、昼食と休憩の時間ですから、御案内は、午後の訓練が始まるから致す事にして、此処でその前に、概略乍ら、当訓練所の生活の一端を御紹介致しますよう。

此処は単なる職業モデルの量産所などというものではなく、お聞きの通りの訓練所とい

う些か古風な名称の示す如く、一度入所を許された少年は、理想的な人体モデルとしての肉体美を創る為に、いろ／＼ときびしい訓練の課程を経なければならぬのです。入所資格は、十四才から十六才迄の男子という事になっていますが、その際の審査は厳重で、綿密なる検査が行われます。又、柔和で人好きのする容貌と、少年らしい、美しいからだつきでなければならぬのは当然ですが、たとえ自選他選の人並み秀れた美少年といえども『温厚と誠実』此の二つの資性を欠く者は採らない事にして居ります。うわべだけの「飾り」は、すぐに消えてなくなってしまうからです。

さて入所後は、全員強制的に寄宿舎に収容され、集団的な又は個人的な訓練を受ける事になります。入所と同時に、少年達は、先ず新しい晒の六尺褌と、三角褌を更に簡略にした、極く細い腰ひものついた白い「まえあて」を渡され、同時にその場で、着用していた全衣類の提出を命ぜられます。そうです。少年達は、その日から、訓練所内では、衣類は一切用いず、昼夜を問わず、褌一本だけの生活をさせられるのです。真冬でも？ といわれるのですか。大丈夫、さすがに冬はそのまゝでは戸外へ出してやれませんが、各部屋とも使用中は、室内の温度や換気は、科学的設備に依って随意に調節出来る様になっています



ので、決して支障はありません。

少年達は、毎日お互いの“からだ”を生き

た教材として観察し乍ら、いろいろな勉強をする事も出来ますし、人体モデルという特別

な職業の性質上からも、此の様にして、日頃から馴れさせておく事も重要な訓練の一つなのです。尤も生れて初めて襻を締めたという者が多く、はじめは皆嫌がっていますが、ひと月も経つと、からだは何時ものびくと出て来て、健康そうになって良かったとか、襻を締めていると、体中に力が入る様な気がするなどと喜ぶ様になって来るものです。

頭髮を全員残らず丸刈りにさせるのは、訓練の時、邪魔にならぬ様にする為と、特に日本的な少年美又は襻美というものが、モダンなヘヤスタイルの為に多分に減殺される恐れがあるからです。とはいふものの折角今迄きれいに分けていた髪を忽ち坊主に刈られてしまうのは辛い事なのでしょう。唇をかんで、こらえているのがわかります。又時々最初の中は、飯もロクにのどへ通らずに、ふさいでいる者も居ります。ホームシックもあるのでしょうかね。

ところで毎日の訓練ですが、朝は六時半に起床、六尺襻を“まえあて”に着け代えて集合、点呼を受け、まあこれは、体の具合などを聞くだけですが、朝食後、午前中は、教習が行われます。いわば、教室授業ですが、少年達の年令に応じた常識や、その他、午後の実地訓練と特に関係のある智識や事柄、たとえば人体の構造や、基礎的な生理、保健、それに内外美術書の解説等々に関する講義を受

けます。又、木曜日と日曜日の午前は、全部自由研究の時間になっていますので、少年達は大抵、図書室に入って本を読んだり、参考になる写真や画集を観賞し、或いは、お互いにモデルになり合ってスケッチなどし乍ら過します。

此処の図書室は、一寸自慢出来るものでして、内外から非常な苦心を払って集めただけありまして、参考図書に不自由を感じるといふ事は、先ずありません。例えば「写真及び解説・人体ポーズ集」、「人種別に見たる男性美の研究」少年篇、「世界少年ヌードフォト傑作集」、「少年美、輝美、ETC」、「少年相撲教本」まわしの締め方から基本完成迄、「少年期身体の發育」、「身体矯正体操」、「写真及図解」全身日光浴と健康体操……というように、専門用の文献から、体育及び医学に互るもの迄、少年達の参考になるものは、機会ある毎に取り寄せる様に努めています。

そういえば、最近来たもので一寸珍しいのは、D国で発行している医学季刊誌「医療体育画報」の中に発表されている変った報告でした。テーマは「少年軽業師の姿態とその發育の記録」だったと思います。新しい本は何時でも歓迎されますので、此の本も早速、借り出されたわけですが、勿論、横文字の原語は読めなくても、少年達は大勢一緒になって真新しいアート紙のページをパリ／＼音をさ

せ乍らめくっては、各頁毎の鮮明なカラー写真をくい入る様に眺めていました。

写真にとられているのは、年の頃十四、五才位の金髪で丸顔の可愛らしい少年ですが、子供とは思えぬ見事な、というよりもむしろ思わず息をのませる様なアクロバチックなポーズをとっている写真や、烈しい訓練の写真に依る記録、いろ／＼と無理な姿態をとらされて汗で光っている所迄も、はつきりと撮っていました。又、様々な姿勢や、特別の体位をとらされて、いろ／＼な検査や、テストを施されている写真も多数のつていました。そして、巻末には、これ等の異常な肉体酷使に依る体格の変化を半月毎に撮した一年間の記録が、あらゆる方向から収められて居りました。此の報告を寄せた著者は、約一年半に亘って此の少年の傍で生活して、その体型変化を観察したという事です。

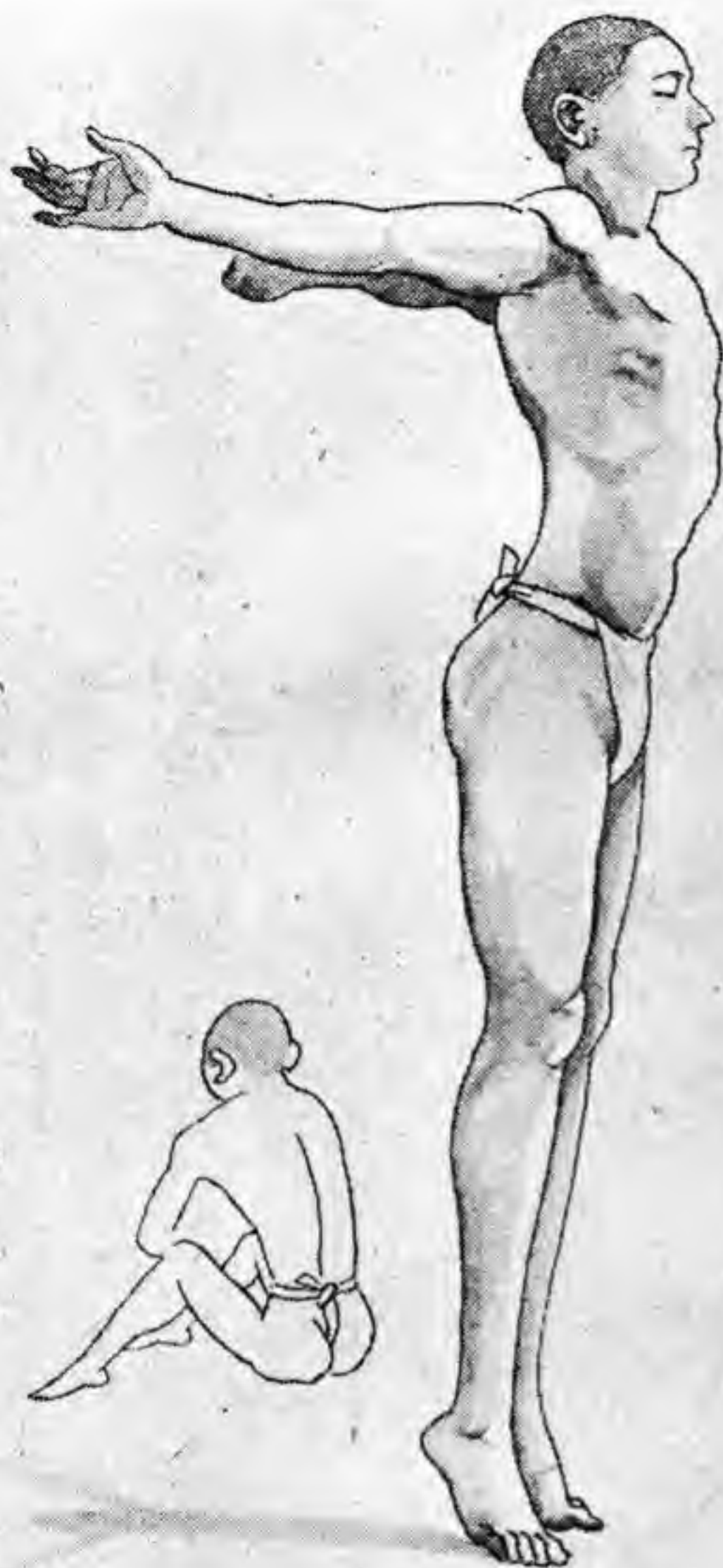
研究に使われたのは、恐らく田舎廻りの大道芸人の子ででもあるのでしよう。欧州辺の小国では、田舎に行くとき未だ、「家なき子」の様な旅芸人が残っている様ですね。虐待防止法の完備？ している日本では、出来ない研究でしょう。

軽業師とモデルの訓練とは一見何の関係もない様ですが、どうして！ 異常な筋肉酷使間違った体育指導よくボディビルと称して

成長期の少年にやたらに重い物を挙げさせたり、きついエキスパンダーを引っばらせる人がいますが、その結果が、非常にかたよった体軀を作ってしまうという無言の警告を巻末の發育記録から読みとる事が出来るのです。

その場で、すぐ写真について説明はしてやりました。中には、人一倍熱心に写真を見ていた少年もいました。尤も私達でも、小さい時には、曲馬団を見につれて行かれて、自分と同じ年位の子が出て曲芸をはじめると、横の方からソツと「あの子は人さらいに連れて来られたのだ」とか、「毎日酔を吞まされたり、鞭で打たれたりしながら芸を仕込まれたんだよ」などと耳打ちされて、夜になってからも、恐怖と好奇心が入り交まじって、なかなか寝つけなかった事もありますからね。まあ、誰もが一度は経験する気持でしょう。いや大分横道にそれてしまいました。

で、午後は実技の時間とでもいましょう。か、成育途上にある少年達のからだの均勢美柔軟性、それに何よりも彼等の健康を増進させる為の体育訓練が行われます。一体に、性質のおとなしい少年は、運動とか競技というものをおとなしい様ですが、入所した以上は相応しい訓練にも耐えねばなりません。しかし、毎日の訓練でも特に気を配るのは、決して手心を加えたり甘やかす様な事があってはならない、と同時に決して人前でけなした



りなどして恥ずかしい思いをさせてはならないという事です。少年達にとっては、訓練そのものよりも、恥をかくという事の方が耐えがたい辛さなのですから。

此処の体育訓練は、大別すると、徒手と機械という風になるのですが、徒手といいますが、此処では、柔軟体操、整姿体操等のいわゆる体操から、相撲、ランニング、マット運動又は種々の跳躍運動など、機械や道具を使わない運動一切を指します。整姿体操といえますのは、整型外科に於ける治療体操から

工夫して取り入れた一種の矯正というよりもむしろ整容体操とでもいうものですが、本質的には医療的な矯正体操と変りはありませんから、此の体操を行う時は、身体の拘束を完全に除去し、又全身とその動きを隅なく観察し得る様、全く自然のままの姿になって指導を受けるのです。

尚申しおくれましたが、ふんどしも各々使われがかりまして、平常は成る可く、そして就寝時は必ず六尺褌を締めさせ、体育訓練の時に限り、超軽装という建前から、小さい

まえあてだけを使用させているわけですが、相撲とか、ある種の機械運動の時は、六尺でなければなりません。機械を用いる運動といいますが、特別な技能とか体力を必要とするものではなく、専ら、からだの柔軟性とか均勢美、それに全身の筋肉を無理のない様に発達させる為に特に工夫考案された運動機械が設備されているのです。後程御案内申し上げますが、二、三名前を挙げて見ますと。

自在式平均台これは組み立て式で、留めねじの孔の位置に依り、高低、勾配を自由に変化させる事が出来ます。

ヤジロベエこれは名前でお判りの様に、一人乗りのシーソーで、一時流行していた『 balan・プレイ』から思いついたものです。

スウインガーといいますのは、小型の遊動円木ですが、体の平衡を保つ訓練ですから、取外しの出来る補助手すりがある外、一切、ノー・シート（無席）で足場は円木ではなく平板で出来ているものです。

レガッタ・トレーナーこれも名前からお判りの事と存じますが、例の舟漕ぎ運動をくりかえす事によって、特に腕、背面から腰の筋肉を発達させる運動機械です。

ラッシュアワーといえますのは本

当は吊り輪運動の事でしてこれは少年達が命名したのですが、学校などにある平行棒の様な形の、左右の間隔を調節出来る様にした二本の高い鉄のアーム（腕）に、左右向い合わせに、幾組かずつの堅牢な吊り輪を下げたものです。何人か一緒に使くと、吊り革が全部ふさがってしまうので、満員電車を連想して、ラッシュアワーというわけなのだそうですが、手や足を用いて、工夫に依っては、様々な運動に使えるものです。

それから、最近、ある篤志の方が、御自分の創案に依る「Y式廻転運動機」という運動機械を寄贈して下さいました。

此の他、今日は末だお見せする事が出来なくて残念ですが今「サイクルジム」という特殊なシーソーを造らせています。先程申し上げましたY式廻転機からヒントを得たもので一寸御説明しにくいのですが、Y式の機械をもっと大型にして、左右の適当な高さの所に足台をつけたシーソーです。二人の少年は、左右の両側に互に背中合わせになって大の字の姿勢になり両足を固定されます。挙げた両腕は、左右のパイプの上の方に自在把手があつて、そこにつかまる様になっています。

こうして、反復して上下運動を行うわけですが、体がねじれたり、姿勢がくずれたりせぬ様、後陣の交叉部にバンドを通して末端を機械に固定させる装置もついて居ります。此

のバンドのいろいろな効果もY式を基としたものですから、少年達のY式の練習をごらんになれば、よくお判りになると思います。

ところで、これ等の毎日の訓練記録は、入所の際、与えられた『訓練日記帳』に詳細に記入して、毎晩就床の前にこちらへ提出させる事になっています。あいにく今、手許にはありませんが、此の日記帳の事も一寸申し上げておきましょう。

これは、大学ノートよりも一まわり程大型で、表紙の厚いルーズリーフ式のノートですが、その第一頁の前には、入所と同時に撮した「起立全裸体像、前横後各態」と身体各部の接写又は拡大写真を貼布した台紙がファイル（とじこみ）されています。これは半月毎に同じ条件で撮影してその後へ順々にファイルして行きますので、全身や筋肉の成育状況が一目瞭然に見る事が出来ます。此の年頃はいわば、ナルチズムに傾く時期ですから、直接、鮮明な写真を通して自分自身のかだの発達過程を観察研究させ、更に美しい体型を創る様努力をさせるのに相当な効果をみせております。

又、これ等の写真のすぐあとにファイルしてあるのは、毎月一度行われる『精密全身計測』の記録で、身長、胸囲、腰周り等は勿論身体各部の筋肉の発育度、皮下脂肪の沈積状況、種々のテストに依る機能検査に至る迄、

細大もらさず記載されて居ります。身体各部が計測される都度、少年達はその測定値を大きな声で復誦させられ、記入係が（これも最年長級の少年がやっていますが）記録する事にして居るものです。

お話しを戻しまして、訓練の事をもう一つ申し上げましょう。演技過剰というものは、ともすれば嫌味を伴うものですが、その反対でも困ります。いわゆる「馴れ」は非常に大事な事です。少年達は此処で、ポーズの作り方に付いても、基本的な訓練を受けるのです。例えば、基本ポーズ三十態という教程がありまして、短期間の中にこれ等の形を全部おぼえて、すぐそのポーズがとれる様にしなければならぬのです。

ポーズ第一号は勿論「直立姿勢」で始まりますが、例えば、ポーズ十四号をとれ、といわれ、ば、その少年は、両足をきっちり、とろえ、両腕を真直に挙げたまま体を思い切つて後方へ反らせたポーズをとるとか、ポーズ十八号と命ぜられ、ば、両足を思い切つて大きく開き、腰をおとし、胸を前方へ突出す様に大きく張って、両腕を真直のばして斜上方へ挙げた姿勢になる。又二十一号から三十号迄は、仰臥又は伏臥姿勢の基本練習となつて居ります。これを一応覚えたと、次にはデュエット（二人ポーズ）、トリオ（三人ポーズ）、グループ（数人ポーズ）などの訓練を

施されます。

アトリエや撮影会などで、実際にモデルが使われる時は、輝美にするか、ヌードにするかは、その人の好みに依りますが、ポーズの練習の時は、すべて全く自然の姿の儘で指導を受けねばなりません。これは先程申し上げた整姿体操の場合と同じ理由からです。此の他にアクティヴポーズ乃ち躍動姿勢という訓練もあります。基本ポーズが静的なものであるのに反してこれは動的ポーズとでもいうものですが、種々の運動をしている時の姿態が、どうすれば美しいからだの線を見せる事が出来るかを練習させられるもので、非常にむずかしい訓練ですが、最近、高速撮影機や、ストロボなどの発達に依り、此の様な「動くモデル」として使われる少年も多くなりましたので、いよいよ此の種の訓練の必要が増して来たわけです。此の練習を重ねていると、相撲訓練の時なども少しも意識せずに、自然に非常に美しい姿勢で投げたり投げられたりする様になって参ります。

先程申し上げました、精密全身計測の日には検査が済んでから、各少年は、静、動ポーズに付いてその練習成果を検定され、シネで撮影（及び録音）されます。御見学のあとで先回收録したものを上映してごらんに入れます。各少年共、最初に全身正面像を映し出された時、例えば、「吉村裕行、十五才二カ月」と自己紹介をしてから、そのまゝ横向き及び後向きになって見せ、それが終わってから、「ポーズ第何号」といふ乍ら、次々にポーズを取って見せる様になって居ります。躍動ポーズの訓練成果も同時に映写されますが跳躍運動などの時に発する大きな掛け声や、烈しい運動、例えば、急速度で反復する様命ぜられた捻転、又は屈伸運動の時などの半声音や呼吸音も、ハイ・ファイ装置で、そのまゝ録音されて居ります。

少年達は、スクリーンに映し出された自分のからだつきの欠点、美点を研究し、又批評して貰って、その後の訓練の時の反省の資とするのです。

あゝもう大分長い事おしやべりをしましたね。では最後に一寸おことわりしておきますが、入所の検査は、とてもきついと申し上げましたが、決して始めから完全なものを求めているわけではありません。

たとえ注文通りの肉体的な条件が完備していなくても、いわば誠実な努力型の少年が欲しいのです。身体の方は、練習や治療に依って改良する事も出来るのですから。治療という一寸大げさですが、例えば、姿勢のわるい少年には、整姿用コルセットを調製して着けさせる、これは、医療用コルセットと、無理のない美容コルセットとを兼ねた様なもので、止め鉤や、革バンドの部分以外は、すべ

て透明な硬質プラスチックで出来ていますので、非常に軽く大抵の訓練はコルセットを着けたまゝでも出来ます。

今の所、約四人程、整姿コルセットを装着させて居ります。訓練を御見学なさる時よくごらん下さい。

それからこれは、最近、実験的に始めたのですが、体型乃ちからだつきにアクセントの不足している少年は、体線改良の為に特殊な肉質注射を必要な個所に打たれます。

ある種の両性ホルモンが配合されている肉質促進剤なのですが、最近、直送させて求めた某国の特殊新製品なので詳しい事は判りません。しかしホルモンの研究の進んだその国では、女性の美容整形には広く用いられて居り、決して危分なものでない事がわかっていますので、此処でも徐々に用いる様になったのです。

只、一時に多数の注射を打たねばならぬ事と相当な痛みに耐えねばならないのが欠点ですが、効果が早く、又、一定期間を過ぎると此の仮装肉質は吸収消滅させられてしまうので、将来、機能的な又は形態上の障害は全くありません。

そうですね、では、そろそろ御案内いたしましょうか。

(終)

ファンタジック・フィクション 「妊婦の切腹」

絢爛たる復讐

黒木節夫

1

B Gの三浦保子は、近頃、急に服装が派手になり、お化粧が華やかになった。職場の同僚達の間では、彼女に恋人でも出来たのではないかと、もっぱらの評判である。

三浦保子は十九歳、昨年G市の県立女子高校を卒業して、現在の職場晶立電機G営業所に勤める様になった。高校時代からの、バレーボール部のレギュラーだけあって、実に均整のとれた身体つきで、身長一六四センチ、清純な容貌と、運動選手に特有のサッパリして居て明るい性格は、職場の誰に対しても好印象を与える。

同僚達の噂の通り、実際、彼女には恋人が出来たのであった。

相手は富士産業G工場勤務の大山徹である。大山徹は富士産業のバレーボール部員であったから、色々な競技会を通じて、自然、三浦保子と知り合う様になったのであった。

大山は、競技会の度に、晶立電機チームの中にあつて若鮎の様に激刺として躍

動する三浦保子の清純な容姿に魅了された。忍ぶれど色に出にけり、思慕の念は自然に相手に通ずるものである。三浦保子も、いつとはなしに、いつも富士産業チームの中堅として活躍している大山徹の、たくましい男性的魅力にひかれて行き、彼から好意を示される度に女性としてのたまらぬ嬉しさと共にほのかな慕情を感じる様になって行った。

二人の仲は次第に深まって行き、翌夏のパレーボール全国大会T地方予選が始まる頃は互いに将来を誓い合うまでに進展していた。

しかし、二人ともその関係を他人には秘密にしていた。それは、三浦保子の職場で若い女子職員の恋愛を喜ばない不文律になっていたということもあるが、大山徹が何故か強くそれを主張したからであった。しかし、純真な三浦保子はその事は別段気にもとめず、二人だけの秘密めいた楽しい時間に浸れる事に、かえって一種不思議な喜びと魅力を感じて夢中で大山徹との逢う瀬を重ねて行った。

2

大山徹は国立大学出身のインテリ青年で、スポーツマンらしくスマートな身体とハンサムな容貌の持主で、その上、人をそらさぬ社交家だったから、若い女性にもてた。

彼は今日も仕事を終ると、二、三人の友人と共に行きつけのバーへ足を向けた。

夕闇が迫ってネオンの輝き始めた街は、一種のあわただしさと共に、何とはなしに安らぎと人なつかしさの情とを、道行く人の胸に訴えてくる。

バー「ゼー」(湖)と云うのが大山達のなじみのバーだった。ドヤドヤと店へ入りながら、

「おい、雪ちゃん、徹ちゃんを連れて来たぞ！」

友人の加藤がどなると、忽ち女たちの嬌声が湧き起った。

「アーラ、富士産業のチャンピオン、暫らく来なかったじゃない？」

「うん、練習でね。忙がしかったんだ」

「どうですかネ。いい娘でも出来たんじゃないの？」

「大山さん、今夜は私の独占ヨ！」

「まあ、君ちゃんたら憎らしい！ 心臓ネ」

「あははは。今夜は独占禁止法だ。みんなで愉快にやろうじゃないか。おい、ハイボール頼むヨ！」

止まり木に腰かけて運ばれたハイボールを飲みながら、彼らの話題が、近づいたバレ-

ボール大会の上に弾んで行ったのは、ごく自然であった。

「予選の優勝候補は、どこなんだい」

「明治電工さ。あそこは攻撃もいいし、守備が実に固くて穴がない。今度の予選では、先ず本命だな」

「徹ちゃんの弾丸サーヴィスをもってしても明治電工の守備陣には歯が立たねえってわけか？」

「まあね。たまに破れるぐらいじゃダメなんだ。ウチのチームにもう二人、サーヴのいいのが居れば何とかなるんだがなあ」

「アーラ、御謙遜ネ、大山さん。夕刊スポーツ読んだらね、富士産業も有力な優勝候補だって書いてあったワ。私、断然応援したげるから。」

「あははは。雪ちゃんの応援のおかげで、うちが目出度く優勝できたら、何をオゴッてやろうかな」

「ホント？ 嬉しいワ。よく考えといて素晴らしい物、お願いするワ」

「まあ、大山さんたら、雪ちゃんにばかり……。ズルイわ。ネ、大山さん、優勝したらあだし達にもオゴッてネ」

「ああ、いいとも。但し、優勝したらだぜ。そ

う君達みたいに、もう優勝したみたいに決めてかかって居たって保証の限りではないよ」

「大丈夫ヨ。勝つに決ってるワ。さあ、みんな富士産業チームのために乾杯！」

みんな一息にハイボールを飲んだ。

「おい、お代りだ！」

「ハイイ」
こうして一同は他愛もない雑談に花を咲かせながら、夜の更ける迄享楽の一時を過すのが常なのであった。

3

大山徹は、いつの間にか座を外して外へ出ていた。彼は流しのタクシーを拾うと、郊外の白萩アパートに向けて走らせた。

白萩アパートはG市の様な地方都市では目を見はる様な五層の近代建築であった。その五階の二七号室には大山徹の大学時代からの愛人の河村瑛子が住んで居る。彼女はこの地方の某劇団の若手の女優であった。芸は未熟だったが素晴らしい肉体と魅力的な美貌とで客を引きつける力を持っているので、劇団には欠かすことの出来ない存在であった。

深夜なのでアパートのエレベーターは動いていない。大山徹は、コツコツと大きく響く

足音を少し気にしながら五階へ上っていく。

大山徹と河村瑛子の、筆舌につくし難いプレーが、例の如くに繰り展げられた。

バラ色の、派手なネグリジェを着た河村瑛子が、右手に太い皮のムチを持って、ブリーフ一つになった大山徹を、

ピシリ！ ピシリ！

と打ちのめしながら追いかけるのを、彼は悲鳴をあげながら必死に逃げ回るのである。

「徹さん！ さあ今夜こそ、私がこのムチで貴方を打ち殺してあげるワ！おとなしく観念なさい！」

「も、もう助けてくれ！ もう

沢山だ！」

「何言ってるの！ ダメヨ！

そうら！」

——ピシッ！ピシリッ——

「わーッ！ い、痛い！！も、もう止めてくれ！！…… 止めて。え、瑛子！」

たくましい大山徹の背中と言わず、尻と言わず、腹と言わず胸と言わず、めちやくちやにム

チの雨が降り注ぐ。

——ピシッ——

「むーッ！！……」

——ピシッ——

「あ、あーッ！！……」

苦痛にころげ回る男を熱した目で凝視しな

がら、

「どお？ 徹さん、快い気持？ そうら！！」

——ピシーリッ——

「あ、あッ！痛うッ！！……」

「何ヨ、これくらいで……」

悲鳴をあげながらのたうっていた大山が、



苦痛のために遂に動けなくなって、ベッドにもたれたままグッタリとなったのを見ますと、河村瑛子はニッコリ笑ってムチを置き、着ていたネグリジェを脱ぎ捨てて

「さあ、徹さん、今度は私の番よ。さあ、立って……」

と言いながら、素早く自分もパンティ一枚になり、傍のムチを大山に手渡し

「思いつきり、お願いネ」と耳もとへささやいた。

「うん……」

大山は、半ば無意識に瑛子から皮のムチを受け取ったが、その朦朧たる彼の視界に、形の好い瑛子の白い脚線がパツと映ると、バネ人形の様にスツと立ち上った。

「瑛子！ さっきは、よくも俺を打ち殺そうとしたな！ 今度は仇討ちだ。いくら謝ったってダメだから観念しろヨ」

言うが早い、たくましい右腕のムチがピューッと風を切った。

——ピシッ！——

「ギャーッ！！……た、助けてえ！！……」

非情なムチは、真白く滑らかな瑛子の柔かい肌へ所きらず喰い込んでサツと赤い筋を走らせた。

「今さら何が助けてだ！ これでも喰らえ！！」

——ピシッ！——

「ギャーッ！！……い、痛い！！……助けてーッ！」

——ピシッ！——

「あ、あーッ……」

白魚の様な瑛子の肉体が、苦痛に痙攣しながら室中をころげ回った。悲鳴は半ば歡喜の呻き声でもあった。

——ピシッ！——

「あ！ うッ、痛……」

「思い知ったか！ それ！」

——ピシッ！——

「ギャーッ！ や、止めてーッ！ と、徹さん！……」

「うるさい！ これでもか！」

——ピシッ！——

——ピシッ！——

背と言わず、腹と言わず、ムチの雨を浴びながら、のたうち回っている中に、瑛子は遂に、しびれる様な苦痛に堪えかねて失神しうになった。そこで、いつもの様に大山徹の激しいムチの雨が止んだ。打った男も打たれた女も、ジットリ汗ばんだ全身を波打たせていた。

早くも一年近い歳月が流れた。この頃、大山徹は憂うつ病にとりつかれていた。

大山徹が今でも三浦保子の清純な愛らしさに心ひかれているのは事実であったが、何と言っても互いの肉体の奥底にひそむ秘密の歡びを知り合い、その底知れぬ嗜虐の淵に身を任せて、超理性的な歡喜を分かち合える異性としての河村瑛子から離れ去ることは出来なかった。毎夜の様な、瑛子との妖しいプレーの前には、初心な三浦保子との交渉など影がうすく感じられた。大山徹は、自分は保子の様な正常な女性と一緒にいたのでは、とうてい満足できないことを自覚していた。

次第に教育して行くと云う手段もある。しかしそれとて程度問題であらうし、仮りに、保子を教育によって自分や瑛子と同じ程度に変え得るとしても、それはいかにもわずらわしい。結局のところ、自分の三浦保子に対する思慕は、単にその潑刺とした清純な容姿にひかれたのであるが、現在では、保子に対してもうそれ程の未練もない。いつか好い機会を擲んで三浦保子と手を切りたいと思っていた。

しかし、それには重大な支障があった。三

浦保子は既に妊娠していたのである。徹もそれを知らされていた。保子は晶立電機も一カ月前に退社している。大きなお腹を隠しきれなくなるのを恐れてである。けれども、彼女は大山徹を信じきって居り、お腹が目立つ様になる前に結婚すると云う彼の言葉に少しの疑いも抱かずに、目下、結婚準備に余念のない毎日を送って居るのである。これが大山徹の憂うつ病の原因なのであった。他人にも打ち明けられず、一人悶々としている中に、容赦なく月日が経過して行った。

やがて破局が来た。

会う度ごとに、約束に反して曖昧になって行く大山徹の態度に、やがて、三浦保子が不審を起さぬ筈がなかった。

或る夜、三浦保子は苦心して大山徹を尾行した。そして、白萩アパートでの大山と河村瑛子との秘密をつきとめたのである。その上三浦保子は、今や大山徹の気持が完全に自分から離れ去ってしまったている事を確認しない訳には行かなかった。

「——だまされて居た！——」

屈辱と絶望とが三浦保子の脳天を貫き走った。打ちのめされて、目の前が真っ暗になった保子は、倒れそうになる自分の身体をやっ

と支えて白萩アパートを出た。どこをどう歩いたのか全然覚えはなかった。

それから二時間の後、三浦保子は放心した様に、深夜のG駅のベンチにくずれる様に腰を下していた。彼の言葉を一途に信じきって身体を許して妊娠までした。二人だけの、楽しい幸福な生活を夢にまで見て、折角入ったばかりの会社もやめてしまった。それなのに自分は今、石ころの様に彼に捨てられてしまったのだ。思えば余りにも純真過ぎた自分だった。人気のない駅のベンチの一隅で、保子は絶望に打ちひしがれて、一人、苦い苦い涙に頬をぬらした。

5

それから三カ月余りが経過し、世は初夏を迎えようとしていた。

ここは、白萩アパート五階の二七号室——河村瑛子の室——である。さき程から室内をとり片づけている若い女性は、意外にも三浦保子であった。

あの時以来、彼女の受けた決定的なショックは、やがて大山徹と河村瑛子に対する深い憎悪へと一変した。そして、考えぬいたあげく、保子は一つの報復手段を思いついた。そ

れは、我が身を殺して、その代りに大山と河村瑛子とに一生忘れることの出来ないショックを与えると同時に、世間に対して顔向けの出来ない様にしてやることであつた。それは或る週刊誌に載っていた「妊婦の腹切り事件」と云うのにヒントを得たものであつた。河村瑛子の室で、妊娠九カ月のこの大きな腹を切り開いて、中の赤ん坊を生きたまま取り出しその子を大山に育てさせるのだ。この計画が保子の頭に浮んで以来、彼女はその準備にあらゆる努力を傾倒した。室の鍵も苦心して手に入れた。

いよいよ今日が、練りに練ったその計画を実行に移す日なのであつた。保子の調査によれば、大山と瑛子とは三日前にG温泉に出かけて、今夜十時きっかりにこのアパートに帰つて来る筈であつた。

保子は、既に市内のN病院に、事情があるからと巧みに連絡して、今夜十時頃赤ん坊を引き取りに来てくれる様確約させ、一方かねて書きあげておいた事件の真相を細かく記した長い遺書を、時間を計算して市内のG新聞社宛に発送した。明日、事件を知った町中は恐らく大騒ぎになるであらう。騒ぎが大きくなる程、保子にとっては都合がよいのであ

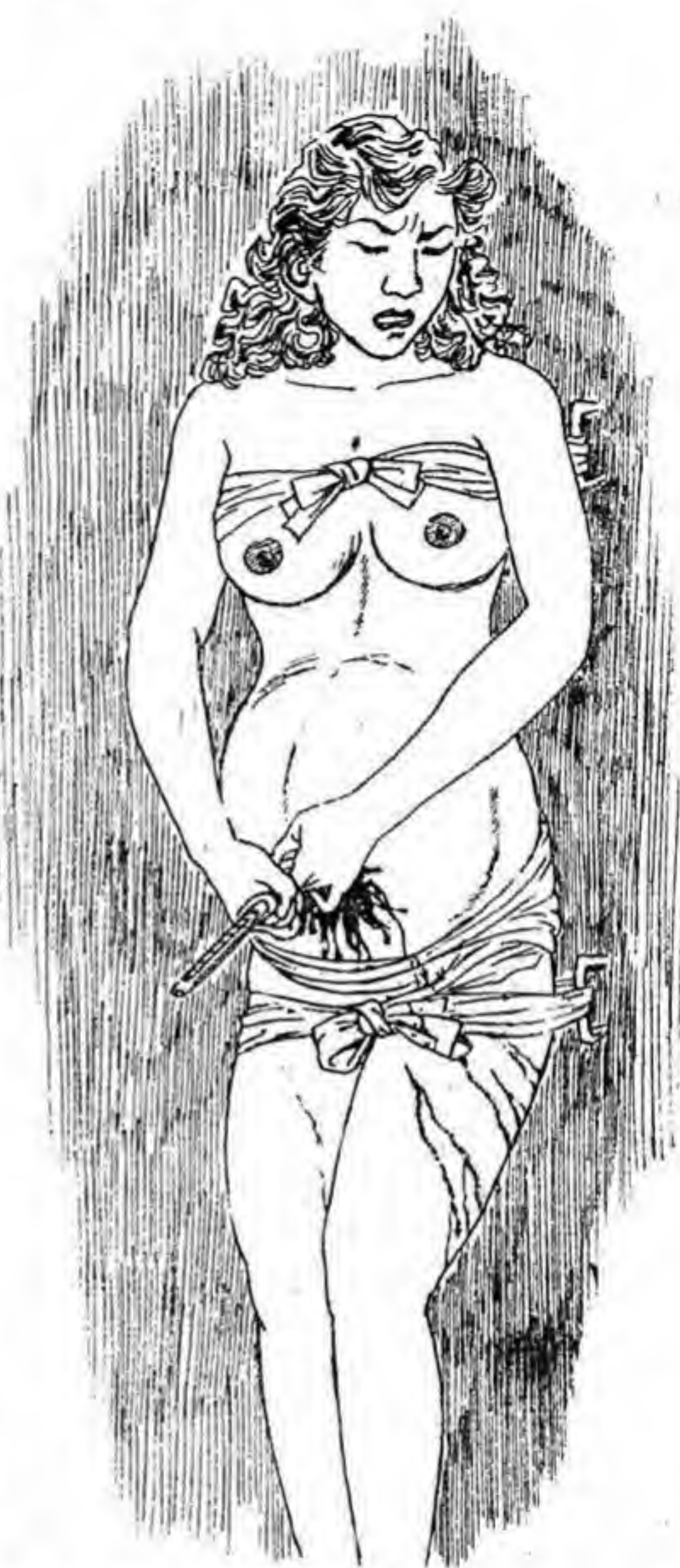
る。

生れ出る新生児の養育の責任を大山徹に負わせる可き一切の手筈を済ませると、保子は室内の準備にとりかかった。先ず、室を、ドアに近い方の半分と反対側の半分との二つに仕切り、真中に白いカーテンを引いた。このカーテンの奥で腹を切ろうと云うのである。ドアを開いて室に入って来た大山と瑛子とは先ずカーテンによって視界をさえぎられる。不審に思つてカーテンを引き開けて中をのぞいて見ると、そこにすさまじい光景を発見して仰天し、狼狽するであらう。これが保子の

計算であつた。

カーテンの内側にはテーブルを置き、その上に用意の洗面器や産着、毛布、昨日砥屋から持つて来たばかりの、海軍で戦死した兄の形見の短剣、大山徹宛の手紙、その他必要な品々を全部整理して載せた。それが済むと、保子は、後の壁に、自分の身体を縛つて支えるためのカスガイを打ち込んだ。

もう、時間をつばかりであつた。時計を見ると、まだ七時ちよつと過ぎたばかりである。保子は近くの銭湯へ行つて、たんねんに身体を洗い清め、室に帰ると、入念にこの世



の最後のお化粧をした。

気がつくと時計は既に九時近くを指している。いよいよ非情な計画を実行する時刻が近づいたのである。保子の身体は、さすがに、ガタガタと小刻みの震えが止まらなかつた。元氣をつけるために、用意のウィスキーを無理にノドに流し込んだ。

九時十五分。遂に予定の時刻が来た。心持ち青ざめながら、保子は静かに着ていた衣服を脱ぐと、きちんと折りたたんで室の隅に置

き、更に下着も脱いでその上に重ねると、白い肌を皓々たる電灯の光の下にさらして立ち上つた。妊娠九カ月の大きい腹部がはち切れんばかりであつた。後の壁に背中をピタリと押しつけると、卓上から用意の白布の紐をとつて、自分の両乳の上を、後の壁にしっかりと縛りつけて動けない様にした。さき程打つておいたカスガイが役立った。両足も、モモの所を同様にして壁に固定した。丁度、壁を背負つて人の字形に体を支えたわけである。両手だけは自由であつた。腹を切り割いた時に、苦しまぎれにのたうち回つて計画をめち

やくちやにしてしまう場合を恐れて、こう云う立ち腹の姿勢を考えたのである。

時刻は、はや九時三十分を回っている。

「そろそろ始めなければ……。」

保子は、立ったまま壁に縛りつけられた自分の白い肌を、しみじみと見下した。ムッチリ盛り上った二つの乳房、はち切れんばかりに張れるだけ張りきった大きな腹部。悲しいまでに象徴的な「女体」がそこにあった。

右手を伸ばして、目の前の卓上から用意の短剣を取りあげると、グルグルとガーゼを刀身に捲きつけた。目がガラガラと異常に輝き胸がドキドキと激しく鳴った。ガーゼから、キラリと切先九センチ程をのぞかせた短剣を右手にしっかりと握りしめた。

ピクリ！　ピクリ！　と腹中で嬰兒が胎動するのが、はっきりとわかる。

「このお腹を切り開いて、自分で赤ん坊をとり出す！……どんなに苦しいのかしら……どんなに痛いのかしら」

ピクリ！　ピクリ！　と盛んに胎動する自分の大きな下腹を凝視しながら、保子の身体は緊張にガタガタと震えた。

「許してネ……」

と言いなら左手で何度も大きな下腹を愛は

しむ様に撫で回している中に、保子の美しい両眼から涙が溢れて来た。

九時四十分。もはや一瞬の躊躇も許されない。きつと氣をとり直した保子は、刃を下方に向けて両手でしっかりと短剣を握りしめ、鋭い切先を、大きく前方に突き出している自分の臍にピタリと当てがうと、まなじりを吊り上げながら狂った様に

「せ、切腹！……ムーツ！！」

夢中で両手に力をこめると、

——ブスッ！——

厚い皮下脂肪を一気に突き破って、非情な鋼鉄の刃は臍から容赦なく腹腔内へ刺し通されてしまった。

「あ、あッ！！……さ、刺した！！」

覚悟の上とは言え、初めて我が生体を刃物で刺し通した恐れと驚きの余り、思わず叫んだ保子は両手を短剣から離してしまった。

見れば短剣は、刃を下方に向けて、大きな腹部の中央に切先六センチ程を腹腔内に没したまま直角に突っ立ち、保子の喘ぎと共に波うつ大きな腹部と一緒に、上下に生き物の様に波動している。傷口に鮮血が湧き出し、糸の様にスーッと床に落ちた。

「さ、刺したワ！！……ほ、本当に刺してしま

ったワ！！……こ、これからだワ！！……」

必死に氣力をとり直した保子は、再び両手を臍に突き刺さった短剣にかけると、

「ムーツ……さ、割くんだワ！！……割く！！……お、お腹を割く……ムーツ！！」

ふくれ上った豊満な下腹を縦一文字に切り開こうと焦ったが、意外に手強い皮下脂肪の抵抗に、

「——ふうッ！——……ムッ！！……ムムーツ！！……」

のしかかる様にして上半身の体重を刃の上にかけると、砥ぎたての短剣の切れ味は素晴らしく

——プリッ！！プリ、プリ、プリ、プリッ！！

無気味な音を立てながら、保子の張りつめた豊満な腹壁をアッと言う間に一直線に切り下げて、パツクリと左右に切り離してしまっ

た。

「あ、あーッ！！……き、切った！！」

うわずった叫びと共に見下すと、ザクロの様に、大きくえみ割れた傷口から、無気味な内臓がのぞき鮮血が泉の様に湧き出して、音を立てて床に流れ落ちていく。

「さ、割いたワ！！……あ、赤ちゃんを！！……」

保子は狂氣の様に叫んだ。思いきり切り開

かれた大きな傷口。

「あ、あッ!!……痛うッ!!……」

傷口から、グロテスクな腸管が、血まみれになってうねうねと押し出して来た。

無我夢中でテーブルの上から短剣を掴み取る。

切り割いた傷の激痛に、今にも失神しそうになるのを、必死の気力で辛うじて支えながら、保子は気丈にも予定通りの作業をやり終えた。

とり出した嬰兒に卓上の洗面器の産湯をつかわせて、用意の産着を着せ、幾重にも毛布にくるんでやると、力つきてガククリと頭を垂れかけたが、朦朧たる意識の中に、自分の腹の傷口から垂れ下って露出している腸管に気がついた。このままでは死体が醜い。保子は、残りの力をふりしぼると、血に染った左手で、垂れ下った自分の腸管のつけ根をムズと掴み上げて

「ムッ!!……ムッ!!……」

右手の短剣で、プスリ、プスリと腹腔から切り離しては床に捨てた。切り捨てられた腸は、保子の血だまりの足もとで、生きた芋虫の様に気味悪くうごめいていた。

火の様な息をしながら、我が腹腔内部をま

さぐり、完全に空洞となつてしまった事を確かめると、

——ブスッ!——

短剣を左下腹に深々と突き刺した。

「ムッ!!」

縦の切り傷に左手をかけて、グーッと左半面の血みどろの腹壁をまくって其の裏側をのぞい見ると、たった今、刺し通した短剣の切先が、厚い腹壁を貫いて、六センチ程も、空洞化した腹腔の内側へ頭を突き出している様が、はっきり見てとれた。保子は狂った様に短剣を右脇へと引き回した。

「ムッ!!……ムッ!!……ムッ!!……」

遂に、保子の空洞の下腹は、完全に十文字に切り開かれた。しかし、保子はなおも、血みどろの左下腹へ短剣を突き刺すと、先程の傷と平行に、

「ムッ!!……ムッ!!……」

狂気のように右脇腹へ引き回して、遂にキの字形に存分に切り刻んでしまった。下半身から床下は、紅をぶち撒いた様な血の海である。

ガタリと血の短剣をテーブルの上に置きながら

「……こ、これで……ほ、本望だワ……」

きれぎれにつぶやいた保子の顔には、既にはつきりと死相が浮かんでいた。

赤ん坊は、さっきから力なく泣き続けた。

その時、廊下で、ガヤガヤと言う話し声と一緒に人の足音が聞こえた。かすかにその物音を感じとった保子は、ハッと最後の気力をふりしぼって血汐のしたたる短剣をさか手に取り直し、切先を己がミゾオチに当てがうと一瞬、泣いている赤ん坊の方を凝視して、

「……ゆ……許してネ……さようなら!」

かすかにつぶやくのと一緒に、斜め左上へ力一ぱいに

——プスリ!!——

「ムッ!!……」

深々と心臓を刺し貫いたまま、ガククリと頭を垂れた。力のぬけた両手がダラリと両脇にぶら下った。

こうして、二十一歳のうら若いB・G三浦保子は、自分を裏切った男に対し、見事な、絢爛たる復讐をなし遂げて息絶えたのである。

十時五分——。外側から室のドアが開かれた。

(完)

★懸賞募集原稿入選作品★

契
約
書北
村
浪
々

契 約 書

一、ライバル

朱実は玄関の戸を開けた瞬間、どきっと、悪い予感に胸を突かれた。ふうんと甘い香水の匂い、バック・スキンの純白のハイヒール……。

彼女は音のしないように靴を脱ぐと、そつと玄関脇の家主夫妻の部屋を覗いてみた。案の定、彼等は留守だった。新興宗教に凝っている彼等が、土曜の昼過頃に在宅している筈はなかった。すると、これは矢張り一郎のお

客に違いない。彼女は二階廊下の突当りにある彼の部屋まで、一步步、足音を忍ばせて近寄った。幸い襖が幽かにすいていた。彼女は早鳴る胸を抑えつつ、其処から息を殺して密かに中を窺った。だが、見えるのは無粋な経済学や哲学の書物が、ぎっしりと詰った本棚であった。何とか見えないかしら、彼女は身を屈めたり、柱に鼻をぺしゃんこになる迄押し付けてみたりした。其の時、突然、「はゝゝゝ、令子は相変らずだな。」と、一郎の心地良さそうな笑い声に続いて

「だって、ふゝゝ、私、今でも貴方に首ったけなのよ。」と、いう若い女の声に、朱実はずんでのことに「あッ！」と、叫び声を発してしまふ所だった。予期以上の驚愕と忿怒、それは余りにも強烈過ぎた。彼女は爆発しそうな激情を辛うじて自制し、よろめく足を踏みしめ乍ら、やっと隣りの自室に這入ると、がっくりと畳の上に崩折れた。ハンドバッグも一郎への心からのお土産包も、思い切り投げ付けるように放り出して――。

あの甘ったるい声……。それに、なんて腹

の立つ言葉だろう。『今でも貴方に首ったけなのよ——』。彼女は止め得ない憤怒と嫉妬に身を焦した。が、やがてそれが、疑惑に交じて来た。令子って一体誰だろう。田舎の町で一郎の卒業を待っている許嫁は、たしか雪枝とか聞いていた。許嫁ではない。第一、田舎の純情な娘のいうべき言葉ではない。しかし、今でもという以上、大分前から知っていて、最近又逢ったに違いない。此処数日、確に一郎は変だった。冷たく私を避けていた。それは却って私への愛の苦惱かと思っていたのに……。分らない。私には分らない。しかし、ひよっとすると、彼が物好きなアルバイトでやっているスイングバンドでの単なる知り合いかも知れない。あの甘い声の調子ならダンサーかなにかであろう。彼女等なら平気であの位の事はいうだろうから。

彼女は無理にも斯う考えて自らの心を慰めた。しかし此の儘でいると、一週に二日しかない楽しい土曜と日曜が、無聊な孤独に終わってしまいそうな、それが恰も永久に一郎と二人切りの喜悦が消えてしまう様な錯覚に包まれて、底知れぬ恐怖に悩まされて来た。すると放り出してあるケーキのお土産までが無上に悲しさを誘った。月給日と土曜日がかち合

った喜びに小躍りして買ったケーキだったのに……。膝摺り寄せて共に食べるべき座には令子とかいう憎らしい女が坐っている。声の響きから察すると、どうやら彼に寄り添って、手でも握り合っているに違いない。朱実は、もうじつと辛抱して女の帰りを待っていていられなかった。こんな儘にして置くと、きつと一郎は私の気も知らないで、女を送りがてら夜のアルバイトに出て行ってしまう。あんな女に負けてたまるものか。朱実は体内に急に闘志がむらむらと湧いて来た。先ず逸る心を抑えながら暫く鏡台に向って顔を整えた。化粧が終ると、急いでケーキの包みを開け、それを小器用に菓子皿に盛り合せて部屋を出た。しかし一郎の部屋の前まで行くと、流石にお盆を持った手が小刻みに震え、顔がかつくと火照って来るのはどうしようもなかった。

「やあ。」

一郎は、当り前とも困惑とも取れる声を出しただけだったが、令子は「あッ！」と驚きの声を発して、慌てて一郎の傍を離れた。

朱実は若しもその令子の驚愕に勝ち誇らな

ければ、恐らく氣後れしてしまったであろう。令子という女は華麗な容貌に輝き、豪華な衣裳に身を包んで、何処から押して見ても大富豪の御令嬢に違いなかった。

「いらっしやいませ。どうぞ」

暫く見惚れていた朱実は、ぐっと氣を取り直して、静かにケーキを勧めた後

「一郎さん、御紹介して」と、態と意地悪く

彼に催促した。一郎はぶっきらぼうに

「令子さん。僕の旧友。此方は朱実さん。」

「初めまして。」

「初めまして。」

冷たい御座なりの挨拶の後、暫く三人はきまずい沈黙を続けていたが、其の内に令子が

「此の頃、馬鹿に暑い日が続きますわねえ。」

朱実さん。此の下宿のお嬢さんですの。」

「いいえ、ふふ」

朱実は微かに含み笑いをし、ちらつと令子を見たが、態と令子を見無視して、思い切り大胆に、

「貴方。いいでしょう。令子さんがいらしても——。ね、何時もの様に、お帰り、ってキッスして。」

いきなりぱつと一郎の首に腕を回して、夢中で唇をつけた。

「お、おい……」

一郎は驚いて振り払おうとしたが、反って「むゝゝ」と、鼻に掛かった甘い接吻の音に変じた。暫くの間、全身の力を單めて抱き付いていた朱実、やっと唇を離したが、腕は依然彼の頸に巻いたまま。

「令子さん、お分りでしょう。一郎さんは私の彼氏。」

「まあ！」

「どうぞ、お帰りになって下さい。」

「……………」

無言のまま、さつと立ち上った令子は、激怒の為に頬を震わせていたが、ガラッと乱暴に襖を開けて、転ぶ様に駆け出して行った。

「令子さん！ 令子さん！」

邪怪に朱実を突き飛ばして後を追おうとする一郎に

「嫌！ 嫌！」と、朱実は獅嚙附いて必死に叫んだ。一郎がそれを振り切って玄関迄走った時には、もう令子は、戸も開け放した儘後をも見ずに通りの方へ駆けて居た。

「驚いたなァ。」と、苦笑しながら額の汗を拭いたが、一郎は別段もう追い掛けるでもなく引返して来た。しかし一步部屋に入ると急に「何んて真似すんだ。」と、大声で怒鳴りつけ

た。

「だって……だって……」

「呆れたよ、お前には。出掛けるよ、俺は。馬鹿々々しい。」

「御免なさい。勘忍して。ねえ、未だ早いじゃ、ありませんか。」

「お蔭で、令子さんの所へ寄って行かなければならないよ。遅い位だ。」

「嫌、嫌よ。お願い。」

「何が嫌なんだ。俺は何もお前から行動の自由を束縛される覚えはないよ。」

「でも、でも。一郎さんが今から、あんな女の処へ行くなんて……」

一郎は彼女に構わずに、さつと服を着換え始めた。彼女は身体ごと彼にぶっつけて、穿こうとする彼のズボンを抱え込み

「嫌だわ。行かせない。」

「馬鹿。ズボンが皺になるじゃないか。」

「なったっていい。」

尚更強く抱き締めて、狂った様にズボンを皺くちやにする彼女を見て

「よし、止めないな。」

一郎は部屋を飛び出し、朱実の部屋から彼女の腰紐を二三本持って来ると、暴れる朱実の両手を強く抑えた。

「嫌よ。嫌。」

朱実は必死になって抵抗したが、柔道三段の彼の手に掴まされると、まるで手が痺れて力が抜けてしまった。否応なしに部屋の隅まで曳摺られると、片袖机の脚を抱えさせられ、あっ、いう間もなく両手頸を重ねて、ぎっしりと括り上げられた。もうどう藻掻いても重い机の脚から手を抜く事は出来ない。一郎は次に、すんなりと括れた彼女の両足頸を掴んだ。

「止めて。止めて。」

思い切り足をばたつかせて見たが、手を縛られていては全く徒労に終わった。彼女は足までも同じ様に机の脚を挟んで一つに縛られ、其の上、手頸と足頸を一緒にして、解けない様に固く括られてしまった。一郎は、スカートが腰迄捲れて、薄いナイロンのストッキングを穿いた伸びやかな太腿の上部に、真赤なガーターが艶かしく括れ、お負けに、靴下を脱ぐことの出来ないように靴下と素肌に亘って絆創膏でしっかりと封印してあるのを見て「お前は顔はまずいが、脚だけは魅力があるよ。まあ精々俺が帰るまで、自分の脚でも観賞してるといい」

「解いて、お願いだわ。こんな羞ずかしい恰

好。おばさん達が帰って来たら、きっと部屋に来るわ。」

「夜まで帰ってくるもんか。夜は真暗なまま黙ってりゃあ来やしないよ。じゃ行って来る

よ。」
「待って。一郎さん。」

「はゝゝゝ、罰だよ。」

一郎は部屋を出かけて、ふと、令子が忘れて行ったらしい、絹糸で鳳の刺繍のあるハンカチを見付け

「なんだ、慌てるから、ハンカチ忘れて行ったな。そうだ、朱実、これ啜えさせてやろうか。お前の大好きな令子さんの汗が染み込んでいるだろう。」

「嫌、嫌。死んでも嫌。あんな女のものなんか。」

「いい匂いがするよ。何んて香水だろう。ほら。」

「嫌、穢らわしい。あゝ止めて、あゝ、あゝ、嫌、嫌、一郎さんのものなら何でも啜えますから。ねえ、あゝ、止めて、あゝ、むゝゝ。」

「俺のものより、これの方が余程綺麗だよ。」

一郎は嫌がる朱実の口を無理にこじ開けて、遮二無二ハンカチを捻じ込むと、上から手拭で固く縛り上げ「可愛いお嬢さん。」と、額にチュッ



と音を立てて接吻してから、
「行って来ます」と、おどけた声を残して、さっさと出掛けてしまった。

彼女は折角の土曜日というのに、四つ肢を縛られた動物の様な哀れな恰好で、唯独り悲しく取り残された。それから暫くの後に、藻掻きに藻掻いた末、やつのことでハンカチだけは、吐き出すことが出来た。しかし、手足を括った紐は、結び目が意地悪くも、ちゃんと踵の方にしてある為、どう解こうと試みてみても無理だった。彼女は横になることも出来ず、固い机の脚を抱えたまま、とほうに暮れた。時間がたつにつれて、全身の重みを支えているお尻が痛くなり始め、彼女は不自由な身を色々動かして、少しでも其の苦痛を減らそうと悶えた。其の中に額を流れる汗が、ブラウスの肩で拭き切れずに、痛い程に目に染みた。しかし、そんな事はまだ良い方で、家主夫妻が帰って来てからの心配は、全く身も細る思いだった。一度おばさんが廊下を歩いて来て

「朱実さん、朱実さん。」と、呼びながら隣の部屋の襖を開け、

「おや、留守だわ。」と、呟きながら去って行った時には、其の後、暫くは胸の動悸が止ま

らなかった。彼女は一郎の外出中も彼の部屋にいたことが多かった、それをおばさんがよく知っている筈なのに、よくまあ、此方の襖を開けなかったもの。それでも何時又やって来るかも知れない。彼女は耳を傾けて、一刻も安んじる事は出来なかった。

一郎さんの馬鹿、一郎さんの馬鹿。恋しい一郎さん、恋しい一郎さん。朱実は心の中で交互に叫び続けた。

二、契 約 書

契 約 書

一、一郎と朱実の同棲中は朱実は決して一郎の如何なる自由にも干渉しないこと。

一、一郎が朱実の自由を束縛する際は朱実は決して異議を申立てないこと。

一、一郎の大学卒業と同時に同棲を中止し、以後は全然面識もない他人となること。

一、同棲は一郎の大学卒業までは中止しないこと。

右契約致します

昭和〇〇年十二月一日

田 中 一 郎 印

萩 野 朱 実 印

朱実はこの契約書を書き終ると、思い切り

一郎に接吻した。心は歡喜に躍り狂っていた。念願通って今日から一郎さんと同棲出来る。卒業迄でもいい、兎に角、今後約一年間は一郎さんの側で生活することを約束付けられたのだ。一郎の呆れるのも構わずに、直ぐ彼女は、一郎が借りていた二部屋のうちの一つに引越した。それから朱実は、恰も初々しい新妻の様に、早朝から一郎の衣類を洗濯したり一郎の好物を選んで御馳走を作ったり一人で楽しそうにはしゃぎ廻っていた。しかし一方、一郎は、彼女がまめまめしく立働けば働く程益々困惑の度を増して行った。一郎は億万長者の一人息子で、国には名家の娘が幼い時からの許嫁として彼を待っていた。勿論彼はそんな幼い時から親同志で決めた許嫁などに全く興味はなかった。しかし東京で勝手に家柄もないオフィスガールと住んでいる事が国許に知れてはまずかった。父は頑固一徹の昔者だった。東京での自堕落が知れることは、彼自身にとっては、正しく身の破滅を意味した。従って、彼の精神の奥深くにはサジスティックな根が萌していたといえ、民主主義者を標榜している彼が、同棲の為の契約書を作製したという事は、万事単なる遊戯ではなかったのである。彼自身受身であったと

はいえ、一度の間違いから同棲に追い込まれた彼は、朱実の一途で約束に固い一本気な氣質を知悉していたので、一応此の契約書で気安めとなっていた。処が一緒になって見て、彼女の余りの愛情の深さに驚いた。時々は契約書の事も忘れて、お妾でも良いから一生傍に置いてと執拗にせがまれたりした。夜は彼がバンドを終えて、一時二時頃迄遊んで帰って来ても、ちゃんと起きて待っていた。朝は彼の枕許に寝ながらも食べれる様に朝食を並べ、煙草と新聞も手の届く辺に置き、万事抜け目なく彼の氣に入る様に整えた上で、休むことなく会社に出動していた。彼女は会社を辞めていなかった。金に不自由のない彼と同棲しても、自分の費用は一切彼に面倒を掛けたりしなかった。一つには彼が卒業して国に帰ってしまった後の生計の為でもあったが。

彼はあらゆる点で、彼女が完全過ぎたので全く辟易してしまつた。辟易すると同時に態と厚かましくしてみた。しかし、間もなく、その厚かましい意地悪が、或る切掛から愛情と結び付いて、新らしい二人の愛を生んでしまふ結果になった。

或る夜、彼は矢張りバンドが終つてから、遅く迄新橋附近を彷徨っていて、家に帰った

のは二時を廻っていた。少し酔い過ぎてもないし、全く疲れていた。しかし朱実は何時もの様に、彼の蒲団に炬燵を入れて暖めながら、睡そうな顔も見せず待っていた。彼は服の儘、ごろんと横になると

「お前、自分の部屋で寝ろよ。俺は睡い。」

彼女は其の晩、甘い恋愛映画を観て来て、映画館の帰途から、彼の顔を見る迄、ずっと胸を疼かせながら待ち侘びていた処とて、どうしても一人でなど寝る氣にはなれなかった。全然相手にしない彼をゆさぶり

「ねえ、服の儘じゃ身体に毒だわ。」と、頬を摺り寄せて、無理に服を脱がせようとした。した。

「うるさいな。」

「駄目よ。着換えなくちゃア。」

頻りに揉み合っている中に彼女はどうにも我慢し切れなくなつて、夢中で彼を抱き締めると、氣違ひの様に接吻した。

「お前は動物みたいだな。」

やっと彼女を押し転ばせてそういった時は彼の感情もかなり亢つて来た。しかし、裾も乱し、胸許もはだけて

「動物でもいいわ、何でもいいわ。貴方さえ私のものなら……。」と、頬を紅潮させた彼女

を見た時、彼には、ふと、異つた欲情が――生れて以来静かに眠っていたサジズム――が烈しく息をし始めて来た。

「兎に角、寝かせてくれ、一人で。」

「嫌、嫌。」

「どうしても嫌か。」

「嫌。」

「よし。」

彼は矢庭に彼女の腰紐を解くと、素早く後手に捻じ伏せた。

余り突然であつたし、全く初めての事でもあつたので、彼女は、嫌とも駄目とも声を発する隙さえなく、彼の力に任せて、瞬く間に後手に固く括られてしまつた。彼は一気に足頭も縛り上げると、それを手頭の所まで引上げて一緒に結んだ。

彼は終つて、どっかりと胡坐をかくと、初めて人を縛つた興奮の為に、ドキドキと胸の動悸が全身を震わせているのを、はっきりと感じることが出来た。一方、朱実も一言も発しなかった。否、発せられないのだつた。彼女も初めてのこんな経験に異様な喜びとも何とも形容の出来ない感情の亢りに胸を強く締められていた。吐く息のみ荒くて到底声などは出せなかった。

一郎はそんな彼女に、珍らしくも彼の方から飛び付いて行きたい程の強い衝動に駆られたが、辛じてそれを抑えようと、震える手で、何度も点けそこない乍ら、やっと煙草に火を点けた。一服二服、荒々しく煙草を吸っている中に、どうやら少しは気も鎮まって来たと、又、彼には意地悪な気持が頭を拾げて来た。煙草を揉み消し、急いで手拭を取る、と、適当な布が見附からぬ儘、彼女の腕を捲って袖を口に押込み、其の上から力一杯に頬を引き絞った。

「ふゝ、やっと静かになったな。これで安眠出来るよ。」

彼は惹かれる感情を押し殺すと、思い切つて蒲団を被り、息をつめた。

驚いた彼女は、この時、初めて声を立てようとしたが

「むゝゝゝ」と、徒らに呻吟いたに過ぎなかった。慌てて藻掻いてみたが、悶えれば悶える程、膝関節に痛みを感じ、腹や腿の筋肉が引き攣る様な苦痛を受けるだけであった。

初めは御芝居で蒲団に潜った彼は、疲れと酔の為に、何時の間にか本当に深く寝入ってしまった。

こうなると朱実は、最早無駄に悶えて苦し

まないよう、静かに身を横たえて朝を待つより仕方がなかった。一旦寝入ったら、ちよつとやそつとでは起きる一郎でないことを、彼女は充分過ぎる程知っていたから。

どの位、時が経ったか、火鉢の炭も燃え切ったのであろう。手足の指先が痛い程に冷たく、身体は寒さに顫え始めた。

しかし、やがて太陽が部屋の窓から眩しい光を差し込んで朝が来た。部屋が明るくなると、急に浅ましく縛られた身に羞ずかしさが湧いて苛々と女心をいたぶり始めた。とうとう、我慢出来ずに、彼女は不自由な身体を振って、身体ごと一郎の蒲団にぶついたり、何とかして彼を起そうとし出したが、彼は一向に目を醒す気配も見せなかった。

その儘時が過ぎて、一郎がやっと心地良い熟睡から覚めたのは、もう昼近い頃であった。その時、彼はすっかり朱実の事を忘却していた。大きく欠伸をして起き上りかけ、ふと、変てこな恰好で縛られて転がっている彼女を見る迄は。おや。彼は急に昨夜の記憶が甦って来た。と、同時に昨夜の儘の同じ恰好で未だに転がっている彼女にいい知れぬ憐憫と愛情を覚えた。それは今迄に感じたことのない強烈な愛情であった。彼は直ぐさま、彼

女の紐を解こうと身を近ずけたが、ふと、もつと何か此の儘で彼女をじらしてみたい衝動に駆り立てられて

「何だ、お前はまたそんな不様な恰好をしてたのか。」

だって、貴方が、貴方が……酷いわ、酷いわ。彼女は頸を左右に振って声の無い抗議をしている内に、何とはなしに目から涙が溢れて落ちた。

「泣く奴があるか。馬鹿だな。じゃ笑わしてやろうか。」

彼は彼女の白い足の裏を、こちょこちょと擦った。

「むゝゝゝ。」

人一倍に敏感な彼女――

「はゝゝゝ、解いて欲しけりゃ、泣かないで解いて下さいっていえよ。」

彼は手足は其の儘暫く置いて、先ず口を縛った手拭を解こうとしたが、昨夜は余程力任せに結んだとみえて、仲々解く事が出来なかった。やっと苦心してそれを弛めると、彼女の頬に痛々しく手拭の跡が附いていた。彼はそれを手で摩りながら、彼女の口から袖をずるすると引出した途端

「馬鹿、馬鹿、馬鹿。一郎さんの馬鹿。」

彼女は泣声を上げて叫び続けた。しかしその声には怒りも恨みもなかった。彼はもうたまらずに、思い切り彼女を抱き締めて、熱い熱い接吻をした。

「ああ、嬉しい。もっと……。」

彼女は束縛された身を悶え、何も彼も忘れて、心から喜悅の声を上げた。

彼女にとって、それは一郎から与えられた、初めての、而も烈しい受身の愛撫であつたのだ。

二、ストッキング刑

彼女の契約書は二度、三度と書き換えられた。何か事有る度に一郎は認識を改める為に、といってそれを書かしたのだった。しかし契約書の枚数が増えるに従つて、彼の愛情も彼のサジズムも亦、深まって行つた。或る時は大きな蜘蛛を捕まえて来て、其れを彼女の乳首に糸で結んだり、又、時には、滅多に一緒に食ふることのない夕食に、彼女が子供の様にはしゃいでいると、

「お前も一緒にビール飲まないか。」

「ええ、戴くわ。」

「じゃ、お前のパンプス持ってきて来いよ。」

「え？」

「あれは素晴らしく風流なコップじゃないか。」
結局、食卓の上に自分のハイヒールを載せて、それに唇を付けながら哀れな夕食を食べさせられたりした。

又彼は非常に気永くじりじりと彼女を困らせるのを好んだ。同棲を始めて半年程たった頃、丁度夏に入った暑い季節だった。彼女は彼に断りなしに彼の職場に遊びに行った罰として、三カ月にも亘る永いお仕置を受ける羽目になった。

最初彼から其のお仕置をいい渡された時、彼女は何だそんな事位かと、簡単に多寡を括って考えたが、時が経つにつれて、それが、仲々大変なことを知らされた。

判決

荻野朱実

一、右の者、不謹慎であつた罪によりストッキング刑三カ月に処す。

(1) ストッキング刑受刑者は期間中ストッキングを腿の付根までピッチリと穿き一瞬と雖これを脱ぐこと能わず。

但し穿き換えの時は監視付きにて片足の脱ぎ始めよりその穿き終り迄十秒以内とし、これを超えたる時は特に副刑を処するものとす。

又爪の美容の際は矢張り片方ずつ監視付きにて許される。

右以外の場合には理由の如何を問はずストッキングを脱ぐことを得ず。

(2) 衣服、履物については特に命令なき時は何を着用するも可なり。

但しストッキングの上よりソックス、足袋等を着用することを禁ず

右諸規則を厳守して服役することを宣誓致します

昭和〇〇年〇月〇日

荻野朱実印

朱実はこの変てこな判決文に署名捺印をすると、微笑を以て服役を誓ったが、やがて一日も経たぬ内に、それが並大抵の刑でないことに気付いた。

先ず第一に、この下宿には風呂がなかった。此の判決に依れば入浴中もストッキングを穿いていなければならぬ事になつていゝる。お風呂屋で靴下を穿いた儘湯に入つたらどんなことになるだろう。彼女は三カ月間、ガスで湯を沸して盥で入浴しなければならぬ羽目となつた。幸い家主夫妻が留守勝ちで何よりであつたが。出勤の際とか、或は彼が外出する時には腿とストッキングを嚴重に絆



創膏で繋いで、彼の特製である大きなハンコでペタタリと封印された。此の瞬間の哀れな

汚辱感は、幾日たっても、何回同じ事が繰返されても、少しも減じることがなかった。外

出する前に、彼女は自分の手で、決して離れることのない様に固く絆創膏を貼って、

「一郎さん、今から外出したいと思いますので、どうか封印して下さいませ。」と、両手をついて頭を下げる。

「よし。」と、許可が下ると、彼女は彼の前に両足を揃えて立ちスカートを腰迄捲り上げて、観念の目を閉じる。彼は丹念に絆創膏の貼り具合を点検した後、大きなハンコに、たつぷりと朱肉をつけてペタッ、ペタッ、と無遠慮に封印してしまう。このペタッと腿にハンコが触れる時の哀れな感触は、彼女の腿から背筋を突走ってズキンと鋭く脳神経を痺らせるのだった。

この、脚にハンコを押すということは、一郎にとっては偶然の思い付きではなかった。彼が小学生の頃、父の読んでいた雑誌を拾い読みしていた時に、頁の隅っこの小さな枠の中に、外国の婦人が、スカートを心持ち

摺り上げていて、後からカイゼル髭を生やした巡査が、握拳よりも大きなハンコを、彼女のすんなりとした脹脛にペタリと押している画が載っていた。そのニュースは確かドイツか何処かのことであったに違いない。婦人の奢侈を禁ずる為に、街角や物蔭に巡査が恐ろしい目を光らせていて、絹の薄い上等なストッキングを穿いている婦人を見付けると、有無をいわず即座に拘引して、嚴重に説諭した上、両方の脹脛に、売国奴と書いた大きなハンコをペタリ押しして釈放する。この婦人が家に着く迄は、一切の乗物が乗車を拒否することになっている上、これに使用されるインキは特殊の物で、薄い絹を透して肌にも染込み、約一カ月は洗っても、どうしても売国奴の字を消すことが出来ない。これには流石の御洒落婦人達も、全く閉口しているので、

急激に贅沢が蔭を潜め始めた。然し此れが、日本の絹の輸出に影響しなければ良いが——と、大体此の様な記事であつた。

彼は、贅沢に着飾った美しい外国の婦人が泣きながらハンコを押されている様や、沢山の弥次馬に罵られ乍ら、顔をハンカチで覆って立ち竦んでいる様を想像して、一人で小さな胸を機ませ、時々こっそりとその雑誌を持ち

ち出しては、一人で興奮を新たにしたりしたものだった。

だから一郎は朱実の腿にハンコを押す時には何時も此の時の記憶が甦っていた。或る時はじっくりと押し付ける様に、又或る時は上から叩き付ける様に、時にはお負けとして、ストッキングと腿とに亘って割印を押したりもしてみた。しかし、一郎にとってはハンコを押す瞬間の興奮はそう一日中続く筈もなかった。処が朱実にしてみれば、腿に羞かしいハンコが押しであるという事が、会社でタイプを叩いていても、友達との歓談中にも、常に腦裏から去ることはなかった。特に会社のバレーのキャプテンである彼女にとって、何や彼やと理由をつけては好きなバレーを止めなければならぬことは、一番の苦痛であり打撃であつた。

「朱実さん、此頃少し変よ。」「赤ちゃんでないか知ら。」「独身で？」「ふふふ。」

こんな、同僚の陰口もちよい耳にする様にさえた。こんなことは判決を受けた時には全く夢想だにできなかったことで、この儘三月も我慢出来るかどうか、心細くさえたて来た。

又判決文中には、最初氣が附かなかったが

色々の陰謀が隠されていた。靴下の穿き換えが十秒以内というのも仲々困難なことだった。脱ぐ時にはすぐ脱げても、極く薄いナイロンの靴下を特に汗ばんだ夏の頃に、如何に慌てて穿こうとしても、それは十秒以内に穿き終らないことが多かった。すると早速、一郎は副刑をいい渡した。此の副刑に制限がないのも曲者であつた。

或る時の副刑は湯タンポを入れて寝ることだった。股迄ピッタリと靴下を纏って寝るだけでさえ暑苦しいのに、御丁寧に湯タンポ迄入れさされては宛で蒲団の中にビショビショに湯を撒いて寝た程に汗を掻かなければならなかった。初めての晩の事、どうやら、うとうとと眠りに入つた時には、余りの蒸し暑さに知らず識らず蒲団を撥ね除けていた。所が、そうなる事を始めから計算に入れていた一郎は、早速彼女を揺り起した。その結果、彼女は追加の罰として蒲団を撥ねられない様に、嚴重に手足を括られることになった。おまけに、一日だけだった此の副刑が一週間の延期となった。彼女にとって、此の湯タンポ刑は全く辛かった。それで、汗だくの此の副刑をやっと勤め上げた日、彼女は漸くほつとした思いだった。

彼も其の日は非常に優しくて、彼女を慰勞として銀座に連れて行ってやるといった。

「まあ、嬉しい。一郎さんに銀座に連れて行って貰うの何カ月振りかしら。」

「馬鹿いえ、ねんがら年中連れて行ってやったじゃないか。」

「ええ、でも、最近はなかったわ。」

「そうだったかな。まあ、そんな事はどうでもいい。それよりか、俺は久し振りにお前の盛装した和服姿が見たいよ。今日の銀ブラは着物がいい。」

「ええ、そうするわ。」

嬉しさの余り、すっかり判決文のことを忘れていた。自室の姿見に向って、いそいそと着換えにかかったが、スカートを取った時、ふと、ストッキングに気が付いた。そして、ストッキングの上よりソックス、足袋等を着用することを禁ずという但し書を思い出してどきッとした。着物の下から靴下を穿いた足を出して草履をひっかけている姿が、明瞭に頭の中に画き出された。ああ羞ずかしい、堪らないわ。彼女は慌てて一郎の処へ飛んで行き、

「ねえ、一郎さん、今日は足袋を穿いてもいいんでしょう。」

思い切り甘えた声を出して媚びてみたが、
「勿論駄目だよ。」

「でも着物に靴下なんか穿いて銀座を歩いたら氣違かと思われるわ。」

「何と思われようと、お前は現在、僕の囚人なんだよ。」

「でも、どうしても足袋なしでは銀座に行けませんわ。お願い、今日だけ許して。」

「そうだな、じゃア特に今日は勘弁してやろう。その代り湯タンボ刑を、あと一週間延期するよ。それに明日からは服装に就て特にちいち命令することにしよう。それでもいいね。」

「やっと終わったのに、又一週間？」

彼女は咄嗟には返事することが出来なかった。ああ、やっと今夜から解放されると思ったのに——。しかし、銀座に氣違いの様な恰好をして行く訳にもいかない。

「いいわ、仕方ありませんわ。その代り、今日は足袋を穿いてもいいんですわね。」

「足袋を穿いちアいけないよ。判決は、どんな事があっても変えられない。今日は洋服で行ってもいいことにする。」

彼女はもう斯うなつては、先々のことは考へ悩んでいられない。目前が何とか良くなれ

ばいいと思った。しかし、終わった早々、又々一週間の発汗訓練を続けなければならないとは……。

その翌日、此の日は朝から夏らしくもなく切れ目のない長雨がザアザアと降っていた。彼は目醒時計の助けを借りて、早々と起きて彼女の手を解きながら

「やあ、お詔え向きのジャンジャカ降りじゃないか、はハハハ。今日は服装に就ては特に命令はしないが、履物は木のサンダルを履いて行けよ。」

「サンダル？」

「雨降りに草履ばきなら変だが、サンダルなら別段可笑しくもないよ。」

「でも、真夏に、こんなひどい雨の中を靴下穿いた儘、サンダルで通勤する女などいませんわ。」

「兎も角、命令だよ。変な人だと思われても誰も氣遣いとまでは思わないよ。」

もう朱実には反抗する余地がなかった。屠所に牽かれる羊の様な氣持で、降りしきる雨の中を、サンダル履きで外に出た。玄関先から下を見ないで、思い切って通り迄出たが、人通りの劇しい表通に來ると、どうしても羞しい足許を見ないではいられなかった。既に靴

下はビッシヨリ濡れて、小粒の泥が雨の跳返りで一杯附着していた。彼女は押し潰される様な悲しさに立ち竦んだ。といって家に帰ることも出来ない彼女は、やっと勇をふるって歩き始めたものの、行き交う人々は必ず一度は彼女の足許を見、そして次に顔を見た。その度に身も細る羞しさを味わなければならなかった。何時もは、そんなに感じなかった会社迄の時間が、こんなにも永かったかと痛感させられた。やっと神田まで電車に揺られて先を思ぐ人混に紛れながら駅を出た。駅は出たものの、何時もの今川橋から本通りの方を通る路順はひとりで避けて、ごみごみした屋台の列んだ裏路を選んでいった。それでもどうやら会社に近附いた時、ふと前方をグリーンのコートにニュースタイルの白のレインシューズを履いて、ちょっと傘を斜めに気取って歩いて行く春代を見とめた。春代は朱実と同じ会社の事務員で、放送局と渾名のあるオキャンな娘だった。朱実は途端に気が挫けて立止まった。私のこんな姿は一朝にして会社中に知れ亘ってしまうに違いない。お負けにこのサンダル履きを知られない中に、こっそりと社内履きの靴と履き換えることが出来た所で、此のびしょびしょの靴下を其の儘穿い

ているとしたら、ああ、私には我慢が出来ない。唯さえ最近には皆に兎や角いわれているのに。

彼女は急に恐ろしくなってきた。早くこんな処は逃げなければ。彼女は慌てて引返ししかけると、皮肉にも此方の路からも彼方の通りからも、同僚や男の社員達がぞくぞくとやって来る。出勤時刻の会社の附近なのだから当然のことであつたのに、今更彼女は深入りし過ぎたことを後悔した。何でうろろうとこんな処迄来てしまったのだろう。彼女は行場に困って直ぐ横のビルに飛込んだ。人口の隅に隠れて、一人、二人、と、同僚達をやり過したが、未だ後から後からやって来る。それよりも次に此のビルの人達がじろじろと変な横目で彼女を見ながら入って来る。彼女は切羽詰って、廊下を中に進んで行った。カタカタ、サンダルの音が一足毎に臆病を増した。廊下を突当り迄行ってしまふと全く行き場に困って丁度横にあったトイレに飛込んだ。中は勤務前の化粧直しの女性で一杯に溢れていた。皆が一斉に、あわてふためいた彼女を注視した。彼女は急いで其処も飛出すと、全く泣きたい様な捨鉢の気持で、又入口まで逃げ返って、思い切って外に走り出た。其の時、

もう全く心が上ずっていたのであろう、足を踏み滑らせて転びそうになった途端にサンダルが脱げて飛んだ。脱げたと思ったサンダルは、実は切れていた。ああ、彼女は奈落に突落された様な悲哀に、木部から離れた棲皮を見詰めた目から、ポタポタと涙が零れ落ちた。もう人目を避けて逃げ廻る気力もなくなってきた。彼女は片手にサンダルをぶら下げて顔を隠しながら通りの方に向って歩き始めた。華やかなビル街をこんな姿で歩く哀れさが、べったりと心に泥を塗っていた。雨に濡れたアスファルトの道路が、ペチャペチャと、履物のない彼女を嘲笑う。

彼女は跛を引きながら表通まで出ると漸うのことでタクシーを拾うことが出来た。

「おや、切れたんですかい。」

運ちゃんは多分に輕蔑を含んで嗤った。

「ええ、中野まで。」

彼女はもう一郎から、どんなお仕置を受けても構わないから、一刻も早く家に帰りたい。自動車のソファに凭れ、ハンカチを出して顔を拭くと、こんな姿で帰宅する自分が哀れでもあり、悲しくもあり、そして不思議に楽しくもあった。

「一体、どうしたのだ。」

家に辿り着いて、一郎の前に崩折れると、一郎はニヤニヤ笑いながら訊いた。

「サンダルが切れちゃったんですもの。」と、

彼女は泣きじゃくりながら、途切れ途切れに訴えた。

「切れたら跣足で歩けばいいじゃないか。」

「嫌、嫌よ。そんな……」

「はゝゝゝ、はゝゝゝ。」

彼は急に腹をかかえて笑いこけた。一しきり笑うと、両手で彼女の顔を挟んで上を向け「なんだ、その顔。狎が噓したみたいじゃないか。」

泣べそ搔いた顔を見詰められる羞しさに、彼女は頸を振り、手で拒もうとするのを、彼は両手に力を加えて、二三度強く彼女の顔を振り、

「兎に角、会社に出勤もせずに命令に背いて帰って来たんだ。どんな罰がいい、雨の中を素裸にして立木にでも繋いどいてやろうか。」
「御免なさい。勘忍して。そんな……」
「そんなもこんなも有るか。先ず第一の罰だ。」

いい終るや、彼はぐッと手に力を入れて、引寄せると、いきなり唇を寄せ、彼女の唇も潰れるかと思う程に強くそれを吸った。

それは彼女の全く予期しないことだった。

朱実にはわッと泣き声を上げて彼に獅噛附いた。今朝からの屈辱も悲哀も、凡てが此の瞬間に於て至上のものとなった。一郎も亦、彼女に接吻してやろうなどとは、その寸前まで考えてもいなかった。しかし彼女を見詰めている中に無上に可愛らしくなって、そうする以外に方法が見付からなかった。彼の彼女に對する愛情は、サジズムを媒介として、事実抜き差しならぬものとなり始めていたのである。しかし、彼女にとっては二人の愛情の深まりを感じ取ることが、此の世の最大の幸福であるのに反して、彼にとっては、ますます愛情の深度に比例して苦痛が増して行くのは如何ともなし得なかった。

四、江の島の沖

一郎は又契約書を書かせた。彼は最早此の契約書は朱実を縛る為のものではなく、彼自身の心を引締める為のものになっていることを自覚していた。彼はこの儘、朱実の愛を受け入れて行ったら、来年の三月には彼自身が彼女から離れられなくなってしまいそうな気がした。そうなれば、仮令、父に知られる様な事がなくても、此の女の為に、恐らく精神

も肉体も腐敗し切って、到底浮上ることの出来ない泥沼に落込んでしまうことも知っていた。彼女には俺が凡てなのだ。彼女には神もいらぬ。仏もいらぬ。唯俺に對する驚くべき愛情——。あらゆる生活が唯それ一つに集中され、それに依って幸福と満足を得ているのだ。俺は彼女のこの情熱に感謝する。しかし、俺は詩人でも画家でも音楽家でもない。もしも彼女の此の怒濤の様な愛を受入れたならば、俺にとっては唯一つ、それは破滅があるのみなのだ。

一郎は彼女への愛が深まれば深まる程、意識して極力彼女を避け始めた。ともすれば魅かれ勝ちな彼女への愛、それに必然的に伴ったサジスティックなプレイ。これを出来る限り避けようと努めた。彼がストッキング刑を課した最初のプランの中には、彼女を温泉に連れて行って、男女混浴の大浴場に、真夜中のなるべく人の少ない時を見計らって、無理に入れさせてやろうというスリル満点な予定があった。然し、そんなことは、尚一層二人の間を離れ難いものにしそうな気がして断念した。

彼の此の様な心理状態は明瞭に朱実に伝わった。彼女は彼の苦しみが自分に対する愛の

深まりであるのを感じとって嬉しかった。しかし、一方ストックキング刑も其の後、何等新らしい発展も見せず、従って彼の感情の亢りも感じられず、苛々と彼の一刻々々の必理の動きに氣を使いながら、何かもの足りない日々を重ねた。一番恐れたのは、此の儘彼の愛情の火がたち消えてしまうのではないかという心配だった。

而も、驚くべき令子の出現は此の時だったのである。朱実は其の日こそ、机の脚を抱いた儘一日中縛られたが、其の後は、彼は益々彼女を避けている様子だった。何時迄待っても家に帰らない日が多くなった。そんな時、彼女は一日でも二日でも、ストックキングの封印を切らずに彼を待った。そうすることが彼に対する悲

しい宿命的な愛情の表現である様な気がしていた。然し、そんな淋しい幾日かが過ぎた或る日、彼女は思い切って態と封印を切り、ストックキングを脱いで彼を待った。



彼が帰って来た時、

「お帰りなさい。」と、自分では平静な声を出した積りだったが、それは喉にひっかゝった様な上ずった響きとなり、目は妖しく輝いていた。

彼は明らかにハッと驚きを顔に現わし、何かおうとしかけたが、急に口を噤んだ。複雑な表情をした儘、知らぬ顔をして、何か白々しく、さっと床に入ってしまった。

今に何かいうか、今に「おい、お仕置は覚悟

しているんだろうな。」といって腕を捻じ上げられるか。彼女は焼け付く様な視線を投げて彼の一部始終の動きに視入っていたが、彼が蒲団を頭から被ってしまった瞬間、ぼうっと辺が霞んで、ぼたりと涙が落ちた。力なく自分の部屋に戻ると思わず鳴咽にむせんだ。遂に彼は私を完全に無視してしまった。彼女はとうとう一晩中一睡もせずに泣き明かした。

しかし、一晩中眠れなかったのは一郎とて同じことだった。これでいいのだ。この儘出来るだけ冷たくして朱実と別れてしまえばいいのだ。斯う自分にいきかせる心の片隅から、彼女との甘い抱擁や灼熱の如く劇しい愛情が轟々と胸に迫った。その愛情が徐々に冷たい心を熔し始めると、色々の楽しい計画が頭を拾げて来た。社会に対する常識的な欲望を称して理性と唱えるならば、彼に於て、一晩の不眠の戦の後に、理性は完全に本能に打ち負かされた。

翌日、彼は朱実に再び契約書を書かせると共に、ストッキング刑の三カ月延期を宣言した。これは朱実に再び嬉しい希望の燈火を与えた。

然し、それから又々幾日かの無為の日が続いた。そして令子が矢張り彼に付き纏って居

ることも此の間に知った。

令子が某富豪の令嬢らしいことと、それにあの輝くばかりの美貌を想い合せた時、朱実は明らかに令子が恐るべき強敵であるのを自覚せずには居れなかった。而もその強敵令子と間もなく再び顔を会わさねばならない日が来た。

それは毎日茹る様な晴天の続いた或る土曜日の朝、

「俺は海に行きたくなった。今日の午後から泊りがけで江の島か、鎌倉にでも行こうじゃないか。バンドは二三日休みだ。」

彼女は有頂天になって喜んだ。

「私、会社なんか休むわ。お弁当作りましようか。」

「子供の遠足じゃあるまいし。それより海水着でも買いに行くか。」

彼女は楽しくて楽しくてたまらなかった。

冷淡にされて居た幾日かの悲しみの後に、此の様な喜びが来ようなどとは、夢にも思っただけでなかったことだった。新宿のデパートで、彼のお好みにより、パンティとブラジャーの二組になったピンク色のビキニスタイルの海水着を買うと、新妻の様に彼に寄り添って、いそいそとして小田急に乗り込んだ。

朱実は嬉しい反面、何か羞しいことが待ち受けて居る様な不安はあった。海へ行ってもどうせストッキングは脱がせて呉れないに決まって居る。それは一郎から特に目立つ様な濃い焦茶色のナイロンを穿かされたのでも明らかだった。しかし、彼女は、海で真逆令子と顔を会わせようとは夢にも思っただけで居なかった。

電車の進行に伴って、窓から青々とした林や、美しく蜷った島などが展望され始めると彼女は久しく東京を離れたことがなかったのだ、不安などはすっかり忘れて、心の底から清らかな楽しさが湧上って来た。

片瀬、江の島は流石晴天続きの茹る様な週末のこと、て、全く文字通り芋の子を洗う様な人出だった。

「驚いたなあ、これじゃ、東京より余程暑いや、来るんではなかったなあ。」

彼は口ではそう云い乍らも、矢張りザザアと岸に打寄せては砕ける白波を眺めて、さも心地良さそうに、

「は、は、は」と、訳もなく笑った。

二人は先ず、長い棧橋を江の島に渡って宿をとった。奥まった静かな一室に落着いて、彼は悠然と一時間ばかり昼寝した後、

「さあ、海へ行こうか。」

と、云って起き上った。

「え……。」

朱実はいくから手術台に上る時の様な遺瀨ない気持で、曖昧な返事をした。

「此処で海水着に着換えて行こう。」

「え……。」

「何処か具合でも悪いのか。」

「いゝえ、……あの……靴下脱いでもいゝんでしよう。」

「靴下を脱ぐ？ 冗談云ってはいけないよ。」

もう判決文を忘れたんではあるまいね。」

『でも、でも……私、海へ入るのよすわ。』

「じゃ、何の為に海水着まで買って海へ来たんだ。」

「だって、まさか……。」

「はゝゝゝ、俺は何も、お前に此処から海水着だけで行けとは云って居ないよ。海水着の上から服を着な。沖迄ボートを出してやるから。」

「沖？ あら、私カナヅチなのよ。」

「知ってるよ。浮袋を買えばいゝさ。」

「でも、怖いわ。」

「命令だよ。」

「はい。」

朱実はどうやら恥をかゝずに済みそうなので、喜んで海水着に着換えて、近所の店で浮袋を買うと、一郎の後から再び長い棧橋を渡って浜辺に出た。

一郎は波打際をバシバシ波を蹴り乍ら歩いて行く。彼女は砂浜の上を、歩きにくいハイヒールを履いた儘、小走りに従った。そんな処で、靴にストッキングまで穿いて歩いて居る者は誰も居なかった。洋服を着て居る者でも、足だけは皆跣足になって居た。砂浜に寝そべって戯れて居た若い数人の男女が、首を竦めてクククッと嗤うのが感じられた。男ばかりの連れは、

「なんだ、あの女は。」

「いかれてるんだろう。」

「銀座で男でも漁って居る気さ。」

などと、後から無遠慮に浴せ掛けた。

それでも朱実はいく、近くに一郎が居るという力強さに、何等、気の挫けを感じなかった。漸く、一郎が一隻のボートを借りた。

「朱実、早く乗れよ。」

「え……。」

ボートに乗るには膝の辺まで水に浸らなければならぬのだが、彼は全然抱いて呉れる気配を見せなかった。ボートの附近に居た沢

山の人達が、そんな二人を面白そうに見入って居る。彼女は一刻も早く沖に出て、二人切りの世界になりたいと思った。思い切ってハイヒールを脱ぎ、ストッキングの儘、ジャブジャブと水に入ってボートに掴まった。ボートが揺れるので二三度乗り損う内に、スカート迄ビショビショに濡れてしまった。

「凄げえなあ、あの女。」

こんな声に附近の者が一斉にクスクスと笑った。子供が不思議そうに顔を覗き込んで居る。朱実はいくボートに乗り込んでしまうと、急に羞しさがこみ上げて来て、ポツと顔が火照って来るのを覚えた。流石の一郎も少し照れ臭いとみえて、急いで沖に漕ぎ出した。沖に出る迄は、オール捌きも自由にならない程の人、人、人で、やっと気楽にボートが漕げる辺まで出ると、

「やれやれ。」

一郎は額の汗を腕で擦りながら云った。

「一郎さんたら、抱いて下さらないんですもの。」

「赤んぼでもあるまいし。」

一郎は相変らず憎まれ口を叩き乍ら、逞しい腕に力瘤をみせて、ぐんぐんと沖に漕ぎ出した。しかし、何処まで行っても視野から一

隻のボートも無くなるということは不可能だった。もう、海岸の雑沓も、ぐわんと一つの遠い響きになって聞える処まで出て居た。

「此処らでいゝだろう。」

「でも、まだあのボートから見えるわ。」

「これ以上沖に出て、ボートがひっくり返ったらどうするんだ。ほら！」

彼は態とグラグラ、ボートを揺すぶった。

「嫌、嫌。」

「はゝゝゝ、じゃ海に入ろう。」

彼はジャボンと錨を投込むと、早速浮袋を脹らせ始めた。彼女は仕方なしに、こわこわ及び腰で服を脱ぎにかゝった。右や左に浮んで居るボートは、かなりの距離があったが、充分に乗って居る人の見分が付く位なので、彼女は脱ぎ終ると、素早く腿をスカートで覆

った。

「臆病だな、見えるものか。」

「あら、見えるわよ。」

「さあ、浮袋。」

彼女は浮袋を受取ると、自分で、空気を止める金具を充分に捻り直して見て、さて、それを身に着けようとする、其れは、とても小さかった。

「あら、入らないわ。」

「そんなことあるものか。手を通してしまえば丁度いゝのさ。」

一郎の助けを借りて身を振ると、ゴムが無理に押し拡げられて、すぽっと腋の下に嵌った。腕が浮袋の上で水平になった儘固定されて、手先がブラブラと空に遊んで居た。

「まあ、小さいわ。」

「カナヅチにはそれ位が丁度いゝんだよ。水中で浮袋が抜けると困るからなあ。」

彼はスカートを取ると、

「さあ入れてやろう。」

と、腿の下に腕を入れて、彼女の足先を舷側に掛けた。

「ま、待って、彼方のボートが……」



云いも終らぬ内に、彼女は其の儘ジャボンと水しぶきを上げて海中に投げ込まれた。後から続いて飛び込んだ一郎は、暫く泳ぎ廻って居たが、其の内に彼女に近附くと、頭の上から覆い被さったり、脇の辺や、お臍の所を擦ったりして、執拗く騷り始めた。手が浮袋の上で固定された儘、まるっきり下に廻らない彼女は、

「あゝゝゝ、駄目よ。……あゝゝ。」と、手で水をバチャバチャやって藻掻くだけで、どうにもならない。色々悪戯して居る内に、彼は乱暴にも、無理矢理に彼女のパンティを脱がせて了った。彼はピンクのパンティを彼女の目の前で振って、

「欲しいか。」と、笑った。

「お願い、穿かせて。」

「自分で穿ければ遣るよ。」

「……………」

「おやおや、本当の赤ちゃんになっちゃった。穿けなけりゃ駄目だ。」

彼はボートに帰ってパンティを置き、何かごそごそやって居たが、又彼女の所へ引返して、大きく息を吸うと、ぐっと水に潜った。

「あゝ、あゝ。」

彼女は思い切り足をばたつかせて彼を蹴っ

た。彼は彼女の足を掴もうとして居るらしいが、水中では思う様にならないとみえて、二三度失敗して浮上った。だが、纏て両足を一緒に掴まれてしまった彼女は、彼の意図を知って、ハッと驚いた。だが、その時はもう遅かった。初めから輪にしてあったらしい縄がしっかりと両足首を一つに括り上げて居た。彼が手を放した時には、最早、足をばたつかせてみても、両足が一緒に屈伸するに過ぎなかった。

「酷いわ、一郎さん、解いて。」

浮上った一郎に彼女は手を合せて、拝むように哀願したが、

「手が自由なんだから、自分で解きゃいいじゃないか。パンティだってボートの上に置いてあるんだし。……さあ、俺はボートに上って一休みするかな。」

彼は笑いながら、ボートに向って泳ぎ始めた。その彼が四、五メートルも離れると、彼女は、ぐっと足首を引張られた。足を縛られた縄は、長く伸ばして其の一端を彼が握って居るらしい。彼の泳ぐにつれて、彼女は足から先にボートに吸い寄せられた。

彼はボートに上ると、縄の端を、オールの支え金具に結び、身体を拭いて煙草を吸い始

めた。彼女は手をバチャつかせて、やっとボートの舷側を掴むと、一生懸命になって上ろうと悶えたが、旨く行かない。

「一郎さん、お願い。上げて。」

「はははは、赤ちゃんは自分で上れないのか。」

一郎は近寄って、舷側に掛かった彼女の両手首を掴むと、少し引張り上げて置いて、ぽつんと、遠く突き放した。

「あッ！」

彼女は頭から水を被ってバシャバシャ水を掻きながら、やっと身体を平均に保った。

「折角だから、もう少し泳ぐ練習するんだな。それとも上げてやろうか。」

彼は縄を手繰り始めた。彼女の身体は再びボートに吸寄せられて、足が水から出て舷側まで持上げられると、くの字に曲げられた身体が、今にも頭が下になって水中に没し、そうになった。慌てて彼女は、

「嫌！ 止めて。」と、叫んでしまった。

「そうか。じゃ止めよう。」

彼は皮肉に笑うと、其処まで持上げた儘で金具に縄を結び付けた。

彼女は、どうしても直ぐには解放されそうもないのを知ると、観念して大きく一つ息を

吸った。持上げられた脚には水に濡れた焦茶色のナイロンが、強い夏の陽差を受けて艶やかに光って居た。下半身が浮上って居る為に澄んだ水を透して腰部が羞ずかしく揺れて見えた。彼女は仰向いて雲一つない青空を見上げた。暫く見て居る内に、何だか青色の円い大きなお碗を被せられて居る様な気がして来る。彼女は目を閉じた。雑念を去って、ただ浪の揺れに身体を任せて居ると陶然とした気分になり誘われて来た。矢張り海は気持ちいい。彼女に暫くそうしてじっと浮んで居た。

ダ、ダ、ダ、ふと、彼女は段々大きく響いて来るエンジンの音に気がついて、ハッと目を開けた。遠くから白浜を蹴立てて真白なモーターボートが此方に向って進んで来る。「一郎さん、あのボート此方の方へ来るわ。早く解いて。」

「どうせ、其方のボートからだって見られたさ。」

彼は平然と顎をしゃくった。彼女は驚いて頸を廻すと、成程、其方に浮んだボートの人達は皆此方を見て居るらしい。彼女は全く慌ててしまった。

「酷いわ。一郎さん、私羞ずかしい。」

「羞ずかしい柄でもないだろう。」

それでも、どんどん近附いて来るモーターボートを見て、彼は縄を解いた。

もう見られたかも知れない。そう思うと、彼女は顔を見られたくないので、モーターボートの来る方に背を向けて居た。エンジンの音はぐんと大きくなって来て、ボートのスピードに依って出来た大きな浪がふわアッと朱実を大きく揺ったと思うと、急にモーターボートはエンジンを止めた。

「一郎さん！」

突然、背後から大きな甘ったるい声が響いた。あッ！ 朱実の心臓はギクッと一瞬電気にでも触れた様に鼓動が止った。あの声。あの巻舌の甘い声。令子さんだ。何故こんな処に。疑惑、嫉妬、激怒、恐怖、それに羞恥、複雑な感情に身体中痺れた様になって身動きすら出来なかった。先日唯一度の数分間の邂逅だけで、全く敵視し合わなければならぬ運命に置かれた彼女と、こんな悪い時に顔を合わせねばならぬとは。朱実には悲しさに声を上げて泣き喚きたい程残念だった。相手は真白なモーターボートを運転して来た美しい御嬢様。そして私は、私は……。

ああ、もう駄目。私は駄目。

又縛られた足首が、ぐんと引張られた。一

郎がボートを漕ぎ始めたのだ。その一郎が怨めしかった。

「一郎さん、江の島にいらっしゃるって、仰しやったでしょう。だから、一寸来てみましたのよ。」

「そうか。良く分ったな。……これか、今度買ったボートって云うのは。」

「ええ、そう。素晴らしい調子よ。一郎さんも乗ってみたい？」

「うん、乗って見るかな。それはそうと、何か慰問品位は持って来たんだろうな。」

「あら、チャッカリね。ふ、ふ、ふ、ほら、ブランドー。」

「感心感心。じゃ一杯飲み乍ら、江の島湾でも一周するか。」

「賛成。あら、御一緒ね。朱実さんとか云った人。」

それ迄、態と全く気附かなかった様に朱実を無視して居た令子は、急に朱実の方を向いて、

「朱実さん、今日は。先日はどうも。」と、云って、ニコッと笑った。そう云われては、朱実も後を向いては居られなかった。令子の方に向き直りはしたが、「今日は」と云う声も喉にひっかかって、唯微かに頭を下げるだけ

だった。

「朱実、一緒に行くか？」

朱実首を振った。酷いことを云う一郎さん。こんな姿を令子に見せる位なら、寧ろ海の底に沈んでしまった方がましだ。

一郎はモーターボートに移った。

「朱実さん、朱実さん、ちよっと——」

横を向いて居た朱実は、仕方なしに令子を見た。

「ふふふ、何時ぞやの御返礼よ。」

令子はパツと一郎に抱き付いて接吻した。

朱実浮袋に顔を埋めた。もう何と云われても顔を上げることは出来なかった。

やがてモーターボートはエンジンの音を響かせて去って行った。彼女は余りの悔しさに自殺してしまおうかと思った。此の儘、浮袋の空気を抜けば沈んでしまう。——

彼女は泣き続けた。泣いて居る中に、思い切り暴れ廻り、子供の様に転げ廻って泣き度くなった。手で水面をバチャバチャ叩いてみた。しかし、脚は足首をひつつけた儘、どうしても離れない。ああ、じれったい。いっそのこと一思いに空気を抜いちゃおうかしら。……しかし、彼女はまだまだ一郎への未練があった。何とか今の内にボートに這い上らな

くては。彼女は懸命に腕いた。

一方、一郎は矢張り、朱実のことが気になった。あの儘、若しものが有って……

「朱実はカナヅチだから、余り遠くへ行っちゃ駄目だよ。」

ブランドーを飲み乍ら、そう云わないでは居られなかった。

「ふふふ、矢張り、御心配ですの？」

「心配じゃないが、死なれちや此方が困るかなア」

「ふふふ、ああ可笑しい。」

「何が」

「一郎さん、貴方、悪趣味ね。」

「え？」

「でも、私、凡人は嫌いですの。悪趣味位がいいわ。ほら、これ。」

彼女はツアイスの双眼鏡を彼に渡した。彼は一瞬、驚きを顔に現わしたが、

「はふふ、何だ、見てたのか。」

「ええ、見ましたわ。私も可愛がられようと思つたら、矢張り虐められなくては、いけないのねえ。」

彼は其れには答えずに、急いで双眼鏡を覗くと、気忙しく朱実を捜した。

朱実ボートに乗ろうと苦心して居た。もう少しで、ボートがひっくり返りそうになったりした。一郎は双眼鏡から目を離せなかった。やがて、漸くのことと朱実がボートに乗り得たのを見届けると、彼は自分のことのようにほっとした。

五、奇妙なプレゼント

朱実炬燵へ入ってじっと一部の帰りを待っていた。斯うして一人切りで居ると、色々の煩悶に頭を煩わされる。令子とは夏の島の島以来逢って居ないが、彼は毎日の様に逢う機会を持って居るらしい。今では、令子の存在は単なる強敵という言葉を通り越して居た。それに又、彼と別れなければならぬ時期が刻々と近附いて居る。限らない不安——。これは全く遺瀨ないことだった。しかし、契約書は既に十数通も溜って居た。一体彼は本当に私を愛して居るのだろうか。若しも私を愛して居るとすれば、令子は……。それとも同時に沢山の女性を愛し得る性格なのだろうか。いやいや同時に多数の人に恋情を抱くなんてことは有り得ない。カザノヴァですら、其の時、其の時の一人の女性を愛したと言うことだし、ドンファンは遂に一度の恋もしなかった。……とすれば私と令子、一体彼はど

ちらを愛して居るのであろう。或いは両方とも愛して居ないのかしら。そんな事はない。少くとも愛した瞬間があった事は疑う余地がない。或いは私を愛して居るとしても三月には別れねばならない。彼のことだから、あっさりとは別れて国へ帰ってしまうだろう。然し本当に愛して居てそんな事が出来るであろうか。私には出来ないが……然し女と男とでは違うかも知れない。ああ、分らない、分らない。彼女は何時も同じ考え、同じ疑問の中を逍遙し、結局は解決を掴めぬままに、「私は現在毎日彼と共に生活して居る。少くとも三月までは。これで満足しなければいけない。そう運命付けられた女なのだ。」最後は此の悲しい諦めに終わってしまうのだった。然し、令子にだけは負けたくない。令子に負ける。ああ、それは余りにも惨めだ。もう、何も考えまい。考えて心が楽になる訳じやなし……。

彼女は火鉢に炭をつぎ足した。

「おい、朱実、プレゼントだよ。」

ところが其の夜、彼は帰って来るなり、ボンと大きな洋服箱を投げ出した。

「私に？」

彼女は急いで箱を開けた。

「まあ！ 素晴らしい。」

箱の中には、美事な毛皮のケープが入って居た。

「どうだ、いいだろう。」

「私、こんな立派な毛皮に、触ってみるのも初めて。」

「情けないことをいうなよ。」

「だって……。ねえ、これ本当に私に下さるの？」

「要らんか。」

「あら、嬉しいわ。嬉しいわ。」

彼女は泣けて来る程嬉しかった。こんな高価なプレゼントを。それに彼は何時になく上機嫌だった。

「どうしてこんなプレゼントして下さるの。」

「どうして？」

「あら。御免なさい、済みません。こんなこといって。私、私、嬉しいの。」

「馬鹿だな。今日は十一月二十日。お前の誕生日じやないか。」

「あッ、本当に。」

彼女は彼の腕に取纏って泣いた。嬉しかった。こんな嬉しいことは無かった。

それから四五日経つと、彼は又お土産を呉れた。それも又素晴しく高価な金色のハイヒールだった。

「まあ！」と、いったきり、朱実は後の言葉が続かなかった。

「美事だろう。」

「綺麗だわ。でもこんな上等な靴、私、羞ずかしくて履けないわ。」

しかし、其の靴は一郎の特別誂え品だった。踵は六インチも有ったし、お負けに踵の底は一握平方にも満たない程に細かった。足首には三重に革が巻きついて、ピッタリと止金で止める様に出来ていた。其の止金も亦、錠になっていて、小さな鍵が別に錦の袋に入れてあった。

其の翌日も続けてプレゼントがあった。それは素敵なたイト型のスカートだった。穿いてみると、膝の少し下迄しかない程短く、胴には丈夫なゴムが入っていて、丁度コルセットの様に強く腹を締め付けた。腰廻りは非常に細く出来ていて、それを穿いていると、両の内腿が殆んどくっついてしまう程だった。又其の翌日には真珠の首飾。次は紫水晶のぶら下った大きなイヤリング。ついで上等な香りの強い香水。

彼女は日ならずして、豪奢な貴婦人に仕立て上げられた。



一体、これはどうした事なんだろう。何か一郎に意図する所が有るに相違ない。毛皮のケープをプレゼントされた時は、何も気付か

ずに、只、無限の喜悦に浸った彼女も、斯う次々と支度が整えられると、一沫の不安を感じずには居られなかった。

細いスカート。錠の付いたハイヒール。明らかに美しく飾られた拷問道具だ。何時か近い将来に、此等を用いて私を虐める時が来るに違いない。こういう予感、彼女に不安と恐怖を与えたが、一面、

何か待ち遠しい様な甘美な期待もあった。何時の間に私は羞ずかしい苦痛を好む様になったのだろう。初めの内は、それが一郎の異状な愛の表現だから楽しかった筈なのに。今でも、それに変わりはないが、令子という強力なライバルが出来てからは、知らず識らずの内に、それが内面に向って、体内には悦虐の感情が漲ってしまつて居る。私は矢張り、契約書に依つて束縛されるような運命の下に生れた、宿命の女なのに違いな。――それは悲しい、だが今では寧ろ楽しい様な諦めであった。

十二月に入ると急に寒さが増した。

一晚中雪の降り積った、或る寒い朝、彼女は何時もの様に暗い内から起きて朝餉の仕度をしていると、珍らしく彼が早々と起きて来て、

「寒いなあ、早く起きると。」

「おや、もうお目覚め？。末だ寝るんでしょ。」

「いや、もう寝たくないよ。」

「まあ、変ね、今日は。じつ直ぐ炭を入れますわ。」

「今日は一緒に何処かへ遊びに行こう。会社は休めよ。」

「まあ、突然に。」

彼女は驚いたが、嬉しかった。勿論不安もあった。今日はきつと未だ履いて外に出たこともないあのハイヒールを履かされる。そして歩き難いスカートも。彼女は未知の国を探険する様な、不安と喜びに心を躍らせた。

案の条、朝食が終ると、早速仕度を命ぜられた。

「こんなに早くから？ 何処のお店も未だ閉まっているでしょう。」

「構うもんか。」

先日から買い整えられたイヤリングやネックレスを着けて、毛皮のケープコートを纏うと、彼女はとても面映ゆかった。

「良く似合うよ。」

「まあ、意地悪。馬子にも衣裳って仰しやう度いんでしょ。」

玄関のたたきの上で、初めて不安定な金色のハイヒールも履いた。

「これ、夜会靴でしょう。」

「日本人には夜会靴も散歩靴もあるもんか、上等の物ならいゝんさ。」

そういつて、彼は鍵を入れた錦の袋を自分のポケットに入れた。

「私、持ちますわ。」

「お前は、そゝっかしいから落すと困るよ。」

「まあ、一郎さんの方が、よっぽどよ。」

彼女はそれ以上鍵を持つことなど要求はしなかった。それよりたたきの上を一、二度行き来して見た。

「もっと膝を伸ばせよ。」

「何だか転びそうなの。」

「はゝゝゝ、田舎っぺみたいな事をいうなよ。」

其の靴を履いていると、爪先だけで背伸びして歩いている様な感じだった。これじつ、到底長い道程は疲れて了って歩けそうもない。

「さあ、行こう。」

彼女は彼に従って外に出た。外は真白な雪景色で、目がチカチカと目映かった。外では彼にいわれる迄もなく、膝を曲げて歩いたの

では見つともないので、出来るだけ苦心して膝を伸ばした。しかし、スカートがぴっちりとして腿に嵌っている為、速い彼に遅れない為には常に小走りにしていなければならない。細い三本の革でサンダル型に作られた靴の爪先から、雪が容赦なく薄いナイロンを透して足先を濡らす。尻が波打って、ケープが大きく揺れる。彼はそんな彼女を見て、

「あんまり、あんよは上手でないな。」

「だって精一杯よ。」

彼女は肩で息をしながらいった。

「仕様がないうア。」

中野の駅の近く迄出ると、彼は直ぐにタクシーを拾った。

彼女はシートに坐ると、ホッとした。実は此の儘、一日中歩き廻されるのだろうと予期していたから。だが、

「旦那、どちら迄」と、運転手が問うと、

「銀座、……いや違う。四谷だ。麹町。」と、

いう彼の答に、麹町？ 一体、一郎さんは何処に行く気なんだろう、という新しい疑問が湧いて来た。「何処へいらっしゃるの。」訊いてみようと思った言葉が、喉の奥で止まった。どうせ今に分ることなのだ。

自動車は雪を蹴立てながら、朝の青梅街道

を突っ走った。

麴町に入ると、やがて車は、高い塀を長々と廻らせた、或る豪壮な邸宅の前で停められた。

「此処、何処なの？」

車から降りると、急に強い不安に襲われた彼女は、声までも小さくはずませて、早口に訊いた。

「友達の処さ、来いよ。」

彼は潜り戸を開けて、さっさと入って行く。彼女はきょろきょろと辺りを見廻しながら、拔足する様な恰好で其の後に従った。

邸内の小路は、もう綺麗に雪が掃かれていた。門番の爺さんが飛び出て来て、ぴょこんと頭を下げた。彼は表玄関の方に行かずに、植込の方に廻って、脇玄関のベルを押した。玄関が開くと、美しい洋装の女中が出て来て、

「いらっしやいませ。どうぞ。早くから御待ちしていらっしやいました。」と、彼が来るのを初めから知っている様な応待をした。

彼は立った儘乱暴に靴を脱ぐと、ずかずかと上って行く。朱実は急いで其の靴を揃えようとしたが、女中が、

「私が致しますから、どうぞお上りになっ

て。」と、いった靴をとった。

「えゝ」と、いった仕方なしに靴を脱ごうとした朱実は、ハッと驚いた。もう少しで廊下の角を曲ってしまいそうな彼に向って、

「一郎さん、一郎さん。」

一郎は悠然と振向いて、

「なんだ、早く上れよ。」

「だって靴が……。」

「靴？ あゝ、そうか。御免御免。」

彼は引返して来て錦の鍵袋を渡すと、又、どんどん先に行ってしまった。

脱は受取ったものゝ、横にけげんそうな顔をして女中が控えている。だが時間が経てば余計可笑しいので、彼女は思い切って錠に鍵を差込んだ。ピインと幽かな余音を残して金具が外れると、女中は目を円くして訊いた。

「まあ、鍵でお開けになりますの。」

「えゝ。」

彼女は急に恥かしさに顔が赤らんだ。靴を脱ぎ終ると、ケープを女中に渡して、なるべく女中の顔を見ないようにしながら、彼女の後に従った。廊下を二曲り程すると、女中は一つのドアをノックして、返事も待たずに直ぐ開けた。

「どうぞ。」

女中に言われて、一步、中に這入った時、あッ！と低く叫び声まで上げて、息を呑んだ。

「いらっしやい。お待ちして居ましたわ。」

寝椅子に長々と身を横えて、傲然と言ったのは令子。夢に迄見た憎らしいライバル令子ではないか。朱実は入口に立った儘、睨むように令子を見詰めて居た。

「どうぞ、此方へお入りなさいな。」

薄笑いを浮べて、こう促す令子の声を聞いた瞬間、朱実は、サッと身を翻えして廊下に飛び出した。

「お待ち！」

令子は鋭い声と共に後を追った。細いスカートに脚を奪われて、朱実は廊下の角で令子に追い付かれた。其処で令子と揉合って居ると、男のように大きな体格をした女中が令子に加勢して朱実を抑えた。彼女は馬鹿力を持って居て、朱実は瞬く間に、無理矢理、腕を背後に捻じられてしまった。

「何をなさるんです。」

甲高くそう叫んだ時、カチツと音がして、両手首に金属が触れたと思うと、もう両手は後に回した儘、全く自由を奪われて居た。

「ほゝゝゝ。さあ、お帰りになりたけりゃ、

お帰りなさい」

令子は誇らしげに嘲笑った。

「竹や、私の部屋に連れておいで。先日借りて、たっぷりお返しするんだから」

竹と呼ばれた馬鹿力の有る女中は、もう一人の美しい女中と違い、五尺五寸以上もあり、そうな大女で、その上肥って居て、顔も醜くかった。この女は、実は令子が今日の為に雇い、そして仕込んだ怪力女だった。

背後から朱実の両腕をぐっと掴み、悶える彼女を上するようにして元の部屋に連れ戻した。さっきは気附かなかったが、一郎が横のソファに寝転んで、一人でちびりちびりとウイスキーを飲んで居た。

「一郎さん。一体、私をどうするの。帰して。」

「俺も知らないよ。兎に角、令子さんが毎日のよう煩くせがむんで、一日だけお前を貸してやる約束をしたまでなんだ。先日の恨みを思う存分に返さなければ、気が済まないんだそうだよ。」

「先日の恨み？ 令子さん、あれは、とつくに返された筈ですわ。」

「いゝえ、私は返して居ませんわ。私は何も貴女を机の脚に縛りつけたり、ストッキングだけの裸で海の中に投げ込んだりしませんも

の。それは皆一郎さんよ。」

「まあ！」

「一郎さんの罰ですら、そんなのですもの私の返礼はそれの何倍もであっていい筈よ。」

「まあ！」

「貴女は、私と対等の積りで傲慢に構えて居るけれども、貴女なんか、そんな身分じゃなくってよ。第一、一郎さんだって、ちゃんと区別なさって居るわ、私に対しては本当の紳士よ。私は貴女みたいな玩具じゃないのよ。腿にスタンブ押されたりして、まるで荷物じゃないの。」

「まあ！ 一郎さんたら、みんな……。」

「はゝゝゝ、仕様がないうさ。江の島ですっかり見られちゃったのさ。」

「まあ！」

あゝ、なんという屈辱。もう正面に令子の顔を見る事も出来なかったし、返す言葉も見付からなかった。

「さあ、分ったら、そんな所に突っ立ってないでお坐りなさいな。今更泣いても喚いても駄目よ。どうせ今日一日は貴女を借り受けたんですからね。焼いて食おうと、煮て食おうと私の勝手。ふゝゝ、今に、ひいひい言わせて上げるわ。さあ、お坐りしたら。竹や、坐

らせなさい。」

「はい。さあ、御嬢様が優しく仰しやったられる中に、じたばたせずに坐るのよ。剛情っ張り！ 坐れったら」

竹は少し訛を持った言葉も乱暴なら、遣ることはもっと乱暴だった。いきなり、後から朱実のお尻を嫌という程に蹴上げると、朱実が泳ぐ所を、腕力に物言わせて、ぐッと押し潰し、令子の足許に、床を甜める程に頸筋を踏みつけた。

「朱実さん、貴女の事は、すっかり竹やにもさっきの信にも話してあるんですから。もうお上品振ってみても駄目よ。ねえ、竹や。」

「えゝ、そうですとも御嬢様。でも、こんなに立派な恰好して、香水など匂わせて居るとまさか、考えられませんか。」

「ほゝゝゝ、今に化けの皮を剥いであげるわ。竹や、放しておやり」

朱実は、じっと唇を噛みしめて俯向いて居た。一郎は黙って酒を飲みながら、そんな有様を興味深そうに眺めて居るに過ぎなかった。

其処へ信子が小皿に一つずつプリンを盛って入って来た。

「そんな甘いものは要らんよ」と、一郎は無

造作に断った。次に朱実の皿の置場に困って迷っていると、令子が、

「朱実さんの？ 床の上に置きなさい。床上等よ。駄目ね、信は。」

信子は一皿を朱実の傍に置いて、

「済みません。」と、小声で謝った。

「信や、朱実さんに匙は要らないわよ。」

信子が、気の毒そうに匙もとった。

朱実は何しさに顫えた。令子さんは私に、後手の儘、犬のようにしてこれを食べさせようというのだろう。誰が令子などの前で、そんな浅ましい恰好をするものか。

朱実は何しさを向いて目をつむった。

「朱実さん、美味しいわよ。お食べにならない？」

朱実は何も言わずに居た。

「ねえ朱実さん、そんなに意地を張らないで今日は私の言うことを聞いて頂戴。ねえ、いゝでしょう。あら、駄目？。困った御嬢さんねえ。」

横から竹が、「お嬢様が、あんなに優しく仰しやっていたらしやるのに。なんて剛情な女なの」と、言いざま、朱実の頭を抑えて遮二無二プリンを食べさせようとする。

「竹や、お待ち、私は食べ度く無いものを無

理に食べて貰いたくないの。それに、そんな剛情っ張りには、無理にと言っても駄目よ。剛情を張れないように気を挫いてやるのが一番。ねえ、そうでしょう。朱実さん。ほゝゝ、私はね、貴女と違って、物分りがいゝ方なのよ。信や、朱実さんのズロースを取っておやり。」

「え？」

朱実は何しさを驚きの声を発した。こんな明るい時に、そんな羞ずかしい目には、一郎にだって遭われたことがなかった。信子も躊躇していた。

「信や、何しているの。苦しみお前が私の言うことが訊けないなら、お前から先に素裸にしてしまわよ。」

気の弱い信子は仕方なく、羞ずかしそうに真赤になって朱実のスカートに手を掛けた。

こうなったら朱実は何しさを、観念してじっとしている訳になどいかなかった。竹が馬鹿力を出して朱実の上体を抱き起し、俯伏せに抑え付けたが、腿に力を入れ、足先をばたつかせて、必死に抵抗した。この場合、スカートが細いのが朱実に幸いした。二人掛りでも、仲々ズロースを脱がせることが出来なかった。令子は何しさを脱がせて、

「何してるのよ。構わないから、スカートも取ってしまいなさい。」と、命令を下した。これは腰のチャックを外されると、簡単にずると抜き取られてしまった。斯うなると、もう、無防備に近かった。直ぐにズロースに手が掛けられた。

「待って、待って！」

朱実は何しさを夢中で叫んだ。

「ちょっと、お待ち。」

令子は二人を制すと、

「プリンが食べ度くなつたの？」

「食べますわ。」

何しさに顔を歪めて微かに答えた。

「ほゝゝ、世話の焼ける入ね。」

朱実は何しさを観念した。裸にされて虐められるよりは増しだと思った。竹が手を放すと、屈辱に顫えながら、後手の儘、プリンに顔を近づけた。その時、

「ねえ朱実さん。貴女、犬なの？」

朱実は何しさを弾かれたように顔を上げた。何という侮辱の言葉であろう。しかし、怒鳴り返したい衝動を辛じて忍んで、再びプリンに顔を近寄せると、

「ねえ、犬なのって、訊いているのよ。」

覆い被せるようにこう罵られて、

「人間ですわ。」

屹ッと眦を裂いていい返した。

「そうでしよう。そんなら、そんなら犬みたいな四ッん這いになって食べないで匙か箸をお使いなさいよ。」

「令子さん、貴女は私がこんなに迄恥を忍んで仰しやる通りにプリンを食べようとしていきますのに、未だおからかいになるんですか。」
「おや、私が何時からかって？、私は貴女に犬みたいな恰好で食べないで、箸でもお使いなさっていったのよ。」

「じゃ手錠を外して下さい。」

「あら、手で匙を持つって仰しやるの。それは人並の人間のいうことよ。貴女みたいにお荷物のいう言葉じゃないわ。貴女はお利口かと思っていたけど、私のいうことが分らないのね。私はね、貴女にプリンをその二本の足でお食べなさいって云ったのよ。分って？」
「はははは。」

此の時、一郎が大きな声で笑った。

「令子さんは仲々大したサジストだね。素晴らしい思い付きだよ。敬服の至りだ。」

「一郎さん程の天才にお褒めに与るとは、光栄ですわ。さあ、朱実さん。一郎さんも、ああ仰しやられてるんだから、もっと褒めら

れる様に、上手に食べて御覧なさい。赤ちゃんみたいに零しちゃ駄目よ。」

朱実は此れ以上、侮辱に堪えることは出来なかった。足で食べ始めれば始めたで、又何だ彼だと難癖を付けられるに決って居る。それも相手が令子でなければ未だ我慢も出来ようが、令子の意地悪な目、竹の残忍な目、信子の哀れんだ目、興味深く視まもった一郎の目。私は此れ以上嗤われることには堪えられない。

「さあ、何、考えてるの。裸にして貰い度いの。ほれ。」

と、云って令子が足で皿を近寄せた時、朱実は思わずプリンの皿を蹴飛ばした。

「まあ、何するんだよ。」

竹がいきなり朱実を突倒した。しかし、令子は、

「ほはほは、竹や、いいのよ。朱実さんはヒステリー起したのよ。男性に可愛がられれば直るんだわ、この人のヒステリーは。ねえ、そうでしょう、朱実さん。さあ、竹や、構わないから裸にしてお遣り。」

朱実はプリンを蹴飛ばした興奮の為に、最早許してと哀願する気持にはなれなかった。たゞ無我夢中で抵抗した。そんな朱実を、竹は

無造作に尻の下に踏敷くと、用意して居た縄で片足首を固く縛り、身体を逆様に抱上げて縄の結び目をドアの蝶番に引掛けた。其の儘、竹が抱えて居た身体を放すと、朱実は、「ひーッ！」と、絹を裂く様な悲鳴を上げた。縛られた足首にぐッと重量が加わって、裸に焼けつく様な痛みを受けたのだった。余り鋭い悲鳴に、見て居た令子の方も魂消で、慌てて手錠を外した。朱実は手を床につくと辛じて裸の痛みは柔らいだが、直ぐさま、竹に依って、ブラウスやシュミーズが乱暴に剥がされて行くのに、床に手をついたまゝ、全く抵抗することが出来なかった。そして、引き千切る様にしてブラジャーを取り去られると、最早、ズロースとストッキングを残したのみの羞ずかしい姿にされて居た。

彼女は其の儘暫く放って置かれた。頭に血が下って顔が真赤になって来た。縛られて居ない片足は重みで、どうしても少し下った。すると令子は竹と一緒に、彼女の敏感な内腿を執拗に擦った。ああ、ああ、彼女は絶間なく呻めき声を発して悶え苦しんだ。令子は又信子にも、腿とか脇腹とか、特に柔い所を選んで擦らせた。朱実はたまらなくて、涙をばろばろ零して泣いて苦しんだ。無茶な令子達

より、蓋ずかしがって、もぞもぞと触る信子の擦りに、肉体的にも心理的にもより一層苦悶した。

やがて、床の上に降された朱実、は、固く後手に括られた上、大きな竹の手で、ピシャッ、ピシャッと尻を追い叩かれながら、雪の真白に積った広い裏庭に突き出された。太陽を反射して目がチカチカする程明るい雪の庭に曳き出されると、寒さを感じるよりも、狭い部屋の中とは違い、覆うべくもない裸身の羞しさに、足が竦み、目が眩んで、一步も進めずに雪の中に蹲ってしまった。

竹は、そんな朱実の、片足首に未だ結ばれたままになって居る縄を握ると、遠慮会釈もなく雪の中を曳き摺り廻して、庭の中程にある大きな松の木の太い幹を背にして犂々と縛り付けた。斯うまでされてしまうと、もう朱実は完全に抵抗する気力も失い、肩で荒く息をし乍ら、じっと項垂れて涙を呑むより仕方がなかった。



令子はお気味よさそうに、薄笑いを浮べて、そんな哀れな朱実を眺めて居たが、

「朱実さん、最初の元気が、すっかり何処かへ行ってしまったわねエ。全く張合がないじゃないの。それとも寒い。ほほほ、いいわ今直ぐ元気を附けて上げるから。竹や、太郎さんを連れておいで。」

「はい。」

「それから、あれも忘れないでよ。あら、一郎さんは？」

横から信子が

「お部屋で、未だ、めし上って居らっしゃいます。」

「まあ、仕様のない呑ん平さんね。」

間もなく、竹が小牛程もあるセパードを連れて来た。充分に訓練が行き届いて居るとみえて、令子が「お坐り。」と云うと、彼女の横にきちんと坐った。

朱実は、令子のお坐り、と云う声にふと目を開けた瞬間、どきッ！と戦慄が背筋を突走った。

「信や、朱実さんに、此れを塗ってお上げ。」
令子が斯う云って、竹の持ってきた水飴の缶を信子に渡すと、もう朱実も自分の受けなければならぬ恥辱が、どんなに悲惨なものであるかを、はっきりと知覚することが出来た。

「令子さん、お願いです。もう堪忍して、足で食べますから。何でも云うこと聞きますから。」

朱実はもう外見も意地も忘れて泣き乍ら哀願した。然し、それは却って令子の嗜虐心を昂める結果になった。

信子の手から缶を取ると、自分で意地悪く指を働かせ擦りながら、べったりと丁寧に飴を塗った。塗り終ると、「太郎、よし。」と強く掛声をかけた。

その時、一郎が出て来て、余りにも無茶な此のお仕置を中止させた。

彼女は部屋に連れ帰されてからは、否応なしに足の食事をやらされた。

足先を口に持って来るには浅ましくも、脚を大きく開かねばならなかったし、足にくっついた物を食べるには、嫌でも自分の足の裏を甜めなければならなかった。そんな可笑しな恰好を見ては、腹を抱えて令子は笑った。

全く上機嫌で、

「ほらほら、朱実さん、食べ乍ら此方を見て御覧。」

と、云って、一郎に抱き付いて接吻もして見せた。

しかし、永い間擦られたり転がされたり、色々と辱めを受けた後、朱実は漸く縄を解かれて暫くの休養を与えられた。これも矢張り一郎の提案だった。彼は矢継早な激烈過る折檻を好まなかったし、それよりも、彼が予定した楽しい、彼のプランを実行する為に、彼女が余り疲労し過ぎることを恐れたからでもあった。

朱実は今令子の柔かい羽根蒲団にくるまって、決して眠ることは出来なかった。悔しさ、涙が止めどなく枕を濡して居た。然し、それよりも一層、彼の不可解な行為に思い悩んで居た。

蒲団に入ってから、令子がちょっと席を外した時、彼は我慢出来ない様な狂おしさで、彼女に火の様な接吻をして呉れた。それは令子との遊び半分の接吻などとは比較にならない。朱実は今全く判断に苦んだ。

一方では令子の御機嫌を取る為に私を令子の玩具に提供して置き乍ら……。分らない。

一体私はどうすればいいんだろう。朱実は昼頃蒲団から出される迄、こんな疑問に思い悩んだり、令子への悔しさに涙を新たにしたりとうとう一時も憩むことが出来なかった。

昼頃、朱実を起した令子は、

「朱実さん、貴女は幾らお馬鹿さんでも、もう私には永久に頭が上らないことを悟ったでしょう。どうを？」と、誇らし気に云った。「ええ。」

朱実はなるべく逆らわない様に、令子の足許に跪いて、そう答えるより他に仕方がなかった。

「ほほほ、じゃ帰して上げてもいいわ。帰りたい？」

「お願いします。」

「じゃ帰して上げるわ。だけど其の前に、もう少し、貴女の従順振りを見せてね。」

朱実は今、そう云う令子の命令通りに、腿のガーターを外すと、一本一本渡される細いゴム輪を、順々に腿に嵌めて行った。それは買物包などに使用してある弱い輪ゴムなので、一本や二本では、全く靴下を押える役目を果たさなかったが、同じ個所に上から上から十本も嵌めると、どうやらかなりの弾力を持って締めつけて来た。

令子は、それを片脚に十五本ずつ嵌めさせた。それでもガーターよりは弱い様だった。朱実は何の為に令子が、こんな事をさせるのか、全く判断に苦んだ。

それが終ると、腰に革のバンドを嵌めて、珠数玉の付いた紐を、後の革から股を通して腹の前のバンドに、引絞る様にして結び付けなければならなかった。珠数玉は直経一糎程のジュラルミンの様な金属で出来て居て、玉と玉が触れ合うと幽かにコロコロ、コロコロと淋しい音を出した。令子は、其の締め具合を検べた後、

「フッフッフ、よく云うことを聞いて感心だわ。御褒美にビールを飲ませて上げましょう。貴女は相当に強いんだってね。さあ信や準備出来ていて？」

「え、御嬢様。」

信子は大きな空のジョッキとビールを二本載せたお盆を前に出した。「さあ」と、令子に促されて、朱実は空のジョッキを手に持った。すると令子はビールを注ぐ前に

「朱実さんの好きそうな美味しいカクテルに上げてみましょうね」と、いい、それまで隠して居た紙包を開けて、中から汚れた脱脂綿や鼻紙を取り出すと、ぐっとジョッキの中に

其れを押し込んだ。すると横から竹が、ビールを注いで、御丁寧に長い靴べらで充分に掻きませた。

「さあ、美味しそうに出来たわ。朱実さん、遠慮しないで二本とも、すっかり召し上って頂戴。さあ。」

朱実は流石に直ぐには飲むことが出来なかったが、到底拒み通すことは出来ないと思念して、目を閉じると思い切ってぐっと飲み干した。何か酸っぱいような厭な味がして、二杯目を注がれた時には暫く躊躇した。

しかし、無理強いに二本とも飲まされてしまうと、豊かな白い頬がぼつと軽い酔の為に紅をさした。

「流石、強豪の誉れが高いだけあるわ。じゃもう帰して上げなくちやね。竹や、そろそろ、おいた出来ないようにお手々を縛ってあげなさい。」

令子は帰してあげるといいながら、竹に又朱実を縛ることを命じた。

竹は朱実の腕を後に捻ると、手首を固く括った縄を二つに分けて頸に廻し、腕を背後に高々と吊上げて、十字に犄々と締め上げた。その間、朱実はもう諦めきって身悶え一つせずじっと縛られた。

竹が縛り終わると、令子は面白い物を出して来て朱実に見せた。それは薄い紙に画鋏を一面に突き刺し、背面に厚紙を糊着けし、前面に出た無数の針先の上を、かなり丈夫なビニールの布で軽く覆ったものだった。

令子は、朱実を立たせると、その紙の二隅に付いた紐を、腰のバンドに固く結び付けた。するとその紙は無数の針の山を、朱実の柔らかい肌に向けて、お尻一杯に覆い被さった。朱実には段々と恐ろしい令子の意図が分って来るような気がした。彼女は其の儘の姿で上から細いスカートを穿かされ、雁字搦めに縛られた儘、毛皮のケープコートを着せられた。すると、哀れな捕われの女体は忽ちに消え去り、表面からは素晴しく豪華な貴婦人が出来上った。

「ほ、ほ、ほ、やっと美しい御嬢様に還ったわね。じゃついでに此を啜えて頂戴。」

令子が出したのは、二本の汚れたナイロンの靴下の上部を、しっかりと糸で裏に縫付けた真白なマスクだった。朱実は鼻を掴まれて充分に靴下を啜えさせられると、上から固くそのマスクを掛けられた。外から見れば真白で綺麗なマスクだが、裏側は鼻の上も一面に靴下で覆われるようになっていて、その靴下

が又、どうやって準備されたものか、魚の腐ったような強い臭気に満されていた。

万事準備が終ると、朱実は玄関に連れ出されて、例の六インチのハイヒールを履かされ全員に送られて、門の潜り戸を出た。

「朱実さん、私を怨まないでね。その服装は全部一郎さんのプランなんですから。」

令子は最後に別れる時、しみりとしていった。一郎が、その横でじっと朱実を覗めていた。

六、最後の勝利者

朱実は全く困惑した。最初に気になったのは、深く食い込んだ珠数玉だった。それは歩く度にコロコロと幽かな音を立てていたし、腿の動きにつれて断間なく肌を刺戟した。次にはお尻の針の板に閉口した。人通りの段々繁くなる通りへ進むにつれて、よちよちとも歩いていられないので思い切って少し歩幅を拡げると、細いスカートが張ってチクチクと針の先がお尻を突つたのだった。又、腕に食込んだ縄目も痛くなって来た。いやそれにも増して徐々に苦痛を加え始めたのは、腿のゴム輪だった。初めは何ともなかったこのゴム輪のガーターが、知らず識らずの内に少し

ずつ少しずつ輪を縮めて、腿の肌に深く喰入って来たのだ。しまいに、一步毎に腿を切り取られるかと思われる程の痛さに、どうしても跛を曳かなければ歩けない程になってしまった。それに高いハイヒールの為に脹脛も痛くなって来たし、雪に濡れた爪先が、冷たさの為に痺れ切っていた。二本のビールが効いて、そろそろ用便までも我慢出来ない限度に来ていた。

そんな苦しさに耐えつゝ、やっと市ヶ谷駅前の跨線橋迄辿り着いた朱実は、橋下をゴーツと中野方面に走り去って行く省線電車を眺めながら、全く悲歎に暮れてしまった。疲れでも電車に乗る事も坐る事さえ許されない我身を思い、この先、未だ何里もの道程を歩かねばならないことを思うと、全く限らない遺瀕なさに襲われた。

しかし、一方、彼女は今、何とも名状し難い幸福感が湧出していた。最後に令子のいった言葉が耳に残っている。「その服装は全部一郎さんのプランなんですから。」すると、この現在の苦痛は凡て一郎さんに与えられたものなのだ。彼女の一年来育まれたマソヒステイックな血潮は、この痛烈な責苦の中に止揚されて、始めて判然と、一郎の愛情の存在を

感じ、それを把握し得る自信に満ちた血潮となって鼓動し始めた。令子の家での自分に対する彼の不可解な行為や表情。あの令子に対する不自然な接吻。最後に彼女を送りながら瞞めた澄んだ瞳。あの瞳こそは、彼の一年来の苦悩を明瞭に割り切った瞳でなくて何であらう。彼はきつと、もう私を見捨てることはいないであらうし、私も決して一生彼を離すようなことはしない。

今日の勝利者は令子さんではなく、この私だったのだ。

又、電車がゴーツと走り去って行った。朱実は又、痛い脚を曳摺りながら一步一步家路についた。勝利の歡喜に陶醉しながら……。

(おわり)

【告知板】○羽村京子さんへ。「K子の手記」は二月号に掲載予定。辻村氏へのレターは目下氏の方へ転送しましたから、回答が参り次第発表することにします。○モデルを志望された女性の方で、待合せ日時を御指定下さった福井清子さん。当方の都合で参れませんでしたので、連絡場所(局留でも結構)又はテレホンを下さい。お願いします。

サジスチックな軽演劇から

魅せられた舞台

柴里雷九



1 フラックキヤットの惚れ家が解ったからわ
先には角捕われてる娘さん達を早く救い出
さなければいけないわ。とんでもない野良
猫奴、ギョツと云う目に会はしてやるから

南村竣平作・画

オイ、これからすごい歌
2 を聞かせてやるから皆
で踊るんだぞ。いいか

怪少女スリーX 2
フラックキヤット
退治の巻

私はストリップ劇場や○○ミュージックと銘うった常設小屋は勿論テント張りの仮設小屋のヌード○
○といった芝居を見るのが大好きである。パレースクとかヌードミュージックとか云っても、とにかく男性のお色気を挑発することにおいてには変りない。それらの軽演劇を、私は、私なりの妖しい雰囲気を作りあげて楽しく眺めている。だから、私は暇があつて、ぶらりと街へ出かけたなら、必ずそれらの小屋をきまづて覗くことにして

いる。いや、街へぶらりと出かける目的の大部分が、そこにあるといつても過言ではないだろう。何の気なしに覗いたヌードの踊りや芝居の中に、素晴らしいサジスチックな場面があつて胸をわくわくさせることがあると、私は自分の座席の中に孤立して、その桃源境をしみじみと味う。

しかし、時には表のウィンドーに、それらしきムチや縄をあしらったスチール写真が、思わせぶりに飾つてあつたりすると、思わず前後の見境もなく、期待に胸を躍らせながら、切符を買う手ももどかしく階段をかけ上つてゆくのだが、そんな時に限つて、いくら待つても、そんな場面が一向に出て来ず、失望に胸も塞ぐ思いが怒りにまでなつて、帰途の足の重い経験も一度や二度ではない。
それだけに、私の小屋通いも、この頃では一種のアテ物趣味で、宝クジでも買うような気持で、その入口を潜るのが習慣である。今

日も又、私は只一人、と、ある常設館に入り、おきまりの座席に腰を下すと、売店で買って来たハツカ入りのチューインガムをむしゃくしゃと噛み出した。

場内に開演を知らせるベルが鳴り、照明が消えた瞬間、観客席に何かピリッとした緊張が走ったのを感じた私は、この劇場入口の絵看板や写真を思いだした。それは開演を待つ舞台を暗示させるに十分なものであった。

やがて、観客席の最前列に座を占める私の目の前、真暗な舞台に青白く光る夜光塗料を塗ったものが音楽にのって旋回をはじめた。私の眼が暗い舞台になれてくると、それはコウモリの翼をつけた踊り子の群舞であることが分った。陰気で不吉な未来を暗示するプロローグは終わった。

舞台は一転して、中世紀風の衣裳の踊り子の楽しそうな踊りになったが、夕刻を告げる鐘の音と共に

に踊り子の表情もこわばり、恐怖を示しつつ舞台ソデにひっ込んでいった。

次の景は簡単な造りの屋内で、ここにも、陰気な鐘の音が流れている。

ジョーとタツ、それにマリが青い照明の中に登場して来た。

ジョー「おい、もうこんな時間だぜ！さあ、早く仕度しろ！マリ、今晚もガッチリ頼んだぜ」

タツ、ジョーに「ガッテン」とうなずき、張切ってマリの衣裳を素早く脱し、晒布を裸のマリの体に巻きつけていく。

マリの体は目と口、乳房を残して、頭のテッペンから足の先まで晒布でおおわれ、不気味な人形が出来上った。

マリ「あんた達はどんどんもうかるし、気分も悪かねえだろうが、私じゃ、毎晩、こんなかつこうをさせられちゃあ、苦しくって……」

ジョーとタツがマリの晒布の巻上り具合を調べるうちに舞台は暗

転して、再びコウモリの踊りが始った。

続いては、星や三日月を頭にのせた踊り子が数人、半裸で踊りまくる。

伴奏音楽が激しいラテン・リズムに変わり、長くて美しい鳥の羽をつけた踊り子が、何か事件を暗示するかの様に激しい踊りを始めた。

踊り子の背中にはじつとりと汗が浮き、私の背後に広がる観客席の熱気もあがって来た様子が、手にとるように分った。

幕が降りた。高潮した気分を、はぐらかすように、コメディアン扮する警官が二人登場して来た。警官一「昨今はぶっそうになったなあ」

警官二「全く何者でしょうねえ、正体が見たいもんだ」

警官一「せひ、我々の手でひっ捕えてやらにゃあ」

警官二「そうですよ、出るんなら出てみろってんだ！　そうやすや

3

スリー-Xが次々にこの憶れ家に近付いているとも知らぬブラックキャットはどきげんで柱のスイッチを押すと前の壁面に大きな山猫の顔がクロスアップされ、太いトスのきいた声で山猫ソングを唄い始めた。



4



おれはまだらの山猫だあー何んでも食っちゃうのがおれの仕事さ、サアモリモリ食ってやるう

5

これお聞くと、ウサギやネズミの魂を入れられている少女達はびっくりして逃げ出そうとしたが手足が反いて不規則につながれてから自由がきかず滑ったり転んだり大変な騒ぎ



すと赤い血、いや、美味しい汁は吸わせないぜ」

突然、稲妻が走り、大いばりの二人、一目散に逃げてゆく。

再び幕が上った。

舞台は豪華な寝室の控え。美しい娘が踊りながら、薄衣のネグリジェに着換え、ベッドに入る。照明もやゝ暗くなり、伴奏音楽も無気味に流れる。場内は水を打ったようになり、私も一瞬、身を乗り出していた。



6 「ワイルドといつは愉快だよー今度はこの鞭で柔らかな奴等の尻を叩いてやるかなー覚悟しろよ」彼が次の行動に出ようとした時そこへ現れたのはスリー

7 「オッ何んだおめえは「スリー」と云うチンピラにどぞんす。どうぞよろしく」何しに来やがった「お嬢さん達を私にお預け願いたく存じまして来ましたのさ」ぶざけるなッ

8 おのれ、フランクキヤットは鞭を振って打ち込んで来たヒョウ団をかわすスリー

出て来た、体中に晒布を巻いたマリがベッドに近づく。突然、ベッドにやすむ娘のノドに噛みつく。娘は声も立てずにぐったりとなる。マリは娘の死体の上に「死体第十三号」と書いた札を置く。マリの合図でジョーとタツが入ってくる。二人は室内を物色したあと、娘の死体の衣装をはぎ、盗品と一緒に袋につめて運んでゆく。

最前列に頑張る私は、ジョーとタツに扮した俳優が「ドッコイシヨ」と娘の入った袋を担ぎあげたとき、袋の中の女の「イタイ！」という鋭く小さな悲鳴が聞えたような気がして、「ギクッ」とした。生身の女優いや、素直にストリッパートと云おう——が役の上とはいながら死体になり、袋に入れられ担がれるという状態の中であげた小さな悲鳴は、一緒に袋の中に入れられた小道具の時計の角にどこかをブツケタのだろう。乳房だろうか？ 同じく小道具の電気スタンドのコードが髪にひっかかって、つれたのだろうか？ など瞬間の想像をたくましくしたためだった。

黒の薄衣をまとった踊り子達の「悲しみの踊り」をはさんで、舞台はジョー達の巢窟にもどって、ストーリーが展開されていった。ジョー、タツ、マリが、今、殺して来た娘と盗品を入れた袋を担いで登場する。タツ「へへへ……兄貴、今晚も成功しましたね。悪くねえ商売だ」

マリ「あゝ、疲れた。こんなに巻いてちゃあ、暑いし、むれるし、早くといてよ」

タツ、マリにうながされて、晒布をほどきはじめる。

一方、ジョーは娘の死体を袋からひっぱり出し、壁ぎわにもたせ掛けて見入る。

ジョー「この女は格別だ。すぐに仕事に掛るから、道具を持ってこい！」

タツはマリの晒布をほどきかけて、舞台ソデから、馬穴、ハケ、竹ベラなどをもって来てジョーに渡し、ほどきかけのマリの複雑に巻かれた晒布をほどきつつける。

ジョーは早速、竹ベラやハケで裸にむかれた娘の死体に石膏を塗る仕草をはじめる。

ハケで顔をなでたり、脇の下をくすぐったり、竹ベラを鼻腔に入れ鼻を上向かせたり、乳房をいじりまわして、ブルンブルンとふるわせたり、臍につっこんだり、観客の含み笑いなどの反応を楽しみ



ながら、ジョーに扮した俳優の演技が続いた。その度に死体であるはずのストリッパーが笑ったり、体をもんだり、舞台の俳優と客席がいじめられる女を通して一つになって楽しんだ。

ジョー「こういう玉がいつも手に入れば、人形の出来も良くなるぜ」

ジョーは、なおも石膏を塗り続ける。顔、胸、腰、股。

やっと作業を終った感じのジョーはタツを呼ぶ。

ジョー「おい、タツ！ 今度のはいい出来だぜ。ちよっと、この前のを持ってきてみな」

タツ、裸の踊り子がポーズしたまゝ、体をかたくしている人形を持って来て、今、出来上った新しい人形の側に置く。

マリをまじえた三人は、つくづく二つの人形を見比べる。

この景は、この種の劇場なら、どこでもやる。悪ふざけを中心に終った。私を含めて、観客の男達

は、一度でいいから、今、ジョーに扮した俳優のように、若いピチピチした女を自由にてもてあそんでみたいと考えて、次の景にうつる少しの間を羨望と、その様子を見たというささやかな満足を中心に奥深く、噛みしめたような顔つきをしていたことだろう。

舞台は洋品店のショー・ウインドウの感じに変わった。色とりどりの下着をつけ、ポーズした人形に扮した踊り子が、じっと立っている姿がライトに浮びあがって来た。その人形は衣裳の解説が始まると、一人ずつ動き出した。その様子をながめるジョー、タツ、マリの三人。

ジョー「あれは血液のぬき方が足りなかったの、臓器が腐って、もうこわれるころだぜ」

タツ「兄貴、それから、あれは（と一人の踊り子扮する人形を指し）虫垂炎の跡やオッパイの大小を直すのに苦労しましたね」

ジョー「全くだ。あんな手間のか

かる奴を選んでまいったな、しかし、いい値で売れたぜ」

マリ「あれとあれは、首と乳房と足を取りかえっこしたんだったわね、全然分らないじゃあないの」

ジョー「あったりまえよ。俺の腕は確かなもんだ」

次々に登場する踊り子の首や、手、足のつけねには黒い細い線がひかれ、いかにも、マネキン人形。しかも、体の一部を交換したように見せかけてあった。この小細工は氣にいった、細い線は縛り跡のようにも見えるし、又、踊り子の人格を無視して、より物の観念に近づけようと工夫した演出家の細心の注意にマニアとしては、心にくいものを感じずにはいられなかった。このようなことは、実生活における演出者と踊り子の関係も、想像出来得るようにも思えた。

ジョーはさらに進展した。

夜中、洋品店のショー・ウインドに並ぶ人形の数々、そこへ懐中電灯の丸い光が一じょう投ぜら



れ、警官が二人登場する。

警官一（人形を照らしながら）「おい、あの人形、この間から行方不明のお前の妹さんに、そっくりじゃあないか？」

警官二（その人形をじっとみつめて）「うん、よく似てるな」

警官一「おい、ここの親爺起してよく見せて貰おうか？」

警官二「勤務中だし、そうもしてはいられませんよ」

警官一「何云ってるんだ。行方不

明の妹さんについて、何か得られたら、しめたもんだぞ。特徴はなんだ」

警官二「はい、左の乳房にホクロが二つ並んでいる。えーと、尻に小さなおデキのあと、臍の右下に一本、長い毛が生えているんです」

警官一、「えーッ、お前いやにくわしいな。いくら妹といっても、普通の奴は、そこまですてないぞ」

警官二「行方不明になるまでは、

一緒に寝てたんです」

このような二人の警官の会話の間中、後のショーウィンドの中にゴソゴソ動くものがある。

ついに警官がこれに気付く。逃げる者、追う者。暗やみで動く者はマリであった。ドンチョウがおり、その前をマリと警官が追っかけっこをする。その間、舞台では、釘を打つトントンという音がして、装置の造りかえが行われている様子だった。

ジョー達の果。

追手から、やっとのがれたマリが飛び込んで来る。驚くジョーとタツ。

たちまち、ジョーとタツの執拗な詰問がはじまった。

「どうして、こんな深夜に外にいたんだ」

「どうして、あわてて逃げて来たんだ」

しかし、マリは頑として口をひらこうとしなかった。

たまりかねたジョーのムチの第

一発が鋭く床を打った。

ムチの音は、最前列の私の腹の芯にもジーンとひびいて来た。

『いよいよ、待望のシーンがはじまるな』と思うと、私は自分自身の目つきや動作で性向を周囲の人々にさとられはしないか、感激して変な声を出してしまひはしないかなどと周囲を気にしたり、より一層強烈な責を見せてほしいという願望がいりまじって複雑な気持ちになってしまった。二発目のムチはマリの頭の所で鳴った。マリはあえぎながら一回転した。思わずのり出した私の目の前に細長く柔軟性のある皮紐がのびて来た。

そして、その三発目のムチは、故意か偶然か、アツという間にマリの太股に当り、マリに扮する女優は「ウッ」というような押し殺した悲鳴をあげて、のたうちまわった。マリの太股にはハッキリと一条の赤い線が認められた。ムチがつづき、マリは舞台の端から端へコロゲまわった。その間、彼女

の衣裳はよごれしだいに、乱れて、乳房もあらわになってしまった。

タツはジョーの指図で、なおも抵抗を続けるマリから衣裳をはぎとった。

やがて、ジョーはムチで威嚇しながら、マリに「腕立て伏せ」を命じた。ドローランにかくされた顔をまっかにし、それでも必死に六回目を終え、七回目に入るとマリの腕力は限界がきたらしく、その

まゝつぶれてしまった。そこへ、又ムチがとんだ。

私自身は普通の体力と運動神経を持つと自認しているが、腕立て伏せも十回以上となると可成り骨だったのを思い出し、マリの六回と

えていたではないか。実際、私の隣の席の男も、中学時代の体操の時間を思い出したのか、小声で一回、二回と数えていた。

「云え！ 隠していることを、みんな云ってしまえッ」

かたくなに口をとぎすマリ。ごうをにやしたジョーとタツは机を提出し、その上にマリを寝かせ、あばれるマリの足を机の脚に縛りつけてしまった。さらに手も後に組んで、いわゆる高手小手に縛りあげた。

息をのむ観客。

机の上のマリは腹筋運動をやられることになった。これは足を固定し、体を起したり寝かせたりして腹の筋肉を鍛える運動で仲々キツイものだ。マリはムチの恐怖におののき、命ぜられるまゝに運動をはじめた。この運動は体を倒したり起したりする時の腰の動きにつれ、体は自分の頭の方へ移動する。従って、縛られたマリの足は、自分の体にひっぱられるわけ

だ。ヒイヒイ悲鳴をあげるマリ。足をつられる痛さに加え、後手という姿では、運動をつづけるわけにはいかない。すぐマリは体を起すことが出来なくなった。そんなマリの腹をタツは得意になって、羽子板のようなもので打った。大きくパチャンという音がする。続いて「ワァー」と泣き叫ぶマリの声。異常な雰囲気の場合、観客のせき一つ聞えてこなかった。

ゼイゼイと荒い息づかいのマリ役女優。濃いドローランの下の上気した素顔をみせるジョーとタツの役者。

実際に肉体的苦痛を受けるマリ役の女優の疲労は、すでに相当のものとなつてせられ、呼吸にともなう腹部の凸凹は激しく、荒く、回数も多くなつてきていた。

机から降されたマリは、足首にはっきりと縄のあとをみせ、後手のまゝ「兎とび」をやられるはめになった。この運動は中腰のまゝピョンピョンととぶもので、マ



リは舞台の端から端へ何度も何度も飛びはねた。しかし、やがて中腰で歩くような動作になり、力つきて後手のまゝ、舞台の真中にのびてしまった。

私はマリではなく、女優自身の肉体がのびてしまったのではないかと思った。

すでに相当、疲労しているはずだ。

ジョーはさらに命じた。前方回

転、いわゆる“でんぐり返し”を……マリは後手のまゝ、必死で回転した。髪を乱し、汗のにじんだ背中に舞台のゴミを点々とつけ……その姿は、すでに、舞台のマリから離れて、女優を仕事にする女が被虐を甘受する姿、そのものであった。

やはり、女優の体力を気ずかったのか？ 責も“動”から“静”に移った。



両手を水平にあげたマリの手首に重りがつけられ、手首の縄は首に連結され、手を水平以下に下げると首がしまるように仕掛けられているという責がマリに加えられた。疲労の重なるマリの手はたちまち下り、自から首をしめる結果になってしまった。マリは倒れた。

ジョーとタツも疲れたのか、加虐の動作をやめてしまった瞬間、警官隊がふみ込んで来た。洋品店の主人から人形の仕入れ経路をたどって、ついにジョー一味をつきとめたものだった。

倒れたマリは下になった後手が痛いのか、しきりにもがくうちに幕がしずかに降りてきて、そこにナレーションがかぶさって聞えてきた。それによると、マリは、自分達の作った生人形の乳房の中に、ジョーにだまって盗んだ宝石をうめておいた。その宝石を捜しに街へ出かけたということであった。

原色のスポット・ライトも消え

再び明るくなった客席を退場してゆく私の足はフラフラと力なく、頭はボンヤリとして、強烈な刺激があつたのか、なかったのか？をすら考える余裕もなくなっていた。ただ、頭のすみで考えられたのは、あのように肉体を酷使する舞台を一日に三回もつとめるマリ役の女優が、何のために、どうして舞台を続けているかということだけだった。

大体、舞台へ出て四方八方からライトを浴びて、素足やお乳、お臍なんかもあらわに半裸となって踊りまくり、太股をさらけ出してエロチックな芝居を演ずる軽演劇の女優やヌード・ダンサー、あるいはストリップパーの中には露出症的な傾向の女性が多いと聞く。それが舞台の上で縛られたりムチで叩かれたりする役をつとめているに従って、やがて、そのようなサジスチックなムードの中に、喜びを感じずるようになってくるのも、極めて自然のなりゆきだろう。

【本誌最近号総目次】

十月特大号 (定価二百円)

目次裏「風俗川柳」新残酷物語「一」身仕舞「第一グラビヤ」SMムードの組写真「第一口絵」茶屋と茶摘女。人間の調教。夜は妖婦の如し。女体燭台。華麗な私刑。宇宙船用女奴隷輸送函。犀の骨。私は浣腸マニヤの看護婦。第二グラビヤ「美の冒険」他。第二口絵緊縛フット撮影の実際「ゴムの感触とフェチ好み」

告白特集「偏執記録の断片」

女装は私の楽しみです……桃山かおる
お腰天国……関根純司
おむつカパー雑考……栗根長
浣腸器を貰う……衣木一
ふんどしと恍惚……藤木久生
鼻鏡……春木俊野
マゾに生きる……井上直澄
私の下着はふんどし……山岸悠子
導尿の羞恥に喘ぐ……中谷正夫
読者と奇ク……神谷一夫
奇クと奇ク……佐度高志
連載「狩獵者」(最終回)……牧野高志
映画「用心棒」の緊縛を貰う……とやまわが唇は喜びにふるえる……とやま
外誌紹介「麗わしき争奪」……とやま

女性の切腹……数寄咲
連載「宇宙のどこかで」……佐治麻人
女斗美絵「土俵際の攻防」……雪崎京人
女相撲ファン見聞記……江波恵吾
奇クサロン「岩崎一生氏に答う」……他
アクロバットの訓練……上田隆子
フイクシヨン「厭な夢」……西田保仁
麻生保氏の生活と意見……麻生保
訓練される女……仏光力四郎
色質「遠藤春一個展」……
読者通信……

十一月特大号 (定価二百円)

目次裏「川柳」マニヤ幻想句「リン」チに遭う小鳩「第一グラビヤ」緊縛美の祭典「第一口絵」女相撲「外掛」スケを張れ。坊主の嫉妬。車輪とムチ。深夜のオフィス。悪童日記。学生馬。殉死。第二グラビヤ「アブ双曲線」第二口絵「雑踏の中の孤独」

奇クの性格について……衣軍一
奇ク三十九夜物語……東山村隆
東映、最近の縛りシーン……黒木史隆
野に散る花(女学生切腹)……小島誠夫
生涯の灯は何処に……雪林吾夫
女斗美絵「熱戦譜」……雪崎京人
シナリオ「ジェラシー」……塚本英三
緊縛フット撮影の実際……原白二
猿轡考……田原規雄
切腹実見記と雑感……坂本恵二
切腹と足袋と女装……桜木久
女相撲物語……雪崎京人
連載「宇宙のどこかで」……佐治麻人
創作「異教徒」……草薙久
奇クサロン「作者名について」……洗腸風物
詩。私の描いた實画。切腹レポ。風流サド談義。我が思いを託して。ある力メラマンの自伝。絹川さんの麗姿。解剖について。或る現実の断片。クスリタリ。万才。玉稿落集。備えあれば憂なし。痴人「設立試案」……愛

創作「樹の壁」……榎村二
ぜいにく……北村浩
大奥裸女血斗の果て……吾嬬徹
炎舞め熱海の一晩……保田博
わが甘美なるもの……とやま
手記「私の実験」……笹川生
麻生保氏の生活と意見……麻生保
おまじない……中平文彦
告白「足の美しい女」……三好謙
「火星への招待」……
読者通信……

十二月特大号 (定価二百円)

目次裏「川柳」情緒日本調「一」獣人街の競り市「第一グラビヤ」緊縛美の祭典「第一口絵」雨の中の折檻。カラス蛇の鼻。高慢な鼻を灼く。奇怪な湯浴み。場。マソ画廊。アクロバット・ダンス。他。第二グラビヤ「美しき女囚吊り」第二口絵「緊縛フット撮影の実際」

千草氏の論理……宇宙人
告白「腫瘍者」……渡辺かね
女斗美絵「黒いコート」……宇野弘通
体験告白「黒いコート」……中野弘通
思い出すことども……三村卓史
マソ三十九夜物語……とやま
わが身を灼く屈辱感……三条や
創作「ミシンを踏む女」……数寄咲
レポ「ひろ子緊縛記」……数寄咲
女性切腹「凶札式」……数寄咲
おむつカパー「試作室レポ」……関根良人
創作「老画家の手紙」……榎本秀彦
平家の馬場秘聞……飯装の一夜……桂次郎
奇クサロン「泥中の連たれ。灸責フット」……桂次郎
思いつくまま。絵画と写真のアイディ
ア。私の好きなネル。倒錯のための倒錯行為。私の切腹。あるカメラマンの自伝。連作「少女」……花嫁の靴。お尻頌歌。サドと呼ばれる出戻り娘。他
連載「宇宙のどこかで」……佐治麻人
洗腸雑記……北沢操
日本アマゾン記「遠淡海」……二俣志津子
旅と女と縄と……南方佳男
続・白足袋のこと……木下明美
梨花悠紀子と猿轡……藤本久
体験小説「愛のプレイ」……志麻二
絵物語「嫉妬夜叉」……杉原虹児
読者通信……

昭和三十七年

一月特大号 (定価二百円)

目次裏「悦唐川柳ムード集」「少女大相撲」第一グラビヤ「美しき緊縛」第一口絵「安祈願の生簀屋。踊子の訓練。奇妙なドレス。尻の玉。新年歌。多量感。人妻椿。十五夜。第二グラビヤ「捨てられた人形」他。第二口絵「続・ひろ子緊縛記」おしめ・力ロ絵「ガール」「緊縛フット撮影の実際」

告白「逆エビ縛りの一例」……巽羊三郎
女体切腹小説「十五夜」……石井章造
体験「女装生活の幸福」……長浜章一
マソ放浪記「美しき脅迫者」……恒川文彦
少女のお灸折檻……水木清彦
私の楽しみと浣腸プレイ……江波恵吾
連載「宇宙のどこかで」……佐治麻人
ヘルニヤ少年特別検診……北森太一
創作「雪責抄」……倉仁人
馬化狂通信「馬風流譚」……とやま
わが生涯の良き日……とやま
奇クサロン「K誌はエロ誌か。白い肌と縄。巷に拾う「浣腸」の絵。他」……とやま

体験「釜ヶ崎の女」……長山進
御土産女相撲……内山三
女斗美絵「あわやの一瞬」……雪崎京人
蛙腹のアイディア……瀬沼一郎
川端多奈子嬢に……近藤芳一
体験小説「輝(さいじ)」……久我隆保
麻生保氏の生活と意見……麻生保
奇ク三十九夜物語……辻村一
白い部屋「片隅から」……須藤隆
針とお臍と……角田律夫
創作「体銀行」……岡田三郎
体験小説「夜の告白」……村田雪夫
絵物語「狂熱の鞭」……千春
読者通信……



秋も深まり、めっきり寒くなつてまいりました。徳永津久子様、突然お手紙を差し上げる失礼をお許し下さい。貴女のことを十二月号奇譚クラブにて知りました。小生も貴女と同じく愛読者の一人ですが、この様なSMの世界の経験はありませんので、貴女となら御互いにゆつくり話し合えると思います。連絡方法は次の機会に考えましょう。(京都か大阪か、日時と場所)取りあえず貴女の呼びかけに応じます。勿論貴女が立派な

一社会人である如く、小生も良き一技術者(京都の私立大学卒、美男子?二十七才)です。だから、この様な本を見ることには興味があるが、決して今のところ自分自身をプレイの対象には置いて考えておりません。(京都市中京区笠殿町八唐渡揚一V)

私はつい一年ほど前に貴誌を偶然書店で見かけ、それ以来、大のファンとなつてしまいました。またことにお恥しいことながら、私の体験記を投稿いたします。採用されるなどという不心得なことは、思つてはおりませんが、若し編集部様の御意向に添いましたら奇巧のページをおさき願えば、これほど幸せなこととはございません。なお、最後にお願いがございませうが、私同様「切腹」に異常なまでの熱意をお持ちの方が意外に多くいらつしやる様でございます。長年の懸案となつております「切腹特集号」を発行していただけないものでしょうか。この次には私のプレイしております写真も送らせていただきます。かしこ、(神戸市生田区八藤村陵子V)

以前のように再び書店の店頭

て発売していただける貴誌を発見しました時は、ぞくぞくとする程の精神の高ぶりを感ぜました。早速十二月号を買い求め、開巻一番、グラビアの責めに驚きました。「緊縛美の祭典」では梨花悠紀子さんが紐状の裾一つで逆さに吊られた場面が目の中に飛び込んできました。秀麗なフェイスの梨花嬢が文字通り本当に逆さに吊り下げられているのです。しかも、只の一枚だけではなく、次頁では順次徐々に吊り上げられてゆくシーンが次々と掲載され、その上ラストには「揺れる女体」と題して、正面と裏面の逆さ吊りが載せられているのです。

◎写真特写引受◎

特別に変わった趣向、ポーズ、着衣、小道具、アイデア等によって特写御希望の方は写真部に於てお引受け致します。詳細な御希望を御連絡下されば見積りの上お返事いたします。(要返信料)

「美しき女囚吊り」では囚衣の梨花嬢が松の木に高々と吊り下げられているポーズが八枚にも亘って載っています。久方はぶりに拝見した十二月号は「吊り責め」特集といった恰好で堪能しました。全く素晴らしい内容で感心いたしました。(山口県下松市八

O・M生V)

僕は二十六才の男性です。僕は旧刊時代からの愛読者ですが、新刊になってからの奇巧の良くなつた事は、僕一人の喜びではないでしょう。特にグラビア緊縛写真の鮮明さには、夢中になり愛読しております。話しはかわりますが、全国の愛読者の方々の中に、マゾ女性の方はみえませんか、僕は一度貴女にお会いしたいと毎日思っています。もしそんな機会に読者通信を通じて恵まれるなら、僕と貴女の二人で、縄のプレイを楽しもうでは、有りませんか。僕のプランを発表致しますと貴女に色々なしきり責めをして上げます。そして、縄のプレイをしていての間は(まず時間をきめまして、一時間なら一時間の間は)貴女は、僕の奴隷になつたつもりで、僕のなすままにならねばなりませんよ。僕にしきられたい貴女は、曲線を描いたり、時にはうつむいたり、次から次へと、責められる。貴女は身をくねらせたり、もたえる事でしよう。色々なしきり方で、必ず貴女を、満足させ

る事をお約束します。ぜひ僕と会って下さい。貴女にお会いできる日が有ります様に、たのしみに待っています。この奇クが僕と貴女の、のぞみをかなえて、くれる事を祈ります。(名古屋市中井生)

○ 女装愛好の皆様、早くも初冬が訪れてきました。御元氣のことと存じます。私は女装する時に、腰巻の下に褌をしめます。これは六尺や越中褌ではありません。ストリップの踊子のつけているバタフライと称する三角形の褌です。私は腰巻の残り布で作りました。越中は後から前にしめますが、私のは反対に前から後へまわしてしめます。前のあたる布の両端を下に少しつまんで縫っておきます。これは前を包むようにするためです。それから後へまわす三角の先端に共布で二十センチ程の紐をつけておきます。これで出来上りますが、しめる時は腰骨の上にしめます。結目は右左どちらかの真横にして、三角の先を後へまわして紐にかけてから強くしめると、Y形になります。この上に赤い腰巻をしめてみても、こんもりふくらんで、女性のそれと同じようになります。これだけでも自分は女性

になれたと思えます。私はこの褌を二枚ピンクと黒の四枚あって、勤めに出る時以外は、赤黒ピンク赤の順で四枚しめておきますが、そのしめ心地は素晴らしいものです。私は褌をしめ、赤い腰巻に長襦袢を着て寝る時に鏡を前に置き前をまくり、股をひろげると、赤い腰巻の奥に赤い褌が見える、あられない自分の姿にうっとりしていきます。これは女性の方にもよいと思います。有合せの布で簡単に出来ます。色は赤かピンクが最適です。この褌は下腹に強くしめるところに快感があるので。(横浜伊佐正幸)

○ 新年号拝見しました。最近三、四カ月の間の口絵は各月号とも従来に比べて隔段の進歩があり、ほんとに心に楽しく毎月拝見しておりました。新年号はその中でも特に優秀だったように見受けられます。グラビヤ巻頭の塚本鉄三氏構成による美しき緊縛は、全く美しい快心の作品です。きつと塚本氏も、この作品が数ある中でも、第一等のものだとして巻頭に推されたものと思えますが、一枚の手拭が猿轡と呼ぶ拘束具としてより、この美貌の近代的な女性(残

新作『血紅使用 切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢 (大中判印画紙焼付)

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

念ながらモデル名不詳)の身についた必須のアクセサリーとなつて、手拭、縄が渾然一体となつて、見事な構成美を見せておられます。全裸とか、半裸とかいったいやらしさが、いささかもなく(他誌の口絵で全く美を欠除した下品なものをよく見受けます)私の今まで望んでいた、上品さの中の美しい惨虐さがよく出ています。バックの木葉のぼけぐあいなども、この若々しい人物を一きわ浮き立たせておられます。次に「憂愁の囚女」も断然他を圧した傑作です。囚われた女の憂愁が、よく面上に出されています。この首枷から上だけを切りはなして鑑賞しても、この題名にぴったりする素晴らしい出来栄です。厚い板の首枷の下に僅かに見える名札番号の文字も一層哀れさを誘っています。一号一号レベルを上げてきた本誌の写真が新年号において遂に最高度にまで達したことは熱心なファンの一人

区八植村京)

○ 私のイタ・セクスアリスのどの頁も、真紅の「ふんどし」に包まれています。私はあわれな一匹のふんどし男でございます。私が、奴隷として、赤ふん一張でお仕えするような御婦人を求めて悩んで参りましたが、只今迄は駄目でございます。矢張「性」の問題は「男女」の関係です。異性間の相互理解が第一だと思います。私の悲想な夢は、相結ぶ事の出来ない相愛の男女二人が、人知れぬ森の奥で二人共、赤ふんだけの姿でその前ミツをしつかりと結び合せ、首つり心中をする事です。互の力で引き合い「ふんどし」と「ふんどし」で美しく殺し合った二人の姿が人目にふれる事があっても決して

恥かしいとも思いません。あるいは又その肉体が鳥や虫に蝕まれて人知れず大地に帰するならば、それも又、大自然の法則でありましょう。どうか私とふんどし一貫で御交際下さる女の方と御文通を願いたいと存じます。幸いにふんどし好きの女の方が、私に連絡下さるならば、私の赤ふん姿の写真を早速お送り致します。その上で交際をきめて下されば結構です。(岐阜市八赤井軍好)

○ 私も本誌を愛読致して以来、五年にも相成りました。町の本店で楽しみに買求めて唯一つの自分の趣味。愛する女性を縛り上げ、苦しめる想像を本誌を見てまぎらわしております。又、映画で女優が縛られている場面を頭の中で想い出して一人どうしようもなく、もがき苦しんでいる男性です。幸い私の願っても叶ってない女

マゾ・モデル募集

本誌のマゾ・フォトに出演希望のモデルを募集いたします。御希望の方は年令、身長、体重を記してお申込下さい。詳細お返事いたします。(編集部)

性、根本英子様が近くの水戸駅前に居られるとは何と嬉しい事です。私の町から汽車で二時間、車でなら二時間半でお会い出来るわけです。水戸へは商用や魚釣り、此沼へ度々参ります。一度でもいいから根本英子様と奇譚クラブ愛読者としてのブライドをもっておつき合い願いたいものです。(福島県八佐藤雅俊)

○ 本誌新年号楽しく拝見しました。女性切腹物の中でも石井章造氏の「十五夜」がマニアへの絶好のお年玉だと思います。しかしマニアとしては志乃の切腹が省略されているのが残念です。その他は挿画といふ、グラビアといふ申し分がありません。私のアイディアとしては、恋人の若侍が志乃の後に介錯刀を振りかぶって娘が右まで引き切り苦痛に耐えている最高潮の場面にして欲しかったと思います。図中、萩や薄がよく情緒を添えており、白無垢の双股脱ぎで両膝を扱帯で縛り、裾の合せ目から娘らしく赤い腰巻を覗かせた姿は心憎いばかりの演出効果を出しています。これには秋田市のST生さんもさぞ御満足の事でしょう。次に組写真ですが、東京の川原和生

『切腹風景十二態』(9×13センチ)印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

禪美切腹

大手札判(9×13厘米)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円

略号(こせ)

女性自刃三態

大手札型(9×13厘米)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(じじん)

切腹のプレイ

大手札型(9×13厘米)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(れい)

豊麗切腹三態

大手札型(9×13厘米)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(ほう)

さんの書いていられる如く、苦悶あるいは悶悶の表情に欠けているのが残念です。この事は下関の森田敬三さんの注文にもある通りで今後の挿画やモデル写真作成の際マニア共通の願いとして置きます。須賀綾女さんの「私の切腹」は真のマニアらしく、姿態、表情ともよく出来ていると思います。これを大きくグラビアにして載せて頂けたら有難いと思います。(大阪八兵頭庫一)

○ まったくすばらしい一月号を拝見いたしました。梨花さんのグラビアが第一頁から我々鼻マニアを感激させてしまったのです。二十四日の発売日が待遠しく、朝の一番に書店に参りますと華麗な表紙の奇譚クラブが目に入ると胸を撫ぜおろします。今の生活は唯本誌を見るのだけが楽しみです。表紙をめくると一番に大きなアップの鼻責めの写真、美と凌辱、まったくです。あきもせず唯毎日眺めて暮しております。ぐにやりとおし

鼻

虐

略号(はい)

モデル 絹川 文代

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

鼻

責

略号(はき)

モデル 絹川 文代

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

上げられた大きい鼻。ぽっかり大きな二つの鼻孔、孔の中までまる見えです。その陶醉しきつた梨花さんの表情。まったく感激です。たくさんのしわをきざんでむくれ上った鼻は人間を完全に凌辱に浸し切っていて、その大きな二つの穴は我々を完全に吸いこんでしまふようです。本当に編集部の先生方の心のこもった我々鼻マニアへの贈りもの。今後ともどうぞ我々の望みを叶えてやって下さい。絹川さんの鼻責めの表情も大変よかったです。鼻責めの写真は梨花さんに限ります。テープでつり上げられて醜く押し、しわを刻んで豚のようになつた鼻は我々を桃源境にさそひこみます。どうぞ今後

とも、一そう我々の期待を満たして下さい。又、全国の鼻マニアの方々のお便りのない事も淋しく思っております。どうかお便り下さい。(大阪八提厳V)

初めてお便り致します。僕は家事手伝いをして二十一年才になる男です。本誌を知りましたのは一年程前から未だほんの新米ですが、買ってすぐに病みつきになり、今では毎月の発売日を首を長くして待っている次第です。さて僕は今の浣腸マニアです。年令は問いません、全国にお住みになつてゐる女の方(なるべく近所に住む方がいふんですが余り無理な事は申しません)で僕と同じ趣味を

持つてゐる人、是非「読者通信」宛お手紙下さい。多くの女の人の中で一人位は僕の夢物語の様な希望をかなえさせて下さるお方が居られると信じております。又秘密は厳守するし浣腸を強要も致しません。近所に住むお方とお逢い出来る事が実現したらそれこれ僕の本望です。その時には何か考えて連絡場所をお知らせ致します。浣腸の事を考えると平静を保てず興奮してしまふ始末です。僕の気持、どなたかお察し下さい。お便りを中心からお待ちしています。最後に本誌の今後益々の御発展を心よりお祈り致します。(京都八佐野学一V)

○ 本誌を愛読後早や九年となりました。復刊後のは全部ありますが、それ以前のも三〇冊余りあり、書棚も満員となりました。近刊号は写真が非常に良くなりましたのでグラビアは楽しみます。特に梨花さん、大塚さんの写真は川端嬢全盛以上です。只読物には少しもの足りなさがあり、淋しく感じます。以前のアリスの受難等は何度読んでもあきません。然しそれも公刊の性質上、致し方なき事と存じます。小生も縛りの実行もしました

が何分個人の事故まゝにはなりません。只、貴社に希望致したく存じますのは、古い読者等で愛読者の会合を催されては如何でしょうか。九年近くも読んでおれば塚本氏、辻村氏、滝氏等が余りにも身近かに感じられます故。(和歌山AR・TV)

○ 編集部の皆様、日々の御取材に嘸お疲れの事と推察致します。一月号のすばらしさ、待望の梨花嬢の「美と凌辱」を拝見し、鼻責めのファンの生き甲斐これに過ぎたるはありません。ひがんでゐる訳ではないが投書欄もマゾ党に押され気味で、鼻責めマニアの振るわな事を嘆いてゐる折から、パツと出されたあの写真のすばらしさ、本当に感謝感激です。絹川嬢にせよ梨花嬢にせよ大塚嬢にせよ、よくもこれまで飼育なされた事と敬服致す次第です。願わくばその取材の模様を記事にしてお載せ願えませんでしょうか。そしてモデル嬢の鼻責めを必ず毎月本誌に発表されて我々を楽しませて下さい。尙、梨花嬢の鼻責め組写真の御企画もお願い致します。御願ひばかり多くて誠に申し訳ありません。同封の写真、相変らず拙いものです

○浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

○浣腸責アップ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

が御参考迄に。このモデルは多少年増ですがひきしまったいさゝか美貌の持主です。「美のアンパランス」を楽しむ者にとつて至難な事は美しい若々しい顔貌を求める事です、その点いつもながら美しいモデルを葉籠中のものになすっていらつしやる編集部の先生が羨ましいと思つております。それだけに又、月末になると本誌の鼻責め記事に恋ひこがれる訳でございます。余りの嬉しさに御礼を申し上げ、傍々御便りを致した次第です。(墨田堤△Y・K生V)

十一月月号読者通信欄に記載されていまして、市内西成区若宮勝子様へ、小生女相撲ファンとしてお申出の貴女の所持されてゐる女相撲の写真と御希望の写真との交換を是非お願い致し、度々読者通信を拝借しました故、左記に手紙にて御連絡下さい。(大阪市旭区生江町三の四十三城北荘△小西昭V)

編集部の皆様、私は女の人の綿ネル(毛の多い厚手の非常に柔いネル)のお腰に非常な関心があります。今は遊廊等がないのでこの綿ネルのお腰を遊女等より分けて貰う事も出来なくなりました。

そこで編集部の方にお問い合わせします昭和三十年五月号の読者通信に出ているような(長崎K子としか出ていないが)その方のように肌につけられたお腰等をゆずつてくれる女の方はいないでしょうか。又モデル嬢の肌にとつた綿ネルのお腰がありませんか。又、綿ネルの愛好家の中で私の好むような毛の多い柔いネルを作つたり売つたりしている所を御存知の方はないでしょうか。もしあればぜひお知らせ下さい。奇巧の増刊号としてお腰フェチリスト特集号を出していただだけませんか。私のような綿ネルのお腰の好きな方を御紹介下さい。私は女装と綿ネルお腰だけにしか興味を持っていません。女の方で私の気持ちを理解してくれ、る方があれば一度その方と話してみたいのです。(ネルについてですが)色々つまらぬ事を書きましたが一人心の哀れな綿ネル愛好者の願いです。益々奇巧の御発展を祈ります。(西宮△N生V)

毎月キタをたのしく拝見してゐるマゾ男性です。最近奇巧にはサジストの女王様方の投稿がみられなくなり、何となくさびしい気がします。男性を完全に征服された

新人(ニユーフェイス)悦虐ムード写真

大手札印画紙焼付 各組 三枚一組 二五〇円(送共)

○花本京子

二〇才

身長一五四〇、体重四二斤

略号(もと)

○桜井葉子

一九才

身長一六〇〇、体重六三斤

略号(さく)

○熱海容子

二一才

身長一五五〇、体重四九斤

略号(よう)

○加茂良子

二一才

身長一六二〇、体重五四斤

略号(よし)

○前本妙子

二三才

身長一五八〇、体重五一斤

略号(たえ)

○柳初子

二〇才

身長一五七〇、体重四六斤

略号(はつ)

○大井小夜子

二一才

身長一五四〇、体重四五斤

略号(さよ)

○山路ミヨ子

二〇才

身長一五四〇、体重四五斤

略号(みよ)

○若原明子

二〇才

身長一六一〇、体重四八斤

略号(あき)

○四方清美

二一才

身長一五八〇、体重四八斤

略号(きよ)

女王様の告白、手記など、どんなに寄せていただきたいものです。又この読者通信にも、われわれ飢えたるマゾ男性のために、慈愛深き呼びかけを待ち望んでいます。以前によくお書き下さいました鷹野めぐみ様ほか、なつかしい女王様、新しい女王様、この哀れなマゾ男の願いをかなえて下さい。私もマゾのご多聞にもれず、サドル責め、トイレ奉仕などを無上の

光栄と感じております。それにもまして私の特によろこびとするところは、女王様方の尊い御体臭をかがせて戴くことです。顔乗りの光栄に浴した時、長い時間では息がつまりますので、特別のお慈悲をもつて上体を少し上げて下さい。私はやつとの思いで大きく息を吸い込みますが、その時、私の鼻深くしみ通る女王様の高貴な香り、私は観喜に胸をふるわすこ

きたく存じます。また、一番嬉しく思いましたのは、衣軍一氏の「ふんどし恍惚」です。私のことが書かれていると錯覚を起しているような気がしてなりません。私と同じ心を持った人の生達が、はつきりと表現されているからです。冒頭の白井権八が捕方に囲まれて奮斗する悲壮な挿絵でまず強烈なショックをうけ、頁を繰るにつれて私の頬は紅潮し、衣軍一氏が述べられた丸橋忠弥の一人芝居のよさに、私の胸も同じくドキドキと衝撃をうけ、咽喉はカラカラにひきつり、呼吸が乱れて体が小刻みにふるえるのを禁じ得ませんでした。どうか、本文のような時代劇もので、捕方に首や腹や腿や足に捕縄を、がんじがらめにかけられて苦悶し、「ふんどし」のタレをひるがえして、真白な従帯が見える構図の写真を掲載して下さるよう御配慮下さい。マニヤとして心の底から望ましく思います。捕方の攻め道具として、十手、六尺棒、刺股、袖がらみ、戸板、タタミ、はしご、目つぶし、大八車等々で一つの場面（例えばはしご攻めの場）ごとに、責められて悶々として虚空をつかんでいる表情の写真をお願い致します。男性なればム

女勝ち誇った生々とした美女と
がくMの醜男の下に呻吟しても
織りまぜて、絶妙のコントラス
トをもつて描いた、快心のMF
オト。是非Mの慰安のために一
組を。

シリまげの浪人（黒二重着流し）女性なれば毒婦型か、弁天小僧の様な紛装に限ります。誠に身勝手なお願いで恐縮ですが、フンドシマニアのみ知る喜びは、Y型に食い込んでいふふんどし、晒の肌ざわりも心地よき真白のふんどしの復帯の魅力です。爽快な気分日々の活動の原動力も、快楽の源もこの締めまりから生れるものと確信致しております。マニアの皆様と共に、益々六尺ふんどしを謳歌して、挿絵、写真の掲載がより以上にその数を増すよう希望致します。末筆ながら貴誌の躍進をお祈り致します。（宝塚八輝緊党）

◎女体切腹フォト◎

「腰元白刃」

村井知可子嬢

大判印刷紙焼付
六枚一組 八百円

お家の重宝を紛失した美貌の腰元が激しい青折檻の末、遂に敵方から忍び込んだ間諜であることを白状する。そして今は、せめて武士の娘らしく潔く切腹して果てることを願う。彼女に秘かな好意を寄せていた御側の若侍は彼女の介錯を願って出て許される。今迄の折檻の場は忽ち凄惨な

○ 十月号と十一月号のKK、有難うございました。貴重なフォトを随所に駆使して内容の充実を図っておられるだけに、手にした重みも一層どっしりと嬉しい感じですが、妙な表現かも知れませんが、この数ヶ月来、KKのグラビアは梨花嬢と大塚嬢のトップ争いでした。マードとしては啓子嬢が佳く、肉体派の代表と云えるでしょうし、表情、演技ではヴォリニウムを補って余りある悠紀子嬢が演技派代表と云えます。十月号での代表作は「転轡」「さるぐつわ愁顔」と「自白の強要」で対等の勝負です。

美女切腹の場と変る。という構想のもとに六枚連続の切腹フォト（全場面切腹）六枚の中、二枚は若侍介錯の場面。女体切腹マニアの方は是非一度ごらん下さい。日本髪をふり乱して苦悶するさまは、必ずや皆様を魅了せずにはおかないでしよ。（女性モデルの外、美男男性モデル登場）

「洋服筆筒」と「笥の下に」で大塚嬢は貫禄発揮というところ、体が立派な上に髪長の長いのが何よりの武器です。表情も男心を誘う可憐さが見られます。桜井嬢の豊満美は見事な一作です。切腹マニア某女の裸身は胸部に特徴があり自己愛と自虐の対象として美しいものと思います。それに引き換え絹川嬢のMフォトの不振は不満。雑然とした視目でなく、要所を適確に捉えた縄がキツチリと肌に喰入り厳しく締上げる事が必要で、現状では絹川嬢の美も半減、思い切ったアイディアに没入する東浦嬢にもひけをとるようで淋しいと思います。愛川嬢の復帰は演技派としての活躍が期待できそうです。十月号で、十六ページに及ぶ外誌紹介は不要と思います。むしろ絵物語やフォトストーリーに当たった方がよかったです。十一月月号「涕泣」は素晴らしい作品で悠紀子嬢の実力を余す所なく発揮した佳作。対する啓子嬢は「バンドの猿轡」で対決という所。完全な宙吊りでは悠紀子嬢の独壇場で、その気力は賞讃すべきもの。一方、コード縛りなどは啓子嬢が断然リード、海老縛りでもヴォリニウムがあるだけに迫力充分といえます。

特別浣腸写真

モデル 大塚啓子

大手札印刷紙焼付
各四枚一組 三〇〇円

イルリガートルの

嘴管による浣腸

四枚一組三〇〇円

略号（ちい）

エネマシリンジの

嘴管による浣腸

四枚一組三〇〇円

略号（ちえ）

硝子製三〇〇C

ポンプによる浣腸

四枚一組三〇〇円

略号（ちか）

絹川嬢の「ゴム布の歌口」は清潔な美しさ、桜井嬢の「豊満と乳房」は、スケールの大きさに嬉しいもの。フォト・レポートの東浦、梨花、大塚三嬢はそれぞれ特徴を活かして出色のものをした。殊に裸身へ可愛らしいエプロンを着用す

るお仕置プレイのムードや縛られた女体の白い肌に嗜虐的な文句を書きつけるアイディアは私の日頃希んでいたものだけに嬉しさを抑えられませんでした。今後とも、編集部の皆様には御自愛の上、Kのより良い充実発展にお励み下さるようお願いいたします。書きかけの原稿がなかなか纏まらず、御無沙汰続きになってしまおうのですが、取り敢えず「狂恋の囚女」の続篇を同封致します。川端嬢あての一文は取捨を御都合にお任せしますが、転送など特別の便宜を図って下さらぬようお願いしておきます。(近藤一)

あゝ藤山さん、僕の再三の呼びかけにも答えてくれぬ藤山さん。オフジ(勝手に呼ばして下さい)は何うしている。今夜も切腹して乗馬ズボンやトレンチコートでガバガバさしているのだろうか。完全武装のオフジの苦悶が目に見え、トレンチの襟を立て男っぽいスタイルの女の人に会うたびにオフジ

を思うのだ。夕陽を染める乙女達、女神の塚、太平洋に架ける橋、夕陽に散る華、ベルリン最後の日、腹切る女スパイ、女間諜散華、壮烈大和撫子、機上切腹、乙女桜……。みんな僕のメッカだ。京の町にはこの頃よく乗馬服の人を見かける。中には皮ジャパーに乗馬ズボンであの女スパイそっくりの女子もいる。流行かも知れない。時代祭の巴御前は相かわらず美しかった。ヨロイを着て乗馬ズボンのようなハカマ、金のキヤハン鉢巻きで弓を持ち馬にまたがっている。時々につこりしたりきりりとした顔つきになるのがすばらしい。藤山さんにあのスタイルをしてほしい。あれでハラを切ったら僕は氣を失うだろう。オフジ、女山口二矢といったテーマでお願いします。奇巧も僕達のために立派な女体切腹を続けて下さい。(京都八藤山党V)

井上ますみさん! あなたと紀志栄子さんと私と三人、年に一度で良いから会いたいわ。ますみさ

女体浣腸連続フォト

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九 百 円

モデル 愛川悦子嬢

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽
大手札型印画紙焼付

略号(はせ)
三枚一組 二五〇円
モデル 絹川 文代

特高拷問

△破られたズロースから▽
大手札型印画紙焼付

略号(とく)
三枚一組 二五〇円
モデル 絹川 文代

んは桜色の肌に、燃えるような赤ふんどし、栄子さんは白さんごのようなお尻にビチツと小さなベージュ色のふんどし、私は小麦色の体に晒の六尺、みんなブラジャーもふんどしと同じ色。昼間は一緒に泳いで、そして砂浜にお尻を並べて日光浴しましょう。三人寄れば、それは強いわよ。若い女のふんどし姿の恥かしさが誇らしさに変えると思うわ。あなたの御主人、栄子さんのお兄さん、私の彼氏(まだ無いの、これからさがすわ)なんかが、ふんどし姿で、護衛して下されば尚安心ね。夜は、三人びったり寄り添って、ふんどし話を語り明かしましょうよ。勿論、三人共ふんどし一つで、三人きりだからどんな事でも話せるわね。そして、お互のお腰からはずしたふんどしを洗わずにそのまゝ交換して文通の約束をして、来年を楽しみに別れるの。来年は仲間

がふえるでしょうね。保証できる人は連れてきて良い事にするの。あなたは可愛いお嬢ちゃんにリボンを締めて連れていらつしやるかしら。どう?この考えは、年に一度なら日本の内地なら、私、旅費をためてどこへでも出掛けるわよ、でも、なるべくなら関東、中部、東海地方ぐらいが便利ね。ついでに大先輩の海女さんを訪ねて鮎倉島へ親善旅行なんてのも良いわね。紙上相談はひまがかるから、今からはじめて次の夏頃、ちようど話がまとまるんじゃないかしら。それでは御返事お待ちしています(ふんどし乙女、清水ゆり子)

私は約二年前より本誌を愛読している一切腹マニヤです。他誌には見ることも出来ない体験談、告白、創作は私を勇壮と悲愴の世に満ちた導いて呉れるものです。唯一

つ残念に思うのは、男性切腹フオ
トが発表されない事で、何かしら
一沫の淋しさを感じている次第で
す。全国の切腹マニヤの方の中
にも私と同じ事を感じてられる事
と思っています。私自身、プレイ
はやってはおりますが、実際にま
だ切った事はありません。何時も
想像し、鏡に自分の姿を写し乍ら
色々な方法でプレイしている程度
です。画等も下手ですが相当描い
て持っていますし、集めておりま
す。唯一人でプレイし、描いてい
るのはとても淋しい限りです。切
腹マニヤの愛読者の皆様、どなた
か私と文通、交際して下さる方は
いらつしゃいませんか。話し合い
資料の交換、プレイ等したく思
います。もしおいでになりましたら
御一報下さいませれば幸甚と存じ
ます。お待ちしております。では
マニヤの方々お元気で。(京都中
央局出八奥田春男)

はからずも書店で奇譚クラブと
いう雑誌を知り、文中「女相撲」

のことは知り、すっかりとりこ
なつてしまいました。このごろは
夢にまでみる程です。ほんとにす
ばらしい。しかし、僕には相撲マ
ゲや島田髪のは、なんとなくびつ
たりとしない。女斗美絵巻も三度
に一度は「現代娘の相撲」にして
下さい。髪形の現代風の娘にし
て下さるよう、ぜひぜひお願いし
ます。(京都市南区八河合S)

霞ヶ浦の根本英子様、その後お
元氣ですか、私もあなたと同様の
趣味をもつ男性ですが、奇タをと
り続けているうち、あなたの記事
を見たわけです。是非一度お会い
したいのですが、そちらの御都合
のよい月ごとの休日を誌上でお知
らせ願えませんか、又はおつとめ
の旅館の電話番号でもけつこうで
す。お知らせ願えれば、こちらか
ら連絡しお会いでき、いろいろお
話したいと思ひます。お待ちして
おります。(東京八村田生)

六月号から引続き拝読している

女体「浣腸風景十二態」

(9種×13種) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

麗しき縛しめの乙女たち

大手札型 印画紙焼付
各組三枚一組二五〇円

聖壇の裸女 略号(けい)

△モデル 絹川文代

カーテンの翳 略号(けろ)

△モデル 絹川文代

艶姿色模様 略号(けは)

△モデル 絹川文代

浴場の欲情 略号(けに)

△モデル 大塚啓子

いけにえ人形 略号(けほ)

△モデル 絹川文代

のぞき見極楽 略号(けへ)

△モデル 絹川文代

開股悦虐境 略号(けと)

△モデル 大塚啓子

ダンロの開股 略号(けち)

△モデル 田原美佐子

開股絶命 略号(けり)

△モデル 愛川悦子

悲鳴開股 略号(けぬ)

△モデル 絹川文代

奇クファンです。最近貴誌の素晴
しい充実ぶりに新刊の発売が待ち
遠しい限りです。最近S女性から
のお便りもかなり見受けられ、私
達の様に肉体豊満な女性から残酷
な行為を受ける事を最高の喜びと
する者にとりましては、一遍に世
の中が明るくなった様な気が致し
ます。私はそれらの女王様に仕え
る奴隷として、馬になつてとこと
んまで乗り廻され、息もたえだえ
になつて倒れ伏した顔の上に大き
なお尻を乗せられ、さんざん鞭で
叩かれ、拳の果ては御足で顔を
まるで雑巾かなにかのように踏み

にじられ、蹴とばされ、口の中へ
足の指を突つ込まれて、呼吸ので
きない苦しみにもたえながらも、
私は女王様に忠誠をお誓いするの
です。女王様のお尻の下にうごめ
く馬になろうとも、足の下に踏み
にじられる雑巾になろうとも、私
は只、女王様のお氣に召す様おつ
かえする積りです。若し氣にお召
さなければ、お氣に入るまで処刑
下さい。この愛読者の中に私の夢
を実現させて下さる方があれば、
これに過ぎた幸せはありません。
S女性の方のお便りをお待ちして
おります。(横浜市八長瀬了一)

梨花悠紀子

浣腸

フオト

大手札印画紙焼付
各三枚一組三〇〇円

嘴管挿入

略号(しか)

浣腸図絵

略号(りか)

便器使用

略号(まる)

襠褌図絵

略号(むつ)

おしめ使用

略号(しめ)

便意苦悶

略号(くみ)

女斗美フアンの皆様、お元気で
すか、私も女斗美フアンとして、
女性輝美フアンとして、奇クを毎
号楽しんでおる者です。京都の殿
田様はじめ室井様、ヒキノ様の通
信を度々誌上で拝見し、同好の方
々が増えて来るのを心強く思っ
ておりました。他に頼のない文獻誌
として今や奇クはおしもおされぬ
貫祿を以て斯界に君臨しているこ
とは、堅実な編集部の方々の方針
と相まって百年の礎を築かれたと
云ってよいでしょう。私達マニヤ
は平常満たされぬ欲望をこれで満
たされているとって過言ではあり
ません。ふんどし一つの裸の女の
格闘という全く世間では大きく云
えない事柄が、奇クの世界のみ、

切腹マニヤ某女のモデル

切腹

略号(まに)
三枚一組三〇〇円

大手をふって云えるということが
あって私達の欲望が満たされるの
ですから。十一月号の通信にてヒ
キノ様、英照生様の通信があり、
女斗美、女性輝美の記事の少い事
から楽しく読ませていただきました
。私も現代風の女性のそれより
も、ふんどしと云う純日本風なも
のから、やはり日本風の髪形をし
た女性のそれを望んでいます。水
もしたたるばかりに結い上げた島
田留、雪をあざむく純肌にもえ
るような緋縮緬のふんどしをきり
りとして描いている娘。あるいは仇な
風情の芸妓が紫縮緬のふんどし一
つになつてゐる裸姿、黒橘子のふ
んどしをきゅつとしめ、髪を櫛巻
にして珊瑚の髪差し一本を差して
いる鉄火風な姐御等、様々な女性
のふんどし姿はきつと美しいもの
と思います。それに、ふんどしも
女らしく色々な模様入りとしても
面白いと思います。これらの女性

はいずれも、ふんどし一つの裸を
自慢するだけあって、グラマーな
ものでなければならぬことは云
うまでもありません。又、女性輝
美フアンの中に無惨絵マニヤの傾
向が多いことも私としては意外で
した。十一月の「大奥裸女血斗の
果て」を投稿された吾嬢氏はじめ
他の女斗美、女性輝美フアンの殆ど
の方が、ふんどし一本の裸女の血
斗模様を賛辞を呈しておられます
が、私も改めてこのグループに仲
間入りさせていただきたいもので
す。早速、白表紙時代の奇クを本
屋からとり出して吾嬢氏の作品の
源となつた、京洛生氏の「大奥裸
女血斗」を讀みました。そして、
私も吾嬢氏同様にこの分野のフア
ンになつてしまいました。ふんど
し一つの裸の奥女中達が血に狂つ
て斬り合う様を生き／＼と描き出
してありました。色とりどりのふ
んどしをしめた奥女中達が得物を
手に／＼血みどろの争いを演ずる
状は正に異常美の最たるものがあ
ります。双方すべての裸女が艶れ
果て、その艶めかしい山の中で双
方の主が一騎打する吾嬢氏の作品
となるのですが、ふんどし一つの
御守殿が死力を尽しての果し合い
は異常な美しさを醸し出していま

す。全く京洛生氏の「大奥裸女血
斗」は不思議な、そして誰をも引
きずり込んで行く魅力があります
これだけに止まらず、もっとこの
分野の開拓を今後共望されます。
同好の方々の通信を待つておりま
す。(大阪八K・KY生V)

編集部の皆様お変わりございませ
んか。奇ク益々御発展、愛読者の
一人として喜び申し上げます。私
は殆ど創刊号より本誌を愛読して
おります。(本の数は三分の一程
しか手許に残っていません) 永い
間色々の事があり、内容も色々
変つて参りましたが、幾多の困難
にもめげず今日の充実した素晴ら
しい本誌が出来ました事は、編集
部の皆様のためまざる努力と真面
目な作意によるものと思つており
それが故多くのフアンの要望を叶
えさせ、満足させていられるので
はないでしょうか。そして誰もが
発売日を一日千秋の思いで待つて

輝美と輝縛り

大手札型印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 桜井 葉子

略号「ふし」

いるのです。私も絹川文代嬢、梨花悠紀子嬢、大塚啓子嬢の大ファンであり、特にこの三人のモデルの方の股間縛りに胸の高鳴りを覚える程美しく、素晴らしく、これによって毎日々々が楽しくなつて仕方がありません。又、三人の方の御健康を何時までも心からお祈り致します。自己紹介に入りませんが、最初はいやがる妻を、強烈な縛りでも色々と責め、永い間かゝってマゾヒストに育てようとい生懸命でしたが、妻は私の云うことは聞いては呉れますがマゾに育てる事は性格から云つてもすべて無理だと悟り、それ以後、毎日を悶々と過ごして参りました。そんな事が暫く続くうちに半年程前でした。妻が私を一度縛らせて呉れと云つて、私も何だか変な気持ちでしたのですが、妻の云う通りにさせました。所が私も初めて縛られて何とも云えない喜びと陶醉にひたり、私自身の体内にひそんでいたマゾの性格が頭をもち上げたの

でございます。そして吊りを除くあらゆる縛りをされました。その内容は海老責め、股間縛り、逆エビ責め、雁字ガラム、亀甲股間縛り、首責め等、それに本格的な猿ぐつわ等あらゆる責めを受けました。が、妻は私をもっといじめて呉れと云つても、又凄く縛りをして呉れと云つても、ある程度でやめてしまふので私も物足りなく徹底的に凄く、責めて欲しいと思っています。(大阪八長野文一)

○ 小生は男色党で紅顔の美少年(十六才から二十才までの)と同性愛切腹プレイをしてみたく、相手の美少年から小生の左脇腹の臍下を約二十糎位右の脇腹下を後ろから切つて欲しいと思っています。この切腹は正座です。そして私も美少年の臍下を割腹してそして鳩尾から臍下までも十文字切腹がし度い。今まで自分独りで山の中や又は家の中で切腹擬態プレイを楽しんでいたので小生の下腹部は

花坂道子緊縛フォト集

大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

カミソリの切創が臍下に幾すじもある身体です。その為に銭湯にも行けず、自宅の風呂にばかり入浴しているのです。ある時は風呂場で十文字にカミソリ切腹して血がにじみ出た事もあります。これは約三年程前の夏の宵でした。その十文字腹は立ち腹でしたが、創痕はなくなりました。でも一年位は十文字の切傷が残っていました。布団の中で妻と二人で切腹プレイをした事もあります。その妻とも今は別居中です。(岡山八切腹志願生)

想をしております。私の願いを叶えて下さいませんか。私は清子女王様でしたら忠実な一匹の犬として御命令には絶対服従し女王様の脚拭き雑巾にでも馬にでも清子女王様のお尻の下に喜んで顔を差し出します。あゝ、想像しただけでも私は胸が一杯です。ぜひともお願い致します。お逢い出来なければせめて文書にて御折檻下されたいと存じます。清子様が奴隷に対する一日の奉仕のさせ方など。(埼玉県八野口宗男)

○

東京の坂本清子様。私は二十四才に成るマゾヒストですが、約半年ぐらい前、清子女王様のお便りを拝見致し、すぐにお便りを想いながら今日迄過して参りました。でも日がたつにつれ、清子女王様の奴隷に一度で良いからして頂けたら、どんなに嬉しい事かと毎夜清子女王様の奴隷に成った空

○

毎号感ずる事ですが、表紙の絵の異国風な人物配置のデッサンには、あの独特の題字の字体と共にこの有名な雑誌のトレードマークのようになつてしまっているようです。独特のタッチで、まるでSとMの序曲といった体裁です。旧号も可なり方々の古書肆から買求めました。が欠号もありますので、色刷りはとても望めませんが、せめ

桜井葉子 強烈「浣腸」フォト

大手札印画紙焼付 各三枚一組 三〇〇円

浣腸責め 略号(かさ) 排便強要 略号(はへ)

絹川文代
小沼正三

マゾ・フォト

(芳香を嗅ぐ)

御み足を戴く男

大手札印画紙焼付

二枚一組 二五〇円

略号「ひあ」

真白な御み足を口に戴いて、
その汗に濡れた芳香を親しく味
わせて頂く小沼正三の幸せな姿

御尻の芳香に泣く

大手札印画紙焼付

二枚一組 二五〇円

略号「ひめ」

どっしりとした御尻から、じ
かに有難くも芳しい臭いがか
せて頂けるのは何んという幸
せ。

て縮尺凸版でも次号から、創刊
号から本号までの表紙の移遷を簡
単な解説つきで十乃至十二冊分ず
つ、連載して頂きたいと希ってい
ます。図書館の収書目に入る程
の(失礼!)書ではなく、個人の
蒐集によって後世に遺る資料なの
ですから、是非御一考頂きたく存
じます。九月号読者通信欄の広島
の平岡良人様、マゾ特集号をお求
めになられたそうですね。「囚獄
の想い出」は旧々号時代に収録さ
れたものでその当時のカットとあ
の号のカットとは大分異なります。
勿論新号の方はカット数も多く紙
質がよいので観賞には好適です。
而しわたしは、旧号に載せられて
いたワンカット(ランニングシャ
ツに海パンの丸刈の少年が後手が
後手に縛られ、汽車の座席に腰か

けている。傍らに戦斗帽をかぶつ
た看守が縄尻を持って腕を組み周
囲の人々の好奇に満ちた顔を得意
気に眺めている)の方がすばらし
く、若し希望されるのでしたら、
そのカットの模写(トレース)を御
送り申上げたたく存じます。局止め
でも結構、住所を御教示下さい。
私も渾身の良さも認めますが、そ
れよりも総ゴム製の股の切れ上つ
たパンツや恰もわれわれの観賞の
ために存在するような極短の半ズ
ボンに現れる少年の尻のカーブな
ど、青年時代からの憧れです。「
被虐哀歌」も旧号に劣らぬ迫力が
漲っています。旧号には旧号の良
さがあり、この他に「少年院の想
出」や私がマゾ小説の白眉と絶讃
して惜しまない、そして本文にも
劣らない数葉のカットと共に私の

秘蔵本の一冊であります「悦虐回
想録」。「爛れた花」など、それに
色々なデーターの交換もお願い致
します。(大阪八佐渡健児)

編集部の皆様、始めて御目にか
ります。私は以前「百合子の冒
険」の頃よりの御誌の愛読者です。
休刊になって淋しく思っておりま
したところ、所用で山陽方面へ出
かけた折ふと見た店先きに陳列し
てある奇巧を見つけてより毎月の
発売日が又楽しみになりました。
あの頃の土俵四股平さん、山田夫
妻は今どうしておられますか。又
あの頃よくグラビヤに出た股間縛
り、今思い出して楽しんでいます。
私は少年時代より渾に非常に興味
を持っており渾の文字が出るとむ
さばるように読んだものです。自
分自身、家人の留守を待っては押
入れから長い布を引出し、締めて
おりました。まだ小学生ですから
渾を締めること云う事ははかしく
ある夏、水泳渾を買ってやると云
われた時は嬉しいやらはかしい
やらで、家の者がいる所ではく時
興奮の為、身体ふるえが止まら
なくて苦勞したのを覚えていま
す。渾を締めた時の、腰、下腹、
股、おしり等を固くしめつけると

共に全身に大気の冷氣を感じた時
私の中にひそむマゾが頭をもたげ
ます。合戦に敗れて囚われの身と
なった。又奴隷にされて使われる
と云う気がします。その上、女の
着物をはおりますと、色物と渾が
非常に対象的な異状なものをか
し出し、妙な気になります。鏡の
前で後向きとなり、裾をまくって
眺め、便所に行き、女の人がする
様に小用を足しても見ました。側
から見るとこっけいでしょうが、
私は本気です。「あゝ、こんな姿
で働かされるんだわ」と気分も女
となり、働きます。どんな汚い仕
事でもやります。汚なければ汚い
程私は満足です。今は赤線があり
ませんが、私が女なれば、そこで
働いていたかも知れません。夜お
そくまで男の人の相手にされ、朝
は昨夜と違った、よれよれの着物
で働かされる。私には便所が割当
てられ、着物が汚れるからと、渾
一つの姿で便器をみがかされ、主
人が気に入るまで磨かなければな
らない。今、男であつてこう思え
ば女の身となれば又逆で、お腰一
つでなんて云う事になるかも知れ
ません。しかし、今の私には渾と
女又奴隷に結ばれている様に思え
ます。心理テストなどやられ、縛

を急に見せられ、禪を急に見せられたら反射的に「女」と答えるかも知れません。又、奴隷と云えば女、禪を思い出します。戦前に「海賊」と云う本を見た事がありましたが、その中に日本の婦人が中国人に結婚を申込まれ、喜んで一緒になり、中国本土に渡るが男の家には中国人の本妻が待っておりだまされたと気づいた時は既におそく、国から持って行った物は全部取られ、たゞ一枚のよれよれの中国服を着せられ、なれぬ手にすき、くわを持って牛馬の如く使われ、夜は脱走防止の為、素裸で家の監視の出来るところで横になり、昼間の疲れのある身体に男達の相手をさせられ、星のあるうちに叩き起こされて、女主人のムチのもとに畑へ追い立てられ、一刻も休みなしにそうやって働いてい

るのは日本から引張られてきた女だけ。村の人は奴隷がどんな事をされようか笑って見ているだけ、一人の奴隷が脱走を試みても、村人総出で追いかけられ、やて途中の密林の中で行き悩んでいる女は連れ戻され、逃げた女は勿論、その家の者も吊し上げを食い、女は前以上にひどいやり方でこき使われると云う物語を読んだ時、女の人には気の毒ですが非常に興奮しました。そしてこの人々が中国服の代りによれよれの禪をしていると想像してエキサイトすることもしばしばです。時々山奥へ入って付近に人の気配のないのを見ずまして裸になり、その付近を歩き廻ることしばしばし、山かげのうっそうとしたあたりに入ると耐えられない気持になり、肌をさす小枝、冷めたジメジメした足の裏、傷のつくのも構わず、繁みの中へ分け入り、いばらに刺されて息をのむ事もあります。私は女奴隷だ。開拓の為山へ追立てられ、木材運搬土運搬をさせられて苦しんで、木立に腕をまわし、縛られる自分

女体切腹フオート

梨花悠紀子

血紅切腹『悦楽切腹』

略号(はろ)

大塚啓子

血紅切腹図絵

略号(おせ)

大手札印画紙焼付
各三枚一組 三〇〇円

新版悦虐写真

東浦ひかる悦虐図絵

略号(ひか)

「私を責めて下さい」の主人公である典型的なマゾヒストひかるの強烈な縛り。

梨花悠紀子悦虐図絵

略号(ゆき)

「鑑賞用女性」のナンバーワン悠紀子さんの哀愁をキヤッチした初々しい悦虐。

を想像してうっとりします。こんな時誰か相棒がいれば良いと思う事もありません。ふもとの農家に使われて見たいとも思います。そんな私の気持を柔げらて呉れるのが「奇ク」です。私達同好者のために益々発展される事を御祈り致します。文が進むにつれ益々乱文となり、読みにくくなりましたが何卒お許し下さい。私の今後の希望としては女の人の禪姿の絵と文を毎号載せて頂く事です。女の方達の体験談など、どしどし出して下さい。地方の女の人の禪姿の写真など欲しいところですが、実生活において昔からの習慣でやっておられる普通の常識の持主の方達に御迷惑でしょうから、遠慮するのが無難でしょうね。絹川さんの禪をされた写真がありました、あれの後姿が無いのでしようか。大塚さんのものもよいですが色物は良

いとして、模様入りの禪は実感がでないようですが、他の皆様の御意見は如何ですか。私は、あの絹川さんの写真を見た時、あの方に責められなくなりました。禪をした御婦人に責められるのは、文中の私の性向に合わないように思いますが、女が禪をされていると云うマゾと私自身責められるマゾの両方を味わいたいた為です。女角力スタイルの絹川さんにけいこをつけて頂き、本場所においてひかえから土俵入り、仕切り、土俵上の四十八手、土つき、余りの弱さに絹川兄弟子から「お前なんか角力取りをやめろ」と足蹴にされ、縛られ、あげくの果てに大事な禪も取り上げられると云うのはどうでしょう。ふんどし万才の清水さんなど聞かれたら私の不甲斐なさを感じられるでしょう。しかし私は満足です。私には禪は強者の旗印

竹野ひろ子汚辱図

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号(まい)

羞恥心のきわめて強い竹野ひろ子が、その第二回目の撮影行に於て、完全に自らの下着をむしり取られて、虚飾のベールをぬぐい去り、彼女本来のマゾ性におびえ泣くといった動感のある汚辱作品。

竹野ひろ子感泣図

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号(まる)

彼女の最も好むのは、あのゴムのヌメヌメした肌ざわりとビニールの冷たい感触。息も出来ない位強く噛まれた猿ぐつわそうした彼女の感泣を求めて、その期待にこたえて拘束した珍稀な作品。

に見えます。私達弱い男達は種を辞退し、お強い方々に差し上げます。どうか清水さん、私をお助け下さい。そして私をあなたの方揮愛好者の一員にとめさせて下さい。そして、貴女の方の輝姿を拝見させて下さい。貴女の中で私を責めた御方が有りますなら私は光栄です。美しい女王様の輝の下にひれて命じられる事なら、どんな事でも致します。(松江八山本二二)

○ 始めて読者通信を致します。奇ク十二月号で春日ルミ女史の「尻敷きのプレイ」及び絹川文代女史の「強制される法悦境」のグラビヤ写真を拝見致しまして本当に素

晴しいM写真だと思いました。特に春日女史のプレイ写真は顔がはつきりと写されていて文句なしです。たゞ慾を申せば和服でなく洋装の下着姿のプレイがよかったと思います。絹川女史のプレイ写真はあまり顔がはつきりと見えないのが残念でした。今後ともに私のようなM派のために尻敷きプレイ及び馬乗りプレイのM写真を毎月発表していただきたいと思ひます春日、絹川、両女史のモデル嬢のみでなく他のモデル嬢によるMプレイ写真もどしどし発表していただきたいと思ひます。又、奇クのグラビヤ写真は女性の緊縛写真は数多く発表されているのですが、男性が女性に緊縛されて責められ

ている写真が本当に少いのですが私のようなM派の読者も多数いるのではないかと思いますから、男性M派のためにも男性が女性に責められている写真をもっと発表して下さい。最後に奇クの発展を心から期待致します。(横浜八福井生)

○ 関根様、誌上での御便り嬉しく拝見致しました。おむつカバー雑誌に続いて「試作室レポート」と誠実的な記事に比べて私如き者の拙劣なる記事なんかは全く汗顔の至りです。関根様には大人用のおむつカバーの新しいスタイルを生み出されるアイデアは全く感服致しております。今後大いに御活躍を期待致して止みません。ベビー用には色々スマートな型や簡単なスタイルが続々と考案されていきますが、そう云った点、大人用は従来の旧型なのは少々不満ですが、矢張り実用的と云う点が第一主義ですから、これも致し方のない事です。然しベビー用には殆どと云って良い位、ゴム製品がなく、反対に大人用はゴム製が殆どなのは私達ゴム布マニアにはしつたイルを生み出されるアイデアは全く感服致しております。今

後も大いに御活躍を期待致して止みません。ベビー用には色々スマートな型なら簡便的なスタイルが続々と考案されていますが、そう云った点、大人用は従来の旧型なのは少々不満ですが、矢張り実用的と云う点が第一主義ですからこれも致し方のない事です。然しベビー用には殆どと云って良い位ゴム製品がなく、反対に大人用はゴム製品が殆どなのは私達ゴム布マニアには楽しい事です。ある薬局で聞いた事です。大人用のゴム製品について、第一にゴム製品は丈夫である事、乾きが早いと云う点にある様です。然し大人用には圧倒的にゴワゴワした張りゴム製品が多い事で、色合いにおいてもグリーンが最も多く、うす茶、グレイ、黒と云った順序の様です。それに最近大人用のおむつカバーの需要が増えて来たと云う事です。脳溢血の人が最も多く、次いで交通事故による症状、婦人科疾患、夜尿症と云う事です。最近では大抵の薬局では、こうした物はその場になくても一日二日で取り寄せてくれる様です。面白い事では大人用のおむつカバーをしつたぶ買って行った様な人が使つて見て大いにおむつカバー礼讃者の様な

賞 原 稿 募 集

☆規 定☆ ☆賞 金☆

- 優作** 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇
- 一、必ず未発表の自作であること。
 一、枚数に制限はありません。
 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
 一、締切は別に定めます。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
 一、賞金は発表後一月にお送りいたします。

告白と手記と体験記

事を云って来るとの事なのです。「大人がおむつなんて」とおっしゃった人が便器よりも簡便で始末しやすいと云って来ると云うのですから面白いではありませんか。こうした現状が一流のおむつカバーメーカーも大人用を扱う様になった事も頷けます。最近では干物場も屋根の上に作る処が多いですね。先日の事です。偶然に市内のある物干に女物の浴衣にアイ模様のおむつが一杯干されてあり、その傍に大きなカバーが二枚干されてあるのです。それが又ネル地の赤い柄に白いゴム布を縫合した物です。

私は思わず身体がグーッと熱くなってくるのを覚えるのでした。ここに不幸な人が一人と思う反面、宝物を探し当てた様な楽しい気持ちになるのでした。私は今知りたいたいの、おむつの歴史なのです。「衣服の歴史」とか「衣服の発達」とか云った衣服に関しての物を凡て眼を通してしまいましたが不幸にもおむつに関しては全く不明なのです。これが何よりも残念なのです。私が想像をめぐらして見ると凡その見当は推定出来るのです。人間がこの地球上に存在して以来、衣服も考案されて来たのです。古い遠

い時代においては獣の皮がおむつカバーとして、又下着として使用されて来た事でしよう。それから衣服も発達して来て厚い布地がカバーとして用いられ、油紙等が発明されてこれがカバーとして用いられ、近い時代においてはゴムの発見に依ってゴムのおむつカバーが登場して現在の様に化学繊維に就いては変わった事と推定するのですがゴム布のおむつカバーとして用いられたのは何処の国が最初であったか、誰によつてどの様なスタイルの物が始めて使用され、日本にて使用され出したのは何時であったかと云う事が私は知りたいのです。全く興味しんしんたる事と申すのです。余りにも身近な物として、又一般的に不浄視されてこうした品物と云った物が無いのは何よりも残念な事と思います。でも何時の日か、この問題も解決される時もある事でしよう。原始的なおむつにおいても化学が進歩し、あの柔いヌメヌメした感触のゴム布が新しき時代の物と変わって行く事はゴムマニアにとつては淋しい限りと存じます。(赤井茂)

すっかり御無沙汰して仕舞いました。藤山党様や東一郎様の通信

も拝見しておりましたけれど、私の作品はこの頃の奇巧のはドギツ過ぎるようで、送稿した分で未発表のものも多く、また私のような乗馬ズボンや乗馬靴のマニア、しかも切腹ナルシストを喜んでいただけの範囲も、今の奇巧からは遠ざかつて行くように思え、自然御無沙汰になつてしまつたのです。一つにはキョロットクラブというグループが出来、私の作品をプリントして輪読会などしていただきます。さて、十二月号に「凶礼式」のお話が出ておりましたが、女の切腹も作法が定められている事を知り、しかも検使は生存中に傷口をあたらためるのみで、検使帰城の後、どのようにして死を全うするか定めが無い事に、例えようもないしびれを感じました。自ら進んで女だてらに切腹を申し出る程の者なら、一文字の傷口を検使に見せたのみで、やすやすと介錯を受けるとは思えません。検使の讃辭に満足げにほゝ笑み、行儀正しくその去り行く足音を聞いた彼女が血刀を再び握りしめて、更に深く苦しい生体解剖の苛責に立向う時そこに展開される凄惨な武士道絵巻はマニア垂涎のシーンとなりましょう。(藤山秀緒)

和服フェチに關連したもの、女相撲と女斗美、女性切腹並に禪美、身体各部に對するフェティッシュやその狂崇、少年美とソドミー、その他倒錯美に關する一切。

二、告白、体験、隨筆、実録などを第一に推します。出来る限り真実味溢れるものを期待します。創作、小説は必ず自作の未發表作品に限りません。

三、枚数は制限いたしません。

四、締切は特に定めませんから、出来次第どしどしお送り下さい。

入選及び佳作の作品には折り返えしお返事の上、最近号誌上へ發表いたします。

五、賞金は作品發表後一カ月以内に送金いたします。誌上の匿名及び住所本名の秘匿は御自由です。ふるって御応募下さるよう御待ちしています。

奇譚クラブ編集部